

体制転換後ロシア連邦 20 年の
教育改革の展開と課題に関する総合的研究

中間報告書 (2012 年度)

2012(平成 24)～2013(平成 25) 年度

科学研究費補助金基盤研究 (A) 海外学術調査 (課題番号: 23252011)

研究代表者 福田誠治
(都留文科大学)

2014(平成 26) 年 3 月 31 日

目 次

はじめに	1
年間研究計画	3
第Ⅰ部 教育調査報告	
1. ヤロスラブリ班調査報告書	7
2. サハ共和国 [ヤクーツク] (9機関) 調査報告	40
3. ブリャート共和国 [ウラン・ウデ] (9機関) 調査報告	71
4. カザン班調査報告書—モスクワ市・カザン市 (タタルスタン共和国) —	91
5. 2012年度エカテリブルク・ハンティ-マンシースク教育調査報告	153
6. ペルミ班 (モスクワ、ペルミ) 調査報告書	205
7. モスクワ市・モスクワ州調査報告	247
第Ⅱ部 資料	
国家教育イニシアチブ「私たちの新しい学校」 2010年2月4日付 Пp-271 ロシア連邦大統領 D. メドベージェフ承認	283

はじめに

1年目の調査では、政治のねじれにより予算成立が遅れ、科学研究費の受給見込みが立たなくなったため、大事をとって参加人数を削減した。しかし、結果的には科学研究費は全額支給され、われわれはヤロスラブリに追加調査をすることになった。本報告書は、この部分から始まる。2年目の調査は、地方と中央の関係を見ることにして、できるだけ多くの地方に出かけることにした。体調を崩していた澤野由紀子さんは、3月になって補充調査に単身出かけてくださった。

調査で観察することができた、当初予期しなかった現象を一つ紹介したい。グローバリズムの中で、極小の民族が国外の同一民族と連帯する機会が生まれ、文化復興を遂げているという例だ。サハ=ヤクーチア州は、極北の地にある。自治州で50万人が名称民族、つまりサハ人である。ところが、北極海沿岸には、1万人程度のエヴェンキ族が住んでいる。彼らは、今やっとエヴェンキ語の小学校の教科書を手にしたばかりである。エヴェンキ族は、ブリヤート族に近く、かつては東シベリアの北部一帯に広がっていた。トゥワやサハのようなチュルク系狩猟民族に追われて今は絶滅寸前である。そんな彼らが、グローバリズムの中で、ブリヤート人とともに、モンゴル共和国や中国領内モンゴル自治区に出かけることができるようになった。そこで、モンゴル人と共存するエヴェンキ族と交流するようになったという。それは、つい最近のことだ。交流できるようになったエヴェンキ族は、一挙に倍増したという。ちなみに、ロシア連邦内のエヴェンキ族はかつてのエヴェンキ自治管区なども含め3万5000人、中国に3万人、モンゴル共和国に1000人ほどと言われている。

エヴェンキ族の民族復興には、サハ人も協力している。1万人の極小民族が絶滅するのが歴史なら、50万人の少数民族が消滅することは必至だろう。エヴェンキ族を助けることは、自分たちを守ることにもなると。

ソ連邦崩壊後、教育のカリキュラムには民族的な要素を入れることが原則になり、連邦国家コンポーネント、共和国コンポーネント、学校コンポーネントという構成になった。たとえば、エヴェンキ族の場合、ロシア語で構成されている連邦部分、サハ語で構成されている自治共和国部分、エヴェンキ語で構成されるはずの学校部分という具合である。

しかし、各民族に文化的自治を認めたロシア連邦政府は、今や逆の方向に動き始めている。現在では、連邦国家コンポーネント一色になったからである。サハ語とサハ文化の授業は、正規のカリキュラムでは不可能になった。フォーマルな学校教育ではなく、インフォーマルな課外活動でしか文化的自治は維持できないのか、サハ人の教育者たちの焦りの色は濃い。

しかし視線をエヴェンキ族の位置に移してみると、話はもう少し複雑である。ソ連邦の時代は、エヴェンキ族は母語をロシア語に取り替え、というか、書きことばであるロシア語を習得して学校教育を終えた。皮肉なことに、ソ連邦が崩壊して文化的自治が認められると、エヴェンキ族は、国語としてサハ語を学び、サハ語で教育を受けることが原則になった。しかし、中等教育より上に行くにはロシア語でないと授業はない。そうなると、文化的自治とは、極小のエヴェンキ族にとっては、入れ子構造が一段階増えただけのことで、外に出るための負担が増えてしまったことになる。

もう一度、視線をサハ人の位置に戻してみよう。サハ人の教育者たちは、ソ連崩壊後、いったん学校教育の中に取り入れたサハ語とサハ文化の授業を何とかして続け、できたら発展させたいと思っている。そのためには、エヴェンキ族を助け、エヴェンキ語とエヴェンキ文化を復興・確立させたい。だが、しかし、共和国の名称民族であるサハ人にしてみれば、エヴェンキ族に共和国語としてサハ語を強制してよいものか、あるいはエヴェンキ語の復興を働きかけてよいものか、悩ましい問題なのである。

エヴェンキ族が経験したこのような言語と文化のグローバルな復興例は、インドのパンジャブ州のシーク教徒たちにも当てはまる。シーク教徒はターバンを巻くことで一目でわかるのだが、人口は2800万人であっても、インド国内では、ヒンズー教徒に比べ圧倒的に少数派である。ヒンズー・イスラム教対立、インド・パキスタン対立のちょうど狭間にあり、独立運動が強く黄金寺院事件も起こし、ヒンズー教徒からは弾圧されている。パンジャブ語を話す彼らは、インド国内では出世できない。ところが、グローバリズムは、意外な展開を可能にした。セポイの乱で英国政府に協力したシーク教徒は、英国政府に重宝がられ、シンガポール、マレーシア、タイなどで英国の植民地経営に協力して働くことになる。現在、インド国外にいるシーク教徒は500万人と言われる。そして、変化の波は、シンガポールから起きてくる。英語化政策をとったシンガポールは、外国に脱出する国民が多く、民族意識を高めてそれを引き留めようとしたからである。シーク教徒たちは、パンジャブ語の教科書を作り、堂々と民族復興を旗印にすることが初めて可能になった。もしここで、インターナショナルスクールに入学すれば、パンジャブ語と英語だけで、国語をスルーすることができる。これが、マレーシアやタイでも起きることになった。

さて、ロシアのエヴェンキには、シーク教徒のように共和国語も連邦語も避けることはできない。その上でなお、国際語である英語にたどり着こうとすれば、さらに道は遠い。それでも現在、民族語を復興する必要があるのか。それはどこでどう使われるのか。民族の英雄も見当たらない、民族の歴史も定かではない、そんな極小の少数民族にとっては、近代的な国民国家の確立は不可能であるばかりか、英語を駆使するグローバリズムに顔を出すこともまたきわめて困難なことである。それでも、歴史は進んでいくのである。

研究代表者 福田 誠 治

年間研究計画

様式 A-2-1

平成24年度科学研究費補助金交付申請書										
独立行政法人					平成24年4月20日					
日本学術振興会理事長 殿					所属研究機関の本部の 所在地及び名称					
					〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1		名称 都留文科大学			
所属研究機関の長の職名・氏名					職名 学長		氏名 加藤祐三			
研究代表者の部局・職					部局 文学部			職 教授、副学長		
フリガナ					フクタ セイジ					
研究代表者の氏名					福田 誠治			印		
次のとおり研究を実施したいので、科学研究費補助金（研究種目名を記入）の交付を申請します。 なお、交付された補助金は、補助条件に従い適正に使用します。										
研究課題名		体制転換後ロシア連邦20年の教育改革の展開と課題に関する総合的研究								
補助金額 (交付予定額)	直接経費①		間接経費②				直接経費と間接経費の合計 (①+②)			
	9,900,000円		2,970,000円				13,870,000円			
	直接経費の 費目別内訳	物品費	旅費	人件費・謝金	その他					
	500,000円		8,000,000円		700,000円		700,000円			
補 助 者	研究者番号	機関番号	所属 番号	職番 号	役割分担等 (本年度の研究実施計画に対する分 担事項等を具体的に記入すること。)	エフォート (%)	直接経費 (研究者別内訳) (円)			
	氏名	所属研究機関・部局・職								
研 究 代 表 者	30128631	23501	201	20	研究全体を統括し、研究会を主催する。 教育課程と実験学校に注目して調査・ 研究を進める。	20				
	福田 誠治	都留文科大学文学部教授								
研 究 分 担 者	10104118	32207	363	20	エカテリンブルグ、ハンティ・マンシ 自治管区ハンティ・マンシースク市方 面の調査の班長。教育課程と実験学校 に注目して調査・研究を進める。	15	800,000			
	遠藤 忠	宇都宮共和大学都市経済 学部教授								
	30203368	32689	734	20	サハ共和国ヤクーツク、ブリヤート共 和国ウラン・ウデ方面の調査の班長。 生涯学習・キャリア教育に注目して調 査・研究を進める。	15	800,000			
	岩崎 正吾	早稲田大学教育・総合科学 学術院教授								
	20107155	12613	937	25	バシキール共和国ウファ、タタール共 和国カザン方面の調査の班長。移民子 弟の教育に注目して調査・研究を進め る。	15	800,000			
	関 啓子	一橋大学大学院社会学研 究科特任教授								
	80209840	12102	970	27	モスクワ、ペルミ市方面の調査の班長。 国際教育の視点から 移民の子どもの 教育、シティズンシップ教育に注目し て調査・研究を進める。	15	800,000			
嶺井 明子	筑波大学大学院人間総合 科学研究科准教授									
40280515	32631	201	20	比較教育の視点から、教育制度の変化 に注目して調査・研究を進める。 体調不良のため削除	15					
澤野 由紀子	聖心女子大学文学部教授									
補助事業者合計 (小計)		4名					直接経費合計 (小計)	320,000		
キーワード	①教育史	②学校教育	③学力論	④教育政策	⑤多文化教育					
機関番号	23501	研究種目	基盤研究A海外		課題番号		23232011			
経費管理担当者・部局・職・氏名			部局・職	総務課	氏名		松尾 陽子 (1)			

研究目的 (概要)

ソビエト社会主義共和国連邦が解体後20年間の歴史を、①**社会主義教育**がどのような形で継続しているか。とりわけ、**労働教育・職業技術教育をキャリア形成**という視点から再検討する。②**グローバリズム**への対応を、ボローニャ・プロセスへの加盟、PISA型学力の導入、国家統一テスト体制の模索などの点から分析する。③**多民族・多文化**地域における生涯教育という視点から、学校・地域・社会の連携、移民対策と移民・外国人労働者子弟の教育、シティズンシップ教育など、具体的課題への対応の現状を調査する。

本年度 (～平成25年3月31日) の研究実施計画

本研究では、前述した目的を達成するために、平成24年度の目的を、以下のように設定する。1)民族共和国・自治管区を調査して、独自の教育政策を把握する。**イスラム国**という独自の動きも視野に入れる。2)これまで研究蓄積の少ない地域として、天然資源が豊富で**独特な教育政策**を可能にしているハンティ・マンシ自治管区ハンティ・マンシースクとサハ共和国ヤクーツク、アジアとのつながりを考慮してブリヤート共和国ウラン・ウデを対象に、教育・学力政策、言語政策、工業化政策をとくに取り上げる。3)多民族教育に関する先進地域を調査し、連邦の教育方針との関わりを明らかにする。

研究の進め方は、以下のようである。

4月～6月 筑波大学茗荷谷後者において定例研究会を開催し、本年度調査に向けた準備を行うとともに、情報交換と研究報告を行う。4月15日、5月13日、6月24日。

7月下旬 研究合宿において、各自担当分野の資料収集状況の報告、調査に係わる研究報告、ロシア側研究協力者との連絡状況等の報告と打ち合わせを行う。7月29、30日。

8月下旬(～2月) 4班に分かれて現地調査を実施する。

① ウファ、カザン 関啓子担当

② エカテリンブルグ、ハンティ・マンシースク 遠藤忠担当

③ ヤクーツク、ウラン・ウデ 岩崎正吾担当

④ モスクワ、ペルミ 嶺井明子担当

10月中旬～3月 定例研究会を開催して各調査を分析、評価する。

得られた結果を基にして、2013年3月に中間報告書を作成する。

さらに、中間報告書を都留文科大学の機関リポジトリで公開する。

また、3年間の研究の成果がまとまった時点で、比較教育学会などにおいて学会発表をする。

[連携研究者]

川野辺 敏 星槎大学共生科学部特任教授、調査計画作成と調査分析、報告書作成。

水谷 邦子 芦屋大学臨床教育学部教授、調査に参加し、分析と報告書作成。(調査地は調整中)

松永 裕二 西南学院大学文学部教授、調査に参加し、分析と報告書作成。(調査地は調整中)

森岡 修一 大妻女子大学文学部教授、調査に参加し、分析と報告書作成。(調査地は調整中)

大谷 実 金沢大学教育学部教授、調査に参加し、分析と報告書作成。(調査地は調整中)

澤野 由紀子 聖心女子大学文学部教授、体調を見て調査に参加し、分析と報告書作成。(調査地は調整中)

主要な物品の内訳 (1品又は1組若しくは1式の価格が50万円以上のもの)

品名	仕様 (製造会社名・型)	数量	単価 (円)	金額 (円)	納入予定時期
					平成 年 月
					平成 年 月
					平成 年 月
					平成 年 月
					平成 年 月
					平成 年 月
					平成 年 月

第 I 部 教育調查報告

ヤロスラブリ班調査報告書

(2012年2月11日～19日)

福田 誠治
大谷 実
水谷 邦子
トカチェンコ・スヴィトラナ

2012年(平成24年)2月 ヤロスラブリ調査関係の活動日誌

日 時	時 刻	活 動
2月11日(土)	13:05 18:25～21:30	SU582にて成田発 モスクワー空港移動
2月12日(日)	10:00～16:00	モスクワ・ホテルーヤロスラブリ・ホテル移動
2月13日(月)	10:00～10:45	ヤロスラブリ州教育長と会談
	11:00～13:00	Департамент образования Ярославкой области 遠隔通信情報センター調査、センター長他
	14:50～17:30	Ярославский педагогический университет ヤロスラブリ教育大学調査、学長他
2月14日(火)	10:00～11:30	56番幼稚園、園長他 Центр развития ребёнка - детский сад № 56
	12:00～14:50	26番普通教育学校、校長他 Средняя общеобразовательная школа № 26
	15:00～18:00	児童・青年センター、センター長他 Центр детей и юношества
2月15日(水)	9:50～13:30	21番リセー、校長他 Професиональный лицей №21
	14:30～18:10	58番普通教育学校、校長他 Средняя общеобразовательная школа № 58
2月16日(木)	9:45～13:30	3番ギムナジア、校長他 Гимназия № 3
	14:00～17:00	教育発展研究所、所長他 Институт развития образования
	17:30～19:30	州教育委員会副委員長グルズデフ氏にインタビュー Беседа с Груздевым Михаилом Вадимовичем (первым заместителем директора департамента образования области)
2月17日(金)	10:00～12:30	ヤロスラブリ市教育委員会、委員長他 Департамент образования мэрии города Ярославля, городского центра развития образования
	13:30～15:00	小松製作所ヤロスラブリ工場訪問、工場長他
	～19:00	Посещение завода Комацу в Ярославле モスクワ・ホテル到着
2月18日(土)	10:00	ホテル出発
	21:00	空港に移動 SU575にてモスクワ発
2月19日(日)	11:40 14:00	成田着 秋葉原、首都大学東京サテライトにて月例研究会に参加

< 2月13日(月) >

①ヤロスラブリ州教育科学局局長との面談

Департамент образования Ярославкой области

1. 対応者：Степанова Татьяна Александровна (局長)
Задворнова Маргарита Викторовна (консультант информационно-аналитического отдела департамента, координатор приёма делегации)
Астафьева Светлана Викторовна (Начальник информационно-аналитического отдела)
Прокофьев Андрей В. (советник губернатора)
2. 住 所：г. Ярославль, ул. Советская, 7
3. メール・電話等：(4852) 40-18-95 doobr@region.adm.yar.ru
<http://www.depedu.yar.ru/> (Образование в Ярославской области)
<http://www.yarregion.ru/depts/doobr/default.aspx>
(Департамент образования Ярославкой области)
forum-2012.edu.yar.ru (Ярославский образовательный форум)



この10年間、教育機関のリストラ(学校統廃合)によって再編成した。農村学校には交通手段を与え、州は2001年にスクールバス計画を実行した。この制度は、今では他の州にも広がっている。また、ヤロスラブリ州では、いち早くすべての学校にコンピュータを導入した。学校は、現代の産業のニーズに合うようにしなければならない。2007年9月1日から、教員には新給与制度が適用されている。教員給与は、労働者の平均賃金に追いついたところだ。

職業教育には力を入れている。中等教育段階までに60種類の職業養成がある。職業リセの卒業生では3%が失業率だ。学校は、企業との契約があり、授業の9割が企業契約に基づいて、実習もその企業で行い、就職もできる。時代によって人気の職種は異なるが、10年前の失業率が12%であったことに比べると、今はほとんどない。中等教育後の失業率も4%だ。

10年前の教育費の半分が外資だという指摘はあたらない。当時外国資本はもらわなかった。ソロス財団から2002年に最後の金が出ているので、2003年9月の調査時にはそういうデータがあったのかもしれない。州の教育改革計画を、外国の方と一緒に作成することが重要だっ

たのだ。おかげで、2000年から2011年までは、質の高い教育を目ざすことができた。

現在、医薬品開発には力を入れている。外国企業として製薬会社（スイス企業が建設したが日本企業が買収済み）と小松製作所が来ている。10年前にベンツ賞があったというが、工場があったわけではないから、ベンツのディーラーだろう。

この州でも、大学は、ボローニャプロセスに移行している。現在は、単位（クレジット）制と、専門認定（ディプロマ）制が両立している。

全国统一試験は、ロシア語と数学の2科目が必修で、他に選択として8科目があり、合計10教科だ。いくつ受けてもよい。ABCレベルのうちPISA型、記述式のCレベルの採点は地方で行う。択一問題の採点はモスクワで行う。地域の採点者は、前日夜になって本人に知らされる。成績の評価については、学校から独立したシステムが行うべきだ。教員の主観的・主体的評価が排除されて、公正さを保てる。しかし、全国统一試験にはまだ解決できてない問題もある。

全国统一試験の制度によって、ヤロスラブリ州からモスクワの有名大学に入学する者が増えている。自分の実力がわかるようになったからだ。

国際数学オリンピックでは、全国统一試験前から強かった。数学に強い学校がある。

外国人労働者の子どもの教育も行っている。「外国語としてのロシア語」という授業がある。旧ソ連時代から外国人労働者の子どもはいたが、それほど多くはない。

5年生から英語の授業があるが、2年生から始めてよいことになっている。

資 料

1. Брошюра «Образование в Ярославской области»
2. Ярославль

②ヤロスラブリ州教育分野遠隔通信・情報システムセンター

Центр телекоммуникаций и информационных систем в образовании

1. 対応者：Завьялова Лариса Михайловна (заместитель директора Центра)
Левашова Алия Тагировна (начальник отдела)
Виноградова Любовь Владимировна (главный бухгалтер)
Задворнова Маргарита Викторовна (консультант информационно-аналитического отдела департамента, координатор приёма делегации)
2. 住 所：г. Ярославль, ул.Собинова, 31/6
3. メール・電話等：(4852)-30-29-62, irina@edu.yar.ru
www.edu.yar.ru



副センター長、スタッフ 2 名の紹介の後、前回の訪問以来この 10 年間に起こったことについて説明があり、PPT のプレゼンを交えて現在の本センターの重点的な取り組みが紹介された。その後、質疑の時間が持たれた。

本センターの概要

教育分野において ICT 技術を活用するために、本センターは 18 年前の 1994 年に、ヤロスラブリ州により設立された。18 年前に、本州の国立の教育機関に対して遠隔通信インフラネットワークを整備する機関が設立された。このネットワークは、文化、医療、教育機関を対象とした。現在、教育機関に関しては、1,100 以上の教育機関（幼稚園、初等中等教育機関、職業教育機関）が含まれている（高等教育機関は全ロシアの別のネットワークに含まれる）。このネットワークを運用しているのが本センターである。本センターの中心的課題は、児童や教師たちが、安全かつ効果的にインターネットを利用できるよう条件整備をすることである。この課題には、各学校の教員や技術専門家たちに最新のハード面（機器等）の整備とソフト面（IT リソース等）のサポートを行うこと、また、学校間のコミュニケーションを円滑にできるようにすることである。本センターの職員は 10 年前と同じ、21 名である。様々な専門家が協力している。州からの年間予算は、1500 万ルーブリで、職員の給与や、サーバ等のハードなどすべて含んでいる。本センターは連邦教育省の州の実験施設であるので、営利的活動からの収入は基本的にない。本センターの活動への学校、教師、児童生徒の参加は、すべて無償である。コンクールによるグラントをもらうこともある。しかし、ロシアのコンクールには、有料で参加する大口のコンクールもあるが、本センターはそうしたコンクールには参加できないので、無料で参加できるコンクールのグラントは比較的小口である。

情報・教育ポータル

本センターでは、児童・生徒や教育関係者にインターネットを紹介する空間として「情報・教員ポータル」を設け、ロシア語と英語で紹介している。このポータルは州レベルのものであるが、ヤロスラブリ州だけでなく、ロシア全土、世界 104 か国からのアクセスがあり、実際、昨年は 100 万件以上のアクセスがあった。2005 年には、ロシアでもっともすぐれたポータルとして表彰された。

本ポータルには、ヤロスラブリ州の教育機関のホームページ（HP）とリンクが張られている。本州の各教育機関は、独自に HP を作成し管理をしている。各教育機関は、本ポータルにバーチャルキャビネットと呼ばれる共通にプラットフォームがあり、学校がその活動を掲載した

り、共通情報メーリングシステムを利用して情報（法令、イベント、緊急連絡）を迅速に配信したりすることができる。学校の指導者はどの場所においても、このキャビネットにアクセスできる。このポータルには種々の教育関係のリソースがある。人気のあるリソースとしては、教員や児童が共同で開発した作品のバーチャル展覧会がある。展覧会は、作品だけでなく、その作品を作成する方法も紹介されている。リソースの件数は様々で 11 万件以上あり、すべての学校段階のすべての教科等に対応しており、教師は教室のコンピュータで授業に利用することができる。リソースの中には本センターで独自に開発したものもある。それは、児童生徒が実験をすることができるようなものである。環境システムを研究するために水族館のモデルが紹介される。本センターでは、「ソーシャルナビゲータ」というプロジェクトがあり、児童生徒が誤りに気づきながら問題解決をするバーチャルな空間や、若者が将来の労働の市場において自信をもって活動できるような進路選択の空間が構築されている。他の紹介したいサイトとして「青年と法律」がある。若者が法律を知り、それを遵守できるように、法律家、教育者、心理士、社会学者などの協力を得て、ゲーム仕立てのマルチメディア資料を作成した。児童生徒が資料を閲覧するだけでは十分でなく、児童生徒が特定のテーマ（個人的権利）に関してコンクールに参加し、自らが制作した作品を発信できるようにしている。

社会的な問題に関して様々な人々を結集させるために、インターネットは重要な役割を演じている。ヤロスラブリ州は、全ロシアで、スポーツの地域として有名である。ソ連時代より、いわゆるゲー・テー・オー（労働と防衛準備）コンプレクスが人気で、本センターでは、ゲー・テー・オー・コンプレクスの情報サイトを設けている。児童生徒は、ネットを通じて情報を得たり、専門家・監督に質問をしたりすることもできる。

本センターは、ネット社会に生きる児童生徒のために情報教育も行っている。インターネットでは安全性が重要である。本センターでは、安全性を学習するために、オンライン・ゲーム（例えば、海賊ゲーム）を開発している。ネットワークのスラング（俗語）のサイトもある。児童生徒がそのサイトで学ぶことにより、電子証書を取得することもできる。

教育プロジェクト活動

センターが取り組んでいる積極的な活動として、インターネットを利用した「教育プロジェクト活動」がある。これは、時間・空間的に離れた様々な国（ロシア語圏）の児童生徒が、特定の教育課題を協働で解決するチャンスを与えるものである。そのプロジェクトは教科横断的で、創造的、研究的活動である。プロジェクトは魅力あるプロジェクトにそれぞれの得意な面をもって自発的に参加している。課題は社会的にも重要なもので、例えば、環境問題として水源の問題がある。水源の歴史学、地理学、化学学、生態学、情報学などの側面から調査しており、各分野の教師も参加している。物理に関する SF 作品が現実的に可能かどうかを学際的に検証したり、「台所の化学」をテーマとして化学と他の学問分野の視点を融合させたりして創造的・探究的な活動を行っている。植物学のプロジェクトでは、ヤロスラブリで生育が未確認であった新種の花が発見されている。きれいな環境でしか生息できない宇宙人を迎えるために、ゴミ収集のコンクールも行われ、校区の美化運動にも取り組んでいる。「私の家族」というコンクールでは、様々な世代が参加し、家族の遊びや趣味を紹介し、家族の紋章を作成する。また、2010 年は、ロシアの「教師の年」で、その際に「われ

われの新しい学校の教師」というプロジェクトを実施し、全ロシア・ウクライナ・白ロシア・カザフスタンから 5000 人以上の児童生徒からアカデミー会員までが参加し、自らの教師について紹介したり、教師らしい写真も募集したりした。教師の写真は、2500 人が応募し、インターネット審査を行って 3 万人が投票により、化学実験で驚いている教師と生徒の写真が優勝した。

授業配信とテレビ会議

ヤロスラブリ州のインターネット利用の他の特徴として、「インターネット・マスター授業」の放送がある。児童生徒が州のどこに住んでいようとも、誰でも優れた教師や専門家の授業を視聴し、学ぶことができる。特に、才能のある児童生徒をサポートする方法になっています。例えば、数学オリンピックの全国チームの指導者の授業をみることができる。テレビと異なるのは、双方向性であり、視聴するだけでなく、児童生徒から解法を提示したり質問したりすることができる。シュルースコフという田舎町の生徒が、ICT テクノロジーのおかげで、ヤロブラスリ州から国際オリンピックの金メダルを獲得している。このように、国際オリンピックの金メダリストはヤロスラブリ州出身が多い。現在児童生徒に人気があるのは、非定型的な問題（解法が容易には見いだせない問題）の解決方法を学ぶ授業である。

他に、本センターでは、インターネット会議を行っている。すべての州の学校と教育機関は、Microsoft Link を使って、教育会議のビデオ会議ができるようになっている。学校は、単にビデオ会議を行うだけでなく、公開授業、教育会議、補充資料の準備、スライドプレゼンテーション、サイトの同時視聴、投票、チャット等が可能である。この会議は、専門技術者を必要としない。毎日 3 つくらいの会議が行われている。ビデオ会議の情報は、「メディアセンター」という特別なサイトに収集され、各学校はこのサイトを通じて他の学校に会議参加の案内を出すことができる。また、ヤロスラブリ州の教育長は、2 週に 1 度、教育運営に関する会議をこのシステムを利用して行っている。

英才児のサポートシステム

本州では、英才児童に対するサポートを様々な教育機関レベルで把握するインターネットサポートシステムが策定されている。このシステムは、教育庁、文化長、スポーツ体育青少年政策庁をネットワークで結びつけている。英才児に対する種々の機関の活動を効率化するためのシステムが ITC を利用して構築されている。これは、英才児に活動をコーディネートし、リソースを総合し、共通の基盤を設けるために必要である。その主要な一部は、英才児と教師のデータベースである。そして、英才児を教育している様々な運営機関に対するサポートを行っている。州レベル、市レベル、学校レベルで活用されている。また、ヤロスラブリ州の社会政策担当の副知事が、このデータベースを利用している。このシステムには、モニタリングのツールも作成されて、分析用の統計的データが揃っている。例えば、ある機関や各市・地区の英才児の活動の比較、各教科分野での活動の比較などが可能である。このシステムを用いて、共同活動を計画したり、予算措置の決定をしたりする際の資料となる。さらに重要なこととして、英才児童の成功データだけでなく、それを可能にした教師の活動についての情報や、英才児をサポートする教師に対する支援を行うためのリソースを提供している。

以上、いくつか本センターの取り組みとして興味深いものを選択して紹介をした。

2010年は、ヤロスラブリ州は、ロシア全体で、教育関係におけるインターネット活用に関して第一位になった。

質疑応答

日本ではMicrosoft社は3000-6000人の教師を教育するが、本州ではどうか。2004年に、Microsoft社はロシア政府に対して「ロシアにおける生徒用のITアカデミー（その中に教員の研修も入っている）」を紹介し、そのプロジェクトのコーディネートを本センターが行ってきた。プログラムを作成し、ロシアでアカデミーが実現できるようになった。本センターは、「ITアカデミー」が自立的に運用されるように支援した。今では「認証センター」が設立され、本センターから手を離れた。ヤロスラブリ州では、約20校がこのプログラムの中で活動している。本センターとは関係ないが、Microsoft社はロシアの中で、「革新的教師（Innovative Teacher）」というプログラムも行っている。

本センターが開発している種々のプロジェクトに参加する児童生徒は補充教育として参加しているのか。そうです。今、ロシアでは、2009年にロシア連邦大統領令で「教育現代化総合政策」が出され、普通教育と補充教育を総合化が行われようとしている。各州レベルでも類似のプランを採択し、指標を設けてプランの進捗状況をチェックしている。

以前は、国際プロジェクトにユネスコが支援をしていたが、現在では。現在でも本センターはユネスコの本部となっており、「われわれの時代」というプロジェクトを実現するために行っている。ちょうど10年前に訪問した際に、ユネスコ本部になったばかりであった。

英才児のデータベースが果たしている役割は。それは学校レベルから国際レベルまでのさまざまな（19の）分野のデータベースを提供しており、範囲と情報が豊かになった。

教材を外国と交流する際には、言語は何か。大部分はロシア語である。基本的な情報は英語でもある。マルチメディア教材はロシア語で、翻訳しようとするならばすべてを翻訳しなければならないので、本センターはヤロスラブリ州の教育を中心に考えている。

センターの活動を進めていく際に人々の協力をどのように得るのか。フォーマルな方式とインフォーマルな形態がある。本センターでは、ポータルを通じて、すべての学校のすべての教師と双方向性を持っているので、協力の依頼は基本的に可能である。また、テレビ会議やインターネット授業等の設備によって学校の活動に応じて様々な形態で参加する機会が設けられている。

10年前、障害のある児童生徒は知事からコンピュータを貸与され、家庭で学ぶ制度が導入されていたが、現在ではどうか。この制度は、「世界の窓」という州から始められたプロジェクトであるが、現在はロシアの国立プログラムになり、国が条件を与え、その結果の報告も求められている。現在では、ロシアの各州には、障害者児童用の遠隔教育センターが設置されるようになり、普通教育と補充教育、国家統一試験のサポートも行われている。

資料

1. Календарь
2. Брошюра

③ヤロスラブリ国立教育大学

Ярославский педагогический государственный университет им.К.В.Ушинского

(訪問時間：2：50－5：30)

1. 対応者：Афанасьев Владимир Васильевич (ректор, профессор Ярославского педагогического университета, председатель Ярославской областной общественной палаты)
Новиков Михаил В. (проректор по научной работе и международному сотрудничеству)
Мишенькина Елена Владимировна(начальник отдела международного сотрудничества)
Балеевских Ксения Викторовна (заведующая кафедрой теории и практики переводов факультета иностранных языков)
Лазарев Михаил Николаевич (помощник ректора)
Задворнова Маргарита Викторовна (консультант информационно-аналитического отдела департамента, координатор приёма делегации)
2. 住 所：г. Ярославль, ул.Республиканская, 108
3. メール・電話等：(4852)30-56-61 rector@yspu.org
<http://yspu.org/index.php>



大学概要

この大学の歴史は古く、1908年7月6日皇帝ニコライ2世の詔勅に端を発し、2008年には100周年を祝った。最初は毎年75人の学生を受け入れる3年制の師範学校であり、卒業後は市立学校において、《神の法》を除く全教科を6年間教える義務があった。このような学校は、1876年に設立されたカザン師範学校を嚆矢として19世紀末から各県庁所在地に設立され、低階層の教育水準の向上を目的とした。卒業者の一部は、一般的には伝統的に総合大学卒業者が教鞭を取るようになっていたギムナジアの初等科で教えるものもいた。1918年には師範大学となり、最初の入学試験には96人が応募し、31人が合格した。そのうちの20名は農村出身者で、全員が男子であった。1917年には臨時政権の命令により、女子は聴講生となることが許された。彼女たちの中には、貴族や僧侶階級の出身者もいたが、その過半数は農村出身者であった。師範大学は、ヤロスラブリの学術的、教育学的水準を活性化した。1918年には、国民人民部により大学再編が行われて4年制となり、1919年から1921年には新たに

創設された国民教育大学の一員となったが、1922年から1924年まで存続したヤロスラブリ総合大学では教育学部になった。再編期にも、最初からの物理・数学、自然科学・地質学、語学・文学・歴史学の3コースは維持されていた。1924年から1993年12月8日まで、国立教育大学のステータスは変わることはなかった。現在では、ヤロスラブリ国立教育大学と再編されて、100年以上の時を歩んでいる。1945年からはウシンスキーの名前を冠した大学となった。

アフアナシエフ学長との質疑応答

ボローニャプロセス移行について

2011年にバカラブリとマギストルに完全移行したが、前システムで入学した学生があと4年間在籍し、スペシャリストとして卒業することになっている。1993年から20年間近く実験をしてきて、2011年から完全移行した。2010年に入学した学生には5年制の教育で2つの専門を身につけさせようとしている。例えば、数学と物理、歴史と外国語、数学と情報の教員資格を取らせるようにすれば、卒業後は2つの専門教科を教えることができる。これは、特に農村学校においては重要なことである。

学生の70%は予算措置があり、30%は私費学生である。マギストルを卒業後の給与は30%増しとなる。また、今年からは、教員の給与を30%引き上げ、地域の平均賃金を上回るようにした。これには問題もある。たとえば、学長補佐の給与が一教員より低くなる事態になるのである。農村教師と医師の給与が上がった。学生全体の80%は、目的別契約学生である。平均して、学生の65%が教職に就く。

語学について

英、独、仏、西、伊のヨーロッパ5言語に加えて、昨年から日本語を教えるようになった(日本語担当教師も出席していた)。日本語クラスは、受講者16人でスタートしており、名古屋大学から加藤ユミ講師が派遣されている(常駐ではない)。ヤロスラブリにコマツが進出してきたことと関係している。

大学の規模

600人の教員(8割はこの大学の卒業者)を擁し、大学院生は300人で博士課程もある。以前は、モスクワ大学とサンクトペテルブルグ大学だけでしか、ドクターの養成はできなかった。10年前にはドクターの学位をもつ教員は12人しかいなかったが、現在では101人である。他の5地区に生涯学習を行5つのカレッジをもち、90%の学生はそちらで学んでいる。教育大学ではあるが、学生の4分の1は教員養成以外の、例えば、ジャーナリスト、広告、作家などのスペシャリスト、3000～4000人の修士、高等教育機関の専門家を養成している。

見学

ノビコフ副学長(歴史学専門)の案内で図書館に案内され、1540年ごろの日本各地の景色、風俗を描いた本を紹介された。千年の古都ヤロスラブリには、貴族や大商人所有の教会などを含め千もの教会があったが、革命以後、破壊されて80に激減したそうだ。ここに保存されて

いる貴重な書籍の大部分は、革命時に亡命貴族が屋敷に残してあったものである。

その他、長年待たれ、2006年に開設されたウシンスキー記念博物館、心理学センターを経て大学所属の植物園に案内された。コーヒーや食虫植物など熱帯、亜熱帯の植物を育てていて、ラン展が開催されていた。日本で行われる世界ラン展に較べればつつまじやかなものであるが、零下32度の地でランを咲かせるのは凄いことなのだろうと思われた。

資 料

1. CD
2. Ассоциация «непрерывное профессиональное образование»
3. Перечень образовательных программ, реализуемых в ЯГПУ им. К.Д.Ушинского (программы бакалавриата и магистратуры)
4. Перечень образовательных программ, планируемых к осуществлению с 2012/2013 учебного года (программы магистратуры, бакалавриата, специалиста)
5. Перечень образовательных программ, реализуемых в ЯГПУ им. К.Д.Ушинского в соответствии с ГОС ВПО (второго поколения) (программы бакалавриата, специалиста, магистратуры)
6. Состояние системы менеджмента качества ФГБОУ ВПО «Ярославский государственный педагогический университет им. К.Д.Ушинского»
7. Контакты с другими странами
8. Брошюра «Russian as a Foreign Language»
9. История ЯГПУ за 100 лет / под ред. Д-ра исторических наук, проф. М.В.Новикова. – Ярославль: Изд-во ЯГПУ, 2008. – 244 с.
10. Ярославский государственный педагогический университет им. К.Д.Ушинского. 100 лет со дня основания. ? Рыбинск: Изд-во «РМП», 2008 – 160 с.
11. Ярославль. Тысячелетие (Фотоальбом) / 2011. – 160 с.
12. 1010-2010 Летопись Ярославля

Межрегиональный центр по поддержке одаренных детей и подростков

対応者：Гусева Наталья Александровна (директор)

Золотарёва Ангелина Викторовна («создатель» проекта по поддержке одаренных детей)



資 料

1. Брошюра «Межрегиональный центр по поддержке одаренных детей и подростков»

対応者：Константинов Владимир Александрович (директор ботанического сада)

< 2月14日 (火) >

④第56番幼稚園

Центр развития ребёнка - детский сад № 56

1. 対応者：Пашкова Наталья Геннадьевна (директор)
Клюева Елена Геннадьевна (педагог-психолог)
Павлова Ольга Владимировна (педагог-психолог)
Полякова Ирина Юрьевна (социальный педагог)
Халиченко Валентина Эдуардовна (старший воспитатель)
Сибриков Андрей Викторович (директор департамента образования мэрии города Ярославля)
Задворнова Маргарита Викторовна (консультант информационно-аналитического отдела департамента, координатор приёма делегации)
2. 住 所：г. Ярославль, ул. Панина, 39 А
3. メール・電話等：(4852) 55-81-64 mdousong@mail.ru
<http://mdou56.edu.yar.ru>



以前は、175番就学前教育施設であった。2005年に、英才児のための組織的メソッドを導入した。

2008年に児童開発センターという名称になり、普通の保育所以上の業務が加わった。

2011年11月から、独立経営幼稚園になった。

現在の園児は257人、2歳から入園だが、1歳8か月の幼児もいる。1クラスは25人、各年齢2クラス、年齢にかかわらない英才クラスが1つあり、合計で11グループが編成されている。

教職員は、34人である。

ベンゲルの診断法を用いて、英才児を抽出している。16人が英才児特別クラスに入っている。親が特別クラスでの保育を望まないのが、普通クラスの中に6人の英才児がいる。英才教育だといって特別料金はかからない。

保育園のホームページがある。入園申し込みも、紙に書いて持って来てもよいが、インターネットでできる。3月に入園の知らせをホームページに掲載すると、

ヤロスラブリ州には3つの英才教育をする保育園がある。昨年からは、補充教育センターが英才教育を始めた。

児童開発センターになって、相談員を置いて、市内の家庭保育の子どもたちに対する指導をする。週1時間とか、一時的に数時間とか親子がやってきて、活動をする。

また、市内の保育士のために現職研修を開催している。70人がやってくる。

州の補助金を受けて、補充教育をしている。補充教育は有料だ。演劇や「空道 (Kudo)」という特別活動だ。プールのない保育園から親が子どもを連れてやってくる。これは有料で、補充教育だと考えている。

独立経営幼稚園とは、市から一括して交付金を受けとり、使い方は園で決めることができるというシステムだ。建物は市の管轄で、勝手にできない。教育について、企画書を市に提出し、会計報告書を市の財務部に提出する。

この時、同席した市教育長は、「計画を立てることが大切なのだ」とコメントした。市の説明によると、2007年より出生率が高くなり、3人の子どもを持つ家庭が増えている。2000年時点でヤロスラブリ市の新生児は3000人だったが、2011年には7200人になっている。これから4年間で10の保育園を建設する予定だ。どの保育園にも定員増をお願いしている。保育料は、1人目は20%減、2人目は50%減、3人目は100%減にすることができる。家庭の収入と家庭の子ども（18歳まで）の数で保育園料が決まるのだ。親からの支払いが保育園の運営費の20%以内と法律で決まっているが、ヤロスラブリ州では12%以内としている。平均して、1日6時間子どもを預けると、63ルーブリ（150円程度）だ。

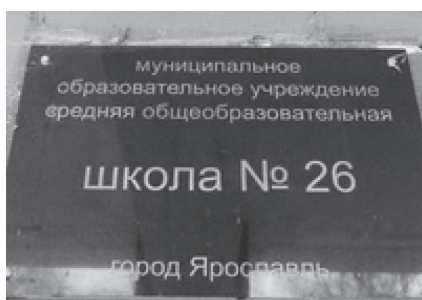
小中学校では、学校選択制が敷かれている。ただし、ヤロスラブリの学区は12あり、学区内を優先する。ここの保育園の子どもたちは情緒豊かに育てられていて、協力校の第58番学校に入学する。そこは「特定教科を深く学ぶ学校」で、優秀な学校だ。

教室の他、お話をする社会心理士の指導室、積み木などがたくさん配置されている美的創造室、「知識の国への旅」など特別室が作られていた。

⑤第26番普通教育学校

Средняя общеобразовательная школа № 26

1. 対応者：Дмитриева Любовь Валентиновна (директор)
Леванов Александр (системный администратор)
Смелкова Юлия Александровна (заместитель директора)
Алексеева Наталья
Беягина Ирина Алексеевна (заместитель директора)
Колотушкина Светлана Александровна (заместитель директора)
Задворнова Маргарита Викторовна (консультант информационно-аналитического отдела департамента, координатор приёма делегации)
2. 住 所：г. Ярославль, ул.Блюхера, 74
3. メール・電話等：(4852) 55-45-74 (4852) 57-54-63 yarsch026@yar-edudep.ru
<http://sch26.moy.su>



学校に到着し、玄関でロシアの伝統衣装をまとった生徒から、ロシアの伝統に基づき来客を歓迎するパンと塩をいただく。市教育長、マルガリータ氏も同席する。校長、副校長、教員、生徒の代表（腕に赤い腕章をした自治会の委員）等が歓迎をしてくれる。まず、物理教室で、学校概要のプレゼンテーションをみる。

本校の概要

教育長が、本校および校長を紹介する。本校はヤロスラブリ市の 12 教育区の一つジェルジンスキー地区の中心的な学校で、ヤロスラブリで最大規模の普通教育学校である。本校では、上級学年でプロフィール（分野別）教育として、物理・数学分野と文学・言語学分野を設けている。

校長より、本校はベッドタウン内にある普通の学校であることが再度強調された。本校の教育に児童生徒や保護者が満足している一つの証拠は、児童生徒の約 30% がこの地区以外から通学している。児童生徒数は、ロシアの人口動態の影響を受けることなく、恒常的で、約 900 名である。教員は優秀であり、73 人が常勤で、8 人が非常勤である。大多数の教員は女性であり、9 名が年金生活者、66 名が中堅者、若手教員は 5 名である。教員の資格に関して、25 人は最上級、19 人が 1 級、23 人が 2 級、7 名は若手教員でこれから取得見込みである。プロフィール教育は 1993 年から初めている。本校の教育的スローガンは、「われわれの学校は、すべての人、一人ひとりのために」というもので、本校の使命は「さまざまな可能性のある学校」というものである。学校は、通常と同じで、3 つの段階からなる。第 2 段階では、前プロフィール教育が行われている。第 3 段階では、上でのべた 2 つのプロフィール教育と普通教育が行われる。本校では、3 つのコースが設けられている。1 つめはプロフィール教育につながるコース、2 つ目は基本スタンダードに基づくコース、そして 3 つ目は特別支援コース（言語治療士や心理士の支援を受ける）である。身体障害者に対しては個人授業を行っている。学校の施設として、3 つのコンピュータ教室、15 台のサーバーがある電子教員室、コンピュータ・プリンター・プロジェクタが配置された教室が 24、移動式パソコンセットが 4、電子ボードが設置された教室が 9、学校の敷地内に 13 台のビデオ監視カメラが設置され 3 日間の記録が可能である。

2006 年以降、本校の教員の 50 名が教育発展研修所「Intel 未来の教育」というコースを受講している。2007-8 学年度、2008-9 学年度に、23 名の教員が「ウェブサイトの作成」というコースを受講している。教育発展研修所で研修を受けた本校の教師は、2009-12 年にかけて、他の学校の 54 名の教師に対して、本校を会場として「活動的アプローチ」をテーマとする研修を実施している。2010-11 年度にかけて、本校は、市レベルで推進しているプロジェクト

である「革新的電子学校」となった。この学校では、本校の42教室で、電子成績簿の管理が行われ、監視カメラによる学校安全対策が取られるようになった。現在、「市のコンピュータネットワークと電子学校の創設」というプロジェクトを推進するために、10の学校の20名の教員に対して研修等の支援を行うリソースセンターの機能を果たしている。さらに、本校では、コンピュータ支援のもとでロシア連邦新スタンダードの導入するためのコースを開設し、外部の15名の初等・中等学校の教員が本校で研修を受けている（後程、研修を参観する）。詳しい施設見学を行う代わりに、特色ある教室（情報学、外国語、ロシア語・文学、物理学、生物学、地理学、初等学校、数学、美学、歴史）の写真が紹介された。

続いて、本校のITC担当の教員から、本校のホームページと遠隔教育について説明があった。現在、学校には校内1ギガバイトの通信速度のLANが敷設され、この容量によりビデオやメディア教材を利用することができる。インターネットは光ファイバー使用で、速度は10メガバイトである。ファイアーウォールのソフトを使用し、外部からのハッカー攻撃を防いでいる。学校の2台のサーバーで、電子成績簿、ビデオ監視カメラのデータ、遠隔教育システムを運用している。遠隔教育システムを使って、本学校の児童生徒だけでなく他校の児童生徒が授業を受けたり、試験を受けたりすることができる。遠隔通信システムを使って、教師は通常の児童生徒と対話することができる。教師・児童生徒・保護者は、学校のホームページを使ってコミュニケーションを行うことができる。実際に、ホームページを閲覧する。ホームページから遠隔教育のサイトに入り、メディア教材、国家統一試験の準備コース、ビデオ会議システムをみる（実際、生徒が試験を受けている途中であった）。次に、監視カメラの画面が紹介される。このシステムで、校内の安全管理が行われている。校長や安全担当者は、携帯電話でも監視することができる。

次に、電子成績簿のシステムが紹介される。このシステムは、ヤロスラブリ市のすべての教育機関で運用されている。保護者と児童生徒は、学校のホームページから入ることができる。このソフトは以前から使用されていたが、最近2年間電子成績簿として使用している。教師は、毎日、自分の教科の成績を入力する。普通の学校の成績簿と形式は同じであるが、保護者は自分の児童生徒の宿題、成績、時間割を見ることができる。保護者や生徒は教師とコミュニケーションができる。忙しい保護者は都合のよい時間に閲覧することができ、好評である。

授業見学

8年Γクラスでは、自宅で身体障害者が遠隔通信教育システムを用いて個別に生物学の授業を行っている。広い教室に、教師1名がパソコンのモニターを通して、在宅生徒と1対1で授業をしている。使用しているソフトはSkypeであった。われわれに実際の様子を紹介するために、モニター画面が液晶プロジェクターでスクリーンに映しだされている。「電子学校(i-Школа)」というホームページの右上に小さく生徒の画面がある。教師は、ホームページのデジタル資料を開きながら生徒に説明をしている。本校にはこうした児童生徒が4人おり、それぞれの時間割にもとづき遠隔授業を行っている。次に参観したには、11年の情報学のクラスであり、生徒は8名であった。授業内容は、遠隔教育システムの使用法のガイダンスである。自宅にいて授業を受けたり、試験を受けたり、チャットすることを手ほどきしている。教師は、

午前の授業で説明をし、放課後にこのシステムを使って学ぶことになっている。4年の周りの世界（歴史分野）の授業を参観した。児童数は24名である。内容は、古典時代のロシアの試練、ロシアを愛する諺（モスクワはすべての町の母）、祖国を守った英雄（ウラジーミル侯爵、アレクサンドル・ネフスキーなど）。その後、宿題を確かめる。教師の電子ボードの研修を見学する。5日間で毎日6時間のコースで、地区の教員が参加している。電子ボードの使用法の復讐と実習をしていた。受講生はすべて女性で、12名である。一人ひとりデスクトップのパソコンを使用しながらまなんでいた。参観した3日目の授業では、複数のデータをグループ化する方法が説明されていた。

授業参観の後、玄関ホールで児童生徒が歌とダンス披露してくれ、バレンタインデーのチョコレートをプレゼントしてくれた。その後、教育長、学校の教職員とともに、昼食をいただきながら歓談を行った。

資 料

1. Школьная газета №1, 2,3 за 2011 год
2. Брошюра

⑥児童青年センター

Центр детей и юношества Государственное образовательное учреждение Ярославской области（訪問時間：15：00－18：00）

- | |
|---|
| <p>1. 対応者：Пузанов Юрий Валентинович (директор)
Гельгиня Гапасовна Гайнулина (дежурный администратор)
Задворнова Маргарита Викторовна (консультант информационно-аналитического отдела департамента, координатор приёма делегации)</p> <p>2. 住 所：г. Ярославль, проспект Дзержинского, 21</p> <p>3. メール・電話等：(4852)55-06-43, 55-66-14, arenal@rambler.ru
www.yarcdu.ru</p> |
|---|

センターの概要

センターは、42年前に創設され、2010年には40周年を祝った。ヤロスラブリ州レベルのイベントを年間約100回程度行い、延べ5000人強が利用している。現在の所長は創設時から4人目である。スタッフは200人で、そのうち111人が教育に当たっている。そのうちの30人はこのセンターの卒業生である。正式名称は、あまりにも長い名前なので、今も呼び慣れた以前のピオネール宮殿と言っているそうだ。

教 員

教員の給与は、一人が週に18時間受け持つのが基準となっているが、二人分受け持つても

よいし、それより少なくてもよい。例えば、センター長はセンター長の仕事とは別に、夜間に週 18 時間柔道を教えており、その手当としては 10000 ルーブル（約 300 ドル）の手当がでている。教員によって時間数は異なるが、平均すると一人 3000 ルーブルの給与である。中には、5000 ルーブルの者も、23000 ルーブルの者もいる。教員はほとんどが大卒であるが、音楽や舞踊などの指導者は中等専門学校修了者もいる。センター長自身は、大学在学中に頼まれてわずかな手当で柔道を教えていたことがある。教員スタッフの中では、6 人が学校の教師をしながらここでも働いているが、そのようなケースは稀である。雇用の際に一番気をつけることは、その人物がどのような人間かよく分かっていることである。

予算は国と州からきており、もっぱらこれに依存している。スポンサーとしては親の援助が挙げられる。たとえば、2 日後には、センターの合唱団《アレグロ》がフランスのコンクールに出場するために出発するが、旅行の経費の 90% は親が負担し、バスの賃貸料など 10% をセンターが負担する。また、ある親の場合は、新体操のコンクールを前にした自分の子どものために、スタジオを借り切るために 100 万ルーブル出したこともある。センターとしても、他の機関の出版物の印刷を請け負うなどして収入増加を図っている。スポンサーからの臨時費用はセンターの修繕費などにも使用されている。

サークルの種類

ここには、教科のサークルはないが、英才児のためにはここは別に補充教育センター《オリュンポス山》があり、学校とは別に補助教育としての英才児教育を行い、夏季と冬季のキャンプを開催している。そのような国立のサークルは、このサークルを含めてヤロスラブリ市には 6 施設ある（子どもと青年のツーリズム・エクスカージョンセンター、技術創造センター、愛国教育センター等）。

センターの主なサークルとしては、技術創造部（航空、造船、写真、プログラミング、コンピュータ、マルチメディア、天文学、子どもテレビ《5+》）、芸術教育部（人形劇、演劇と試作、バレエ、絵画、縫い物、籠作り、民族衣装・刺繍・レース編み、デザイン）、スポーツクラブ《アレナーリ》（サンボ、アクロバット、柔道等）、環境教育スタジオ、合唱スタジオ《アレグロ》、ジャズスタジオ《A and B》が挙げられる。ロシア各地や海外のコンクールで入賞することも多い。2 日後にフランスに発つ合唱団の合唱やジャズの演奏を披露してくれた。

資 料

1. パンフレット

< 2月15日(水) >

⑦職業リセ

Профессиональный лицей №21 ヤロスラブリ州国立初級職業教育機関

(訪問時間：10：00 – 13：00)

1. 対応者：Ярцев Владимир Степанович (директор)

Березина Ирина Владимировна (заместитель директора по воспитательной работе)

Выборнова Надежда Николаевна (заместитель директора по общеобразовательной подготовке)

Паникарова Марина Александровна (заместитель директора по учебно-производственной работе)

Жаворонков Василий Николаевич (преподаватель сварки)

Шестаков Евгений Владимирович (старший мастер)

Ohno Hiroaki (Vice-President, General Manager of HR and administrative department, Komatsu Manufacturing Rus)

Лаас Артур Владиславович (Менеджер по обучению персонала, Komatsu Manufacturing Rus)

Задворнова Маргарита Викторовна (консультант информационно-аналитического отдела департамента, координатор приёма делегации)

2. 住 所：г. Ярославль, ул. Карабельная, 7

3. メール・電話等：46-28-05, 48-85-65 pl_21@mail.ru

<http://pl21.edu.yar.ru/abiturientam.html>



リセの概要

この職業リセの前身は、57年前に設立された職業技術学校であるが、現在はヤロスラブリ州国立初級職業教育機関である。これまでに9000人以上の卒業者を輩出した。2012年1月1日付で、全日制、定時制合わせて527人が在籍している。コースは、①コック、菓子職人コースが一番多く116人 ②溶接工（電気溶接とガス溶接）ガスプラズマ切断装置調整工コースが116人 ③デジタル情報加工工コースが69人 ④B級、C級資格取得のための自動車機械工（自動車整備工）コースが117人 ⑤木材加工工コースが20人である。取得できる等級は、

2 級から 5 級であるが、一般的な生徒の場合は、2 級か 3 級の資格を取っている。教育期間は、コースによって異なり 1 - 4 年である。例えば、すべてのマイクロソフトパッケージを深く学習するコースの場合は 2 年半である。

5 - 6 年前までは入学に際しては 2 倍程度の競争率だったが、出生率の低下の影響で現在では全員の希望者が入学できる。しかし近年、出生率が上昇しているため、将来的には競争率が上がるかもしれない。

学費は無償で、国は各生徒に 1 月に 480 ルーブルの奨学金、無料の昼食、交通費の半額を支給している（この日の献立はオープンサンド、ジャガイモ、紅茶）。50 人程度は、片親家庭を対象とした手当を受けている。食堂では職員と共に料理コースの生徒も働いており、10 時から 3 交代で昼食が供される。このリセの生徒だけではなく、近所のリンダービルディング建設会社、造船工場等からも 200 人ほどが昼食を食べに来る。格安でおいしいと評判だそう。

教職員は 85 人で、教師は 58 人である。その内訳は、専門分野の《祖国に対する功労》メダル受賞者 1 人、ロシア連邦功労教師 2 人、職業技術教育名誉労働者 4 人、職業技術教育優秀者 6 人、ロシア連邦教育省名誉賞受賞者 12 人、上級、1 級、2 級資格カテゴリー教師がそれぞれ 8 人、14 人、8 人で、カテゴリーのないものが 3 人である。300 台の工作機械、80 台のコンピュータ、プロジェクター、プリンター、15 教室、9 作業場、200 人収容の講堂、体育館、ジム、200 人収容の食堂がある。

近年の大きな変化としては、①コック、菓子職人コースが新設されたこと、自動モンタージュのデジタル処理のできる実習場が 2 つ造られたことである。また、2006 年 4 月には、州の教育局の命令に基づき、ヤロスラブリに 1 つしかない最高レベルの初級職業溶接リソースセンターがこのリセにつくられ、リセの卒業生ならびにヤロスラブリ州の初級職業教育学校の卒業生を高資格の労働者に養成することを目的としている。また、大人用の資格向上も行っている。

ヤロスラブリ市の 50 以上の企業と提携して、生徒の生産実習を行っており、60%以上は実習を受けた企業で就職する。コマツ、リンダービルディング、造船工場、中小企業その他である。造船工場とは 10 年以上提携している。2011 年には、コマツから 125 万ルーブルの援助を受けた。2011 年に出されたヤロスラブリ州の目的プログラムに従ってコマツと共同で作業場を創り、市に必要とされる高資格の労働者を養成することになっている。補充予算を用いて、溶接部門を発展させようとしている。現状では、35%が伝統的マニュアル溶接、40%がシールドガス溶接、15%がマニュアルのアルゴン溶接、10%が自動スポット、ガス、プラズマ溶接であるが、今後変化が見込まれる（コマツの場合は、60%がロボット自動溶接、40%がマニュアル溶接である）。卒業生は就職先で使用される溶接を学ぶことになるので、新しい電気溶接、鋼鉄プラズマ溶接、切断溶接が必要とされ、生徒にも高い資格を持つものが増加している。飛行機工場があるレービン市で開催される「Рос-Сварка」博覧会は、外国からの参加もある大会だが、こちらの生徒も見学に行く。溶接の教師であるジャボロンコフ氏は近々溶接の研修のためにドイツに行くことになっている。

見 学

1, 2 年生用の溶接コースの作業場で学ぶ生徒たちは、溶接の仕事はきれいではないが必要であると割り切っている。1 クラス 16 人は全員男子である。昨年は女子もいたし、モスクワで開催されるコンクールには女子も参加していたそうだが、女性の体にはよくない仕事だそう。需要が多い職業なので、卒業生は職場を選ぶことができる。料理も溶接ほどではないが、不足気味の需要が多い職業である。賃金もよく、コマツの場合は約 1000 ドルである。1500 ドルの工場もある。プーチン首相がサンクトペテルブルグを訪問した時の話だが、あちらでは 2000 ドルの賃金でも溶接工が足りないとのことだった。校長は、溶接工に限らず、ロシアでは肉体労働者が不足しているが、お国のためにその教育にあたっていることを誇りに思っていると述べた。ここで養成される労働者はモスクワなどの大都市に行くものは殆どなく、ヤロスラブリ州内で働く。溶接の実習では 19 人以内と決まっているが、ここでは全日、定時制合わせて 116 人を 7 グループに分けている。



コマツの大野氏（人事担当 副社長）の話

3 階には、レストランがあり、料理コースの生徒のつくったフルコースの食事 (海苔巻きのザクースカ、サリャンカ、ポークあるいはサーモンのソテー、デザート) をご馳走になった。コマツではこのリセから料理人を、このリセともう一つのリセから溶接工を雇用した。社内では、日本語、ロシア語、英語が混在して使用されており、日本人向けにはロシア語講座 (早稲田に留学していたロシア人が講師)、ロシア人向けに日本語講座 (モスクワ、サンクト、極東大学卒のロシア人が講師) が開かれている。社員の採用に際しては、ロシア全土を対象として



募集し、まずスカイプで面接をして見込みがありそうなら試験に来てもらう。試験は学力試験を中心に行っている。コマツの社員食堂ではこのリセの卒業生 4 人を採用している (内 1 人は実習中)。彼らの舌を肥やして料理の腕を上げてもらうため、一月に 1 週間はモスクワに出張させて日本料理を食べさせている。そのお蔭で料理人は見違えるほど美味しい日本料理が作られるようになった。

資 料

1. Диск
2. Диск Комацу
3. Брошюра Комацу
4. コマツロシア製造 (有) 概要

⑧第 58 番普通教育学校 (数学、化学・生物学を深く学ぶ学校)

Средняя общеобразовательная школа № 58

1. 対応者：Остапенко Ирина Сергеевна (директор школы)

Макарченко Ольга Юрьевна (заместитель директора по воспитательной работе)

Иванова Елена Анатольевна (заместитель директора по учебно-воспитательной работе)

Александрова Наталья Игоревна (заместитель директора по учебно-воспитательной работе)

Белякова Людмила Васильевна (заместитель директора по учебно-воспитательной работе)

Крупкина Татьяна Викторовна (заместитель директора по учебно-воспитательной работе)

Горбачёва Александра Николаевна (заместитель директора по учебно-воспитательной работе)

Когешкова Наталья Евгеньевна (преподаватель технологии)

Гаспарян Игорь Сергеевич (преподаватель технологий)

Комарова Елена Валериановна (учитель биологии)

Сидорова Марина Борисовна (учитель химии)

Сергеева Татьяна Владиславовна (учитель математики)

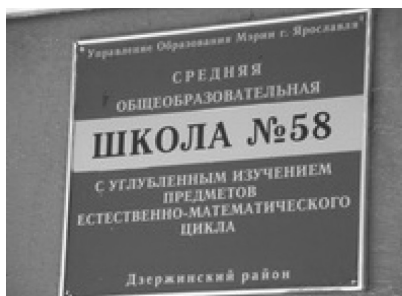
Масленина Елена Владимировна (ведущий специалист отдела общего образования департамента образования мэрии г.Ярославля)

Задворнова Маргарита Викторовна (консультант информационно-аналитического отдела департамента, координатор приёма делегации)

2. 住 所：г. Ярославль, ул. Труфанова, д.21 А

3. メール・電話等：(4852) 53-68-14 yarsch058@yandex.ru

<http://school58.edu.yar.ru>



30分遅れで学校に到着する。マイクロライオンに位置する校舎を特定することが難しかった。玄関で、校長、副校長、教職員らが出迎えてくれる。一部と二部の児童生徒が交替する時間帯

のようで、学校全体がにぎわっていた。校長室であいさつをする。校長、副校長も数学の教師である。本校は、ヤロスラブリ市で最大の普通教育学校で、児童生徒数は1学年4クラスで計1221人で、教員は85人、職員を合わせて125人である。全面的発達を基本とし、理系の教科を深く学んでいる。本校は、いわゆるプロフィール（分野別）教育とはことなり、専門をより深く学ぶものであり、プロフィールクラスよりも学ぶ内容が難しい。数学、化学・生物を深く学ぶ学校として人気があるので、1年生の入学希望者は定員の3倍である。7年生で専門を決め、8年生から4クラスのうち2クラスが化学・生物学を深く学ぶクラス、他の2クラスが数学を深く学ぶクラスである。

施設見学

まず学校博物館を訪問する。本校は、3つの教育の柱があり、愛国心、知性、創造性であり、この博物館は、愛国心教育センターで、大祖国戦争でヤロスラブリを防衛した人を顕彰する施設である。本校では、1998年から「青年愛国社」というクラブが組織され、その指導者は本博物館の館長でもある。本博物館は2008年に開設した。まだ展示物を順次補っているところであらう。このクラブのイニシアティブにより、校歌、校章、本が作成された。クラブでは、インタラクティブな案内ソフトを作成し、現在では18の作品が出来上がっている。2012年は、「ロシアの市」の年とされる。伝統的に本学校で行っている科学作品展でも「ロシアの市」にちなんだ研究を展示している。本校では、「知識人クラブ」があり、2-11学年が所属し、年3階、秋、冬、春に行われており、地区、市、州、全校レベルで、学校を代表する児童生徒が参加する。昨年、児童テレビができ、番組や広告を制作しており、コンクールでも入賞している。

この後、集会場に移動し、民族衣装をまとった7年生と10-11年生の数学プロフィールの生徒が歌と踊りを披露した。一つはロシア民謡「ワーリンキ」、もう一つは7月7日から8日にかけての夜を祝う「イワン・クパーラ」という式典を観る。その後、我々も招かれ、一緒に踊った。その他、本校の生徒が行う活動として、5-11年生の謝肉祭の人形を作りが紹介された。その後、生徒・教員とともに全員で記念写真を撮った。

次に、テクノロジーの教室を見学し、普通の授業と課外活動との連携について説明を受ける。生徒はいない。テクノロジーは5-8学年まで1週間に2コマの授業で、男女別学である。女性は、裁縫（ミシン）、編み物、調理を学ぶとともに、現代産業の知識や技能を習得する。教室は2つの部分に書かれており、一つは裁縫や編物をし、もう一つは台所と食卓がある。近年、大改修が行われ、教室が改善された。テクノロジーは安全性も重視し、応急手当の初歩も教えている。台所は大変新しい設備が整っているが、間取りは比較的狭い。テクノロジーは調理から始まる。5年生ではダンドイッチや野菜料理、料理を配膳する。6年生では魚、加熱野菜、デザート。7年生では、肉、ケーキ、手の込んだ料理を作る。料理の他に、6年生では刺繍、7年生では編物、さまざまな手工芸作品を作成する。さらに、8年生ではプロジェクト活動にとりくむ。生徒は自ら計画をたて、作品を制作し、発表会を行う。生徒がテクノロジー関心をもった場合、補充教育としてクラブに参加することもできる。男子用の教室では、理論用と実習用（機械）の部屋に分かれている。第1-2四半期は木材加工を、第3四半期金属、第4四半期はプロジェクトのテーマを選び作品をつくる。その際、美学の教師と協力している。本校のちが

う教室でコンピュータの学習をする。ヤロスラブリ州には「学校間学習生産コンビナート」(市の6つの地域にある)があるが、本校では施設がよいので、本校の生徒はコンビナートに通っていない。ここでは、クラブ活動として補充教育も行っている。設備が不足している場合には、コンビナートに通うことになる。ここで、生徒が作成したCDをお土産としていただく。

次に、生物学教室を見学する。ここでも生徒はいない。本校では、1-4学年までで「周りの世界」、5学年で「自然学」、6-11学年は「生物学」を学ぶ。本校では、生物を2つの方向性で教えている。一つは普通のカリキュラムで週2時間、もう一つは8年生から生物学を深く学ぶクラスが形成され、週4時間学ぶ。8年生で形成される深く学ぶクラスは、実験を行う際にはグループ分けをして授業をうける。本校の化学・生物学クラスの卒業生は、医学アカデミー、農業アカデミー、ヤロスラブリ国立技術大学、教育大学に進学する。卒業生の50-70%は、自分が選考した専門性を生かした職業を選択する。この後、本教室で指導している教師が説明する。本教室は、5-11学年生が学んでいる。教室に置かれている展示物は、生徒が作成したものである。3階に、「教科間ラボ」というコンピュータクラスがあり、生徒はそこでコンピュータを用いて実験・実習を行っている。設備が不足する場合は、ヤロスラブリの高等教育機関と協力している。

最後に、化学実験室を見学する。7-11学年が「化学分析入門」というコースを学ぶ。7学年から週1時間、8年からは深く学ぶ教科が始まる。10-11年生はグループに分かれて学ぶ。すべての実習は、卓上にある特別な実験セットを用いておこなう。生徒は、インターネット化学オリンピックに参加し、優勝している。インターネット化学オリンピックは、ヤロスラブリ市デミドフ記念総合大学が年に2回組織するもので、7-9学年、10-11学年で5人以内のグループで参加する。問題は、理論、実習的(プロジェクト)なもので、4-5日の間で結果を提出し、審査される。審査は、デミドフ記念大学の専門家が行う。210チームが参加しており、他の州からも参加できる。化学の実験では、2人1組でこのセットを使う。このセットは、ヤロスラブリ州で3つの学校に設置されている。このセットは、ロシアの教育全国コンクールに入賞した賞品として得たものである。

教職員との懇談

情報学教室で、校長より、本校について補足説明があった。

本校は30周年を迎え、1-11学年の生徒が、3つの段階分かれて学んでいる。初等学校では、国家スタンダードに加え、「情報学」、「研究活動入門」、そして追加の「数学」の授業を行っている。初等学校修了時点で、児童は、基本的な読み書き、問題に対する創造的なアプローチ、健康的な生活様式を身に付けることをねらっている。これに関連して、本校のスイミング・プールの写真が紹介される。5-7年生は、許可の選択の準備を想定して学習する。その際、「情報学」と「研究活動」という教科も継続される。さらに、化学と数学の準備コースもある。7年生の際に、全員が数学、化学、生物学の試験を受け、その成績に応じて8学年で学ぶコースを決定する。8年で30%が外部から入学する。5年や10学年で入学する者もいる。10-11年は、教科を深く学ぶカリキュラムを履修する。これに関して数学を深く学ぶ11Aクラスの写真を紹介しながら、ここクラスのすべての生徒が大学に進学し、中にはモスクワの有名な大学に進学したものや、州・ロシアレベルの数学オリンピアドの優勝者もいたという。また、化学・生物学を深く学ぶ11Bクラスの写真

を紹介しながら、このクラスは、化学・生物学で深く学ぶだけでなく、数学に関してプロフィールレベルの内容を学ぶことをのべた。本校の生徒は、コンピュータにも高い能力を発揮しており、様々な会議に参加し、また、全ロシアの「発見」という会議に参加する準備をしている。

数学を深く学ぶまなくコースでは、週8時間（幾何3代数は5時間）学ぶ。深く学ぶコースとプロフィールのコースでは教科書も違う。10年生では、物理学をプロフィールレベルで行っている。その場合、クラスをグループ分けして授業を受けている。8年生以降の深く学ぶクラスでは、放課後に無償で補充学習を行う。10年生からは、数学、生物学、化学を含め選択コースも始まる。卒業試験では、物理、数学、情報学では3人が満点を取った。入学試験では、100%に近い生徒が無償で入学する。モスクワ大学の物理・機械学部にも8名が入学した。国家統一試験のおかげで、本校の生徒はロシアの様々な地域の大学に進学することができた。オリンピックに関しては20種のオリンピックのうち、19種に参加しており、好成績を収めている。ヤロスラブリ州には100の学校があるが、市で4位、州で5位の総合評価を受けている。すばらしい教師と生徒がいるからである。

資 料

1. учебный план

< 2月16日(木) >

⑨ 第3番ギムナジア

Гимназия №3

1. 対応者：Василенко Ирина Айзиковна (директор)

Иванова Елена Анатольевна (первый заместитель директора)

Ложников Дмитрий Викторович (председатель управляющего совета гимназии)

Балакирева Галина Вячеславовна (заместитель директора по информатизации образовательного процесса)

Зарослов Вячеслав Михайлович (художник-педагог)

Григорьева Наталья Евгеньевна (заместитель директора по научно-методической работе)

Михайлова Надежда Сергеевна (заместитель директора по воспитательной работе)

Задворнова Маргарита Викторовна (консультант информационно-аналитического отдела департамента, координатор приёма делегации)

2. 住 所：г. Ярославль, ул. Саукова, д.5

3. メール・電話等：(4852)24-66-07, yargimn003@yandex.ru

<http://gimn3.edu.yar.ru/> <http://proektyargimn3.ucoz.ru/>



校長室に迎えられ、早々にお茶をいただきながら、名刺交換と自己紹介を行った。市教育局次長も遅れて同席した。

本校は1986年9月1日に学校が開学した。本校は5-11年のギムナジアであり、規模は5-8学年が4クラス、9年5クラス、10-11学年が3クラス、計28クラスである。生徒数は772人で、教員は54名で、ほとんどの教師が最高カテゴリーである。功労教員は5名、ロシア連邦功労教師は13人である。プロフィール(分野別)教育を行っているギムナジアもあるが、本校はプロフィール教育を行っていない。しかし、本校は、基本的に人文系の学校である。上級段階では、さまざまな選択教科が設けられている。

生徒は、ザゴールスキー地区から通学している。本校は一部制で、9時30分から授業がはじまり、6時間、14時10分に授業が終わり、その後にさまざまなクラブがあり、夜8時ごろまでクラブなどの補充教育がある。学校は2つの段階があり、5-9学年が第一段階で、10-11学年が第二段階である。本ギムナジアでは、5年生から外国語として英語、ドイツ語、フランス語を学ぶ。本年より、体育の授業時数を2時間から3時間に増やした。

2006年よりロシアは「教育」という全国コンクールが行われており、革新的なプログラムを導入している学校のコンクールが始まり、2007年に本校はコンクールに参加し、優勝し、100万ルーブルを獲得した。他の「教育」コンクールとして、これまでに本校の教員が5人優勝し、個人に10万から20万ルーブルが与えられた。

校長と学校運営委員長の話

10年は人の歴史としては長いですが、教育の歴史からみると長いとはいええないかもしれない。ロシアはこの10年は過渡期であった。90年代の評価はいろいろあろうが、学校にとっては決して悪い時期ではなかった。自由度が大きくなったし、発展を目指している学校、例えば本校のような学校にはよいチャンスであった。それと同時に、90年代は国家からの発注は曖昧なものになっていた時期でもあった。しかし、2002年には「2010年までの教育の現代化概念」、さらに2010年の大統領による「われわれの新しい学校」が出され、次第に明確な国家発注が具体的に示されるようになってきている。「われわれの新しい学校」では、将来の国家や社会は学校から始まるとしており、社会に求められる個人・人格の教育が求められている。例えば、社会に求められる個人の特性としては、イニシアティブを取ること、どのような活動に対しても創造的にアプローチすること、課題を見出し解決できることなどである。生徒は早く進路を選択し、競争社会に適合しなければならない。本校は、人格教育を目指しており、本日は、生徒の姿をみていただきたい。「われわれの新しい学校」には6つの内容が示されている。(1) 新スタンダー

ドへの移行、(2) 英才児童への支援、(3) 教師の専門化の支援、(4) 子どもの健康保持、(5) 学校施設の改善、(6) 学校の自立性、である。10年前は、まったく異なることで、特に(6)に関しては、校長のリーダーシップが高まる。このことに関して、校長は学校運営委員長を紹介する。2006年度より旧来の「学校ソビエト」から「学校運営委員会」を設立することになった。この委員会は、生徒、教師、保護者、卒業生、設立側（市教育長から）の代表からなる。3年ごとに選挙を行い、委員を決める。設立者（教育局長）と学校（長）は契約書を結んで、学校運営委員会を運営する。国家発注が明確になったので、現在は、市教育局から明確な指示が出されるようになった。その意味で、校長の責任が大きくなっている。同席した運営ソビエトの一人（ドミトリー氏）は保護者として参加しており、ヤロスラブリ小松工場の建物を建設した会社の社員である。学校のプログラム、活動、予算などを評価したり、将来の計画にも意見を述べたりすることができる。選任方法としては、各クラスで保護者委員会があり、学年ごとに代表者を決め、運営ソビエトに立候補し、演説会を行い、選挙を行う。委員会には、特定の課題を審議するワーキンググループもある。保護者の委員からは、金銭面の支援がなされることもある。

施設見学

まず、美術教室を訪問する。ビチスラフ教諭（ウラジオストク出身）は2000年に功勞教員の表彰を受け、2011年よりロシアの画家同盟に所属している著名な画家で、本校で最も永く（25年間）勤務している。彼の風景画（バイカル湖の風景）は美術館や学校の廊下に展示されている。生徒のイーゴリ（カムチャツカに住んでいた）は、日本語を独学で学び、日本語の原稿を準備して説明してくれる。

次にコンピュータ教室を見学する。生徒はコンピュータを使用して情報を検索することができる。学校のウェブサイトのサーバーがあり、また、本校は「ネットワーク学校」という連邦プログラムに参加している。ICT担当副校長ガリーナ氏（2006年からこの担当をしているが、専門は心理学）から説明を受ける。ICTは教育の中で最も活発に活用されている分野である。他の学校でもおなじみであるが、授業では電子ボードが使用され、教員はインターネット会議をすることができる。本校は、遠隔教育コンクールを組織し、ロシアギムナジア連盟の協力を得て、ロシアのすべての地域から8000人が参加した。このように、本校のICTシステムは、生徒だけでなく教師の研修の機会にもなっている。

次に、教員室（日本の職員室とはことなる）を訪問する。教員が会議、相談、生徒の評定、休憩を行う。

科学教授法担当の副校長ナターリヤ氏から、本校での教科間プロジェクト研究活動の成果を廊下に展示してあり、その掲示について説明があった。本年は、「世界史の中での12年」というテーマで、文学、芸術、科学など様々な視点から歴史的な事実を調べ、レポートにまとめている。昨年、ロミノーフ生誕300年を記念したテーマを取り上げた。

次に、ナジェージュダ訓育担当の副校長から、児童生徒の心的・文化的な能力を育成している。本校の補充教育の活動として、声楽スタジオで行われている3名の生徒の歌唱を聴く。たいへん表情豊かで、歌声もすばらしい。2005年より、生徒が自主的に運営する「ギムナジア共和国」があり、司法、立法、行政機能をもっている。生徒、教師、保護者が市民となっている。

この共和国で、「今年のクラス」というプロジェクトを行っている。5年から11年のクラスが詳細に評価され、年末に、最優秀のクラスが選択される。賞品として、例えば、クラス全員の旅行などが贈られる。

続いて、学校博物館を見学した。10年前の訪問時は、エクスクルサボードと通訳との間にトラブルがあったが、今回は、学生が説明してくれ、何事も起こらなかった。伝統ある学校では、必ずこのような博物館があり、生徒がそれを流暢に説明していることが印象的であった。前回訪問した際に記した福田先生の言葉がノートに残っており、再度、福田先生か感想を書いた。1986年に開学したこと、1年生の「最初の鐘」の写真や、コムソモール・ピオネール組織が活躍しており、オクチャブラータという団体に入り活動していた。その入式典はどうだったもので、本校の生徒は赤の広場で行った。前回は、ここで問題が起きたのであった。

授業見学

短時間であるが、2つの授業を見学した。一つは9年生の英語の授業で、そこで電子黒板をどのように活用していた。内容は、よい新聞記事とはどういう条件をもったものかを考えることである。電子黒板では、よい記事の条件が空欄で示されており、それをうめていくように教師と生徒の会話が組織される。

もう一つは7年生の地理で、ここで本学校の教師が用いている役割ゲームの方法（テクノロジー）をもちいていた。地理の授業では、生徒は観光代理店の店員として、休暇で遊びに行く国（アフリカの国、エジプト、南アフリカ）について観光キャンペーンを行うものである。この授業はプロジェクト的なもので、生徒は計画をたて、情報を取集し、整理し、結果を判断し、得られた結論を効果的に発表するものであった。参観した授業では、各グループが順番にキャンペーンを発表するものであった。あるグループが発表後、他のグループが、その発表について相互評価を行う。相互評価の方法は、スマイルマーク（笑顔、普通、渋い顔）を黒板に張るという方法であった。

2つのクラスの教師は、われわれが10年前に訪問した後に採用された教員で、彼らは本校の卒業生である。本校は、11名の若手の教員を採用し、かれらがギムナジアの将来を担うことになる。

生徒との面談と校長との食事

学校を案内してくれた生徒から質問を受けた。古典スラブ文化で伝統的な「幸せの鳥」を小さな生地と赤い毛糸を使って作成した。その後、校長先生と昼食をいただきながら歓談を行った。

資料

1. パンフレット гимназии
2. CD
3. календарь
4. Национальная образовательная инициатива «Наша новая школа»
5. Расписание работы кружков и секций гимназии №3 на 2011-2012 учебный год

6. 学習計画 5-11 級

⑩教育発展研究所

Государственное образовательное Автономное Учреждение Ярославской области
Институт развития образования
(訪問時間：14：00 – 16：30)

1. 対応者：Степанова Елена Олеговна (ректор)
Потехин Николай Владимирович (руководитель центра информационных технологий)
Уланова Галина Александровна (руководитель центра развития системы менеджмента качества ИРО)
Задворнова Маргарита Викторовна (консультант информационно-аналитического отдела департамента, координатор приёма делегации)
2. 住 所：г. Ярославль, ул. Богдановича, 16
3. メール・電話等：(4852)21-06-83 rectorat@iro.yar.ru
www.iro.yar.ru

概 要

資格向上研修所から教育発展研究所へ

10年前の私たちの訪問時には、ここは資格向上研修所であったが、現在はヤロスラブリ州国立教育独立機関である教育発展研究所となっている。研修生の数は以前の 5000 人から 12000 人、つまり 2, 5 倍に増えた。名称が変わっただけでなく、以前は資格向上の研修のみであったが、現在では多彩な活動を行っている。研修生のモチベーションも高くなり、研修以外にも、個人や団体に対する教授法の支援も行っている。教育予算はロシア全体でも、ヤロスラブリ州でも増えた。



教師は 5 年に一回、72 時間の研修を受け、証明書を受けなければならなくなった。また、2012 年には教育長の命令でここに 7 つのリソースセンターをつくることになった。それらは、①未成年者の犯罪防止 ②教育の成果に基づいた運営 ③健康的で安全な生活様式の形成 ④新世代の教育スタンダードの支援 ⑤教育課程への ICT の導入 ⑥多文化社会における精神

的、道徳的問題 ⑦就学前教育における必修プログラムの条件と構造に対する要求である。人員の増加も見込まれている。

2004 - 2008 年には British Council の影響下にあったが、2006 年から現在まではロシア・オーストリア共同プログラムに従事している。まず、教育研修のニーズを把握し、2011 - 2012 年には、初級職業教育の旅行代理店とホテルの教育機関の代表者に海外研修を受けさせた。今年も、建設とガス溶接の教育機関の代表者が研修を受けることになっている(そう言えば、職業リセの溶接の教師が研修のためにドイツに行くと言った)。2008 年に職業教育センターと合併し、以前は扱わなかった職業教育の研修も行うようになった。現在は、190 人の教員が在籍する 6 つの講座(教育マネジメント、一般教育学・心理学、特殊欠陥学・心理学、文系教科、理数教科、就学前・初等教育の講座)がある。

教員研修

教師は 5 年に 1 回、1 日 8 時間の授業を 9 日間受けて修了書(Удовлетворение)を受けなければならない。144 時間受けた教員は証明書(Свидетельство)を受け取る。ヤロスラブリ市では現在までに 2 万 5 千人が研修を受けた。毎年 5000 人が研修を受けるとすれば、 $5000 \times 72 \times 1$ 時間分の授業料が研究所の収入となる。法人独立機関となってからは、余った予算を返金しなくてよい。

研修はモジュール形式で行われる。モジュールは約 30 種類あり、《権利》《管理》等、分野に分かれており、1 モジュールは 6 時間である。初心者は、氏名、所属機関、肩書き、生年月日、カテゴリーの書かれたカルテを受け取り、電子データに記録される。テストを受け、相談を受けながらどのようなモジュールを受講するか決める。必修と自由選択のモジュールがあり、1 モジュールにつき 2 回(12 時間)は受けなければならない。例えば、校長になりたての研修生の場合であれば、《権利》を最低の 12 時間以上、《管理》を 24 時間とるといった具合で、あとは《経営》《経済》《コミュニケーションビジネス》等を自由に選択して授業を受け、それらが統合されてコンピテンシーとなるのである。一般的には 5-6 種類のモジュールを選ぶ。初級、中級職業教育用、幼稚園の園長、副園長用のものもある。初級、中級職業教育の場合は、72 時間の受講 + 30 時間の実習を受ける必要がある。情報の教師の場合は、4 年前までは 72 時間のうちの半分から 3 分の 2 の 36 - 48 時間は必修モジュールだったが、現在では必修は 24 時間であとはパスカルやクミールソフトを学習する。10-11 学年の授業ではパスカルは必要ないが、クミールは必要である。《学校リナックス》を学んでもよい。ヤロスラブリ市には情報の教師は 200 人なので、5 年に 1 回、40 人の研修生が来る勘定になるが、実際には 30 人が来ている。ちなみに、わが国で情報コースができたのはソ連時代の 1985 年のことである。

インテル社の《未来のための教育》を用い、ICT を活用している。その主要な課題は、ICT を利用してプロジェクト活動を実現することであり、情報の教師ではなく、ロシア語、外国語、物理、数学、科学、生物の教師が多く携わっている。

5 - 6 年前以降は、研修は義務ではなく、権利とみなされていたが、新スタンダードからは研修は再び、権利から義務となった。

資料

1. パンフレット института

⑪ Ужин с Груздевым М.В

1. 対応者：Груздев Михаил Вадимович (первый заместитель директора департамента образования Ярославской области)
Задворнова Маргарита Викторовна (консультант информационно-аналитического отдела департамента, координатор приёма делегации)
2. 住 所：Ring Premier Hotel
3. メール・電話等：(4852)400-888 gruzdev@region.adm.yar.ru
mvgruz@gmail.com



1990年代は、革命ではなかっただろう。

2000年の頃、教育分野の革命の時代だ。教育の分野がとても大きくなった。一つは、財政的変化だ。

次に、教育が「頭割り (per capita、一人当たり)」に変化した。予算は、学校当たりではなく、生徒一人当たりで降りてくることになった。こうすれば、競争が行き渡るからである。教育分野に市場原理が持ち込まれたのである。

その場合、学校は内向きではなく（生徒にはなく）、外を向くようになる。顧客（クライアント）は、親などいろいろいる。教育内容は、国家教育企画となり、国家スタンダード（標準）で決める。学校は、国家スタンダード通りに動いていく。教育の評価は、独立した評価機構が行うが、それが必要かどうか、教育学者もあまり批判しない。

2001年にロシア国内で11年生の国家統一試験が始まり、2003年にヤロスラブリ州でもはじまった。この結果は、教育行政側に大きな情報を与えてくれた。教師の資質や教科書にも反映することになった。

現在では、卒業する時だけでなく、途中の学年（9年生）でも統一国家試験を行おうということになってきている。

学校別の結果を公表したらよいかという問題もある。10年近く公開してこなかった。それは唯一の教育目標ではないからだ。それでも、ヤロスラブリ州では数学とロシア語の成績を発表することにした。行政側にしてはこれは新しいデータではないが、むしろ顧客（クライアント）が学校に厳しい要求を出せるようにすることが目的なのだ。

民主主義は、社会の形成には必要だ。学校権限の一部を手放さなければならない。産業界から金が入るが、そのかわり校長は独自に教育目標を決められなくなったわけだ。

今国は、学校の各段階がつながるように新世代の標準（スタンダード）を作ろうとしている。

試験のスタイルについては、

- ①教育の終了時点で教育の成果(教科の学力)を独立した評価機構が調査する。これは、2000年頃からロシアで始まった。
- ②ICTなど、教科横断的、メタ教科的な能力の評価、PISAのようなものをビジネス界は望んでいる。これを測るのは意味がある。これが何を意味するのか、現在の教員には説明できない。ICTという場合、「コンピュータが学校にあるか」を調査していたが、それが「何台ありどう使っているか」という調査になり、今では「プロジェクト学習を行っているか」という調査項目になっている。
- ③国家スタンダードには、個人の人格的な特徴が評価に入っている。2008年にメドベージェフが打ち出した「我らが新しき学校」にはそれが表れている。これは、学校に評価が戻ってきたという意味で注目される。

ロシアの子どもたちは、たくさんの公式を知っていたのに、知らない情報を探す力を持っていなかった。教育機構の改革よりも、教育評価の基準をどうするかの方が重要である。そのためには、教師の全世代が変わらなければならない。ヤロスラブリだけではなく、ロシア全体で、新しい教師を育てる状況にはない。

< 2月17日(金) >

⑫ヤロスラブリ市教育委員会

Департамент образования мэрии города Ярославля, городского центра развития образования

1. 対応者：Сибриков Андрей Викторович (директор департамента образования мэрии города Ярославля)

Иванова Елена Анатольевна (первый заместитель директора департамента)

Ильина Елена Александровна (начальник отдела общего образования департамента образования мэрии г.Ярославля)

Бушная Ольга Вячеславовна (директор городского центра развития образования)

Задворнова Маргарита Викторовна (консультант информационно-аналитического отдела департамента, координатор приёма делегации)

2. 住 所：г. Ярославль, ул.Волжская набережная, 27

3. メール・電話等：(4852)40-51-00

<http://www.yar-edudep.ru/> <http://gcro.ru>

この10年間、教育機関のリストラ(学校統廃合)によって再編成した。農村学校には交通手段を与え、州は2001年にスクールバス計画を実行した。この制度は、今では他の州にも広がっている。また、ヤロスラブリ州では、いち早くすべての学校にコンピュータを導入した。学校

は、現代の産業のニーズに合うようにしなければならない。2007年9月1日から、教員には新給与制度が適用されている。教員給与は、労働者の平均賃金に追いついたところだ。



職業教育には力を入れている。中等教育段階までに60種類の職業養成がある。職業リセの卒業生では3%が失業率だ。学校は、企業との契約があり、授業の9割が企業契約に基づいて、実習もその企業で行い、就職もできる。時代によって人気の職種は異なるが、10年前の失業率が12%であったことに比べると、今はほとんどない。中等教育後の失業率も4%だ。

10年前の教育費の半分以上が外資だという指摘はあたらない。当時外国資本はもらわなかった。ソロス財団から2002年に最後の金が出ているので、2003年9月の調査時にはそういうデータがあったのかもしれない。州の教育改革計画を、外国の方と一緒に作成することが重要だったのだ。おかげで、2000年から2011年までは、質の高い教育をみざすことができた。

現在、医薬品開発には力を入れている。外国企業として製薬会社(スイス企業が建設したが日本企業が買収済み)と小松製作所が来ている。10年前にベンツ賞があったというが、工場があったわけではないから、ベンツのディーラーだろう。

この州でも、大学は、ボローニャプロセスに移行している。現在は、単位(クレジット)制と、専門認定(ディプロマ)制が両立している。

全国統一試験は、ロシア語と数学の2科目が必修で、他に選択として8科目があり、合計10教科だ。いくつ受けてもよい。ABCレベルのうちPISA型、記述式のCレベルの採点は地方で行う。択一問題の採点はモスクワで行う。地域の採点者は、前日夜になって本人に知らされる。成績の評価については、学校から独立したシステムが行うべきだ。教員の主観的・主体的評価が排除されて、公正さを保てる。しかし、国家統一試験にはまだ解決できてない問題もある。

国家統一試験の制度によって、ヤロスラブリ州からモスクワの有名大学に入学する者が増えている。自分の実力がわかるようになったからだ。

国際数学オリンピックでは、国家統一試験前から強かった。数学に強い学校がある。

外国人労働者の子どもの教育も行っている。「外国語としてのロシア語」という授業がある。旧ソ連時代から外国人労働者の子どもはいたが、それほど多くはない。

5年生から英語の授業があるが、2年生から始めてよいことになっている。

資料

1. Сборник лучших докладов школьников по экологии. Ярославль 2011
2. Публичный доклад о результатах деятельности муниципальной системы образования

города Ярославля за 2010-2011 учебный год

3. Ярославль на рубеже тысячелетий. ? Рыбинск: Медиагруппа, 2011

⑬ Komatsu Manufacturing Rus

1. 対応者：Tsukamoto Yasuhisa (General Director)
Ohno Hiroaki (Vice-President, General Manager of HR and administrative department)
2. 住 所：Ярославская область, Ярославский район, п. Нагорный, ул. Индустриальная, строение 1
3. メール・電話等：(4852)58-82-90 yasuhisa_tsukamoto@komatsu.co.jp
www.komatsu.yar.ru



ヤロスラブリの様々な教育機関を訪問したときは、以下の所でコマツの話が出た。

- ヤロスラブリ州教育科学局
- ヤロスラブリ教育大学（日本語の講座を導入した。現在様々な教育課程の大学生はこの講座を取っている。その中の2人は日本のコマツ工場へ研修に行ったことある。）
- 第21番職業リセイ（溶接工と料理人の卒業者はコマツ工場に雇われている。）

コマツ（社長：野路國夫）は、1921年に創立され、ロシアとの関係は1960年代から始まっている。9月11日に、ヤロスラブリ市の建都千年記念式典に合わせて、ロシアのヤロスラブリにある「コマツロシア製造」において工場開所式が行なわれ、CIS市場へ向けた油圧ショベルの出荷を本格的に開始した。ヤロスラブリの工場は、溶接から組立まで一貫生産となる建設機械の生産ラインを設置している。将来的には、フォークリフトを含むユーティリティ、大型機械、鉱山機械、ガスパイプライン用機械等の生産も予定されている。

コマツは世界的に有名な会社で、ロシアのヤロスラブリ市での工場の開設は地域の経済やインフラの発展に著しく貢献した。プーチン首相も工場を訪問した。新たな技術や製品品質検査システムの導入によって成果を収めたコマツの経験によって、ヤロスラブリ州はロシアのもっとも動的に発展している地域の一つになると期待されている。

コマツ工場の開設は、日本とロシアの互恵的な協力だけではなく、両国の相互理解も促進させる。日本政府や様々な基金はよく文化事業へ投資する。しかし、肩を並べて仕事する両国の人たちはお互いのことをもっとよく理解できる。これは、一般の人の間だけではなく国レベルの相互理解や相互尊重を促進させ、日本とロシアの間の良い関係の構築にも役立つ。

コマツ工場ではユニークな技術が使用されている。ロシア国民は質の高い教育を受けた人が多く、ヤロスラブリコマツ工場の代表者によると、ロシアの今日の特徴は、優秀な卒業生は大学院などへの進学よりも企業に就職する人が多いことである。コマツのヤロスラブリ工場と日本の新社員を比べると、ヤロスラブリのほうが新入社員研修の期間が短く、昇進も早い。しかし、残念ながら、現在のロシアは企業も技術的に遅れているし、教育制度への資金供給も不十分であるため、多くの卒業生は新たな技術を勉強する機会が非常に少ない。その状況の中で、コマツ工場は専門化養成の段階で教育機関を援助している。学習者には、技術の紹介だけでなく、見学や機会使用体験や研修も可能になっている。具体的にいえば、職業リツェイでは、ロボット溶接機械の体験できる新たな溶接教室の開場、ヤロスラブリ工業大学においては、技術センターや講座を開き、大学教員の研修を行い、大学生が工場で実習している。

コマツロシア製造は、地域に密着しヤロスラブリの更なる発展に貢献することを目的として、同地域の産業およびスポーツの振興と人材育成に寄与する社会貢献事業に取り組むことを決め、ヤロスラブリ州政府と合意した。具体的には、州内の大学・中等職業教育機関と提携し、建設機械技術や機械製造技術に関する講座の開設や共同研究の実施などの産学連携を進める。2010年より5年間で予定は、①ヤロスラブリ工業大学に建設機械技術および溶接技術講座を開設、②ルイビンスク航空技術大学に機械製造に関する基礎技術講座を開設、③ヤロスラブリ第21番職業リセイに溶接技能者育成コースを開設のさん点である。また、スポーツ振興の分野では、コマツが日本においても支援している柔道を振興していくための各種施策に加え、地元プロアイスホッケーチームの公式戦への子供たちの招待などを実施する予定です。

コマツ工場は一般の人にとっては、重要な就職口の一つである。給料も環境もヤロスラブリの技能の高い専門家を引き付けているらしい。ヤロスラブリコマツの溶接工は州の溶接コンテストに参加し、職業リツェイを卒業したばかりの一人の若い溶接工は、第2位だった。その上、第1位になった溶接工は、コンテストのときコマツの者ではなかったが、優勝してから、コマツへ行って工場での就職を求めた。

資 料

1. パンフレット

サハ共和国 [ヤクーツク] (9機関) 調査報告

(2012年9月3日～9月7日)

岩崎 正吾 (早稲田大学)
 福田 誠治 (都留文科大学)
 水谷 邦子 (芦屋大学)
 森岡 修一 (大妻女子大学)

2012年(平成24年)9月

サハ共和国～ブリヤート共和国(ヤクーツク～ウラン・ウデ) 調査日程・調査機関

月 日	時 間	都 市	航空便・ホテル	調 査 機 関
9月3日(月)	15:30 20:05	成田発 ハバロフスク着	S7(シベリア空港)568便 (H・札幌泊)	
9月4日(火)	午前、午後 17:30 19:35 22:20	ハバロフスク発 ヤクーツク着	空港へ出発 R3(ヤクーチア航空)496便 (H・ステルフ泊)	●本屋、考古学博物館、郷土博物館
9月5日(水)	10:00～12:15 14:30～16:00 16:30～18:40	ヤクーツク市	(H・ステルフ泊)	①サハ共和国教育省 ②サハ共和国科学アカデミー ③共和国カレッジ
9月6日(木)	10:50～13:20 14:30～16:40 16:50～19:10	ヤクーツク市	(H・ステルフ泊)	④ハタッサ児童創造の家 ⑤国民総合技術学校No.2 ⑥ヤクート教育カレッジ
9月7日(金)	11:00～12:50 13:00～13:30 14:50～16:25 16:40～18:40	ヤクーツク市	(外国語学部) (H・ステルフ泊)	⑦北東連邦大学極東語講座 ●永久凍土王国 ⑧北東連邦大学学長訪問 ⑨民族学校研究所
9月8日(土)	04:30 06:30 09:30 午後	ヤクーツク発 ウラン・ウデ着	空港へ出発 R3(ヤクーチア航空)493便 (H・ブリヤーチヤ泊)	●イルクーツク空港が天候不順のため、ウラン・ウデに行き先を急遽変更
9月9日(日)	11:00～ 13:00	ウラン・ウデ市	(H・バイカル・プラザ泊)	●ザバイカル諸民族のエトノ博物館
9月10日(月)	10:15～11:30 11:00～12:40 13:00～15:50	ウラン・ウデ市	(H・バイカル・プラザ泊)	①ブリヤート共和国教育・科学省 ②幼稚園No.72 ③ギムナジアNo.14とウラン・ウデ市教育局
9月11日(火)	10:30～12:00 12:30～14:15 14:40～15:50	ウラン・ウデ市	(H・バイカル・プラザ泊)	④共和国教育カレッジ ⑤ブリヤート民族寄宿制リツェイNo.1 ⑥ブリヤート国立大学民族一人文研究所
9月12日(水)	10:30～11:50 11:00～12:25 16:00～18:45 22:30 23:42	ウラン・ウデ市	駅へ出発 ウラン・ウデ発寝台急行列車No.361 (車中泊)	⑦青少年美育共和国センター ⑧ブリヤート共和国教育・科学省(教育大臣への報告) ⑨北方民族地域社会発展基金「タチヤナ」
9月13日(木)	09:55 23:30	イルクーツク着	(H・イルクーツク泊) 空港へ出発	
9月14日(金)	01:25 06:45 17:00 17:40	イルクーツク発 ハバロフスク着 ハバロフスク発 成 田 着	SU(ロシア空港)4653便 (H・インツースト泊) S7(シベリア空港)567便	

< 2012年9月5日 >

①サハ（ヤクーチア）共和国教育省

Министерство образования Республики Саха (Якутия), Отдел воспитания,
дополнительного и специального образования

(10:00 ~ 12:15)

(担当：岩崎正吾)

1. 対応者：①訓育・補充教育局長オーリガ・ヤーシナ
(Руководитель отдела : Ольга Яшина)
②補充教育共和国センター「ケスキル」のセンター長セミヨン・ヴィクトリエヴィチ
③その他、1人
2. 住 所：Почтовый адрес : 677000, Российская Федерация, Республика Саха (Якутия), г. Якутск, пр. Ленина, д. 30
3. 連絡先：電話：(4112) 424532
E-mail : ivanovayan@sakha.gov.ru
受付用電話：телефон: приемная 1 - (4112) 420356,
приемная 2 - (4112) 421119, канцелярия - (4112) 422907
ファックス：(4112) 424929.
4. 入手資料：①ホムス（口琴）のDVD 4枚。
②共和国幼稚園センター "Кэскил"20年 (DVD 1枚)。



1. サハ共和国の教育の特徴（オーリガ・ヤーシナ局長の話）

サハ共和国全体で生徒数は13万6,000人。124の補充教育機関で8万人が利用している（2011年）。補充教育の必修化に伴い、今後さらに増大する。サハ共和国は広大な国土を有し、34のウルス又は地区（ライオン）と2つの市区（ヤクーツク市とジャータイ市）の全部で36の行政区からなる。サハ共和国の教育機関の特徴は、普通教育学校の他に、遠隔地のウルスにある1クラス10人以内の小学校在数多くあるということ、また、アナバールスキー・ウルス、ブルンスキー・ウルス、ニーシーニー・コリィムスキー・ウルスなどでは、移動学校があり、子どもたちは親と一緒に移動しながら教育を受けている。

補充教育機関には、他の構成主体と同様に、技術・創造センター、児童創造センター、美術

教育センター、エコロジーセンター、スポーツ青少年学校などの他に、60年代から70年代のソ連時代に人気のあった青少年生物クラブもある。大きな都市、例えば、ヤクーツク市、ミールヌイ市、オルダンスキー、オイミヤコン、スレドゥネ・コルィムスキー、ネリユングリなどでは、新たに補充教育機関がつけられている。

サハ共和国の訓育の特徴は、民族教育学を使っていることであり、オロンホ叙事詩を用いた教育を行っている。サハ共和国には120以上の民族が住んでおり、丁度2012年は民族統一年として、記念行事が行われた。

改革に関していえば、セミヨーンさんがその長である補充教育の共和国レベルの機関である共和国センターが設立された。「ケスキル」という名称がついているが、これは「未来」という意味である。最近の変化としては、「多分野補充教育センター」が設立されており、その中には新しい分野としてロボット技術や技術創造などを含む多様なクラブが活動するようになっている。

補充教育機関の最新の動向としては、新しい国家教育スタンダードの導入に伴って、補充教育の統合モデルが導入された。これは、普通教育と補充教育と就学前教育の連携を強化し、それらを統合して活動を組み立てていこうとするものである。

2. 共和国センターについて（共和国センター長セミヨーン・ヴィクトリエヴィチの話）

共和国センターは、既にお話があったように124の補充教育機関を管轄している。補充教育機関には、一つの建物の中で9～10の分野が活動しており、そこに子どもたちが通ってくる場合と、補充教育センターが学校の中に入って行って、それぞれの学校で補充教育を行うタイプがある。伝統的な分野としては美術や民族芸術などがあり、最近人気があるのは科学技術関係の分野である。

スポーツ関係の補充教育機関は少し異なっており、3つの種類がある。一つは「青少年スポーツ学校」でおおむね5・6歳から18歳までが通うことができ、いくつかの種類のスポーツが活動している。二つ目は「特別スポーツ学校」で、これは一つのスポーツだけを教え、21歳までここで習うことができる。三つ目はスポーツ英才児の育成を行う「オリンピックリザーブスポーツ学校」である。昨日の報道によれば、ロンドンのパラリンピックでヤクーツクの選手が銀メダルを獲得した。これで3つ目である。2016年の4月の始めに、ヤクーツクで「アジアの子ども」という大会が開催される。これは、今年からは国際オリンピック委員会の主催で行われている。

第三の種類の補充教育機関は、音楽学校と美術学校である。管轄は現在教育省だが、文化省も担当している。今後、教育省管轄から文化省管轄に移すという話が進んでいる。これは、初級職業教育機関として位置づけようということである。

以上のように、科学・技術、スポーツ、文化の3つの分野から補充教育は構成されている。

3. 補充教育機関の管轄について

2つのレベルからなっている。他の構成主体と同様に、市町村レベルで管轄されている補充教育機関がある。これとは別に、それらの補充教育機関の活動を管理したり、調整したりする

機関として「共和国センター」が設立されており、これは共和国予算から支出される。新しい動向としては、補充教育機関を地域レベル（構成主体レベル）にして、財政的には連邦レベルで支出するという案である。まだ法案の段階であり、10月頃に新しい連邦教育法の中に盛り込まれるのではないかと思う。

補充教育機関は法律的には（第131法「地方自治法」）、100%が市町村レベルでの財務措置となっているのだが、サハ共和国では90%が市町村の予算、10%程度が共和国レベルでの予算から支出している。サハ共和国には、連邦レベルでの補充教育機関は6つある。これは共和国の教育省管轄である。共和国センターは、共和国レベルおよび連邦レベルの行事や催しを企画遂行する。

4. 補充教育機関の管轄の歴史について

ソ連時代は強力な中央集権化の下で、どの共和国でも同じ制度を取っており、連邦レベルでの共通の管理システムであった。1991年にソ連邦が崩壊し、新しい教育と訓育のシステムが導入されたが、90年代は複雑な時代であった。その後、新しい教育が次第に確立し今日に至っている。連邦構成主体はそれぞれ独立した役割を果たすことになり、教育も地域の特色に応じたシステムを取ることができるようになった。

21世紀の初め、2003年に連邦法が採択されたときから、就学前教育機関と補充教育機関は市町村管轄になり、それまでは連邦管轄、すなわち、連邦からの予算措置が取られていた。2003年から市町村立になり、予算も市町村から出るようになった。

90年代は、ロシア全体で多くの就学前教育機関と補充教育機関が閉鎖されたが、サハ共和国では幸いにも補充教育システムは残った。極東地域の構成主体の場合、補充教育機関機関の数や分野、参加人数などの指数を比較すると、ほぼ同程度であるが、中央地域と比べれば、指数的には高い数字を示しており、閉鎖されていないことが分かる。国際的な経済環境の中で、補充教育の有料サービスは全体の0.7%に過ぎない。しかし、子どもや親のニーズの高い分野は有料サービスを行う予定がある。

90年代はサハ共和国でも厳しい時代であり、困難もあった。しかし、それほど激しくはなかった。中央から離れているし、寒いところなので忍耐強い面もある。連邦補助金をもらっていない裕福な構成主体の一つであり、資源と心の豊かさがその背景にはあったことは確かである。

サハ共和国の生徒13万6,000人のうち、補充教育機関でカバーしている生徒数は8万2,000人、約62%をカバーしている。ソ時代が60～70%だったので、そんなに変わっていない。これから新スタンダードの学校への導入により、80～90%に増大し、5～7年後には100%になる予定だが、システムも少し変わる。つまり、教科課程の中に含まれるということだ。

5. 教育格差と就職問題について

ソ連時代にはそれほど教育格差はなかった。つまり、平均的レベルが維持されていた。90年代以降、リセやカレッジや教科を深く学ぶ学校などが設立されるようになって、格差が大きくなってきた。教育格差や就職問題は、サハ共和国もこれから経験する問題だと思うが、これは世界的な問題で、ただ教育を受けただけでは就職が難しくなっている。

これと関連して、補充教育の役割が高くなってきている。つまり、自分の手で何か創造できるような能力が求められるからだ。あるいは、自分で考えたプロジェクトを実現できるような能力が必要になるからだ。

付け加えれば、2年前から学校予算の与え方が変わった。生徒ひとり当たりいくらで算定され、生徒数が多ければ予算も増えるシステムである。学校は、生徒の関心を集め、生徒数を増やす努力をしなければならなくなった。

就職問題では、新しい分野に子どもたちの関心を持たせることが重要になってきている。機械生産、科学・技術分野、鉄道建設、道路建設などの分野である。補充教育機関の役割は、単に創造的な能力を養成するだけでなく、こうしたニーズの高い分野に子どもたちの関心を向けさせ、職業・進路指導を行い、就職に向けて準備することである。

6. 農村学校の教員養成について

報償やその他の刺激など、若手教員のモチベーションを高める方法を用いている。大学付属の教育研究所での養成や資格向上教員研修所での養成、あるいは共和国大統領グラントがあり、若い教員は5年働けば、都会や好きな場所での住宅購入費の30%～50%が支給される。ある地区の学校の若手教員の26人中、19人が農村学校で働き続けたいという希望を出した。3分の1ぐらいだと思っていたが、これは驚くべき数字で、家族ができたり、そこから離れがたいとかの理由による。

農村学校の数は、サハ共和国の特徴として、人口密度が低く、町から町まで、集落から集落までかなり遠いので、そんなに減少しないと考えている。子どもたちは、住んでいる場所で教育を受ける権利を有しており、これはロシア憲法に保障されている。重要なことは、「通いやすさ」が重視されるということだ。したがって、効率の問題から言えば、学校統廃合の問題もあるが、余り大きな問題にはならないと思う。

7. 男性教師と女性教師の割合について

伝統的に女性教員が多く、問題だが、これは今でも変わらない。サハ共和国の補充教育の教員では、男性教員は27%しかいない。ロボット技術関係、工業技術関係、飛行機モデル関係、軍事愛国関係のサークルは圧倒的に男性教員が占めている。ただ、ネリュングリ市の飛行機クラブの指導者の中の一人は女性教員だ。

8. 英語の国家語化について

サハ共和国では、ロシア語とサハ語が国家語だが、2001年頃から外国語に関心が高まり、サハカナダ学校、サハドイツ学校、サハフランス学校、サハベルギー語学校などヨーロッパの言語を学ぶ学校が創設された。英語に関する関心も高まり、英語を教える学校も多くなった。サハトルコ語学校もできたが、これは現在はサハ物理・数学学校になっている。多文化環境の中にいるので、ヨーロッパや外国に関心を持つことは良いことだ。2001年からは、母語－サハ語学校やエヴェン語、エヴェンキ語学校なども増えてきた。最近の3年間くらいからは英語より東洋語に関心を持つ生徒が増えている。ここ2年間は、中国語を希望する生徒の

数が増えてきた。

90年代の新聞記事の意味は、ロシア語を英語に代えて国家語にするというのではなく、初代大統領のニコラエフは、サハ語とロシア語の他に英語も国家語にしたかったのだと思う。90年代末（1996年～1998年）頃に大統領が出され、そのようなことが意図されたが、幅広く導入されず、次第に消滅していった。ロシア語はもともと主要な言語であり続けているが、最近では母語に対する関心が高くなってきている。

日本語を教える学校も多くはないが存在する。少ない原因は教える教員がいないからだ。今大学では、中国語や韓国語とともに日本語を含む東洋語の専門家の養成に力を入れている。日本語は観光会社や大学などでの働き口がある。

昨年出されたという「国家語と公用語を発展させる大統領令（プログラム）」の正式な名称はここではわからないが、民族文化や民族言語の維持・発展に関する補充教育機関での取り組みももちろん存在する。今年の夏、農村教育見本市（フェア）が開催されたときには、エヴェン文化とヤクート・オロンホの合同子どもキャンプのアイデアが出されたり、手先を起用にするためのチュクチの伝統的な子どもの遊びを用いるという催しも開かれた。

9. 社会教育士の導入と役割について

社会教育士(социальный педагог)は1991年から導入された職種で、教育省の管轄である。その対象は教育過程の参加者であるが、ソーシャルワーカー(социальный работник)は労働社会発展省の管轄で、居住する場所で住民を対象にサービスを提供する。ソーシャルワーク専門士(специалист по социальной работе)は最近できた新しい分野で、企業や民間会社などで年金や福祉に関する社会的問題を解決するために、それらと社会との間に入って協力する。

社会教育士は、普通教育学校ではおおむね配置されるが、補充教育機関では配置されていない。ただし、配置を決定する権限は機関の長であり、長の決定にしたがって配置することはできる。最近では、心理士や社会教育士の配置を必要とする教育機関も多くなっており、その必要性の認識が高くなってきている。

導入の背景としては、90年代からの社会経済状況の激変や教育制度の改革がある。ピオネールやコムソモールといった青少年組織の解体も、青少年を取り巻く社会環境の変化に影響を及ぼした。つまり、彼らの健全な社会的活動を組織する媒体がなくなり、新しい教育システムの中で対応することが求められた。その一つの現れが社会教育士である。

< 2012年9月5日 >

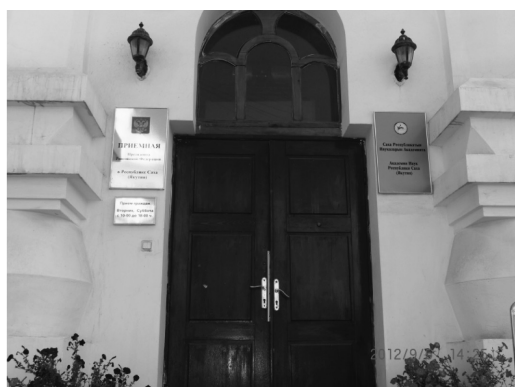
②サハ共和国科学アカデミー

(Академия Наук Республики Саха (Якутия))

(14:30 ~ 16:00)

(担当：岩崎正吾)

1. 対応者：①サハ共和国科学アカデミー副総裁：
 - ②革新技术導入センター上級研究員／物理学・数学修士／主任研究員：
リュドミラ・シャードリナ (Людмила Шадрина) (長年宇宙物理学研究所の学術秘書であった)
 - ③サハ共和国科学アカデミー会員、生物学博士／教授、前エコロジー研究所所長：ドミトリー・サービノフ
 - ④経済学修士、イノベーション・センター・政府機関などを歴任／研究員：ドミトリー・ソロヴィヨフ
 - ⑤サハ共和国科学アカデミー秘書：ズィナイーダ・コルニーロワ
2. 住 所：677997 г. Якутск, пр. Ленина, 33
3. 連絡先：リュドミラさんの連絡先 電話：7 (4112) 390-999
Fax : 7 (4112) 33-57-10 E-mail : lushadr@mail.ru
4. 入手資料：なし



1. サハ共和国科学アカデミーの概要

サハ共和国科学アカデミーは、1993年12月に設立された。この年はご存じのように困難な年であったが、バシコルトスタンやタタールスタン、チェチェンにもそれぞれの科学アカデミーが設立された。科学アカデミーは、共和国の最高の学術上のポテンシャルをもつ機関として、地域の科学政策の決定に関連した活動を行っている。総裁は現在休暇中で、イーゴリ・コロデニコフ (Игорь Колодезников) で、地理学の専門家である。

これは科学アカデミーの組織図(壁に掛かっている図)である。学術秘書や幹部会を始め様々な部門があるが、科学のあらゆる部門からそれぞれの部門の専門家を集めている総合的な学術集団である。組織構造的にはロシア科学アカデミーと同じである。2004年までは、科学アカデミーには独立した5つの研究所が入っていたが、2004～2005年にこれらの研究所はそれ

ぞれ別の機関の管轄になった。そのうち3つ（健康研究所、応用エコロジー研究所、地域経済研究所）はヤクート国立大学の管轄になり、9つの連邦大学の一つとして北東連邦大学となった。ロシアには約360の大学があるが、そのうち9つが連邦レベルの大学となった。他の2つはロシア科学アカデミー付属のシベリア部門のヤクーチア・シベリアセンターとなった。

サハ共和国科学アカデミーは、北極考古学センター（その付属の考古学博物館は大変すばらしい）、刷新技術実施センター、労働社会問題センター、ヤクーチア百科事典編纂センターをもっており、これらのセンターを統合している。組織構成は以下のようになっている。

サハ共和国科学アカデミーの組織構成

創設者：サハ共和国大統領

総 会：サハ共和国科学アカデミー会員、学術合同会議とサハ共和国学術諸機関の代表者による選挙によって選ばれたサハ共和国学術機関と大学の代表者

サハ共和国科学アカデミー会員：正会員33人（ロシア科学アカデミー会員1人、ロシア科学アカデミー通信会員5人）、名誉会員4人

サハ共和国科学アカデミー幹部会（常設管理機関）：総裁、副総裁－2人、学術書長、幹部会員－13人

サハ共和国幹部会付属学術会議

サハ共和国科学アカデミー合同学術会議：物理・技術学に関する合同会議、地球学に関する合同会議、人文科学に関する合同会議、医学・生物学に関する合同会議、農業科学に関する合同会議

サハ共和国地域センター：西ヤクーツク学術センター（ミールヌイ市）

南ヤクーツク学術センター（ネリュングリ市）

サハ共和国学術センター：北極考古学・人類古代エコロジーセンター

労働社会問題センター

刷新技術実施センター

サハ共和国科学アカデミーの統合機関：6つの研究所、2つの大学、1つの社会アカデミー

2. サハ共和国科学アカデミーの歴史

1989～1992年は、ご存じのようにソ連が崩壊した時期であった。ソ連時代は、それぞれの共和国はコーカサス、カザフスタン、シベリアなど、地域によって経済的役割を担っていたが、ソ連崩壊後は形だけの独立国家共同体が形成され、それぞれの国家の経済は崩壊していった。新ロシア連邦では、科学研究を維持していただくだけの資源が不足しており、アメリカやヨーロッパへの頭脳流出が行われた。ソ連科学アカデミーはロシア科学アカデミーとなったが、組織は崩壊していった。当時の自治共和国や自治体は構成主体となり、それぞれの地域で科学アカデミーが再組織された。当時サハ共和国では共和国の5つの研究所を統合しなければならなかった。経済的に協力しながら、科学的ポテンシャルを高める努力をした。こうした動きは、バシコルトスタンやチェチェンおよびタタールスタンでもあった。

3. 科学と教育との関係について

ソ連時代からあったことだが、高等教育機関の中にも研究所が入っており、様々な研究者の育成を行っている。また、サハ共和国の科学アカデミーは初等中等教育とも密接な関係を持っている。例えば、人文学校や農業エコロジー学校などである。

アカデミー会員は41人で、研究だけではなく様々な教育活動も行っている。分校（地域センター）もあり、ミールヌィ市に西部センターが、ネリユングリ市に南部センターがある。サハ共和国は広大な領土があるが、人口はわずか100万人に過ぎない。その約半数はサハ人で約50万人である。ヤクーツク市でいえば、450人の博士号取得者がおり、1300人の博士候補がいる。これはロシア連邦の中では、人口当たりの割合からすればトップレベルである。この18年間で博士号をもっている研究員の数は2.5倍に増大した。

科学アカデミーは、これらの研究者たちに対して、精神的サポートだけでなく、物的サポートも行っている。論文を書いたり、学位を取ったりすれば、物的報酬も与える。科学アカデミー自身が若手研究者に対する奨学金や博士候補者たちに対する物的支援を行うが、サハ共和国ではその他に大統領奨学金や様々な基金が支出されている。

4. 学位（博士号）の授与システムについて

ソ連時代のBAKは存在しているが、やがてなくなり、これからはそれぞれの学会に付設される学位委員会が出すようになる。現在検討中であるが、もうすぐ明確になるはずで、いくつかの学会（ученый совет）に論文を提出すれば、学会が審査し認定するシステムである。これらの学会は共和国レベルのものもあれば、都市レベルのものもあり、いろいろなレベルで考えられる（連邦レベルは？）。すべての学会は同じ権利を持つようになる。ソ連時代には、連邦レベル、共和国レベル、研究所レベルでも、学会は同じ権限をもっていた。これはまだ検討中の段階である。

1994年にサハ共和国科学アカデミーが設立されてから、35歳以下の若手研究員で、博士号を授与されたのは343人で、博士候補は620人である。これらの若手研究者にはボーナスが与えられた。ポローニャプロセスとの関連で、ソ連時代に博士候補を取った人は、現在はPh.Dと読み替えており、当時博士を取っていた研究者は外国の教授と同程度と見なしている。上の獲得学位の数字は、ソ連時代の学位のレベルのことである。

5. 研究者の待遇について

サハ共和国の科学アカデミー会員は、給料に加えて、月額3万ルーブルの奨学金をもらっている。これは死ぬまでもらえる特権で、本人の死後はその奥さんに半額支給される。サハ共和国科学アカデミー会員の平均年齢は66～67歳で、ロシア科学アカデミーの場合は、70歳に近い。サハ共和国科学アカデミーは大統領直轄である。55歳になれば、年金とし月額2万5000ルーブルが支給される。また、大学やその他の機関で研究や教育に従事すれば、その分の給料が支払われる。平均給料は、大学の教授で講座長の場合5万5000ルーブル、ロシア連邦の功労学者の称号を授与されれば、20%が加算される。平均は、5万から5万5000ルーブルで、この額は講座やその構成員の数によって異なってくる。ロシア科学アカデミー会員は

7～8万ルーブル、ロシア科学アカデミー総裁は15～20万ルーブルである。サハ共和国の平均賃金は3万3000ルーブル程度である。

6. 若手研究者の養成について

20世紀末には、多くの若い研究者が外国へ出るという頭脳流失があったり、研究者にならないで他の経済分野へ進出するという現象が多く見られた。21世紀に入り、科学の評判も高まり、状況は改善されつつある。90年代は研究者の給料はとても低かったが、2002年～2003年頃から徐々に良くなってきた。国の役割も重要で、どれだけ科学研究をサポートしてくれるかにもかかっている。

7. グラントの獲得システムについて

基礎的な早く成果のでない研究に対しては、「ロシア基礎研究ファンド」(РФФЕ)からの助成金があり、研究期間は2～3年ぐらいから、特別研究の場合は10年間までである。応用的で、すぐに成果を出すことが期待されている研究期間が1年以内のものは、共和国レベルからサポートするものが多い。これ以外に、「ロシア人文科学研究ファンド」(РГНФ)、「ロシア連邦大統領助成金」、「ロシア連邦政府助成金」などがある。様々なプログラムやプロジェクトに対する助成金もある。また、共和国レベルの助成金もあり、サハ共和国には民間レベルの基金も多い。民間レベルでは、生物学やナノテク分野などへのものが多い。

ロシア連邦とサハ共和国とは、「ロシア基礎研究ファンド」と「ロシア人文科学研究ファンド」に関して協定が結ばれており、年間の金額が決定される。連邦レベルのファンドへの応募は、モスクワやサンクト・ペテルブルクと競合しないために、地域でコンクールを行う。連邦とサハ共和国との間の協定書で「ロシア基礎研究ファンド」が1400万ルーブルであるとすれば、そのうち700万ルーブルは連邦予算から、700万ルーブルは共和国予算から入る。「ロシア人文科学研究ファンド」は200万ルーブルで、100万ルーブルが連邦予算から入り、100万ルーブルが共和国予算から入る。「ロシア人文科学研究ファンド」の総裁は、サハ共和国科学アカデミーのこの副総裁である。

< 2012年9月5日 >

③共和国カレッジ (Республиканский колледж) → Республиканский лицей

(16:30～18:40)

(担当: 岩崎正吾)

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">1. 対応者: ①校長
②多くの先生方2. 住所: Адрес: 677000, Республика Саха (Якутия), город Якутск, Сергеляхская улица, 23. 連絡先: 電話: Телефон: +7(411-2)36-83-604. 入手資料: ①第5～第11学年の教科課程 (Учебные планы) |
|--|



1. 学校概要

本校は〇〇の建物の中にその一部を間借りしており、この廊下の両側にある教室で全部である。寄宿舎はあるが、今修理中である。生徒たちは親戚の家に泊まっていて、授業に通っている。生徒たちの多くは、ヤクーツク市以外の地域から来ている。本校は、1972年に創立されたが、当時は全ソ連的に数学・物理学校が設立されていた。創立者は、ノヴォシビルスクに住んでいたアゼルバイジャン系のアリユーシャ・バズオグリー(?)という人であった。

本校は、第5～第9学年では各学年1クラスずつで、低学年はヤクーツク市から来ている生徒が多い。第10・11学年は、それぞれ6クラスずつある。第10・11学年は分野別教育が行われており、①人文クラス(歴史とサハ文学が中心)、②生物・化学クラス、③総合技術クラス、④技術クラス(建築、電力、採掘関係でエンジニアとしてのものの見方やその準備)、⑤物理・数学クラス(物理重視)、⑥物理・数学クラス(数学重視)となっている。

今年の卒業生130人のうち、3人以外は大学へ入り、3人は中等専門学校へ入った。60年代に物理・数学学校の運動があり、本校はそれを継承している。全生徒数は365人、男子生徒が65%、女子生徒が35%の割合である。教員数は教科担当の常勤教員が31人、非常勤が20人(大学や研究所の先生)、10人の訓育担当教師のうち、6人はクラス担当、4人の寄宿舎担当である。クラス担当は1人が2クラスを受け持つ。

2. 生徒・教員との懇談会

○森岡先生への質問と自己紹介。女子大のこと、専門のこと、ホムスのこと、日本人とサハ人の類似、ヴィゴツキーのこと、など。

○岩崎の自己紹介と質問。懇談会に参加した生徒の中の一人は、母がエベン人で、父がヤクーツ人。住んでいるのはヤクーツク市、エヴェン語は話せないということであった。

○水谷先生の自己紹介。経歴など。

○福田先生の自己紹介。生徒たちはヨーロッパ人というより、強くアジア人として自己を意識している。しかし、アジアの諸国との交流が少ないと感じている。

○国家語としてのロシア語とサハ語の他に、本校では英語が教えられている。生徒たちの中には、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語などを本校に来る前には学んでいた生徒もいた。

○日本におけるロシア語教育についての質問。

- 日本の大学とロシアの大学との交流についての質問。11 学年のアリーナさんは日本に留学した。千葉県の市川市の学校で3 週間日本語を学んだ。市川市に日本語学校があり、ヤクーツク市の観光会社が派遣している。
- 日本のコンピュータ教育やクラス定員など。
- 母語が教育において果たす役割についてのヴィゴツキーの考え方への質問。
- 日本の生徒は休みがないのは本当か。

3. 校長との懇談

本校には、2012 年（昨年度）にはドルガン人の女生徒がいたが、卒業した。エヴェンキ人もいたが、今年はいない。サハ共和国では先住民の生徒が入れば、その言語の先生を呼んで、母語教育を保障しなければならない。15 年前から、母語を話せるエヴェン人やエヴェンキ人を試験なしで入学させる制度ができて、実施されていたのだが、最近はそのような生徒がいなくなった。しかし、母語を学びたいという要望があれば学ばせなければならない。

サハ共和国の問題として、ほとんどはサハ語が話せるのだが、母語を失う恐れも存在する。ヤクーツク市の子どもたちは、多くの単語の意味がわからなくなっている。日本にはそのような状況はないか（ない。しかし、昔の言葉や文学は読めなくなっている）。ヴィゴツキーは、母語と潜在意識の関係を研究していた。母語と潜在意識や思考の発達との関係について、あるいは二言語併用の問題について、現代の優れた研究成果に学ばなければならない。

親がヤクート語で勉強してほしいというとき、学校でヤクート語で教えている学校を探すのが難しい状況になっている。本校は第5 学年からだが、第9 学年までは教授言語はロシア語でもヤクート語でも教えて良いことになっている。教師に任されている。しかし、第10・11 学年はロシア語のみとなる。ただし、ヤクート人が多いので、ヤクート文学の分野があり、ここでは説明するのにヤクート語を使っている。本校では言語問題はそれほど生じていないのだが、若い親は母語の意味がわからない。彼らを説得するわかりやすい説明が必要だ。（日本におけるアイヌと在日朝鮮・韓国人の言語問題について）

今の若い世代までは、自分をまだサハ人と意識しており、それほど心配はないかもしれないが、次の世代では状況はかなり変わってくるように思う。都会ではサハ語を話す者が減少し、ロシア語に取って代わっているからだ。

< 2012 年 9 月 6 日 >

④ハタッサ児童創造会館

Муниципальное образовательное бюджетное учреждение Дополнительного образования детей «Дом детского творчества с. Хатассы» (МОБУ ДОД ДДТ с. Хатассы ГО «Город Якутск»)
 (10:50 ~ 13:20) (担当:岩崎正吾)

1. 対応者：①機関長：サルグイラナ・タラソヴナ・ストルチコワ (Саргылана Тарасовна Стручкова)
②その他
2. 住 所：677907 PC (Я) г. Якутск с. Хатассы ул. Каланадарашвили, 68
3. 連絡先：電話／ファックス：8 (4112) 409192
E-mail : DDT_Khatassy@mail.ru / DDT_Khatassy@yaguo.ru
ホームページ：http://hatassy-ddt.yaguo.ru/
4. 入手資料：①プレゼンの電子資料
② Проектное обучение как условие личностного роста воспитанника и повышения профессиональной компетентности педагога дополнительного образования.
③他、2～3冊



1. 会館の概要

1980年に「ピオネール会館」として活動を開始した。1993年に「児童創造会館」と名称を変えた。この建物は、1960年代に建てられた2階建ての建物である。独立会館(?)となったのは1999年である。「ハタッサ」とは人名で、この村の名前となっているが、どの村も人の名前を付けている。9月15日に新学期が開始される。当会館では504人の生徒たちが、4つの活動分野でサークルに従事している。①技術分野(飛行機のモデル制作)、②幼稚園に通っ

ていない6歳児のためのコース、③応用美術（装飾芸術）分野、④エコロジー・生物分野、である。この施設は休みなしで年中活動しており、夏にはサマーキャンプを行う。常勤の補充教育教師は12人で、3人の非常勤教師が勤務している。そのうち最高カテゴリー2人、第一カテゴリー3人、第二カテゴリー5人で、高等教育保持者5人、未完成の高等教育保持者が4人である。

すべてのサークルは3年コースで、終了したら別のサークルに入る。ただし、6歳児は1年コースである。ここに展示されているのは、サハ共和国のコンクールで優勝したオロンホの主人公たちである。技術サークルの飛行機の模型は松の木か白樺の木でできている。外には温室があり、植物クラブの生徒たちは、苗や収穫できる農作物を植えたり、様々な世話をする。共和国レベルの展覧会に出品し、優勝したこともある。展覧会への出品の仕方も子どもたち自身が考える。

2. 当会館についてのプレゼンテーション（館長）

1980年に学校付属のピオネール会館として創設された。1982年にアナトリー・カラチョーフ氏が館長として赴任した。2004年～2009年はライサ・ミハイロヴナが館長を務め、サルガイラナ・タラソヴナさんは2009年に館長となり、現在に至っている。2006年にヤクーツク市の最高の補充教育機関の称号をもらい、2010年にはサハ共和国教育省の補充教育の拠点機関の地位を獲得した。

ピオネール会館時代から、この会館では様々な活動を展開してきた。運動会を開催したり、様々な行事を行い、ほとんどすべての村の子どもたちはここに集まってきている。館長は2009年からここで活動している。第二代館長はハタッサ村の村長をやった人で、館長自身も子どもの頃にここに通った。

分野別生徒数

分野 年度	08-09	09-10	10-11
科学・技術	62	85	97
装飾・応用	201	206	171
美 術	138	168	231
エコロジー	30	20	5
計	431	479	504

生徒や先生たち、また技術関係のスタッフも共和国や連邦レベルの様々なコンクールに参加し、優勝したり、立派な成績を上げている。展覧会やコンクールで優勝したり、入賞すると市から奨学金や報償が出る。国内やロシアだけでなく、中国や韓国、エジプトなど、国外で行われるコンクールにも参加している。国外の場合は連邦教育・科学省、サハ共和国教育省やヤクーツク市教育局からの支援があり、ほとんど無償で参加できる。これは英才児教育プログラムに関連した取り組みである。英才児プログラムは3年間のプログラムで、最後に残るのはコンクー

ルに優勝した子どもである。

4つの分野で42のサークルがあり、1人の常勤教員は3つのサークルを指導する。第1年目と第2年目の生徒たちは週2回通ってくる。展覧会の準備グループの場合週3回程度で、技術サークルの場合は週4回にもなる。技術分野には、飛行機モデル、自動車モデル、建築・デザイン、ロケットモデル、初級技術モデルなどのサークルがある。

3. 通ってくる子どもの状況

子どもたちはせいぜい2つのサークルに所属する。これは定款上の決まりである。この村の学校の65%がここに通っている。定款では5歳から18歳が利用すると書かれているが、初等学年の1年生は、学校に通い始めたばかりなのでここには来ない。村の人口は約5000人で、幼稚園に収容できない子どもたちがここに通っている。民族的には、ヤクート人が多いが、ロシア人、タタール人、韓国人も通っている。

ここでは、すべてのプログラムがロシア語とヤクート語の両方を用いている。つまり、ロシア語でのサークルとヤクート語でのサークルがあるということだ。ドルガン人の子どもも10人、ニブヒの子どもが1人いる。ロシア人の子どもは15%ぐらいである。

4. 子どもの数や世帯の状況について

全ロシアで公布された法律により、2012年の春から子どもを3人以上もっている家族には、一定の区画の土地が与えられることになった。そのことにより、ハタッサ村には3000人くらいの人口が増えることになる。ハタッサ村では1世帯当たりの子どもの数は平均3人だが、300以上の世帯で4～5人の子どもがいる。

5. 補充教育教師の採用・養成・給料などについて

教師自体は館長に採用の権限があるが、2009年に現館長が赴任したときには、すべての教師が揃っていた。採用するに際しての資格としては、教育学関係の教育を受けていることが必要で、この点が学校と異なる。補充教育と学校教育との違いは、学校教育では点数をつけられたり、学習がメインになるが、補充教育は自分にあった友達を見つけ、つきあう中で成長・発達することである。不良として登録されている子どもたちも来るが、彼らはここでは活発に活動し、良い業績を上げている。

補充教育教師の給料は率直に言って低い。館長で月額19,000ルーブル程度である。功労教師となったり、高等教育を受けて、就労期間の長い教師合は館長より高い場合もある。5年ごとの資格向上システムがある。等級(разряд)は廃止された。

当会館の活動タイムは9時から18時までで、その間に食事休憩がある。週18時間担当の教師の場合、1日3時間ということになる。つまり、2つのグループを1時間半担当する。後は、教授法の研究や教材研究を行う。

6. ハタッサ村の補充教育機関について

ハタッサ村には3つの補充教育機関がある。一つはこの児童創造会館だが、その他に音楽

関係の補充教育機関とスポーツ関係の補充教育機関がある。音楽関係の場合は、音楽学校で行うのだが、ここでは民族音楽も教えられる。ホムス（口琴）は民族音楽にとって極めて高い役割を果たしている。ここでも数年前から両親からの要望があり、フォークロアのサークルを開設した。皆さんを迎えたときに歌ってくれた生徒（8歳）はそのサークルに所属している。伝統的なサハ人の衣装を着て迎えてくれた女性は、フォークロアのサークルを指導している教師である。フォークロアのサークルには20人の子どもたちが所属している。

7. 社会教育士の配属について

社会教育士は補充教育機関にも配置されるが、ここは小さな機関なのでいない。メソジストも医者も配属されていない。先ほど述べたように、館長と12人の教師で活動している。

<2012年9月6日>

⑤民族（国民）総合技術普通教育学校

(МОУ Национальная политехническая общеобразовательная школа №2 (с углубленным изучением отдельных предметов))

(14:30 ~ 16:40)

(担当：森岡修一)

1. 対応者：校長：セメノフ・アレクセイ・クリメンチエヴィチ (Семенов Алексей Климентьевич)
他多数
2. 住 所：677000, Республика Саха(Я), г. Якутск, ул. Ярославского, 8/1
3. 連絡先： телефон/факс : (4112) 34-39-89
Электронная почта : school2@yaguo.ru
Веб-сайт : <http://school2.yaguo.ru/index.php>



われわれが到着すると、恒例の生徒たちによる歓迎のセレモニーがあり、ホーミー、口琴（ホムス）等のメロディーの流れる華やかな雰囲気の中、生徒たちの熱烈な拍手に送られて所定のホールで女性教師によるPPでの説明が行われた。

1. 国民総合技術学校 No.2 について

本学は 2012 年創立 75 年を迎えたが、その間に輩出した卒業生は、共和国の発展に多大な貢献をしている。本学はサハ共和国居住するサハ人以外にユカギル人や少数民族のために設立されたもので、1990 年にカフカス地方の技術関係の大学進学者を教育する目的で設立された。初等（1 - 4 年）では種々の教育法を取り入れており、基本普通（5 - 9 年）では 6 学年から物理、7 学年から化学の要素を導入して総合技術教育の特色を出しているが、下級生（2 学年）から英語やフランス語を取り入れたり、物理・数学をとりいれたプロフィール学習や、ロシア語、文学などの人文学や経済学など社会学系に重点を置いた学習の積極的な試みも行っている。

生徒数は 1850 人で、その民族内訳は、99% がサハ人、その他ロシア人が 30 人、少数民族が 7 名である。初等（ロシア語 2、ヤクート語 3 クラス）、中等学校もロシア、ヤクート語のクラスに分かれており、外国語は英語とフランス語が初等 2 学年から導入され、8 学年からはプロフィール学習が始まるが、11 学年までロシア語、サハ語はともに 3 クラスあり、創造クラブでは、日・中・韓・ドイツ・エヴェン語やフォークロアなどが組み込まれてくる。卒業生のうち、これまで 27 名が本校の教員として採用されている。本学のスタッフは総勢 165 名で、そのうち教員数は 125 名（70% は教員、30% が行政職）であり、うち教頭は行政担当が 1 名（8 - 9 学年）、学習担当（5 - 7 学年）が 3 名である。

本学には健康センター、科学教授法（メソッド）センター、など 5 つのセンターがあり、地方出身の学生の健康管理、教員・指導者等の教育に配慮している。また 7 つの創造クラブ・サークルがあり、子ども・両親・教師の共同参加により創造的な能力を発達させる科学・技術の深化学習により成果をあげているが、それにとどまらず、本学の生徒たちは、市内の博物館、植物園、スポーツ学校、芸術学校などの補助教育機関にも通っている。

本学は、基本学習プラン以外に多様なプログラムを用意して子どもの能力、適性等に配慮した教育を目指しており、教師資格向上のセミナーの拠点にもなっている。卒業生の約 8 割は技術大学へ進学しており、中等職業教育機関に入学する者もいる。60 年代には本学には、サハ初の物理・数学クラスが創設されて、そのような輝かしい伝統が本学の歴史を支えており、北東連邦大学の学長も本学の出身である。本学の学生は遠隔地から入学した場合、本学の近くにスポーツ学校の寄宿舎があり、スポーツ学校に通学しながら本学にも通学することで寄宿生となることができる。（この説明にさいして、30 ページほどのカラフルな冊子が配布され、その中にはこれまでのスポーツ関係の卒業生の代表選手のプロフィール、国内外の戦勝歴、歴代教員などの紹介が記載されており、スポーツにおいても注目すべき実績を残していることが実感できた。）

2. 授業参観

最初は 8 年生の化学の授業で、2 人 1 組のグループごとに机の上に試薬等が置かれ、女性教師の説明を熱心にノートしながら、実験の手順を確認しつつ準備作業を行っていた。その後、物理学等いくつか授業を参観したが、ここでも生徒たちは熱心に授業に取り組んでおり、我々闖入者に集中力を妨げられた様子は見えない。人数はいずれも 20 - 30 人ほどで、やや女生徒のほうが多いようだ。興味深かったのは、ヤクート文化教師と物理学教師（ともに女性）に

よる共同授業で、短時間の授業参観では、詳細についてはその特色を伺うことはできなかったが、このような授業があること自体、大変興味深い。他の教室に移動する間、廊下の壁面に飾られた、色彩鮮やかな芸術作品群に目を奪われた。それぞれ縦横1メートル前後の額縁に収められたそれらの作品は、毛織物、ビーズ、粘土などを用いて民間伝承を表現するヤクートの伝統芸術に基づいており、色彩も明るく、魅力的である。

歴史の授業では、民族友好に貢献している女性教師による低学年の授業が行われており、女生徒が色彩豊かなさまざまなヤクートの民族衣装を身にまとい、民族の伝統的な音曲を合唱し、さらに口琴を見事に合奏して見せたが、こうした授業にも彼らの民族文化に対する誇りが感じられる。この教室の生徒たちは、口琴の学内フェスティバルで優勝したとのことであり、まさにそれを実感させる見事な演奏ぶりであった。次に訪れた教室でも、生徒は授業用に準備された民族衣装を身にまとっていたが、ピンク、緑、白、黄色などを基調としている衣装が多く見受けられた。

教室を辞して廊下に出ると、ホールには20名ほどの民族衣装の児童が集まって、これも白の華やかな民族衣装を身につけた教師の指導のもと、民族伝統のゲームに興じている。これらは当然、我々日本人ゲストに対する歓迎サービスの一環であると思われるが、日本の将棋やサイコロゲームに近い遊戯もあり、教師も生徒も楽しんでいる様子で、われわれも肩がこらず童心に帰って心和むひと時であった。

次のクラスでは英語の授業を参観したが、電子黒板を有効に駆使して単語の配列などを瞬時に映し出し、クラスの共通理解を深める試みが行われていた。またヤクート語と英語による歌の授業でも電子機器が活用されており、民族の伝統的文化を英語で表現する際にも、トナカイやハクチョウ、永久凍土博物館の内部などの映像を投射しつつ生徒自身が、英語による自己表現のプレゼンテーションを行うなど、英語の授業のレベルの高さとともに、民族文化を英語で表現するという「発信型」の方法が印象的であった。4名の受講者による高学年のコンピュータグラフィックの授業では、かなり高度なソフトの開発がおこなわれており、物理・数学・化学・生物学分野の、実用的価値の高い研究に力を注いでいるということであった。そのうちの一人は物理・数学フォーラムに参加しており、センサーの温度を測定するプログラムを作成中である、ということでその一部を見せて、無線を利用した圧力ゲージ制御等の研究について説明してくれた。また、別の学生は、アニメーションを使った興味深いソフトを2日間で完成したとのことで作品を披露してくれたが、短期間で仕上げたとは思えない完成度の高さに関心した。それ以外にも興味深いソフトがあるとのことであったが、時間的制約もあり、他の教室に移動することにした。

「生物」の授業では、ヤクートの自然文化に関する内容の説明が行われており、電子黒板やパソコン等で「鶴」の生態を投射しながらの説明で、鶴には5種類あることなど興味深かった。というのも、たまたまヤクーツクのわれわれの宿泊したホテル名は「ステルフ」であるが、これはヤクート語で神聖な鳥とされている「鶴」の意味であることを知ることができたからである。

< 2012年9月6日 >

⑥ヤクート教育カレッジ

(Якутский педагогический колледж №1 им. С.Ф. Гоголева)

(16:50 ~ 19:10)

(担当: 森岡修一)

1. 対応者: 学長: Копылова Клавдия Иннокентьевна、その他
2. 住 所: 677000, Республика Саха (Якутия), г. Якутск, ул. Ленина, д. 5
3. 連絡先: 電話: (4112) 42-59-26 Директор / 44-42-02 Приемная
E-mail: ypk1@sakha.ru
Факс (4112)444202, 425926
4. 入手資料: ①カレッジ紹介パンフレット
: ② Yakutia Toda

ここでも、われわれが正面玄関を入ると、華やかな民族衣装で着飾った生徒と教師が出迎えてくれ、右側には濃いグリーンと黄色のコスチュームに身を包んだ男子生徒、左側には明るい色合いのロングドレス風の女子生徒が整然と並び、中央の薄青色の女性教師が短い歓迎のあいさつの後、透き通る美声で歓迎のホーミーを歌ってくれた。

まず、カレッジの博物館に案内される途中で本学の歴史についての説明を受けたが、歩きながらの説明で詳細にメモすることができず、間もなく博物館に到着。博物館はオープンスペースになっており、気楽に参観できるよう、壁面には歴代の学校関係者等の写真をはじめ、きれいに整理された資料が順序良く飾られている。これらの資料を前に説明を聞く。



本学は、ヤクーチア初の教員養成カレッジとして98年前に設立されたが、1914年教育学校として出発した当時の卒業生はヤクートを代表する知識人であり、壁面を飾るこの写真がそれであるとの説明であった。ヤクート人の育成は本学に任された格好となり、ヤクートを代表する学校としての位置を占めている。当初は木造であった建物もその後改築されて、現在のよ様な施設を備えた建物として生まれ変わった。学長(女性)は本学で16年目ということであったが、99年には創価大学を訪問した経験もあるとのことで、壁面には創価大学との交流を示す書状も飾られており、日本との学术交流が盛んであるとの説明であった。政治家、大臣、学長、芸術家など多くの優秀な卒業生を輩出しており、例えばミハイル・アレクセエフ氏も本学の卒業生で、芸術民族教育功労者の称号を有しており、現学長も本学の出身である。本学では

こうした資料を完備して、アーカイブスの探索ができるように努めており、入学生はまず、この博物館に来て本学の歴史的伝統に触れ、学生としての自覚とプライドを持てるように配慮している。

本学は通信教育もあり、それらを含めると学生数は700余名、教員数は105名である。学生のうち、新入生の13名は無償席、200名は有料通信教育で入学しているが、全学では全日制教育学生は425名であり、他の学年に300名近くが在学する。何らかの形で本学はヤクート人との関係があり、そうした意味でも本学の人気は高い。最も人気のある初等学校教員養成課程は11—12倍の競争倍率である。

北東連邦大学でエヴェンキ語や文学などの少数先住民族の教員養成が行われるようになるまでは、本学がその役割を担っていた。現在では、大学進学を目指す少数先住民族の子どもたちは北東連邦大学に進学するケースが多い。本学ではエヴェンキ人の子どもが入学した場合、3学年まではエヴェンキ語の授業が行われる。こうして、少数民族の子どもたちに母語学習を保證するよう配慮している。

農村学校への赴任に対する義務期間は3年間となっており、卒業生の就職率はほぼ100%に近い状況で、その多くが北部地区に赴任する。本学の学習プランは理論と実践の比重がほぼ均等で、3年間で7種類の実践に参加しなければならない。1年生の最初は教授法の専門家とともに学校を訪問し、徹底的に実践的教育のトレーニングを受ける。そのために、就職が決定した段階で、すでにかんがりの教育的技量を身につけることが可能となる。もちろん理論は重要であるが、それは実践と密接に関連したものでなくてはならない。農村学校で5年間勤務すると半分の住居費、10年では1戸分の住居費が支給されるが、これは5年前に導入されたシステムであり、しかるべき成果をあげているが、国家としては若い教育者の養成に配慮する姿勢を見せている。

教員は女性が多いが、男性教員を増加したいとの願いから、理数系（数学、情報など）の課程の強化などを試みており、学長担当の歴史関係講座でも80%近くの男子が入学するなど、徐々にその効果が出てきている。また、体育教員の育成にも力を入れており、現在では25人の定員（以前は50人）のうち、大半が男子学生という状態で、同様の効果が認められる。プログラミング等の学修を終えた学生は、学校よりも一般企業に就職したがるのではないかと、この点に関しては、在学中に教員という仕事の魅力等についてのキャリアプランを徹底して行っているため、ほぼ8割以上は教職に就く。

ヤクーツク語とロシア語の教員養成については、どちらも25名ずつであり、北東大学でエヴェンキ語の教員養成が行われる以前は半分エヴェン人、もう一方はエヴェンキ人という時もあった。少数民族語に関しては75名から50名、さらには25名と半減してきたが、政府の出生率向上政策により子どもの数が増加しており、来年度から50名、ないしは75名に増加する可能性がある。本学としては、このような社会的変化に対応してしかるべき方策を講じなくてはならないと考えている。

筆者（森岡）の勤務する大学は女子大であり、しかも短大と大学を併せて学生数8,000名程度の日本ではかなりの学生規模の女子大であるが、最近では短大に陰りが見えてきており、4年制大学への進学が増加してきている。日本では、就職に対しても、企業のほうでは大学の

卒業生を求めるために、短大生の就職難が問題化してきているが、本学では就職における男女差などの特徴や問題点はないのだろうか、という質問に対しては以下の回答であった。

本学でも最近では同様な問題が報告されており、ボロニア宣言の影響がみられ、専攻リスト 21 種類のうちボロニア宣言に関連の深い 10 種類だけ残され、11 種類は廃止されたが、補充教育士など新設されたものもある。現在は 5 専攻（就学前、初等、体育、補充、音楽）を新設している。本学の場合、大統領や政府関係者からのサポートがあるため、予算面でもあまり深刻な状態には陥ってはいない。たとえば、北方の新任教師を選抜する場合、本学の卒業生を優先的に採用しているなどの優遇措置が講じられているが、2 年後には 120 周年記念を迎えるという歴史の長さが寄与していると思われる。

本学での修学期間は 3 年間であり、中等職業教育機関としては伝統があることで今のところボロニア宣言との齟齬は表面化していないが、正当な競争という点から今後は種々の方策を講じていく必要があるだろう。本学は、現在でも音楽などは 3 年から 4 年の修学期間として柔軟な対応を行っていることもあり、学部、学科によってはそれに近いシステムを検討している部門もある。以前は入試なしで大学への編入システムが機能しており、それ自体素晴らしいシステムであったと考えている。本学出身の編入生は大学入学後も素晴らしい成績を収めるものが多く、教員として就職してその実績を証明してきた。今では、本学と密接な関係にある大学の第 3 学年に 1 年生の途中で編入するなど、変則的な規定運用も可能な状態であるが、いずれそのような方策は不可能となるだろう。

本学の役割期待について、卒業生の果たす役割は極めて大きく、今後もその状態は続くであろう。日本では新設大学の多くが経営危機に陥っており、その要因の一つに卒業生の基盤の脆弱さがあげられる。その点で本学の卒業生の基盤の強さは何よりも、経営基盤の強固さを形成していると言えるだろう。

本学は第 3 世代のスタンダードに基づいて教員養成を行っているが、本学の教員レベルは極めて高い。教員は子どもの発達に即応したシステムを導入し、しかるべき成果を上げることが期待されているが、個々の発達課題すべてにこたえうるようなシステムは存在しない。その意味で、システムは相互排他的でなく、むしろ相互補完的である。本学の学生の発達促進システムは、ザンコフシステムではなくてエリコニン・ダヴィドフシステムが適していると考えており、1997 年から 11 学年での導入を行ってきた。教頭のステパーノワ先生が 30 年以上も前にこれらの研究を進めて、教授学的知見から新スタンダードの導入を検討してきた。

ソ連時代はそれらは主として実験学校での導入的試行であったが、現在ではそれらの導入については学校の主導的判断で行うことができ、選択権は学校にある。とはいえ、その問題は複合的課題を含んでおり、アスモロフ氏のいうように、システム・活動アプローチは全面的・複合的アプローチを必要としているわけであるから、あまりにも偏った性急なシステムの導入によって子どもを実験台にしてはならない。たとえば、以前は、ザンコフシステムの本質を理解しないで中途半端な導入をするようなことがあり、その結果を以てザンコフシステムを全面否定するようなことがあったが、そのようなやり方では真の教育は期待できない。教育は子どもを幸福にする義務があり、その時々々の流行があるとはいえ、それに乗じて決して子どもを犠牲にすることがあってはならない。エリコニン・ダヴィドフシステムを導入するとしても、そ

のことによって、子どもの「幸せ」になる権利が奪われるようなことがあってはならないのである。

(ここで和やかな雰囲気のうち懇談は終了し、プレゼント等の交換)

<その後ホールへ移動して学生の口琴、ホーミー等の観賞>

長時間の会談の間、学生を5階のホールに待たせてあるとのことで、申し訳ない気持ちでホールに移動した。立派なホールの中央にはスクリーンが設置され、PPで作成した映像と民族文化の説明が投影される。われわれから見て舞台右手にはピアノが置かれ、これから始まる民族古謡の伴奏の準備がすでに完了して出番を待っていた。

まず、日本の魅力と美に対する賛辞の挨拶があり、次いでサハの民族楽器と古謡の紹介に移った。舞台には、濃紺の衣装と白の髪飾りをまとった女性教師が一人、さわやかな淡緑色の民族衣装に身を包んだ若い女学生が3名登場して、その後ホーミーや口琴のすばらしい民族芸術を披露してくれたが、パフォーマンスに先立って、背景のスクリーンには国内外での華々しい活躍ぶりが投影され、彼女らがいわばキャンパスの有名人(スター)であることを知らされた。最初は、4人の早口の掛け合いによるユーモラスな音楽寸劇というもので、ホーミーの美声がホールに響き渡る。ホーミーの特徴は独特な裏声にあり、ヨーロッパのヨーデルや日本の追分に近い歌唱法で、民族固有の抒情性をたたえている。民族語のためわれわれには意味は理解できないが、独特なジェスチャーを交えた表現力にとんだ歌唱法であり、深い感動を覚えた。「3つの世界の物語」は、1週間にわたって語り継ぐ伝承古謡であり、そこには民族の世界観、生死、神話の世界などが反映されており興味深い。

口琴の演奏もさすがにレベルの高いものであり、多様な演奏法が駆使されて単調さを感じさせない。特に女性教師の演奏は残響効果を巧みに取り入れ、それを3名の女子学生が深みのある奏法で深みを与え、奥行きのある世界を創り出す。その後、舞台から降りてきた彼女らが、日本人とともに民族舞踊に興じ、楽しい時間を共有することができた。

最後に舞台から再登場した女性教師は、純白の衣装とまさに天使のような透き通った美声でわれわれを別世界に誘ってくれ、われわれは見事なフィナーレに万感の思いを込めて惜しみない拍手を送った。ホールで記念写真を撮影したのち、廊下に出ると、そこには本学の教員が製作したという四季おりおりの風景画が掲げられており、民族音楽の世界に酔いしれたわれわれの感激の余韻をさらに高めてくれた。予定した時間を大幅に超過して名残惜しい気持ちでカレッジを辞したが、まさに心和むひと時であった。

<2012年9月7日>

⑦北東連邦大学極東語講座

(Северо-восточный федеральный университет)

(11:00 ~ 12:50)

(担当: 森岡修一)

1. 対応者：極東語講座日本語コース長エレナ・ステパノヴナ、他1名
2. 住 所：Россия, 677000, г. Якутск, ул. Белинского, 58
3. 連絡先：電話：+7 (964) 422 7755
メール：ruf12003@yandex.ru
4. 入手資料：①外国文学・地域学カレッジパンフレット
②東洋語・地域研究パンフレット



本学は、2000年に統一されたロシア連邦8大学の1つであり、超域プロジェクトの要請に応えるべく革新的発展を目指した活動を行っており、ポリテフニク、技術、等の大学3支部がある。

現在170名の学生が学んでおり、日本語、中国語、韓国語の3カ国語を教えている。日本語は1－5学年では60名である。昨年までのシステムとは異なり、今年から別のプログラムになって1, 2年の学生は4年間のバカラブリヤートになっており、各国語とも、センターから毎年1名のネイティブの教員が来ている。日本からは東京の青年交流センターから来るようになっており、ハバロフスクの総領事館とも関係があり、本学との支部などとの連携作業のもと活動を行っている。韓国語は60名、中国語は50名であるが、中国語はダブル・ディプロマの学生が20名ほどおり、実数は170名より多くなる。中国は地理的にも近く、中国語が人気があったが、最近では韓国語の人気が高まってきている。ダブル・ディプロマは中国語とフランス語にしかなく、残念ながら日本語はまだ実施されていないが、今年から、北海道大学、山形大学との提携が始まり、その可能性が高まってきており、大学としても期待しているところである。

ステパノヴナ氏は、ハバロフスク教育大学を卒業後、2003年に本学に職を得て現在に至っている。サハへの日本の会社進出や旅行者などが少ないところから、日本語を専攻した学生の日本関係の職種の就職については必ずしもよいとは言えない。日本語関係の教職も同様に少ないため、事情は同じである。正職としてではなく、補職あるいはクラブ等の補助などの仕事しかないのが現状であり、その点が問題である。それにもかかわらず、日本語の人気は高く、日本に対する理想化したイメージに加え、自動車産業など魅力的な産業の興隆、地理的にも比較的近いことがその要因となっているようだ。一般市民においても日本の着物や日本料理に大変

興味を持っており、学生間ではアニメやファッションなどのサブカルチャーが人気があり、独力で日本に留学したり、日本企業への手掛かりを得る学生もいる。ロシアは多民族国家であり、サハでも 160 ほどの民族を抱えているが、本学在学の少数民族は 10% 程度であり、おもにサハ共和国出身であり、他の共和国からの出身者は少ない。

入学試験科目はロシア語、ロシア文学と外国語（英・独・仏）であり、日本語等は外国語に含まれない。サハ語は母語であるから、当然のことながらこれも入学試験に含まれない。倍率は 200 点満点中 185 点で、4 倍となっており、無償席はそれぞれ 6 つで、計 18 席である。本年度は日本語 14 名、中国語 10 名、韓国語は 13 名であるが、16 名となる可能性もある。14 名で 6 名は無償席、8 名は有償席となっている。語学別による難易度の差はない。

両親のいない学生や、大家族の学生などは 1 年次に 2,000 ルーブルの奨学金をもらうことができ、1 学年終了時の試験成績により、ランク別に高額から低額の奨学金の次年貸与が決定される。学年進行で増額され 5 年次では 5,000 ルーブルとなるが、昨年度からいわゆるボーナス（最高限度額 12,000 ルーブル）が支給されることになった。有償席の学生は、年間 61,000 ルーブルの学費を支払わなければならない。学生の民族構成は 70% がヤクート人、10% が少数民族、20% がロシア人やウクライナ人その他となっている。ウクライナ人が多い理由は、改革後の民族移動に拠るところが大きい。

ロシア人については、ステパノヴナ氏着任後もとりたててロシア人の現象は感じていないとのことであるが、われわれ日本人が街中を歩いてもロシア人と出会うことが少ない理由について、かつて年取の高かったロシア人が移住した点などをあげて説明してくれた。10 年前はヤクート市でヤクート人が 40% であったが、現在は村落出身のヤクート人が増加したこともあり 60% に増加した。センサスデータでは村落部のロシア人が減少したが、それが都市部のロシア人の増加には、直接つながっていない。というのも、ダイヤモンド発掘など、高収入の期待される新しい地域にロシア人が集中移住していることもその一因である。とはいえ、そのような繁栄は長期的なものではなく、地域そのものの誘因力は流動的であり、繁栄の後は衰退期となり、人口が半減することもまれではない。ロシア人は、またあらたな地域に移住していくのである。現在では、ダイヤモンドの社員はほとんどがロシア人である。ソ連邦崩壊直後は、ヤクートの民族文化に対するアイデンティティの程度も低く、自分の土地という意識も希薄で、国土を守るという意識はそれほどみられなかった。そのため、当初は地下資源の豊富な地域もヤクート人には関心をひかず、ロシア人の流入を加速させたと思われる。現在では、学校においてヤクート語やヤクート文化のプログラムが充実して、一般市民のエスニック・アイデンティティの様相も大きく変化してきており、子どもにヤクート語由来の名前を付ける親も増加してきている。しかし、それらはいくまでも「文化」レベルにとどまっており、経済的・社会的レベルでヤクートの経済を好転する要因にまでは至っていないが、ロシア人との表だった対立は報告されていない。

中国人は、当初商売目的で入ってきたが、いまではさまざまな目的で移住してきており、今後は紛争の原因になることも考えられる。ヤクート人の主に従事する農業では、キャベツ、キュウリ、トマトなど栽培が比較的簡単なものに限られている。

本学の教員は国際基金プログラムで日本に視察に出かけることも多く、ステパノヴナ氏も

2005年から半年間、浦和国際センターに短期留学したこともあるという。氏に、それまでに日本について学んだことと、実際に留学してそのギャップに驚いたり落胆したことはないかと質問したが、それはどのような場合にもありうることであり、日本に関して特別そうした感想は持たなかった、との好意あふれるコメントであった。ステパノヴナ氏はサハ人であるが、それが優先的に就職できた理由にはならず、ロシア人もサハ人も対等であるとの説明であった。その真偽のほどはともかく、ステパノヴナ氏が極めて優秀聡明な女性であることはだれの目にも明らかで、その回答には説得力があった。氏は1998年にヤクーツクの学校を卒業後、ハバロフスク教育大学で勉学を継続したが、卒業時には本学の日本語学科が設立されていて、運よく日本語教員になることができた、とのことであった。それは単に運の良さだけではなく、氏の熱意の賜物であることも大きな要因といえるだろう。大学受験時には英語であり、その時にはまだ日本語の知識はほとんどなかった状態で、多くの学生が同様の状況であった、という説明であった。

本学では、日・中・韓国語以外に独・英（アメリカ含む）、仏（文学に加えて他大学とのダブル・ディプロマ）等がある。さらに、外国語教授法学科、通訳学科等があり、他学部の第2外国語用のプログラムがある。統一国家試験においてドイツ語で受験した場合、ドイツ語関係の学部（学科）に入学するケースは当然多いが、必ずしも選択外国語と履修学科の外国語が一致する必要はなく、他の外国語にシフトすることも可能である。

学生の質に関しては、大学に入学してから日本語を始めた学生ばかりではなく、サブカルチャーなどの影響で中・高生あたりから日本語を始めた学生もおり、モチベーションや語学力も高くなってきている。

（ここで、別室に日本語専攻の1年生と3年生の学生を待たせているとのことで、移動）

教室にはすでに20名ほどの学生（圧倒的に女子学生が多く、男子学生は4－5名）がわれわれを待っていており、司会進行は若い男性のピョートル君で、父親は口琴博物館長のニコライ・シシーギン氏という。ピョートル君は昨年、日本に留学経験もあり、日本での当研究会において、サハの教育について2012年6月24日に研究報告をお願いした山下正美氏（お茶の水大学院生）とも知己であるとのことで、大変見事な日本語を駆使して、和やかな雰囲気を出してくれた。日本人側は筆者を含めて全員が地方出身であり、われわれよりもピョートル君の日本語のほうが標準語に近い、といった話で盛り上がり、ピョートル君がロシア語に通訳すると学生の間にも笑顔が広がった。

日本人側の自己紹介の後、学生からの質問を受け付けることになり、活発な質問が相次いだ。最初に、これまでロシアのどのような都市を訪問したのか、またその目的は、といった質問が出されたので、文科省助成金により研究調査を行っており、モスクワ、サンクトペテルブルグをはじめ、主要地区をグループ分担で訪問したことなどを回答した。また、日本のニュースでサハとの関連事項が何度か報道されたことがあるが、その一つとして愛知県万博（2005年）の際、マンモスが展示され、大きな話題になったことなどを話した。以前筆者は、万博開催地の至近距離のマンションに住んでいたことがあって、子どもが幼い時分のちに開催地となった公園で一緒に遊んだ懐かしい思い出がある。また、サハのダイヤ、金などの地下資源、口琴な

どが話題にのぼり、ピョートル君や学生との距離も一気に縮まった感じであった。ある学生が、10月にハバロフスクで開催される日本語スピーチコンテストに出場するのだが、どのような勉強をすればいいか、アドバイスをしてほしいとのことだったので、大きな声で堂々とスピーチすればかなり好結果が期待できる、と回答した。テーマはギリシャ神話の「シジフォスの神話」に関連するものであるということで、筆者としてはその内容にも大変興味を持ったのだが、残念ながら時間的制約もあり、質問はそれまでで終了となった。

日本側から、「サハ」とか「ヤクーツク(ヤクーチア)」の原義についての質問を行なったが、「サハ」は原住民の自称であり、後者はロシア人からのサハ人に対する呼称であるとのことであった。ただ、「サハ」の厳密な意味は不明だが、神話で太陽から馬から降りてきた人間がこの国を創ったという伝説があり、それに由来して「太陽から来た人」という意味である、との回答を得た。どうして日本語に興味を持つようになったのか、との質問に対し、或る学生は「日本語の響きがとても好きだから」と答えて、他の多くの学生も賛意を示した。アニメなどの「日本文化」に興味を示す学生は多いが、他方、伝統的な文化も人気があり、新旧2層の文化様相が学生の関心をひきつけていることが分かる。

女兒と男児のどちらの誕生を望む傾向があるか、という日本側の質問に対しては、その点の男女差はあまりない、ということで、その理由としては、出生児数とも関連があるだろうし、都市部と村落部では事情が異なることなどが話題になった。

現在の名称「北東連邦大学」は2010年に「ヤクート国立大学」を改称したものであり、名誉教授の勝木英夫氏(1991年から)が日本語、日本文化を教えており、近年では日ロ青年交流センターから日本語のネイティブ講師が派遣され、常駐(任期1年ごと、最長2年まで)しているという(山下氏の指摘に拠る)。1934年創立のヤクート国立教育大学から、56年設立のヤクート国立大学を経て、さらに現在の北東連邦大学に改称されたのが2010年であり、その歴史は古いが新名称の大学としてはまだ2年ほどにしかならない若い大学である。そのせいか、キャンパスの雰囲気も若々しい活気を随所に感じる。若者との熱気あふれる懇談からエネルギーをもらって教室をあとにし、午後の学長との対談に備えることにした。

(この後、永久凍土王国を見学)

<2012年9月7日>

⑧北東連邦大学学長訪問

Северо-восточный федерального университет

(14:50 ~ 16:25)

(担当：森岡修一)

1. 対応者：学長：エヴゲーニヤ・イサーエヴナ・ミハイロヴナ
2. 住 所：Россия, 677000, г. Якутск, ул. Белинского, 58
3. 連絡先：電話：+7 (4112) 35 20 90
メール：rector-svfu@ysu.ru



世界各国の写真や人形などが飾られたガラスケースなど、華やかな雰囲気のある玄関を通過して、学長室に向かう。学長は元副大統領のミハイロヴァ女史であり、文部大臣も務めたというだけあって威風堂々の貫録である。訪問の目的の説明と自己紹介の後、お茶をいただきながら懇談に入る。当方で使用している「教育改革」の用語の説明を求められたので、簡潔に要点を説明した後、インタビューを行った。

前述したように、本学の歴史は長く、その間に何度かの名称変更や改革を経て現在にいたっている。90年代までは教育や医療関係の人材育成を中心に活動を続けてきたが、農業関係の学部もあり、連邦機関になってからは農業アカデミーになった。70年代からは建設関係のエンジニア、地質学の専門家を育成するようになり、その後は芸術、人文、数学関係などの専攻を整備しているが、各専攻は30%ほどの割合となっている。高等職業教育プログラムとしては計176プログラムがあり、その中にバカラブリエート、スペシャリストなどがあり、マギステルだけでも20程度のプログラムが用意されている。昨年からは、エンジニア技術インスティテュートが開設され、カレッジ、リツェイなどもあり、統合的な教育を行っている。2009年10月20日に、メドベージェフ大統領が連邦大学設立令を公布し、2010年4月2日から本学は連邦大学となった。そういう意味では、本学は若い大学である。

本学に統合されたのは、ヤクーツク国立大学、教育アカデミー、エンジニア技術大学の3教育研究機関及び、数学、経済、北方応用エコロジー、天候の4研究所である。ヤクーチアはロシアの宝庫と呼ばれているが、昔、神が宝物を配ろうとした時、寒いため手をおろしてしまったという伝説があるとのことであった。本学では、地下資源発掘の学部や製品加工の学部も設置して需要に応じている。したがって本学は、地質学、資源発掘などの指導的役割を果たしている。ロシア系企業のアロスサ社が、2010年から1000万ドルの予算援助を進めており、ダイヤモンド採掘など19テーマにおいて、見るべき成果をあげてきている。それまでは、アロスサ社はカナダやオーストラリアとの提携を進めていたために、当初本学との提携には消極的であったが、現在は順調に提携業務が進んで好結果を生んでいる。

学長が副大統領時代にはヤクーチア大学での本格的な研究が可能かどうかという疑問があったが、現在では2018年までのアロスサ社ダイヤモンド採掘プログラムのなかに、本学のプログラムが確固として組み込まれている。ネーリングリ市には石炭の埋蔵量を誇る地区があり、そこにはミッチェル社との協力関係があるが、当方としては、それらとは異なる採掘プログラムを考えている。ヤクーツクにおける豊富な地下資源を製品化するさまざまな研究が進んでおり、韓

国とは石油とガスの精製に関するプロジェクトのなかで、専門家育成のプログラムが進行中であるが、こうした国際的な協力関係は、韓国の3大学にとどまらずケンブリッジ大学などとの協定に発展して、新たな方向性を見出しつつある。本学のバカラブリヤート修了学生をそれらの大学に留学させて、さらに学力を高める具体的方策が整った。学長本人も9月にはソウルに赴くなど、その素地が徐々に準備されつつあり、技術ファンドへの期待が高まってきている。9連邦大学のうち、本学だけに医療大学も入っており、東京の児童医療センター、プサン（釜山）の最高医学アカデミーと協力関係を結び、新たな医療関係の教育を行う予定である。現在、大学の近くに最新のラボを建設し、全く新しい研究に着手したいと考えており、そのための日本との協力関係も整いつつある。

医学のみならず、バイオテクノロジー関係でも北海道の教育機関や新潟大学と提携しているが、2010年に北極革新的ラボを設立してトナカイやシカの餌となる苔の研究が丸紅との提携で成果を上げつつあり、別のプロジェクトでは放射能の影響を低減する研究も行っている。

3年前からは、学校及び就学前教育のプログラム改革のコンセプト作りに取り組んでおり、教育学のベースに基づき独自のプログラム作成に力を入れてきた。教育大臣の就任中は、就学前の段階で読み書き（リテラシー）ができるよう施策を行って、現在ではほぼ100%に近い満足できるレベルに達している。就学前のプログラムはさらに計算能力を高めるための技能向上プログラムとして成果が出てきており、さらには就学前段階で、加減のみならず乗除の初歩が可能となるレベルの指定へとシフトしている。数学は週6時間、1学年から外国語の学習を導入、という学習プランが採択された。また、副大統領時代には、体育の時間を週4時間にするなど大統領に進言した。このプログラムでは、第2外国語は第5学年からの導入となる。また、IT関連は就学前の時期から親しめるような方途を考えているが、これまではなかなか普及してこなかったため、最近導入されたブロードバンドに期待をかけている。

2010年からは「知的援助」の制度を取り入れて、大学教育区を編成し、各州から56のレベルの高い学校が選抜され、大学と協力して<リソースセンター>となって成果をあげている。入学生に関して、国家統一試験についてみると、以前は平均点が50点以下であったが、2011年度の平均点は59.6になり、大変喜ばしい成果となってきている。モスクワ大学などはまだ開きがあるとはいうものの、3教科で200点以上が13%おり、1科目あたりの平均点が70点近くということで、今後に期待をかけている。次の25%も3教科の合計が180点以上あり、しかるべき能力を備えた学生と評価できる。

本学には、ヤクーチャ卒後生のうち30%が入学し、他の25%はモスクワ大学やサンクトペテル大学に入学する。後者には、大統領令により1990年から種々の補助金（交通費等）が出されており、そのことが進学意欲を高める要因となっている。

本学は、ロシアとはもちろんのこと、カナダ、ノルウエー、フランス、中国などとの交流もさかんで、パンフレットには、それらの国旗と並んで日本や韓国の国旗も掲載されている。毎年、多数の学生がモスクワ大、サンクト大などに入学しており、これまでの合計は5,500名にも上る。それらの大学を卒業してからヤクーチャに帰国する学生は70%にのぼり、かなり高率の数字となっている。

極東連邦大学のプログラムと共通する部分はほとんどなく、海洋資源等のプログラムは本学

にはみられず、本学では鉱物資源や健康に関するプログラムがあり、少数先住民族の学部、さらには言語教授法や文化等のプログラムも充実していることが特色となっている。本学では、今年、教員公募を行い、その結果、韓国、アゼルバイジャン、モスクワから、応用数学、化学、生物部門に4名の教員を採用した。契約は3年間である。在学生は23,000名、9学部、15研究所、さらには3大学支部という大所帯である。建造物も9、レジデンス・ホールは12という規模の大きさを誇る。他に、スタジアム、スイミングプール、社会センターなどを有し、スポーツ・社会活動にも力を入れている。

以下、学部（学科は多数に上るため省略）および研究所の概要を記す。

<学部>

道路建設（学士8）、生物・地理学（専門3、学士9）、地質・調査（専門6、学士1）、鉱業（専門5、学士5）、エンジニアリング（学士11、修士1）、歴史（学士6）、文献学（学士9）、法律（学士1）

<研究所>

教育（学士16）、テクノロジー（学士2）、物理・テクノロジー（学士15）、財政・経済（学士16、修士10）、外国語・地域学（学士7、修士1）、数学・情報科学（学士7、修士4）、心理学（専門1、学士3）、体育・スポーツ（学士9、修士1）、北東民族の言語と文化（学士12、修士2）、医学（専門5）、ポリテフニク（大学支部；専門4、学士4）、テクノロジー（大学支部；専門5、学士17）、大学チュクチ支部（専門2、学士1）

本学は、現在300の大学と協定を結んであり、50の国際プロジェクトを立ち上げて、アリゾナ大学、スタンフォード大学、シカゴ大学など、そのネットワークはますます広がりを見せている。われわれが訪問する以前に韓国からの研究代表団で、動物のクローンを作るプログラムであり、マンモスのクローンを作ることが目標となっているという。このときは、まだ山中教授のノーベル賞受賞は決定しておらず、話題にもならなかったが、ノーベル賞決定後であれば、さぞかし「細胞」談議に花が咲いたことであろう。

また、シベリア連邦大学とフランスのベルサイユ大学などとの協力体制で2008年から行っているプロジェクトが、少数民族言語をサイバー環境の中で維持していくプロジェクトであるという。

いずれにしても、本学が目指しているのは教育学研究における「イノベーション」であり、2012年の6月1日から「最初から」というプロジェクトが始動したが、これは母親の胎内から教育の準備をしようとするものであり、胎内環境の整備から高等教育への連続性を目標としたプロジェクトで、すでにヤクーチアの10,000世帯が調査に協力、参加している。幼少期から大学教育の準備を行おうとすること自体それほど珍しいことではないが、若者こそが教育の資本であり、未来は子どもたちにかかっている、との強い思いを感じた。

現在は、ホームページは英、ロ、中、韓の言語しかないが、いずれ日本語も加えたいという話であった。また、元ユネスコの理事長松浦氏の尽力によって、ヤクーチアの叙事詩「オロン

ホ」がユネスコの世界文化遺産になったことに、深く感謝したい旨の賛辞があり、和やかな雰囲気の中での懇談を修了した。学長の息女も独学で日本語を学習したとのことで、日本及び日本文化へのあくなき関心を実感することができた。札幌からの「能」の公演に就いては、本学も支援活動を行い、市内での後援会も盛況で、大変喜ばれたとの話であり、日本人形の制作など日本文化を身近に感じている様子であった。

< 2012年9月7日 >

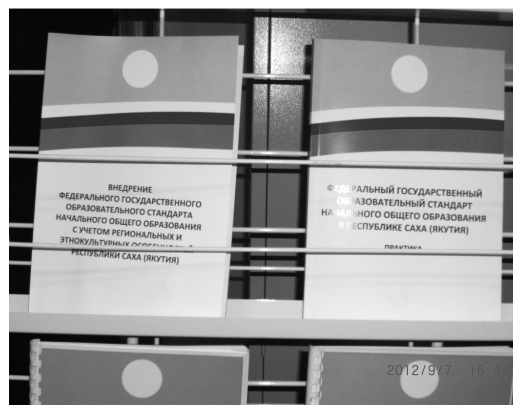
⑨サハ（ヤクーチア）共和国民族学校研究所

(Научно-исследовательский институт национальных школ РС(Я))

(16:40 ~ 18:40)

(担当：福田誠治)

1. 対応者：所長：セミョーノワ・スヴェトラナ・ステパーノヴナ (Семенова Светлана Степановна)、他多数
2. 住 所：677027, г. Якутск, ул. Октябрьская, 22, Республика Саха (Якутия),
3. 連絡先電話：- 8 (4112) 42-94-36
e-mail: insch_sakha@mail.ru, www.insch.ru
4. 入手資料：①民族学校研究所紹介パンフレット
②オロンホ教育学の教科書
③サハ共和国民族的特性を含む初等普通教育機関連邦国家教育スタンダードの導入



研究所の活動目的は、「サハ共和国ならびにロシア連邦の北方、シベリア、極東地方の先住諸民族住民の言語と文化を統一教育圏として保護し発展させることを科学的に保障する」ことである。

サハの子ども用に E-NetSchool を作ったが、これは北方少数民族が住んでいるすべての地域に適用できる。サンクトペテルブルグのゲルツェン名称教育大学が協力してくれた。

ソ連時代の 1930 年代には、エヴェン、エヴェンキなど少数民族言語で教育が行われていた。

レニングラードの北方少数民族研究所が教科書を作り、プロスヴェシチェーニエで出版していた。その研究を引き継いだのは 1990 年代からである。しかし、政治も生活も変わってしまった。(ロシア語とロシア文化には勝てないと言いたらしい)

教授言語で言えば、ロシア語のみで通す学校がある。サハでは、多くが移行型モデルになっていて、教授言語は 5～7 年生のどこかでロシア語に変わる。10、11 年生はロシア語で授業を受けなければいけないからだ。サハ語で深く学ぶ学校はまだ無い。

しかし、教育課程のうち地方コンポーネントが削除され、民族教育はどこで保障していったらよいか課題になっている。ユネスコの教育概念分類では、フォーマル、ノンフォーマル、インフォーマルとなっているが、フォーマルな教育で行えなくなりつつある。つまり、民族教育の教科は民族語のみで、連邦コンポーネントとなっている一般の教科は実に閉鎖的で、その中に民族的要素は入り込めなかった。民族・地方コンポーネントの設定で、初めて民族教育を行う可能性が出てきたが、現在は縮小されつつある。残るは、学校コンポーネントのみである。他には、ノンフォーマルな教科外教育か、補充教育創造センターでの校外教育だが、ここをどれだけ強調できるか。できなければ、図書館や博物館を利用した自己学習など、インフォーマルになってしまう。

北方教育学システムと呼ぶ移動学校がある。課外活動で「社会的コンピテンス」を形成している。たとえば、トナカイの捕獲の仕方、群れのリーダーとなりそうなトナカイを見つけリーダーに育てること、食べれるきのこの見分け方など、北方地域に住む能力がそれにあたる。この方法は、農村学校や少数民族学校にも適用できる。

オロンホの教育学を作っているが、現代の子どもたちにはあまり効果が無いようだ。第一、ことばが古い。

ユネスコとの 3 年間の共同研究を行っている。実際は、ユネスコが共同研究費を提供し、この資金を使って本研究所とサハ共和国教育省との共同研究になっている。この研究とは、北方先住民のデータを集めることだ。22 地域に少数民族向けの学校が 36 校ある。うち、19 地域のデータを集めたところだ。

(質問) そのような活動をするということは、地域からの人口流出や地域崩壊の危機を感じているからか。

(答え) そうだ。(全員が口をそろえて)

地方の教育の問題は、生活全体の総合的なアプローチをしないと解決できない。また、この研究所だけでも解決方法は見つけ出せない。

ブリヤート共和国 [ウラン・ウデ] (9機関) 調査報告

(2012年9月8日～9月14日)

岩崎 正吾 (早稲田大学)
福田 誠治 (都留文科大学)
水谷 邦子 (芦屋大学)
森岡 修一 (大妻女子大学)

<2012年9月10日>

①ブリヤート共和国教育・科学省

(Министерства образования и науки Республики Бурятия)

(10:15～11:30)

(担当: 福田誠治)

1. 対応者: ①副大臣:

②上級・高等後職業教育局長: バザーロフ・オレーク・ダシエヴィチ
(Базаров Олег)

2. 住 所: 670001, Республика Бурятия, г. Улан-Удэ, ул. Коммунистическая, 47

3. 連絡先: 電話: (8-3012) 21-29-21, 44-25-11председатель (+7-3012) 214915 приемной:

E-mail: minobrrb@gmail.com

Веб-сайт: <http://edu03.ru/>

○教育科学大臣は不在で、副大臣に挨拶のみ。意見交換は後日することになった。

<2012年9月10日>

②幼稚園№.72

(Детский сад № 72)

(11:00～12:40)

(担当: 福田誠治)

1. 対応者:

2. 住 所:

3. 連絡先:



1968年に開園した。2007年に再度開園。

12グループで、2～7歳の子どもがいる。

2つは、特別グループである。

第2グループは、3歳前組なので、園になれることが目的だ。この日は、15人中8人が来ていた。7人は、親が連れてきていないとのこと。

第4グループは、3歳児で15人である。ロシア語を使っている。

第5グループは、知的発達障害児である。

第10グループは、言語治療である。12人いて、遠隔地からも入園している。月～金の週5日滞在可能で、水曜日と金曜日に帰宅する。

障害者のインクルーシブ教育のカリキュラムをこの幼稚園が作成し、他の幼稚園が使用できるようにしている。

イノベーション・プログラムとして、4歳からザイツェフ・システムを採用している。

< 2012年9月10日 >

③-1 ブリヤートギムナジア№14

(МОУ Бурятская гимназия №14)

(13:00～14:30)

(担当：福田誠治)

1. 対応者：
2. 住 所：
3. 連絡先：
4. 入手資料：学校紹介パンフレット



ウラン・ウデ市最大の学校。

スタンダード導入と共に ICT の教育機器が配備された。

750 人定員だが 1638 人が通学していて、2 交替授業を行っている。

25 人定員で、実際には 31 人いる。

5～9 年生は、プロフィール準備教育を行う。うち、8、9 年生は、一つの教科を深く学ぶことにしている。ドイツ語、フランス語を第二外国語としていて、学校コンポーネントを使って教えられる。選択教科として中国語と日本語がある。これには、補充授業を当てており、週 2 時間が無料で受けられる。

10、11 年生はプロフィール段階となり、2 つ以上の教科を深く学ぶ。現在国家統一試験は教科で単一レベルだが、深く学ぶレベルを作るという話題が出ている。統一テストの結果は、報奨金に結びつく。

エコロジーの授業もあるが、軍事の授業もある。

科学的実践会議は、今年から科学フェスティバルと呼んで力を入れることになった。

(質問) フィンランドの教育はどう考えているのか。

(答え) 関心はあるが、直接見ていない。

(質問) OECD の PISA は、どう考えているのか。

(答え) 新しいスタンダードを作ったことは、詰め込み教育を否定したということだ。また、大学まで一貫した教育スタイルをとるということでもある。個人が自立して、責任をもって学ぶということになったのだ。

(質問) ууд は小学校ではできているが、中学以降は伝統的な教育のままではないのか。

(答え) ……………。

< 2012 年 9 月 10 日 >

③-2 ウラン・ウデ市教育委員会

(Комитет по образованию города Улан-Удэ)

(14 : 30 ~ 15 : 50)

(担当 : 福田誠治)

1. 対応者：ウラン・ウデ市教育委員会委員長：スヴェトラナ・ヴァシーリエヴナ・トリフォノワ (Светлана Васильевна Трифонова)
2. 住 所：670000, Республика Бурятия, г. Улан-Удэ, ул. Советская, 23
3. 連絡先：電話：21-16-48、21-78-22
E-mail : guo_@mail.ru

市には、179の教育施設があり、4万3000人の子どもが利用している。うち、60が学校、57が幼稚園、他に子どもセンター、スポーツ学校、オリンピック準備学校、青少年生物学者センター、補充教育施設が60くらいある。

市内には5つのギムナジアと3つのリセがある。2つのギムナジアは選抜を行っている。

教授言語はロシア語で、2校のみロシア語とブリヤート語が並行して使われている。

幼稚園は、3～7歳が対象だが、人口増で2016年までに全員入園できるように建設中である。家族保育の制度があり、家庭で3～4人の子どもをあずかって、時々幼稚園にも行くというものだ。私立幼稚園もある。1990年代には学校建設予算がなくて、学校の建物は老朽化している。それなのに学校は不足している。

2016年までにすべてのスタンダードを導入しなくてはならない。

国家統一試験の制度によって、地方から中央の学校に入学する可能性が出てきた。

「われらの新しき学校」は、教育の質を上げている。英才児向けの教育に資金がつくからだ。ウラン・ウデ市では43種類のオリンピックやコンクールを実施している。

教員の給料が安いので、社会的評価が低い。そこで、100世帯の教員住宅を建設中である。また、若手教員には、給与の20%が連邦予算から出ることになっている。

説明責任、情報公開、父母委員会など新しい仕組みが入ってきている。

ブリヤート共和国は多民族共和国で、ベトナム人もカンボジア人も韓国人もいる。

学力問題はどこにもある。新スタンダードや「われらの新しき学校」は、急に現れたのではなく、古い教育スタイルでは起きている教育問題に対応できなくなったからだ。大学生も、1990年代の危機の時代に生まれたわけで、学力問題を抱えている。

教師の役割は、知識を伝えるのではなく、学び方を教えるということになった。

学校によっては、親が通わせたくないところもある。

学校に通っていない生徒のリストを作らなくてはならない。校長と社会教育士がこのデータを作成している。

1、2年生には教科書が無償配布される。障害児と貧困家庭の子どもには、全学年で教科書は無償である。

< 2012年9月11日 >

④ブリヤート共和国教育カレッジ

(Государственное образовательное учреждение среднего профессионального образования "Бурятский республиканский педагогический колледж")

(10:35 ~ 12:00)

(担当: 水谷邦子)

1. 対応者: 校長: スベトラーナ・ニムブエワ (Нимбуева Светлана Цыдыповна)、
その他
2. 住 所: 670020, Республика Бурятия, г. Улан-Удэ, ул. Хоца Намсараева, д. 5
3. 連絡先: 電話: (3012) 44-63-15 - директор,
44-63-29 - зам.директора по учебной работе,
44-63-41 - приемная
E-mail: brpk@bk.ru, brpk@burnet.ru
Веб-сайт: <http://www.brpc.ru>
4. 入手資料: ①学校案内 (露文と英文)
② Учимся, создавая искусство (芸術分野の活動の紹介)
③教科課程



1. カレッジの概要

1924年にブリヤート政府の資金を財源として、ブリヤート共和国最初の国立中等専門学校として共和国文部科学省によって創立された。現在は、教育課程の革新的プロジェクトを実現し、効果的技術を活用するための連邦教育発展研究所の実験場にもなっている。この専門学校は、教員養成・再訓練のための地域間センター、大学前職業教育地域間研究実験所、教育現代化共和国プラットフォーム、ブリヤート共和国大統領後援法学スクール、農村学校研究所、就学前教育機関相談・文化・教育支援教授法センター、子どもサマーキャンプ組織訓練センターを配下にもつ。

また、中国、モンゴル、共和国内、タタールスタン、バシコルスタン、トゥワ、アルタイ、サハ(ヤクーチア)、タイムール自治管区、クラスノヤルスク地方、ザバイカリエ地方、ノボシビルスク州、イルクーツク州の初等・中等教育・職業訓練学科をもつ総合大学、教育大学と密接な協力関係を有している。

これまでに学校が獲得したタイトルには、「刷新学校」部門の「権威ある学校」と「パブリックスクール（モスクワの教育政策大学エブリカによって組織された学校）」、「ロシアの最良カレッジ 100 校」の「ヨーロッパ部ゴールドメダル」である。また、「ロシア国立学校」メンバー、「ロシアの指導的教育大学」であり、「ロシア職業教育国際協力リーダー」入賞、ブリヤート共和国大学前職業教育大学間コンクール入賞等がある。

現校長は 2002 年に就任し、教育学博士にしてブリヤート共和国功労教員、ロシア連邦教育専門学校・教育カレッジ校長会議長、ブリヤート共和国中等専門学校校長会議副議長、ウラン・ウデ鉄道婦人会会長、全露中等専門教育リーダーコンクールの優勝者でもある。

このカレッジは、学生数 1200 人（840 人の全日制学生と 360 人の通信制学生）、100 人の教員と 40 人の職員を擁する。初等教育、ブリヤート語初等教育、音楽・美術学部、体育学部の 4 学部より成り、初等教育学部がもっとも学生数の多い学部である。共和国や自治体の要請に応じて、有料の補助教育も行っている。これは、希望者数に応じて、共和国予算ではなく学校予算でおこなっている。

カレッジは、附属幼稚園と学童保育を有する。幼稚園では、サマーキャンプなどの社会教育プロジェクト活動（Социальный объектный проект）を行う。

学生自治組織が管理する共同組合があり寮を運営している。その活動は、訓育担当副校長室で行われている。教員と学生は、学部附属した器楽や声楽のアンサンブルを組織している。民族楽器等を展示している学校博物館を有し、他の学校とも密接な関係をもっている。

学校の行事として、非母語話者を対象としたブリヤート語、ロシア語、ヤクート語、タタール語、チュワシ語の弁論大会がある。共和国全体で取り組んでいる若手スペシャリスト養成コンクール「今年最高の先生」に学校自体も主体的に取り組んでいる。

2. 質疑応答

入試について

9 学年卒業者は、最終卒業試験である自治体統一試験 (EMA)、11 学年卒業者は国家統一試験 (ЕГЭ) の成績で入学するが、近年は少子化の影響で競争はない。数学とロシア語の試験は全員必修で、音楽・美術や体育ではそれ以外に、各々音楽、美術、体育（陸上、水泳）の試験がある。また、生物、英語の教員志望者には生物、英語の面接試験がある。人気のあるのは、英語、ロシア語、体育の教員志望である。

就職について

就職先は学校であり、学習・就職担当副校長が担当する。学校側の需要が高く、就職学生が不足する状況である。

- ・日本では学生が農村学校に行きたがらないという傾向があるがここではどうか。

カレッジは市町村や農村の行政機関代表者と話し合い、昇給その他の特典をつけるように依頼している。最近では 50 万ルーブルの特典をつけることになった。

- ・サハ共和国では目的別契約養成 (целевое направление контракта) 制度があると聞いたが、こちらではどうか。

ここにもある。特に、キャフタ地域では英語の教員が不足している。10%程度がそこの目的別契約養成である。以前は格段に多く 40~50%だった。サハでは、3年間は教員として勤務する義務があるがここにはない。また、サハでは5年間の勤務で住宅費の半分、10年間で全額を免除される。女性は3年もすれば結婚するが、それは市町村によって状況が異なるだろう。ここではそのような義務はない。

- ・学生の民族構成はどうか。

学生も教員も、ブリヤート人が60%、ロシア人が40%である（共和国統計ではロシア人が70%でブリヤート人が30%）。80%は地方の市町村から来ている。ここは従来から、地方の学生が多かった。地方では教員という職業が最高だと思われる。ブリヤート人の昔からのメンタリティーが残っている。

- ・連邦では去年から第2世代のスタンダードが導入されたが、こちらではどうなっているか。

ここは職業教育なので第3世代のスタンダードがすでに導入されている。職業プロフィール、モジュールを採用し、1,2学年用学習を更に深く学んでいる。教授法だけでなく、追加職業モジュールでイノベーションしている。少人数授業や実習（学習実習・生産実習と専門、一般実習と職業実習）が増加された。以前の18時間の実習から23時間の実習プラス4週間の卒業前実習となった。

- ・ザンコフ、エリコニン、ダビドフ、ペテルソンその他のシステムがあるが、こちらではどのような方式をもちいているか。

学生にはすべての方式の分析をさせている。それ以外にも21世紀の学校 (Школа 21 века)「ハーモニー (Гармония)」「21世紀の将来性ある学校 (Перспективная школа 21 века)」なども用いている。

また、1950年代に作成された非伝統的な教授法、最近接発達教授法も用いる。ビゴツキーの言葉である「教授は発達に先行する」のだ。アスモーロフの「Системная деятельность」「Научная деятельность」は、ビゴツキーの活動的アプローチから来ている。活動を通じてコンピテンシーを習得するという概念でと思う。

- ・ビゴツキーの最近接領域とは異質共存だと思う。考え方はすばらしいと思うのだが、実際問題として学力格差が存在するが、日本では習熟度別学習（英語、数学）をしているが、こちらではどうか。

こちらでも、分野別学習や習熟度別学習を行っている。このカレッジでは、児童生徒の個人別の分野別学習プランの作成をしたり、習熟度別学習もやっている。入学時には、入学診断 (Диагнос) で学生のレベルをそろえるようにしている。また、初等教育学部では、上級生が下級生を教える授業も行っている。УУД (универсальное учебное действие) に

については、コミュニケーション能力を通じて行っている。多文化、国際化プロジェクトについてはグラントを獲得して、「優しく美しい対話」コンクールを開催したり、ロシア以外の、モンゴル、中国などの外国の教育についても学んでいる。たとえば、3日前に終わったばかりであるが、G.R. ツーケルマン(ロシア)の『2週間の学校入門』を参考にした4年生のロシア語・文学の授業では、体験授業として2~3日間、「子ども学校入門」を行った。最初はチームワークを生かして、コミュニケーション、自己紹介などを通して子どもの性格や傾向を見定める練習をした。

- ・学部の男女比について教えてください。スポーツなどでは、仲間に少し心得のある上手い学生がいれば、他の学生も出来るようになっていくと思うがどうか。

その通りで、音楽でも「口があるなら歌える」方式だ。1年ではできなくとも4年ともなれば歌えるようになっていく。体育学部は90%が男子学生である。しかし、就学前教育学部には男子学生は一人もいない。初等教育学部でも男子学生は少数だが、リーダー的存在である。最近では、音楽や美術のグラフィックをやる男子学生もでてきた。70%の学生は地方出身のブリヤート人であるが、今年からは、以前にはいなかったロシア人学生も増えてきた。

- ・教員の給与について教えてください。

学校によって異なる。しかし、中等職業教育機関の教員給与は平均で13000から～14000 - 15000 ルーブルだ。全額、共和国予算から出ている。

< 2012年9月11日 >

⑤共和国ブリヤート民族寄宿制リセ№1

(Республиканский бурятский национальный лицей-интернат №1)

(12:30 ~ 14:15)

(担当：水谷邦子)

1. 対応者：副校長
2. 住 所：
3. 連絡先：電話：校長 受付用電話
E-mail：



1. 学校の概要説明

2006年に、英才児寄宿制リセのステータスを受けた。様々な分野における英才児の6-11年生が学んでいる。共和国の様々な地域からの子どもが学んでいる。生徒数450人、教員数40人、寄宿舎用職員数30人、補充教育教員16人、学校心理士2人、社会教育士1人である。教員の60%は卒業生である。寄宿舎には480のベットが備わっている。寄宿舎の責任者は、訓育指導の副校長である。リセは地域の児童芸術学校としての役割も果たしている。芸術やスポーツの補充教育を行っている。今年の卒業者のうち、3人が金メダル、6人が銀メダルであった。リセを卒業して外国の大学に行く者もいる。メドヴェージェフ主催の「夏季キャンプ」には、ナノテク分野の「ナノラボ」部員が6人参加した。

・オリガミについて

補充教育としては、ブリヤートでは2003年から伊藤、天野講師がオリガミ指導を行っており、2005年には日本で開催されたオリガミフェスティバル、2011年にはオムスクで開催されたオリガミオリンピックに参加した。今年も間もなく9月24日にはモスクワのオリガミセンターのスタッフが来ることになっている。このオリガミは1年から4年生は全生徒が、5年から9年生は希望者がやっている。

・電子図書について

このリセの教員で、2011年の教員コンクールの優勝者が作成したブリヤート語・文学の電子図書について紹介があった。ブリヤート人の服装、ユルタ(折りたたみ式でユルタの半分を男女別に分けたもの)、時間、名前、祭日、仏教とシャーマニズム等、すべてのブリヤート語がこの電子辞書に収められており、CDやDVDになって販売されている。子供用、大人用辞書や百科事典もある。検定を受け、共和国教育科学省のプログラムの一つとしてイルクーツクとザバイカル州で拡大検定が行われた。

・サッカー、バレーのコートについて

1980年と1981年の卒業生2人がビジネスで成功し、300万ルーブルの寄付してくれたのでサッカーとバレーのコートをつくることができた。(2018年にはロシアでサッカーのワールドカップがある。)また、小、中、高校生1人ずつの3人の奨学金も出せるようになった。一人毎月1000ルーブルずつである。

・寄宿舎生活について

寄宿舎には480のベットが備わっているが、現在は450人が居住している。寄宿舎の責任者は、訓育指導の副校長である。2つのキャビネットがあり、社会教育士1人と学校心理士2人がいて各々の生徒のカルテを常備している。それによって、家族や生徒同士の関係、非行のチェック等、1-11年生までの各々の子どもの発達を追跡することができる。最近の社会の傾向としては、子どもを寄宿制学校に入れたいと望む親が増加してきた。

質疑応答：

・学校心理士と社会教育士との違いは？

学校心理士は主にクラスの問題を扱い、社会教育士は家庭の問題を扱うという違いがある。

・日本では子どもの自殺も問題になっているが、ブリヤートではどのような問題があるか。

ブリヤート人の子どもには、自分の感情を表出できないという傾向がある。喜怒哀楽を外に表さないで沈黙しがちだ。心理テストを受けさせたり、絵を描かせたりする。感情表出が控えめな子どもには、その原因が家族関係にあることも多いので本人だけではなく、両親を対象とした心理トレーニングも行う。それによって子どもの緊張感が低くなっている。積極的過ぎる子ども、脳に障害を持つ子どもも日本同様にこちらにもいる。父母会も開いている。

・日本の学校には常駐の心理士は置かれておらず、週に1,2回巡回してくるが、こちらの状況を教えてください。

毎日、12時から19時までは、いつでも心理士のキャビネットに行っていけることになっている。小さな子どもも30人いるのでフォローしている。子どもだけでなく、教員や両親も相談に来る。

・寄宿舎の経費を教えてください。

1ヶ月1500ルーブルである。食事や滞在費、心理・医療費もすべてその中に含まれていて、それ以外の費用を支払う必要はない。

<2012年9月11日>

⑥ブリヤート国立大学民族・人文研究所

(Федеральное Государственное Бюджетное Образовательное Учреждение Бурятский Государственный Университет Национально-гуманитарный институт)

(14:40 ~ 15:50)

(担当：水谷邦子)

1. 対応者：①ブリヤート国立大学学長、同民族・人文研究所所長：バトラフ・セガエーレフ
- ②教務担当副所長：リュドミーラ・ヨシーエフ
- ③ブリヤート語・文学講座長教授
- ④ブリヤート語・文学講座助教授
- ⑤シベリア先住民族・北方民族語講座長：エリザベータ・アフアナシエフ教授
- ⑥日本語学科長、その他日本語教員3人

2. 住 所：

3. 連絡先：電話：受付用電話

E-mail：



1. 民族・人文研究所所長との懇談（1：50～2：50）

ブリヤート国立大学には約1万人の学生と3500人の教職員がいる。6棟の校舎と現在建設中の4棟の寄宿舍がある。今年の9月には創設80周年記念の行事が27,28,29日に行われることになっている。大学内には12学部と、民族・人文研究所、物理・数学研究所、教育学研究所の3つの研究所(институт)がある。ブリヤートウステニー地域とザバイカル地方のアギンスキー地域の2ヶ所には分校がある。

学生数の多い学部は、法学、経済、医学、生物・地理学部である。

民族・人文研究所には160人の学生、103人の通信制学生がいる。教員数は28人である。研究所の主要な課題は、ブリヤート語とエヴェンキ語の教員養成である。昨年からは、母語の教員養成以外にブリヤート語のテレビ・ラジオ用ジャーナリスト養成、今年からはツーリズム関係者の養成をする観光学科が増設された。

質疑応答

・どのような学生が来ているか。

全日制学生160人のうち、115人がブリヤート人である。このブリヤート人の内訳は、ブリヤート共和国からだけでなく、イルクーツク州など他の地方からも来ている。25%がエヴェンキでその他はブリヤート人である。エヴェンキ人は、ブリヤート共和国だけでなく、ハバロフスク、ザバイカル、サハ（ヤクーチア）といった全シベリアから来ている。ロシア人は15人で、観光学科に所属している。学科の中では、第2外国語で中国語を学ぶモンゴル語・英語学科が一番人気がある。モンゴル語・ブリヤート文学の修士課程もある。現在、ニジニー・ウジンスキーや北イルクーツクに住む約500人のトファラル語という少数民族の言語を取り入れることを検討中である。

・卒業生の就職はどのようにになっているか。

共和国教育科学省の国家発注でアギンスキー、ウスチオルダンスキーなどの学校に就職する。エヴェンキは、サハのアルダンスキーやネリユングリー等、故郷に帰って就職する。

・人気のある学科はどこですか。

モンゴル・英語クラスは人気があり、成功していると言える。卒業生でプレハーノフ経済大学に就職した者もいる。ジャーナリスト学科も人気で、就職先はテレビやラジオ局、テレコム社、ブリヤートニン新聞社である。大学全体として人気のある学部は経済学部であり、卒

業者は国立や自治体の行政担当者となる。人気のない学部としては、化学や物理である。

・入試について説明してください。

全員が EΓΘ のロシア語と歴史の成績で決まるが、更にブリヤート語、エヴェンキ語、英語の学科ではそれらの語学の試験が大学の試験として追加される。

・サハでは今年からヤクート語が EΓΘ には入ったそうだが、ブリヤートではどうか。

今年から EΓΘ の実験段階としてブリヤートの学校すべてでブリヤート文学が入った。ここでは、ブリヤート語は 9 年生まで、ブリヤート文学は 11 年生まで学習している。

・無償と有償の学生の比率はどうか。

ほとんどの学生は国家発注の無償学生である。165 人中、15 人だけが有償学生である。通信制学生は、仕事をして給与をもらっているのので、25%が無償で 75%は有償である。

・無償学生は目的別契約で入学しているのか。

以前はそのような学生がいたが、現在ではほとんどいない。入試の結果次第で入学してくる。

・寄宿舎生活をしている学生の生活について教えてください。

地方出身学生の 75 人が寄宿舎で生活している。年間 780 ルーブルの寮費、食事代は別である。普通の奨学金 (академическая стипендия) は、1420 ルーブルで、一人親の学生は 1900 ルーブルの福祉奨学金 (социальная стипендия) の支給を受ける。また、学業や研究活動で目覚ましい業績を収めた学生は、冠奨学金が支給される。

・諸言語・文学オリンピック、コンクールについて教えてください。

2010 年と 2011 年にはウドムルトにおいて全ロシア文学オリンピックが行われ、言語・文学学科の学生が優勝した。少数民族語の中では、エヴェンキ語だけは学生コンクールやオリンピックが行われている。その理由は、エヴェンキ語の専門家が多いからではないかと思う。エヴェンキ語は、ヤクートにある 25 種類の言語を教える北東連邦大学、ゲルツェン教育大学とこの 3 機関で教えられている。エヴェンキ人は 3 万 8 千人、エヴェン人は 1 万人である。ある説によれば、もともとは同じ民族であったが、1989 年にはエヴェンキが 3 万 5 千人、エヴェンが 3 万 8 千人だったそう。互いに親近感をもつツングース・満州語族である。(先住少数民族は 5 万人以下と定められている。) エヴェンキ人は、サハ (ヤクーチア) とクラスノヤルスクに 2 万 960 人おり、ブリヤートには 2664 人いる。ツングース人は、サハよりブリヤートに近いところに居住している。満州族はモンゴル人に近いと考えられている。ウラジーミルツェフという著名なモンゴル語研究者がいる。

・サハでは、エヴェンキ語を話せる人々が少なくなっているので、ロシア語を利用しながらエヴェンキ語を学習していると聞いたがブリヤートでも同様か。

エヴェンキ語話者の状況は複雑である。歴史的にもロシアの構成主体に住み、多くの民族と一緒に生活してきた。つまり、ロシア人とエヴェンキ人は隣り合わせに住んでいた。サハ（ヤクーチア）においても、ヤクート人のほうが多数なのでエヴェンキ人もヤクート語を話すようになった。ロシア連邦では、教科書は全域でロシア語を使っている。（タタールスタンやバシコルスタンのような大きな共和国は別だ。）しかし、ここ10年から20年はエヴェンキ語で話すようになっている。サハには、エヴェンキ語を教授言語とする学校が4校ある。エヴェンキ人が集中している3地域にはエヴェンキ学校がある。

・1931年まではモンゴル文字を使用していたが、その復活の兆しはあるか。

30年前にはブリヤートでは小中高で古典ブリヤート語があった。それは、仏教寺院などで必要だった。モンゴルでは、古典モンゴル語を復活しようとしたができなかった。しかし、内モンゴルは維持している。モンゴル共和国では、モンゴル文字は1年から学んでいる。50の条例で保護され今年の夏からはキリル文字でもモンゴル文字でもよくなった。

・ウラン・ウデは極東共和国の首都だったが。

ブリヤート市の学校では、ロシア史の中でその歴史的事実を教えている。

・モンゴルとの関係はどうか。

外モンゴル、内モンゴルの多くの大学と交流している。ウランバートルには毎日ここからバスがでていて、学生は実習や研修に出かけている。また、モンゴルからきてこちらで教えている者もいる。ブリヤート人、モンゴル人、カルミツキー人は互いにしゃべることはできなくとも聞けば理解できる。また、エヴェンキ語、ブリヤート語、日本語には同じ言葉がある。日本の映画は人気がある。

・日本語を学んでいるのは何人ぐらいか。

東洋学部の日本語科で10人ぐらいである。以前はもっと多く10～15人ぐらいだった。

<2012年9月12日>

⑦青少年美育共和国センター

(10:30～11:50)

(担当：水谷邦子)

1. 対応者：副所長、教授法担当者、
2. 住 所：
3. 連絡先：電話：受付用電話
E-mail：



共和国センターの概要

縦長の美しい花壇と白樺並木の奥の愛らしい建物が共和国センターであった。外見も内部も全体に明るく美しい施設である。所長は休暇中とのことで、それ以外の先生方の話をインターネット会議室で聞いた。補充教育機関には、地元、市町村、地域、連邦の4段階あるが、ここは最高の共和国レベルの補充教育機関である。ブリヤート共和国の7歳～17歳の児童生徒数は69817人であり、そのうちの半数以上の46858人が補充教育施設に通っている。共和国全体で補充教育機関は約300ある。共和国内では227校で補充教育が行われており、41の補充教育機関がある。そこには、180のスポーツ学校、62の音楽学校、共和国教育科学省管轄下にある4つの共和国レベルの補充教育機関が含まれている。このセンターは、共和国全体の補充教育機関に対して協力をしている。センターとは別に6つの共和国センターの支部があり、そちらには約2500人の子どもが通っている。

この共和国センターは、昨年には、ブリヤート各地の補充教育施設の英才教育を担当する教員の資格向上を行った。また、補助教育分野のコンクールやフェスティバルを開催した。補助教育の分野は、芸術、美術、技術創造等、13のコースがある。その内訳は、舞踊、民族楽器、フォークロア、合唱、演劇、バンド、器楽アンサンブル、ジャーナリズム、技術創造等である。また、10年前からは、ここに共和国の児童教育センターと遠隔教育センターが置かれている。身障者が在宅でIT技術によって学習することができる。

このセンターに通う子どもの数は昨年在約570人、今年が約650人である。人数増加の理由は、希望が多かった技術分野のサークルを入れたからである。こちらに通う子どもの数は、義務ではないゆえ変動がある。すべてのサークルは無料で、複数のサークルに通う者もいる。指導者の教員は支部も含めて25人である。非常勤の指導者もあり、地域によっては正規の教員が放課後にセンターの支部で働く場合もある。8:30～17:30の間で第1班と第2班があるが、2時か3時に来所し、7時頃までには帰宅するパターンが多い。平日には学校があるので、土日に来る子どものほうが多い。普通は、1日2時間だが、舞踊や演劇、技術などのサークルでは必要に応じてもっと遅くまで、9時頃までやることもある。

質疑応答：

- 最新の大統領令によると2020年を目標に75%の子どもを補充教育機関でカバーすべきであり、その50%は連邦予算で賄うそうだが、ブリヤート共和国ではどのようになっているか。

補充教育機関には、地元、市町村、地域、連邦の4段階のレベルがあるが、ブリヤート共和国では市町村レベルの180の補充教育機関を地域レベルに上げようとしている。

この月曜日（9月10日）のブリャート大統領会議においては、ロシア大統領の目標期限を前倒しにして2013年前半には100%の子どもを補充教育機関にカバーしようということになった。ロシアでは、美術、芸術、民族芸能については、教科を教える教員がそれを担当するのは難しいという問題があるだろう。

- **連邦の国家教育スタンダードでは、昨年から週10時間の課外活動を全員にさせなければならないが、それに応じて補助教育担当教員を増加しなければならないと思われるがどうか。**

2020年までの課題として、共和国の43000～44000人の子どもの指導をするためには、2170グループのための2170人の教員が必要である。初等教育では週10時間の補充授業はクラス担任が行うことになっている。文学は、クラス担任と補充教育機関の美術や芸術担当の教員が共働することもある。課外活動は、学校内で行わなくてもよい。各々の構成主体によって異なるが、ブリャート共和国では各々の子どもに対して予算がつく。故に、市町村の学校の子どもの数によって予算の額が決まる。学校の教員としては課外授業も学校でやったほうが有利である。必要ならば、別の学校でやってもよい。学校以外の補助教育機関に出すと利益がなくなるわけである。しかも、農村には都会にあるような補助教育機関がないので、農村学校の教員はこの共和国センターに来て補助教育の指導員の下で学び、補助教育の資格を得た上で、農村学校では課外活動も教えるのである。

- **課外活動の研修について**

地方からこのセンターの指導員の下で研修を受けることができるようになっている。研修の最低時間は1回につき36時間であるが、3年間に1度は72時間（理論36時間と実習36時間）の研修を受けなければならない。その際、36時間の研修を2度受けて72時間にしてもよい。また、5年に1度は144時間の研修を受けていなければならない。

一般の資格向上は5年に一回であり、2014年までには1級から6級までの第2カテゴリーは廃止されるので第2カテゴリーの教員を第1カテゴリーにするためにセンターは資格向上の面で協力している。

見 学

- 4年前にできたテレビ局では、ビターリーの指導のもとで編集や録音のメディア技術を学んでいる。ラジオスタジオでは現在ではロシア語で録音したものを放送しているが、将来はロシア語とブリャート語の2言語でのオンライン放送をする予定である。
- マルチメディアコンピュータ室。部員は、ノボシビルスクで開催されたマルチメディアコンクールにも参加した。相撲やロボットのゲーム。レゴでの教材づくり。
- バレエ、絵画、コンピュータ室、その他の見学。

< 2012年9月12日 >

⑧ブリヤート共和国教育・科学省

Комитет общего и дополнительного образования министерства образования и науки
Республики Бурятия

(11:00 ~ 12:25)

(担当：岩崎正吾)

1. 対応者：①教育・科学大臣：ダムジノフ・アルダール・ヴァレリエヴィチ
(Дамдинов Алдар Валерьевич)
②上級・高等後職業教育局長：バザーロフ・オレーク・ダシエヴィチ
(Базаров Олег Дашиевич)
③子どもの訓育・補充教育局長：フロロフ・ドルジ・グンドウイノヴィチ
(Фролов Доржи Гундыновиц)
④就学前教育・普通教育局顧問：ノモコノワ・タチヤナ・イヴァーノヴナ
(Номоконова Татьяна Ивановна)
2. 住 所：670001, Республика Бурятия, г. Улан-Удэ, ул. Коммунистическая, 47
3. 連絡先：電話：(8-3012) 21-29-21, 44-25-11 председатель (+7-3012) 214915 приемной:
E-mail : minobrrb@gmail.com
ホームページ : <http://edu03.ru/>
4. 入手資料：①ブリヤート語で書かれたま教科書 (3冊)
②「ブリヤート共和国の教育制度発展の分析的診断」
③「普通教育の地域システムの現代化について」
④「ブリヤート共和国の国家語としてのブリヤート語に関する初等・
基礎普通教育地域スタンダード」
⑤「第5～10学年ブリヤート語教育プログラム」(ブリヤート語版)
⑥バイカルのCD



○大臣の挨拶

○訪問への御礼と印象・意見

○ウラン・ウデで毎年行われるバイカル教育フォーラムは、来年は7月に実施される予定なので、皆さんをご招待したい。日本の教育には高い関心があり、日本の教育から学ばせて

頂きたい。とりわけ、補充教育の分野では、様々な伝統芸能の機関や博物館、美術館などが参加しているということなので、大変興味深い。日本の子どもたちは、土曜日には様々な場所へ遠足や旅行に行き、日本の各地を探訪することで、愛国主義が育成されていると聞いている。これからも私たちと皆さんの交流や協力関係が深まることを期待したい。

○別室で就学前教育・普通教育局顧問タチヤナさん、子どもの訓育・補充教育局長ドルジさん、上級・高等後職業教育局長オレークさんと懇談会。

○新教育法の採択の遅れと特徴について

すべての法律は、採択の前に社会的審議を行わなければならなくなった。インターネットで法案が公表され、誰でも自分の提案や意見を出すことができる。今回は、一般市民からの様々な提案や意見が多数寄せられたので審議の期間が長くなり、少し遅れている。現在はほとんどその審議が終了し、法案は議会に上げられている。来年の1月か2月には採択されるはずである。

新教育法の特徴であるが、一つは就学前教育が基礎教育の一部として位置づけられたことである。これは、これまでになかった全く新しいアプローチである。就学前教育は教育スタンダードと連邦レベルのルールに基づいて実施されることになる。それから、統一国家試験(ЕГЭ)が、これまでは毎年規程を作って対処してきたが、法律はなかった。それが新教育法により、正規の法律として定められることになる。また、教育機関について、国立・公立などの教育機関、自立的な教育機関、有料の補充教育サービスなど、細かな機関の定義が入っている。つまり、教育機関の再定義がなされている。

この新教育法では、これまでは別個に策定されてきた就学前教育機関から高等教育機関までを含むすべてを網羅した法律となる。その際、就学前教育機関とは3歳からの就学前教育を意味する。つまり、教育スタンダードは3歳から提示される。1歳半からの一般の幼稚園の管轄機関は教育省や教育・科学省になるが、設置者は市町村である。しかし、身体障がい者用の幼稚園は構成主体の設置となる。

⑨ブリヤート北方民族地域社会発展基金「タチヤヤーナ」

(Региональный общественный фонд развития народов Севера Бурятии «Татьяна»)

(16:00 ~ 18:45)

(担当: 森岡修一)

- | |
|--|
| <p>1. 対応者: ①代表者: アレクサンドル・ハラウトフ
②ブリヤート共和国エヴェンキ文化自治組織長: マリア・マドエヴァ
③エヴェンキ文化センター長: ナデジダ・スメトヴァ</p> <p>2. 住 所: Республика Бурятия, город Улан-Удэ, улица Жердева, дом 76А,
цокольный этаж</p> <p>3. 連絡先: 電話 (ファクス): 8(3012)45-03-21
E-mail: taigaobuch@mail.ru</p> |
|--|



○相互の自己紹介終了後、懇談に入る。

1. 「タチヤナ」財団について。

2002年に設立され、今年で10周年を迎えるので、その祝賀準備中である。20年前に「ディラチャ」社が設立された。「ディラチャ」はエヴェンキ語で〈太陽〉を意味している。ブリヤート居住の北方民族（特にエヴェンキ人）の言語と文化の保護・保存、慈善活動にも力を入れており、経済的活動も行う。たとえばエヴェンキ地域出身の学生の修学、スポーツ選手・芸術家に対する経済的援助活動など。また宗教活動（仏教・ロシア正教など）に対しても支援活動を行っている。当財団の活動により、エヴェンキ地方ではロシア正教会が設立され、2004年には別の宗教施設が創設されて北京から銅像が搬入された。会談を行っている建物に隣接して、ユリーナ・ナガーノ？（前述）氏の芸術作品も展示されている。

財団はタチヤナー族の個人的資金で設立されたものであるが、その運営には莫大な資金が必要であり、そのための資金提供会社として「ディラチャ」があり、同社はトナカイなどの飼養・畜産・製品化、鉱物資源の発掘加工等で得た利益を文化事業に提供している。タチヤナ氏の父親がエヴェンキ人、母親がロシア人であるが、決定権は父親にありそのことで経営権が決まるが、理事会に決定権がある。プロジェクトマネージャーにも権限が付与されており、現在10人ほどのプロジェクトマネージャーが活動を行っている。

当財団は、それ以外にも18歳までの児童・生徒で血液病学的な病的傾向をもつ300名ほどの児童・生徒に対して治療活動を行っている。重症児童に対する最初の診断・治療活動は6歳の男児から始められたが、その後は単に患者のみならず、家庭環境を含めた社会的要因の改善に努めている。子どもに対する手厚い保護は、児童の家「マリシカ（幼児）」の活動にも見られ、家庭的に恵まれない子供たちに対する精力的援助活動を展開している。

2. エヴェンキ人の文化と言語

サハでのエヴェンキ人は減少しているが、ブリヤート共和国ではエヴェンキ人の人口はこのところ漸増している。若者ではエヴェンキ語があまり使用できないものもいるが、ブリヤート人や他の種族との結婚等で同化が進んでいる点も無視できない。少数民族に対しては連邦レベルでの援助活動もあるが、それだけでは十分ではない。スポーツや芸術に対する援助活動においては、前者では伝統的な格闘技（レスリングのようなもの）や弓術、馬術など武芸に属する

スポーツが盛んであり、積極的な支援活動を行っている。たとえば、レスリングは設立者とかかわりが深く、10月ごろレスリングの学内大会が行われて奨励金が出されている。また芸術面では、最近、世界的に有名なピアニストなどを招待しての記念公演などを行い、好評を博した。日本では、相撲の横綱がモンゴル相撲の出身であることも多いがレスリングとモンゴル相撲とは関連性が強いと言っていいだろう。ブリヤート出身でも最近日本の相撲界にデビューした期待の新星がいる。

ここで少数民族の話題に関連して、日本のアイヌの民族問題について財団側から質問が出され、岩崎先生から詳細な説明が行われて、少数民族言語政策等における共通の問題点が論議された。アイヌ問題においては「少数民族」の厳密な規定が適用されず、日本政府の態度が不鮮明で公教育も正規の時間としては「アイヌ語」を位置づけることなく、サークル等で命脈を保ってきたにすぎない。その意味では日本人への言語的同化がすすんできたと言える。昨年、民族学フェスティバルが行われて日本からも参加者がおり、サハでの民族問題と関連するところが多いことが報告された。日本人のアイヌ人に対する態度等についての質問が財団側から出されたが、現在の日本におけるアイヌ等の少数民族センサスデータも不正確なものがほとんどで、同化の実態も不明確である、との説明が日本側から行われた。少数民族問題としては琉球等の問題もきわめて重要な位置を占めており、少数民族同士の国際的相互連帯が今後とも重要課題になるという点で両者の見解の一致をみて、さらに議論が深められた。

金田一京助の言語学的研究や『コタンの口笛』などの文芸作品、あるいは『オロチョンの火祭り』などがあるにせよ。それは民族学手的伝統を代表するものではなく、ある意味で観光資源の一助に組み入れられず危険性をはらんでいる。アイヌ村の観光についても同様の批判があり、これは他の少数民族でも同様で、こうした事態は、本来の生産労働から安直な「土産物」産業にながれる危険性をはらんでいるために、民族伝統の産業から少数民族を遊離させる可能性がある。サハの口琴はアイヌとも関連性の深い楽器であるが、それらは単なる物珍しさの対象からではなくて、本来の民族楽器としての機能と象徴性の伝統を保持していかなくてはならない。子どもの民族意識を自覚させるために「民族文化センター」や「民族アンサンブル」などがある。ここで「混合婚」「異民族婚」についての質問を行ったところ、当地は長距離鉄道が敷設されている関係から、ウクライナ人やアゼルバイジャン人との混合婚も少なくないという回答であった。次いで、エヴェンキ人の学校についての簡単な説明があつて、この場での懇談は終了した。

3. 民族博物館

その後、場所を民族博物館に移して、館内の展示物についての説明を受けた。

現在、エヴェンキのホシュン（モンゴルの行政単位）では、1万人以上のエヴェンキ人が居住しているが、全人口では約15万人に上る。ホシュンの中心地バヤントハイ（パントヌイ）には3万人が居住する。

当財団は、ブリヤート史上初めての私営による郷土史研究博物館を創設した。当博物館においては過去から現在に至る貴重な民族的文化財が展示されており、特に中国エヴェンキは当館を世界でも最大の博物館として大きな誇りを持っている。中国エヴェンキは子どもに教育を受

けさせることに熱心で、畜産家ゴンボの娘の一人は国民放送局で活躍しているが、民族的誇りとともに父母への尊敬の念も強い。彼らは、新しいものに対しても好奇心が強く、ロシアエヴェンキがどのようなものに対して関心を抱いているのか、といったことにも注意を払いつつ、彼らの民族的伝統や芸術作品の保持にも努めている。

館内には、民族衣装をはじめ、装飾品、楽器、居住用テントなど興味深い民族（民俗）的・伝統的文化遺産が数多く陳列されており、エヴェンキの民族的誇りの高さがおのずと伝わってくる思いであった。

中でもユーリー・マンダガノフの作品展示には、別室の1部屋すべてがあてがわれ、エヴェンキの生んだ最高の芸術家という位置づけであることを実感した。彼の作品は、大理石等種々の天然石を採掘して、薄い石板状に加工し、それらをジグソーパズルさながらに隙間なく並べたもの（フィレンツェ・モザイク）であるが、いずれも前衛的な雰囲気の中に天然石特有の淡い色調が醸し出すメルヘンチックな抒情性が参観者を魅了する。筆者も自宅に飾りたい欲求に駆られたが、我が家のような陋屋には不似合いと思いなおし、しばし作品群に見入った。氏は筆者とほぼ同じ年齢で、ブリヤートのザカメンスクに生まれ、1958年から6年間芸術スタジオで勤務したのち、イルクーツクやモスクワで芸術関係の勉学に励み、ブリヤートを代表する芸術家としての地位を不動のものとした。国内はもちろんのことパリ、モンゴル、中国、アメリカ、ウラン・ウデ、韓国、イルクーツクなどでも展覧会が開催され高い評価を得ており、ロシア芸術アカデミー表彰、ブリヤート国家賞受賞など数多くの受賞歴がある。

（この間、地元テレビ局による岩崎先生と水谷先生へのインタビューがおこなわれた。）



エヴェンキ人女性による説明



自作について説明中のユーリー・マンダガノフ氏

カザン班調査報告書
—モスクワ市・カザン市（タタルスタン共和国）—
（2012年9月29日－10月8日）

関 啓子
 トカチェンコ・スヴィトラーナ
 木之下健一

2012年（平成24年）9月 モスクワ市・カザン市調査関係の活動日誌

月 日	時間	都 市	航空便・ホテル	調査機関
9月29日（土）	12:05 17:10	成田発 モスクワ着	SU263 機内泊 モスクワ (Danilovskaya 泊)	
9月30日（日）	19:30 22:08	モスクワ発	モスクワ調査 夜行列車でカザンへ車中泊	モスクワ・イスラーム大学 (ホテルロビーにて副学長にインタビュー)
10月1日（月）	09:27 12:00 15:00	カザン着	Passazhirskaya 駅 カザン調査 (Ibis Kazan Center 泊)	カザン市教育行政局 カザン連邦大学
10月2日（火）	10:00 14:00 16:30	カザン	カザン調査 (Ibis Kazan Center 泊)	タタール・ギムナジア No.12 (女子校) 「ムハンマディア」マドラサ 東洋学大学
10月3日（水）	10:00 14:40	カザン	カザン調査 (Ibis Kazan Center 泊)	ロシア・ギムナジア No.37 スヴィヤシスク島基礎学校
10月4日（木）	09:00 13:00	カザン	カザン調査 (Ibis Kazan Center 泊)	タタルスタン共和国教育省 市立子ども宮殿
10月5日（金）	10:30 15:30 19:30	カザン カザン発	カザン調査 Passazhirskaya 駅車中泊	中等普通教育学校ウスマニア (イスラーム教育機関) カザン市立動物園
10月6日（土）	07:00 11:00 15:00	モスクワ着	モスクワ調査 (Danilovskaya 泊)	移民政策研究者グリャエヴナ氏へのインタビュー モスクワ・タタール人協会
10月7日（日）	午前 16:00 20:00	モスクワ モスクワ発	空港へ移動 SU262 機内泊	資料整理
10月8日（月）	10:40	成田着		

モスクワ市（1 機関）

< 2012 年 9 月 30 日 >

①モスクワ・イスラーム大学

（19:40 – 21:10 レニングラード・ホテルのロビーにてインタビュー）

Московский Исламский Университет

1. 対応者：Измайлов, Раис Ряшитович. Проректор по учебно-воспитательной работе
2. 住 所：109382, г. Москва, пр. Кирова, д. 12
3. 連絡先：Tel. (495)351-40-75
E-mail: raiz80@mail.ru



まず歴史を見てみれば、2000 年に北コーカサスで事件があり、それ以来ロシア連邦もイスラーム教育の分野においてもっと積極的な役割をはたすべきだ、とされた。さらに深く歴史を振り返れば、ロシア正教と異なりイスラーム教育の伝統はロシア帝国の時代においては抜け落ちていた。そのためロシア全土で見ればイスラーム教育は少しずつなされていたものの、古典タタール語しか使われていなかった。ダゲスタンを中心として、北コーカサスなどに少しずつ教育の拠点があったが、そこの教育はアラビア語で行われていた。かつてソヴィエト時代は長きに渡ってロシア語による教育が行われていた。そのためロシアにはロシア語で読めるイスラームの本などがなく、古典タタール語かアラビア語によって教育が行われていた。このためロシアの伝統には適していないような思想等が次々と外からアラビア語などとともに入り始めてしまった。

丁度グローバル化とも結びついているが、自分たちの国の伝統が失われているときに、外部から自国に適さない思想等が入ってくるようになってしまったのである。90 年代や 2000 年代のラディカリズムはそうした点に起因している。自分たちの言葉による教育ができていない間に、イスラームは他の国からやってきた言語や思想によって影響を受けるようになってしまった。そのため 2000 年以降は、大統領のイニシアティブでイスラームの他の自治共和国と力を合わせて新しいコンセプトを作るようになった。それは上から押し付けられたというわけではなく、お互いのためであった。人々もイスラーム教育の必要性を十分に認識していたが、それぞれの機関がお互いの協力関係を築くために大統領のリードが必要とされていた。

イスラーム教育には重要とされる 3 段階がある。第 1 段階は、宗教的な小学校、マクタブ、マドラサ、また宗教的な日曜学校などを基礎としている。ムスリムであれば誰もが知るべき、ごく簡単な事柄を教えている。第 2 段階は中等教育である。小さいモスクでイマームとして働くような人々に教育を与えるような施設である。第 3 段階は高等教育である。そこでは宗教

学の専門家を育てたり、地方の宗教的な機関の指導者などを育成していた。現在我々は、20世紀のはじめに存在していたタタールをはじめとする他のイスラーム民族の宗教学の基礎を復元、復活させようとしている。リザエッディン・ファフレッディン (Ризаэддин Фахреддин) や、ムーサー・ビギエフ (Муса Бегиев) といった人物による宗教学である。20世紀の初めには、日本でもイスラーム教学が存在し、日本との交流を行っていた。日本におけるイスラーム学でもそういったことが研究されていたはずである。

我々は古典的な宗教学者の文献、同時に現代的な思想家に基づいた研究をおこなっている。イスラーム協議会というものもあり、そこには国全体のイスラーム大学が集まっているのであるが、問題は我々が博士、教授、などを育てられない、ということである。それはロシアには宗教学の資格を与えられるような委員会が存在していないためである。

例えばアラブの国々で資格を得たとしても、ここではその資格は認められていない。国家間で学位の交換に関しての協定がないためである。大学としてもこの点を問題として受け止めている。大学としても登録をしてもらうための人事上の基準、博士、教授は何人といった基準を満たすことができず、大学として高い評価は得られない。エジプトなどで学位を取った人で宗教的に問題がなかったとしても、そこで得られる教育の水準が低く、知識の視点が狭く、幅広い知識などがそちらでは得られない。また外国で教育を受けた先生方はロシア語の能力が低く、指導能力も低い。教科書を作る、といったこともできない。そのために問題が起きている。そのため我々は、宗教的でない大学から人材をもらうしかない、という状況になっている。そういった人物は宗教的な教育を受けていないために、儀式を執り行う、といったことはできない。

私自身は、教育コレッジを卒業して、イスラーム大学に入学した。しかし、私が教育を受けた時代は教育のレベルが低く、宗教的な知識は足らなかった。また当時国から認可を受けていなかったのもので、教育を受けていたにもかかわらず、バカラブリアートの証明書をもたらすことができなかった。

宗教教育については、3つの大学が目される。一つはモスクワで、これは首都であり可能性が多くあるためである。それから二つ目にカザンであり、そこでは国からの援助が大きい。そして最後にダゲスタンである。この3つの大学は他の教育機関のための共通した教育プログラムを作成し、これが将来的なスタンダードとして認められた。ただし率直にいうと取り組みは少し遅れている。移民の動きも激しくなっているので、例えば中央アジア、コーカサスからも移民が沢山来ている。こうした人々との間で矛盾も生じている。彼らが本来持っている伝統的基盤から切り離された状態にあって、私たちは何を提供すべきか、という点はまだわからないままである。

こうした人々は、故郷の伝統から切り離された状態にあり、そうした穴を埋めるためにネットで情報を探したりしている。その際に自分たちの伝統と全くつながらない思想などを吸収してしまう、という事態が生じている。例えば、家にいると親の影響や権威などがあるが、そうした親元から離れるとそれがまったく影響しなくなる。また、イマームの権威も段々と薄くなっていく。何故かというといマーム自身も外国で勉強していない、行ったことがない、大学で教育を受けたこともない、アラビア語もできない等々の問題があるためである。

そうした際に大きな影響を持つのが、「ヴァーチャルなイマーム」、「サイバー・イマーム」

といわれるような存在である。サウジアラビアなどからメッセージを送ってくるような「サイバー・イマーム」こそ彼らにとって権威のある存在となっている。我々の主な課題は、「サイバー・イマーム」と競争できるようなイマームを育てる、ということである。我々の大学でも現在改革を行おうとしている。伝統的な科目、アラビア語なども重視しながら、教育学とか心理学とか情報学、政治学などといった分野にも取り組みながらイマームを養成するようにしている。また若い学生に評論を書かせ発表する、というようなことも行っている。若者のための特別な論文集の出版なども行っている。それは専門家を育てるためである。

ロシアのいろいろな地方、ウラルやタタルスタンやサンクトペテルブルクなどにおいて、ロシアの事情と外国の事情についての分析が載せられた雑誌の出版が行われている。それに加えて、CIS 諸国のイスラームについての雑誌も出版されている。そういった雑誌は、ユーラシア地域におけるイスラーム学者の研究成果を蓄積することを目的としている。ムスリムのエコノロジーというような雑誌などもある。また純粋に宗教的な雑誌などもある。インターネット・サイトでも我々が出している雑誌は全て見られるようになっている。またイスラーム百科事典なども出版されている。ロシア連邦のイスラームというサイトもあるが、そこも我々が運営しているサイトである。CIS のイスラームについて扱ったものもある。一方でロシア国内においてはチェチェンや中央アジアやタタルスタンなど、様々な地域のイスラームがあり、それらをまとめることも一つの問題となっている。それぞれの地域のイスラームにも伝統があるため、まとめるのが難しい状況となっている。

質問：ロシアのイスラーム、CIS のイスラームを作ろうとしている、ということなのか？

ロシアのイスラームを、CIS のイスラームを一つにまとめあげる、という考えは展望としてはいいけれども、今後の課題となっている。

質問：ワッハーブ主義、ユーロ・イスラームとも違うという言説がタタルスタンにあるが、それとの関係は？

モスクワのイスラームは、ワッハーブ主義やユーロ・イスラームとは少し違う。タタルスタンではハナフィー学派の伝統を復活させようとしている。タタルスタンのイスラームはある意味で対立している。こうした議論は実は 20 世紀から存在してきている。伝統的な、と言った場合には、二つの大きな流れがある。カディミズム (кадимизм)、ジャディディズム (джадидизм) とがある。モスクワはジャディディズムに傾いている。タタルスタンはカディミズムであるとされる。モスクワは多民族的なエリアである。またモスクワは教育のレベルが高いし、教養のある人が多い。彼らは物を考えたり、非常に鋭い質問をしてきたりする。そのためモスクワではジャディディズムの方がふさわしい。カディミズムが何故変化してこなかったかという点、それは昔ながらの閉鎖的な宗教的なシステムであり、他所の世界とは関係を持たずに、また政権ともあまり関係がない状態を保ち続けてきたからである。一方でジャディディズムは明治維新を連想させる。日本は 300 年の鎖国のあと、開放されることとなった。ジャディディズムも伝統を重視しながらも、どんどんと新しい傾向も吸収してきた。

私自身もムスリムではあるが、私の場合それは見た目ではわかりづらい。余りそれを見たい

に出しておらず、ロシア語も話すため、町の中にも誰からも私がムスリムであることはわからない。一方でカディミズムの人々は逆である。これはパキスタンの伝統を守っているためである。メディアにおいてもネットでも思想的な議論、闘争が行われている。私自身はそういった状況に肯定的であり、両派とも存在するべきだと考えている。これはお互いに影響を与えているためである。もしカディミズムがなければ、ジャディディズムは、もっと早く伝統を忘れていたと考えられる。もし逆にカディディズムだけであれば、人々の心はどんどんとイスラームから離れていったと考えられる。理想的とされているのは、トルコのような事例である。日常、経済システムにおいては伝統的な要素が強いが、それと同時にヨーロッパとのつながりもあり、リアリティとの密接な関係を失わずに、調和的な発展を目指している国とされている。

質問：トルコにおいても以前調査をしたこともあるが、トルコは理想的に見えるのか。

トルコは絶対的な理想ではないけれど、今日のトルコと1年前のトルコとは全く違う。今のトルコは完全にイスラーム化された社会になりつつある。昔アタチュルクが建国を行った時代とは変わってきている。理想とするバリエーションとしては世界には、マレーシアか、トルコか、という二者択一になっており、このどちらかからモデルを選ばないといけない、という状況になっている。ただしモスクワはやはり別個で、アラブのイスラームなどとも異なっており、独自性が強くなっている。

質問：タタルスタンが多民族、共生というような思想が強いように思われるが。

タタルスタンが多民族共生的で、多文化的なイスラームである、とも言われるが、モスクワの方が、ハナフィー学派もタタル人もおり、一方では北コーカサス出身の人々もいる。モスクワにおいては統一的なイスラームは存在しない。もっと色々に対応できるようなイスラームでなければ、ここでは上手くいかない。

質問：つまりモスクワではかなり創造的な取り組みが行われているということか。

こういった点は出版物でも指摘されてはいるが、まだあまり言葉としては整理できていない状況である。私自身は大学で教える他に、モスクワ近郊のバラシカという小さい町でイマームを務めている。そこはまさに多民族の集まりで、旧ソ連邦のあらゆる共和国の人々が集まってきており、中近東のあらゆる国々からも人々が来ている。ダゲスタン人にも色々対立があり、スーフィであったり、そうでない人もいて、争いにならないように注意をしなければならない。私自身も、争いの原因になるような内容については、意識的に触れないようにしている。基本的には、議論が紛糾するのはクルアーンの解釈についてである。そのため私自身は、まず原文を重視して教えるようにしている。全ての人々は自分たちの意見を持つべきであり、自分の意見しか認められない、というような立場はよくない、また自分の考えを他人に押し付けてはいけない、というのが私自身の立場である。タタルスタンのハナフィー学派はモスクワではその宗教的慣習を守りにくい状況にある。モスクワではもっと柔軟性に富んだ対応を取らなくてはならない。

例えば、ラマダンの際のお祈りは、ハナフィー学派では一度に20回繰り返すが、モスクワ

では事情が異なる。このモスクワにはモスクは全部で 10 ヶ所しか存在しない。夜の 12 時から始まるこのお祈りは、いろんな場所から多くの人々が集まってくる。ハナフィー学派の人も、そうでない人も、皆にとって都合のいいように我々は 8 回にお祈りを減らした。朝から仕事がある人もおり、そうした人々が仕事に遅れないように、との配慮からであった。私自身もハナフィー学派ではあるが、それほど慣習に厳しくはしていない。しかしタタルスタンではそうした慣習を厳しく守ろうとしている。それはタタルスタンにおいてはいいことであるが、しかしモスクワやサンクトペテルブルクのためには、そうしたモデルは合っていない。タタルスタンはムスリムは 150 万人しかいないが、モスクワやサンクトペテルブルクでは人数でいえば大変な差があり、その倍程度である。

我々モスクワで務めているイマームの社会的な課題、使命は、イギリスなどで行われているゲットー化、つまり移民の人々が一定の区域に集められ、閉鎖的なエリアとなってしまうことを防がなければならない、というものである。そのため我々の使命は、他所から入ってくる人々をモスクワの状態に適応させる、というものである。私自身の家族の例で言っても、先祖は 600 年前からロシアの中に入り込んでいる。祖先はタタール人の村に住んでいたが、その周囲はロシア人の村に囲まれていた。何世紀にも渡ってソヴィエト時代も含めて自身の言葉や習慣や宗教を基本的に守っていたのはイマームであった。このようにイマームは単なる宗教的な活動家、というだけにとどまらず、伝統の守り手という社会的な役割も与えられて来た(副部長自身はタタール人でいらっしゃる)。

質問：タタールの新聞社なども見て、柔軟なイスラームという印象をタタルスタンについて思っていたが、モスクワの方が柔軟であるようにも思う。

そのようにも言えると考えている。

質問：正教の人たちとモスクワで共生するためには何が必要か。

正教の人々とムスリムの人々との間で、公式な衝突はない。しかし例えば新しいモスクを建てるとなると問題がおこる。ある団地では市民が反対運動を起こし、モスクワ市はその計画を停止した、ということがあった。私の所の人々の例でいうと、普通のアパート借りる際に、まず会社がそこを買い取って、あとでそれを我々に貸し出した。それはなぜしたかという、最初に自身の名前をだすと、周りの人が抵抗を示していたと考えられるためである。

質問：新しい宗教教育の導入をどう思われるか。

私自身は率直に言えば、最初からその科目の導入に対して否定的であった。そうした教育は必要ではないと考えていた。まず宗教を教えるのは教育を受けていない普通の先生である。つまりロシア正教のためにもイスラームのためにもならない。子どもたちには退屈で、宗教のことを嫌いになるかもしれない、と危惧している。数学が嫌いな先生が数学への愛着を子どもたちに持たせることは不可能であり、それと同様であると考えていたためである。私自身であれば、自分の子どもには宗教のことを自分で教えるけれども、宗教学として中立の知識を与えるような教科もあり、そうした内容ならばいいかもしれない。まだ人間として形成されていない

4年生の子どもなどに対して、民族性や、宗教性などで分け、区別してしまうことは正しくないと感じている。

私自身も、ソヴィエト時代に自分が学校で学んだ時の自分の気持ちを覚えている。歴史の授業においてチンギス・ハーンの話になると、周囲からいじめられ、「白いカラス」のような気分になっていた。私自身の経験から言えば、民族性においていじめられた人物は、極端に言えば民族主義者になってしまう。私自身はエストニアに生まれ、その後ニジノ・ノブゴロドでロシア語による教育をごく普通の学校で受けた。(副部長の時代には、モスクワのタタール学校のような良い教育機関はなかった。現在 33 歳。ピオネールにも行っていた。)

質問：留学の制度は現在どうなっているのか。

現在も留学の制度はあるが、行き先はエジプトのアガハル、シリア、マレーシア、インドネシア、トルコなどといった国々である。最近もグループでのインドネシアへの留学などがあった。奨学金を取って行く場合もある。そうした場合にも基本的には、まずロシアで教育を受けて、そのあと留学先へ送るようにしている。

質問：学生たちの卒業後の進路はどうなっているのか。

卒業後の就職先も大きな問題となっている。二人程度が大学に残り、あとの就職先はビジネス、工場など様々である。イスラーム大学における教育は基本的には有料であるが、社会からの需要を満たすようにしている。それは昔のラスプレジューニエ (распределение) と同じようなものである。今就職において一番の問題は、給料や住居などといった一般的なものとなっている。イマームは基本的に何でもできる人であり色々な職を抱えていることが多い。大学でも何でもというように、また私のように 3 つも 4 つも肩書きを抱えている、という場合が多い。

カザン市〔タタールスタン共和国 (5 日間)〕 (10 機関)

< 2012 年 10 月 1 日 >

②カザン市教育行政局

Муниципальное казенное учреждение «Управление образования Исполнительного комитета муниципального образования города Казани»
(12:00 – 13:00)

- | |
|--|
| <p>1. 対応者：Хадияллин, Ильсур Гараевич 局長
Хидиятов, Ильнар Рузалович 副局長
Богавеева Райхана Аминовна, Главный специалист Управления образования г.Казани</p> <p>2. 住 所：420111, г. Казань, ул. Большая Красная, д. 1</p> <p>3. 連絡先：Tel. / Fax: (843) 292-70-50
E-mail: guo-kzn@yandex.ru</p> |
|--|

4. 入手資料：カザンの歴史についての本

カザン市における民族教育に関する DVD

カザン市の概要を扱ったディスク資料

「ロシア市民アイデンティティ形成の基礎にむけての政治文化教育」
会議資料集

「社会の革新的発展における成長する世代の精神性の確立」フォーラム資料集

タタールスタン共和国における国家語及び他言語に関するタタールスタン共和国法—2004年—2013年度タタールスタン共和国における国家語及び他言語の保存、学習、発展に関する国家プログラム



質問：カザン市の特徴はどのようなものがあるか。

カザン市の特徴として、ここでは法に基づいて2カ国語による教育を行っている。ロシアでは他にも自治共和国があり、そちらの事情について詳しいわけではないが、タタールスタンでは2つの言語、ロシア語とタタール語の地位は同じであり、学校において教育がなされる、ということが言語法、教育法の二つの法において定められている。誰もがバイリンガルかと言えば、それは全ての人と同じとはいえないが、ロシア語については100%の人が理解しており、タタール語は70%程度の人が理解している。つまりロシア人も最低限タタール語で日常会話ができる程度となっている。

質問：こちらではロシア・ヨーロッパ的、アジア的なものが混ざって新しい価値が生まれているように感じている。教育政策においてもこれらは反映されているのか。

民族融和的な教育政策は、ほぼ無意識に行われており、大昔、何世紀も前からこの土地においてキリスト教、イスラームが平和的に調和し共存してきた。将来的にこうした状態、安定、平和、調和を維持していきたいと考えている。一方で、そうした内容を教えることを目的とした特別な教科が学校において存在するわけではない。お互いの愛情、相互理解、相互尊敬、そうした雰囲気はいずれかの教科において教えているわけではなく、全ての教科に含まれている。学校外における教育もこうした点で大きな役割を果たしている。いずれかの授業において特別に行っているわけではなく、自分たちがモデルとなり、子どもたちに対して模範を示していくことが重要であると考えている。また学校における行事などで、お互いへの理解、尊敬などを

形成しなくてはならない。町全体としても、幼稚園に始まり、多くのイベントが行われている。二つの言語がそうした際には使われている。また英語によって行われる場合もある。タタールスタンの歴史に関する教科は4年生から始まっている。今年から、5年生から世界の宗教史と倫理の授業も行われている。カザンに来られたならば、まず必ずクレムリンを見てほしい。そこには調和が表現されている。正教の寺院もあり、モスクもある。我々はどうのように生きるべきか、ということ余り考えないで生きている。何故かといえば、それは生まれながらにして染み付いているものであり、祖先もそういう暮らしをしてきたからである。教育局にも様々な民族の方が務めているが、ある人は正教会へ、ある人はモスクへと向かう。そのようなことはこちらの人々にとっては自然であり、普通のことである。何かの集りにおいて、皆で観光のようにクレムリンに出かけて行くときは、キリスト教の人たちがお祈りをしている間に、我々はモスクにいたり、というようにしている。

質問：移民の言語教育については、何かしているのか。

カザン市における移民の子どもたちへの言語教育について語る際に重要なのは、まず経済的な安定性は、精神的、道徳的な安定性と深く関連している、ということである。経済が悪い時には、そのような安定性は得られない。カザン市にやってくる人々の中で、一番多い出稼ぎ労働者は、旧ソ連の中央アジア諸国である。そのような人々はわりとロシア語ができるが、それが出来ない子ども達に対しては、上級生などが教える、というように生徒自身が教える取り組みを行っている。ロシア語の学習もレベルによって、いくつかのグループに分かれている。レベルが上がれば、別のグループに移る、ということも行われている。まずロシア語の民族的なコンポーネントのある学校で、少数グループで教育を与える、というシステムをとっている。旧ソ連圏でない諸外国から来ている子どもたちに対しても、同じようなプログラムが適用されている。

そうした状況のもと言語上の問題はカザン市においては発生してはいない。また、カザン市には大きな多民族的な日曜学校があり、そこで子どもたちは自分の国の言葉を学ぶことができる。グループは21に分けられており、ウズベク語やアゼルバイジャン語など、となっている。

質問：宗教教育の導入についてはどのように考えているのか。

宗教に関する教科について、まず第一にロシア連邦における決定事項であり、ここから離れることは間違いであるし、教育スタンダードの一つとしてカザン市においてもこの教科を導入する必要があった。子どもの知識を増やすことは良いことであるので、我々はそういったイノベーションを歓迎している。この教科ではイスラーム、キリスト教、ユダヤ教、仏教の4つの宗教に関する基本的なことが説明されるようになっており、そのため歓迎すべきことである、と捉えている。今年の夏から、その教科を教えるための準備コースが開始され、先生方がそこで準備を行い高い資格を得ている。

質問：言語別学校数についてはどうか。

現在カザン市において40の学校はタタール語である。他の学校はロシア語がメインである。

全体としては 171 の学校がある。ロシア語学校でも、科目としてタタール語がある。もちろんタタール語の学校でもロシア語の授業があり、またいくつかの授業もロシア語で行われている。タタルスタンには言語についての法律もあり、それを実施するためのプログラムも採択されている。そのための実施プログラムに関する本（資料として頂いた）も片面がロシア語、片面がタタール語で書かれている。こうした取り組みは 20 年来、タタルスタンにおいて成功裏に実施されている。このような取り組みは、今の安定性、調和性のために重要な基礎となっている。ソヴィエト時代にもタタール語による教育は行われており、ロシア語で用意された教育内容がタタール語にされていた。今は、翻訳されているものもあれば、地方レベルでそのままタタール語で書かれているものもある。

こちらではタタール人の学校、ロシア人の学校とは言わず、タタール語の、ロシア語のと言われている。それはお互いの民族が、別の民族の学校で学ぶという場合もあるからである。地域によっては田舎などの場合、タタール人しか居住していないような地域もある。そういった場所では科目としてロシア語が教えられているが、実際に使うのは大人になってからである。（インタビューに対応して下さった教育局の皆さんも、タタール語で基礎的な教育を受けてこられた。）

例えば、モスクワとかヤロスラブリから引っ越してきた子などは最初苦労するが、あとから適応するようになっていく。ロシア語学校、タタール語学校、と言っても異なるのは、何語で授業をするのか、ということだけである。タタール語の学校においても、ロシア語は外国語として教えられているわけではなく、国家語として教えられている。

例えば（教育局長ご自身が）6 年生のとき、18 人がロシア人、12 人がタタール人であった。タタール語の授業の時は、クラスは二つのグループに分けられた。ロシア人の子どもたちには、彼らに合ったタタール語の授業が行われ、タタール人の子どもたちは、もっと複雑なレベルでタタール語の授業が行われていた。ロシア人の子どもたちに、タタール語を複雑なレベルで押し付けないようにしている。それはタタール語が嫌いにならないように、という目的に基づいているためである。

日曜学校はカザン市によるものである。タタール人に対する教育は、ロシア連邦の他の地域でも行われている。タタール人はロシアにおいて人口で第二位という大勢を占める民族である。全土に千ヶ所以上のタタール語の学校が存在する。タタルスタンにおいては、ロシア全国のタタール語の学校をサポートするような事業も行われており、先生方のための資格向上の取り組みもある。

質問：タタール語学校とロシア語学校とでは、どちらの方が人気があるか。

タタール語学校とロシア語学校について言えば、カザン市ではまずその教育のレベルに人気がある。ロシア語の学校で人気のあるところもあるし、タタール語の学校で人気のあるところもある。中には世界的に有名になっている学校もある。私たちはどちらの方が人気があるか、というような視点から見ておらず、また立場的にもどちらの学校が人気がある、ということはいえない立場にある。

学校の数に関して言えば、現在は市民のタタール語の要求を満たすことができている。90

年代に圧倒的にタタール語の学校が増えた。今はタタール語の学校は40ヶ所あるが、これ以上の必要性はない。ソヴィエト時代には寄宿制の学校が一つ、つまり地方から来た子どもたちのためのタタール語学校が1校存在するのみであった。つまり、タタール人の民族的なアイデンティティの要求は学校数を40倍にした、ということもできる。

タタルスタンでは、両親はどのような理由で子どもたちをタタール語の学校に送るのかといえば、色々モチベーションはあるが、「タタール語の学校を卒業すると何かになれるのかといえば、タタルスタンの大統領になれる」と冗談のように言う。タタール語の学校を卒業したら、タタルスタンの大臣にもなれる。偉大なる学者にもなれる。外国で活躍しているタタール人の研究者もいる。そういったことから、人間のキャリアは言語とは関係なく、本人の才能や意欲などによって左右される、と考えている。一方で、ロシア語の学校や英語の学校を卒業したからといって、大統領に皆がなったわけではない。大多数は一般の市民生活を営んでいる。

質問：民族同士の尊敬などについて、特別なことは行われているか。

お互いの尊敬、とかそういったことは、連邦レベルで出版される教科書などにおいても貫かれているし、地方のレベルでもある。外国から来た方にとっては、そうしたテーマは興味深い内容であるかもしれないが、こちらではあまりそのようなことを気にしないし、また頭にも浮かんでこない。基本的にここでは友好の雰囲気があり、自然にそのようなことが行われている。この人々は一つの塊であり分けることはできない、どのような変化が起きたとしても、それは変わらない、という考えに立っている。

質問：以前、世界タタール人会議に参加した際、教育を話題にしていたが、最近はどうか。

現在でも、世界タタール語会議といったものが行われているが、そこではロシアのあらゆる地方でのタタール語教育をテーマとして話し合っている。タタルスタンでは、余り問題は起きていないが、タタルスタン以外のところで沢山の問題が起こっているのも、それらを解決するべく、そうした会議では話し合いをしている。

様々な国においてタタール人組織の支部があり、日本の支部においてもサバントウイという興味深いお祭りをやっている。祭りの際は、羊を生贄にしてお祭りをやったりしている。そうしたタタール人は日本にいても、自分の民族性を失っていない。我々も7、8年前にビデオを見たのであるが、日本人も沢山参加していたと思われる。

タタール人は世界中にいる。第二次世界大戦の直前、直後でもタタール人こそがウズベキスタンやアゼルバイジャンなどに派遣されて、地元の人々にロシア語を教える教育を行っていた。こうした面からも学問的な使命を果たしてきたと言える。

③カザン連邦大学

Казанский (приволжский) федеральный университет, Институт педагогики и психологии

(15:00 – 17:00)

1. 対応者：カリムллин, Айдар Минимансурович. директор института педагогики и психологии, КФУ / Институт педагогики и психологии
Андреев Валентин Иванович (КФУ / Институт педагогики и психологии / Отделение психологии / Кафедра педагогики)
Попов Леонид Михайлович (д.псх.н. , профессор, заведующий кафедрой психологии)
Валеева Роза Алексеевна (доктор педагогических наук, профессор, , заведующий кафедрой об-щей и социальной педагогики)
Шайхелисламов Раис Фалихович (КФУ / Институт педагогики и психологии / Приволжский межрегион. центр повышения квалификации и проф.переподготовки работников обр-я, руководитель учебного центра)
2. 住 所：420021, РТ, г. Казань, ул. М. Междаука, 1
3. 連絡先： тел./ факс 8 (843) 292-91-23
Email: kalimullin@yandex.ru
4. 入手資料：大学紹介の英語パンフレット



最初に大学美術館を見学させて頂き、数々の学者、研究者を輩出してきた歴史を紹介して頂く。またその中には、若き日のレーニンの写真や、3ヶ月だけ在籍していたトルストイについての記録もあった。教室も当時の様子を可能な限り保存しており、皇帝が座っていた講堂の椅子や、レーニンが座っていた教室の椅子などを紹介して頂いた。

その後会議室で諸先生とご挨拶し、役職や研究について紹介をして頂いた。全員教育学と心理学の分野の先生であり、ロシア教育アカデミーの会員であり著名な教育学者であるアンドレエフ先生、心理学のポポフ先生、教育史、比較教育学のヴァレエヴァ先生、経済学を担当し教師の資格向上に関しての責任者であり、同時に長年に渡り教育大臣を務めてらしたシャイヘリスラモフ先生、また歴史学、教育経営を担当し、研究所の所長を務められているカリムリン先生という面々であった。

こちらからロシアの教育について質問をする一方、日本の教育制度、教育改革の動向、教師の社会的地位、大学への進学率と卒業率、大学の卒業生に対する評価の方法、卒業生の就職率、

大学の授業における講義とゼミナールの割合などについて質問がなされた。

質問：ロシア連邦になって以降の教育改革について調査を行っている。文献でも拝見しているが、歴史的な位置づけについて、またヨーロッパを展望しながら、同時にアジアにも関心を示してきた同大学の特徴について教えてほしい。

ロシアの教育システムの発展においては、改革と反改革の歴史があった。1804年にカザン大学が開学した際に、当時の教育改革はその最終段階にあった。その時、教育システムの形成が行われた。深刻な改革が行われると思想としても、構造としても大きな変化が加わると、時間が経てば、そのあとに大きな反動があり、だいたい元に戻り、そのあと少し前進する、という状況を繰り返してきている（とヴァレーエヴァ先生は指摘する）。1804年改革、デカブリストの乱に影響を受けたり、またその後の70年代には反動的なリアクションが起きた、ということもあった。1937年の弾圧の時代もまた反動的な時代であった。このように見てくると、波のようなアップダウンのリズムを繰り返してきているように思われる。

1804年のロシアの教育改革の影響で、ロシアは6つの教育区に分けられて、その中心に大学が置かれた。カザン大学のカバーしたテリトリーは広く、アジアの部分もヨーロッパの部分も含まれていた。そのためカザン大学には西文化と東文化の統合が求められた。

質問：当時は東洋学部が中心だったのか。

カザン大学には、東洋学の研究者を育てるだけではなく、研究所としての役割をもあった。カザン大学は大きな特徴を持っており、数学、化学など、様々な学派が存在し発展してきた。そのため教育施設に留まらず、研究所を兼ねており、範囲としてはシベリアまで含まれていた。そのため学問の発展に際して、そうした学派の伸長とともにこの大学が果たした役割が大きいと思われる。第二次世界大戦のときは、モスクワ、サンクトペテルブルクから有能な学者が避難して研究を行っていたため、当時のカザン大学は科学研究センターとしての力をその時につけてきていた。それに伴ってキャパシティも広がり、更に多くの学生たちを引きつけてきた。

最近では、2年前に連邦大学というステータスが与えられ、さらに大きな役割を果たすようになってきた。ヴォルガ周辺、またウラル周辺から秀才を集めて教育し、また全体に対してその成果を還元していかなければならない、という使命を担っている。

またもう一つの大きな特徴として、現在我々は、ヨーロッパや極東等、様々な国と関係を持っており、オープンな関係を築いている。そこから自身の存在をヨーロッパに示し、またヨーロッパのシステムに統合するための試みを行っているところである。それはもちろんボローニャ・プロセスとも関連している。ただし、アンドレーエフ先生もアカデミーの会員として関わってきているが、ロシアの教育に対してはいい面と悪い面がある。つまり世界的な制度に合わせられる、という利点があるものの、教育の二段階制度は、発展を妨げる側面があるのである。

（シャイヘリスラモフ先生によれば、）現在ロシアで改革の結果として辛い状況に置かれているのが、学校の先生と校長先生方である。まず教育の中身が大きく変わり、共産党が無くなり、共産主義的な思想が無くなり、一方でそれに代わるものもでてきていない。それと同時に教育の情報化のプロセスも進行し、専門分野別の教育も整備されてきており、専門学校などもでて

きている。ロシア全土で見ても、統一国家試験が導入されるようになってきている。このために、校長や教師らは自分自身への教育を続けたいといけなく、という状況になってきている。教師に対する給料も良くないなか、先生方も高齢化してきている。ロシアでは5年に1度資格向上の再教育が行われている。それは2、3週間である。校長先生にも5年に1度そのような再教育が与えられるようになってきている。それはその後のキャリアに大きな影響を与えるようになってきている。

質問：連邦大学としての改革の動向はどうか。

ロシアは現在高等教育の改革が行われており、質を高めるための取り組みが行われている。一方で質の低い大学の数を減らし排除していく、という取り組みが進んでいる。その代わりに大学数が少なくなることで、予算がリーダーシップを発揮する優秀な大学に集中するようになってきている。

現在ロシアには、国立の大学として2つの大学があり、それはモスクワとサンクトペテルブルクの国立大学である。また9つの連邦大学、また30の国立研究大学、となっている。これらの大学に普通の大学と比較して何倍も高い予算が優先的に配分されている。こうした大学には大統領から課題が与えられている。つまり、20年のうちに5つの大学が世界のトップ100に入るべきである、とされている。そうした大学においてはまず近代的な設備を整え、その後世界中の有名な学者を招待する可能性も出てくる。こうした大学は発展したインフラを持つことになる。

例えばカザン大学も日本の大学等と協力関係にある。物理学の先生はリケン（理研）などでも仕事をおこなっている。日本や他の国からも研究者が行き来するようになってきている。カザンはロシアの中でも、最も発展している5つのエリアの一つである。そのため、カザン大学としてもそのような方面に対する要求も満たすようになってきている。一方で、小さい教育施設を統合していった。資金の面からいうと他の西側の海外の大学とは比較できないかもしれないが、ロシアの中では教育の分野において最も著しい発展を遂げている。

質問：高等教育の2段階のシステムはなぜブレーキになるのか。

（ポポフ先生の指摘によれば、）ボローニャ・プロセスに従って、現在ロシアでは2段階のシステムに移行してきており、つまりバカラブリアートとマギストラトゥーラという構成になってきている。それは前のシステムとは異なっており、以前はスペツィアリストと大学院生のアスペラントの2段階制度になっていた。現在3年、4年の間にちゃんとした専門家が育てられない、ということがわかってきている。我々もバカラブリアートの卒業生は実験助手のラボラント程度のレベルでしかなく、それほどのラボラントがロシアに必要なのだろうか、ということをお話半分にはアカデミーでも話している。

そうした点について解決方法もある。それはバカラブリアートの資格を得てから、遠隔教育などを用いながら自身のレベルを上げようとするを通じたことである。ただ、大学院に入るためには、2段階目のマギストラトゥーラを取らなければならない。その資格を得ていなければ、大学院生になれない、という問題がある。

< 2012年10月2日 >

④ タタール・ギムナジア No.12 (女子校)

Гимназия №12 с татарским языком обучения имени Ф.Г. Аитовой

(09:50 – 13:30)

1. 対応者：Темиркаева Ильхамия Абдулхаевна 校長先生
Богавеева Райхана Аминовна, Главный специалист Управления образования г.Казани
2. 住 所：ул. Декабристов дом 89-а
3. 連絡先：+7-843-622-25-43
tg-12@mail.ru



近代的な設備を備えた学校であり、また小規模ながら、真面目な学生と情熱的な先生方が印象的な学校であった。最初に校長先生に対してインタビューをした後、3時間余りかけて学校内を見学し、演劇、調理実習、化学実験、歩き方のレッスン、ダンスなどを含む授業を紹介して頂いた。

こちらは1993年に女子のみの学校として設立された。それまで旧市街にあったのが、去年こちらの街に引っ越してきた。現在は270人の女子生徒が学んでいる。現代的な「ジェンダー教育」を目指しており、またちゃんとした「主婦」、「レディ」を育成することを目指した教育を行っている。

このギムナジアはこれまでも優秀な成績をおさめており、様々なオリンピックでも成果を残している。卒業後の進路も生徒たちは容易に見つけている。また子どもたちは3つの言語、つまりロシア語、タタール語、英語を学んでいる。卒業生のなかには、合気道のヨーロッパ・チャンピオンもおり、彼女は今年からこちらの子どもたちに合気道を教えている。9人が高い教育資格を持つ先生がおり、教師数は全校としては19人である。

質問：こちらで言う「ジェンダー教育」とは？

「卒業生 (Выпускница)」という名前のプログラムがあり、1年生からそれに沿って教育が行われる。普通の教育の他に音楽教育を受けたり、ファッション・シアターで洋服や歩き方を学

ぶ、といったことを行っている。またクライという民族楽器を演奏し、ドンドラを演奏する子どもいる。美しい言葉使いや、ちゃんとした料理の作り方なども教えている。刺繍などもそのプログラムに含まれている。

こうした内容は、授業として行われているものもあり、料理や刺繍などもそうである。他のものは午後の時間などを使って、追加と

して行っている。健康も重視しているため、スポーツ活動も充実している。そうした活動のために様々な設備が整えられており、ダンス、テニス、水泳などの施設がある。



質問：新しい建物に引っ越してきた理由は？

旧市街から新しい建物に引っ越して来たのは、以前の場所は古い場所で、歴史的な建物として政府に保護されている場所だったためである。生徒たちも皆こちらに移って来ており、毎日近くの川を渡って政府からもらったバスを使って通学してきている。

一つのクラスには平均 18 – 20 人が在籍しているが、1 年生は 3 クラスであり、また今年の卒業生クラスは 13 人のみである。全体としては、現在 240 人のキャパシティに 270 人を収容している。こちらの学校は歯医者など医療的な施設も整えており人気がある。

質問：女性だけ、という学校は余り多くないと思う。ソヴィエトでまたロシアでも女性だけ、という学校は少ないと思うが、どのようなコンセプトに基づいているのか。



両親には学校選択の権利があるので、様々な学校が存在するべきだと思うし、男子校のギムナジアも存在する。またロシア全土としても、サマーラなどをはじめとして、女子校が存在している。こちらの学校はサマーラの学校とも連携を行っている。最初このような女子校のアイデアを出したのは、タタルスタンの町の婦人会

であった。そちらから女性だけの学校を作るべきだ、というような話があった。

今年我々の学校には、ファティファ・アイトヴァ氏の名前がつけられた。彼女は 1916 年にこちらで最初の女子学校を作った人物である。彼女は婚約者に対して、このような女子のための学校を作るなら結婚します、と言って結婚をした。その後婚約相手は手元にあった全ての財産を投じて学校を作った。彼女については学校の博物館においても紹介されている。こちらの学校は、アイトヴァ氏の作った学校をモデルとして作られている。

女の子だけで退屈ではないか、と度々言われるが実際には退屈してはいない。男子校ギムナジアと合同でのダンスパーティなど様々なイベントを行っており、また家族にも男性がいたりするので、子どもたちは男性とも関係のある状態におかれている。

質問：卒業生はどのような進路に進んでいるのか。

こちらの学生は言語が得意なので、大多数はカザン市の外国語大学で勉強をしている。卒業生のうち3人の子どもは中国の大学で学んでいる。また医科大学や文化大学で学ぶ卒業生もいる。今年は一を除いて、全ての学生が進学した。3年前にはトルコのイスタンブールに留学をした生徒もいる。我々は卒業生についても、しっかりとその後の進路をフォローするようにしている。

質問：この子どもたちの両親はどのような人が多いのか。

ここではタタール人の子どもたちだけではなくて、アゼルバイジャン人も、ロシア人の女性もいる。最近ではベトナム人の子どもが入学から卒業までいた。議員が訪れた時その子は、タタール人よりも綺麗なタタール語で挨拶をしていた。こちらでは余り多くないが5、6%ロシア人の子どもたちもいる。タタール語やタタール文化に興味があって、勉強したいという意思さえあれば受け入れるようにしている。こちらの学校は、トゥファム・ミンヌリンという有名な演劇作家のおかげで作られたが、その人物は今年亡くなられた。

(写真を見て) タタルスタンの大統領が開校の際に本校を訪問した。私自身(校長先生)もロシアの女性実業家というコンクールで優勝している。こちらの他の先生方も様々なコンクールに参加されている。またこの学校の卒業生も先生として学校に戻り、現在働いている。

質問：先生を採用する際の選考基準は？

私自身別の学校で副校長を務めていた際は、同じような選考をしていた。まず第一に教育の面でしっかりとした実績があること、そして女の子の心理がわかる人物を選んでいる。このようにあらゆる面で心理学的な側面に配慮をしている。今年入った一人の英語の先生はこの卒業生で、この基準や学校のことがよくわかっている人物であった。また化学の先生も新しく入ったが、その人は「共和国の若い先生」というコンクールで優勝した人物であった。体育、プールの授業は男性の先生がやっている。給料の面でもこちらはわりと優遇されている。グラントが与えられており、若い先生でも毎月7500ルーブルを給料に追加しているので、それほど悪くはない。

(校長先生自身は、カザン生まれ、タタール語のギムナジアで学び、2年生から英語を学び、カザン教育大学外国語学部に学び、学校で英語とドイツ語を教えていた。一時的に区役所の教育副部長を務め、そこでは民族教育を担当していた。市の教育局も校長先生が教育の面でも、道徳の面でもすぐれた実績を出している、ということがわかっていたので、タタール語の専門学校が出来たときには校長先生として推薦を行った。それ以降、1996年にこちらが作られて以降、16年間校長をつとめている。娘さんもお二人いて、一人ははここで学ばれた。上の娘さんは30歳で文学の博士である。二人目の娘さんは先生として働かされている。お孫さんも二人おられる。)

⑤「ムハンマディア」マドラサ

Высшее медресе «Мухаммадия»

(14:30 – 16:00)

1. 対応者：Габдуллин Зульфат Габдуманафович 副校長 (Проректор по учебно-воспитательной части)
2. 住 所：420021, г. Казань, ул. Г. Тукая, дом 34.
3. 連絡先：Tel: (8432)93-17-06
E-mail: zfs34@mail.ru
4. 入手資料：マドラサの歴史について書かれた本「Медресе «Муханмадия»：преимственность традиций」

ガブドゥリン氏は副校長として、マドラサの責任を担っている。インタビューをした教師控室には、物理やタタール語の教科書も置かれていた。10 – 11年生のもので、こちらでそういった教育が行われているためである、とのことであった。学校の歴史についてまとめた本を頂きながら、創立した方やその家族の写真を見ながら説明して頂いた。



こちら教育施設の特徴は、11年生、あるいは9年生を卒業した後に入学できる、ということである。そのため、夜間学校の先生がこちらに来て、授業をするといったことも行われている。ここの教育システムには2種類あり、一つは9年生を卒業した生徒、もう一つは11年生を卒業した生徒のためのコースである。統一試験を終えた後に入学できるので、子どもたちも自身のためにいろいろな進路選択を考えた上で入って来ている。9年生を終えた後の子どもたちはまだ純粹で、計算高く考えるのではなく、精神が求めるものに従ってこちらに入学してくるので、こちらとしてもそういった人材を必要としており、早めに確保したいと考えている。

マドラサに辿り着くためにも道路工事などで足元が悪い中を通り苦労して来られたと思うが、それに例えて、苦労を乗り越えて学習をするのだ、ということ子どもたちに教えている。ヴォルガ周辺地域においてムハンマディアというこちらの施設は、一番歴史が深く、1882年設立でムハンマド・ジャンガリエフという商人が創立したものである。この人の父親もロシア全土において権威があり、とても尊敬されていた人物であった。

こちらの建物は150年の歴史がある。総合施設であり、モスク、家、それに隣接してマドラサが備えられていた。当時はマドラサは新しい教育技法の場所とされていた。こちらは宗教的な教育とともに、それ以外の地理やロシア語などの教科も教えていたためである。当時はどのマドラサも宗教的な内容のみを教えていたが、ここはそうではなかった。そのため、ここで教育を与えられた人たちは素晴らしい教養の基礎を築き、宗教と関係のないキャリアを作り、タタール人作曲家のタイダーシェフ、彫刻家バークルマンチなど、演劇家や作曲家として世に出ていった。

当時は初等教育から高等教育までの一貫した教育を行っていた。1917年まで存在していたが、その後革命があり、ソヴィエト時代はこの建物には技術専門学校が入るなどしていた。またモスクは寄宿舎として使われていた。その他にも出版社など、関係のない機関が入っていた。1993年にマドラサにとっての新しい歴史がはじまり、教育が再開された。(資料として頂いた本の35ページの写真には2012年7月のテロで亡くなったイスラーム指導者ヤクポフ氏の写真が掲載されていた。以前はレーニンのイニシアティブで宗教指導者たちが殺害され、またマドラサの再開後もレーニン記念文化館の付近でヤクポフ氏の暗殺が行われたことは、不思議なことである、との副校長のお話であった。)

昔の教育技法を維持しているか、ということについてよく聞かれるのであるが、現在ではバランスが変わってきている。昔は宗教的な教育を与える機関がどこにでもあり、一般教育を与える機関が以前は足りなかった。現在一般教育はどこでも与えることができるが、宗教的な教育を与えるための機関が無いと、イノベーションが必要となっている。当時はジャンプ台として一般教育が必要であったが、今はまた状況が異なる。

この建物は95年に裁判の判決に伴って返された。クリーズという出版社は判決が出ても中々出て行かなかったため、ピケなどが行われたりしていた。そして98年からこの建物でマドラサの活動が再開された。

当時は隣の自由市場のゴミがこちらに捨てられており、トラック50台くらいのごみを運び出さなければならなかった。また窓ガラスなども、何もなかった。周知の通り、ロシアは今宗教と政治を切り離している。こちらは1コペイカも予算をもらっていないので、建物のメンテナンスを含めて、教育費から稼がないといけない。500万ルーブルがマドラサ全体の予算であり、これはすごく安い、それを稼ぐことは大変である。イスラーム大学は国から予算もでていて、1700万ルーブルの予算である。



だからこちらは国立施設ではなく、人々(ナロード)のための施設である。人々にそういった教育への要求があればこそ、こちらでなんとかサポートをしているのである。あとは神様に任せている、としか言えない(笑)。

今こちらでは1000人以上が教育を受けているが、これはものすごい数である。他の施設はお金があっても活動は小さいが、こちらはお金がなくても、活動が大きい。夜間、通信教育のコースなど、3つの学習の体制が取られている。昼の部には、9年生卒も11年生卒も来るし、男女ともに受け入れている。他の教育施設は、中卒の子どもたちを引き受けない。10年生、11年生の教科など他にいろいろ教えないといけないので、面倒である、とされるためである。ここでは宗教的な内容と一般的な教育が行われている。宗教的な資格、イマーム・ハティプ(宗務官)という指導者の資格、また一般的な資格としてはアラビア語の教師の資格を得ることができ、卒業後通訳なども行うことができる。これは大変に重要なことである。また全国のオリンピックでも、アラビア語の分野でこの学生が活躍している。

教師については、昔はアラビアから先生を呼んでいた。人材不足であったためである。現在は外国からの先生はほとんどいない。

(頂いた資料には、教科の一覧表も載せられていた) マドラサでの教育科目は 47 あり、そのうち 21 は一般的な科目はであり、他は宗教科目である。哲学や心理学など、様々な教科が教えられている。

質問：マドラサの名称に「高等 (высшее)」とついているのは何故か？

これは革命前の機関の名前も現在維持しているためである。法律に基づけば、カザン市のヴァイシェとされている。ここは 5 年間の学習機関である。あらゆる基準において大学のレベルに相当しているが、それは昼の部だけである。通信教育、夜間教育は、また異なり、中等教育に位置付けられている。

夜間では授業数が少ないので、時間数としても大学に相当していないし、通ってくる人の社会的なバラエティも幅広く、年金生活者もいれば、アラビア語を学びに来る人たちもクルアーンを学びに来る人たちもいる。それに夜間の人たちは、日中働いてたり、土日だけしかこちらに通えない人もいれば、根本的にどこか違うところで教育を受けながら、ここで特殊な科目を学ぶ、というようなことも行っている人もいる。こうした人々全てを対象とできるような教育の基準は存在しないのである。自分の宗教について知りたい、という人もいる。こちらで学ぶ目的は卒業証明書を得るためではなく、知りたいこと、知識のために人々は来ているのである。

これはとても重要なファクターである。本やテレビからの情報は、解釈の面で間違いもあるが、ここで学べば先生から直接、何世代も積み重ねた知識をそのまま知ることができるのである。

質問：「本物のタタールのマドラサ」と度々こちらの施設は資料で紹介されているが、その「本物の」とは何を意味するのか？

一番大事なのは、「人々 (ナロード) の」要求を満たすためにマドラサが造られた、ということである。国家によって造られ、施設を与えられたわけではない。2 点目として、ここでは教育はタタール語で行われている。他の国などでは、そうしたことは不可能である。タタール語の学校を卒業していなくても、受け入れている。つまり、ここに来る人たちは、心が求めることに従って、こちらに入ってくるのである。

質問：運営資金は？

寄付金でまかなっている。寄付は個人的なものであり、その中に会社などはない。それでもこちらでは無償で学生たちに一日 3 回食事を与えており、このことに誰もが驚いている。食事はこちらでは一番高いためである。

近所に農場があるが、例えばそちらがトラック 1 台のじゃがいもを寄付してくれる。それで 1 年間の食事をまかっているのである。一方、祝祭の際には羊を持って来てくれる人がいるので、それをストックして、必要とする人々に分け与えるようにしている。人々は自身のキャパシティに応じて、寄付をしている。こちらでは運営に際して何の秘密もない。人々が寄付したくなるためには、まずオープンでなければならないと考えており、完全に情報を公開するようにしている。

こちらに来る人々は、タタール語が完璧と言える人ばかりではないので、こちらではまずタタール語の授業を行っている。授業はタタール語で行われているためである。ただし、タター

ル的なイスラームを教えている、というような訳では決してない。イスラームは一つだけである。タタールの、とかアラビアの、といったことは、言わないのである。伝統的な宗派はある。ロシアのこの辺りの地域はハナフィー学派である。これは昔から続いている伝統である。我々がこのハナフィー学派を選んだわけではなく、歴史的に続いてきたものなのである。

質問：その他の宗教との共存は？

こちらの国民の情熱、思想などには、このような共存をしていくような調和的な宗教こそが当てはまる、と考えられる。

質問：女性の生徒は卒業後、アラビア語の先生になるのか。

多くの卒業生がいるが、幼稚園、保育園の先生などになることが多い。こちらの70%は同時に他の大学で教育を受けており、宗教的な教育のみを受けているわけではない。彼らは純粋に自身のために学んでいる。何か義務付けられているわけではないので、将来の仕事に関してはこの教育内容に関係がある人も、そうでない人もいるのである。

質問：移民のムスリム、移民の子どもたちにタタール語を教えるような教育をしているのか。

ウズベク、カザフ語などは似ているので、お互いに理解している。しかしペルシャ語系のタジクが問題である。タジキスタンでは80年代、90年代、大きな争いがあったので、当時の人々は基本的に学校に通うことができず、一番悪い時であった。90年代に生まれた子どもたちは、なんとか教育を受けているが、学校に通ったことの無い、まったく教育をされていない子どもたちは、こちらでも本当に扱づらい。そういった人が今もいる。ソヴィエト時代にここでは宗教的な教育ができなかったので、逆にウズベキスタンのブハラにこちらから人々が派遣されたりしていた。特に今はイスラームの面では、ウズベキスタンは難しく、宗教的な教育のレベルは低い。そのため人々はこちらに宗教的な教育を受けるためにやって来ている。ウズベキスタンではお祈りを一日5回すると政府に訴えられたり、女の子が18歳までに何か被り物をしていると、訴えられたりする、と聞いている。そちらは今では政治的な問題がある。

質問：イスラームには色々な地方の伝統があるが、こちらではその習慣を皆で合わせたりしているのか。

こちらでは、習慣に関しては問題はない。中央アジアの人々など、彼らも伝統的なハナフィー学派であるためである。ダゲスタンのシャーフィイー派の人だけは習慣の面で異なる。そのためモスクワでは苦労している。中国にもハナフィー学派があるが、この周辺の他の地域はハナフィー学派である。だからここでは問題はない。カザン市では56のモスクがある。色んな国からムスリムが集まっているので、何語で礼拝をするか、という問題はあった。ロシア人などもいた。部分的にトルコ語、アラビア語で行う、ということを検討した時期もあった。しかし最終的に全部タタール語で行っている。現地の言葉でやる、という意味でこれは正しいと思われる。

カザン大学の創立者の一人が言っていたように、自身の過去を知らない人間には未来がない。自分の言葉も同様である。自分の国の言葉についても知るべきである。言葉が消えてしまうと、

宗教も消えてしまう、と考える。ただしこちらの最近の傾向として、誰にでも分かりやすいように、教科書などもロシア語で出るようになってきている。

こちらでは、9年生卒業後来る子どもたちの10年生、11年生の授業のために夜間学校から先生を呼んで、こちらで授業を受けさせている。先生をそちらから呼んだ方が、周囲から悪い影響を受けないので、こちらとしても安心である。

1000人余りの学生数について、ここでも女性の数が多い。ロシアの他の地方でも、女性と男性が1対10の所もある。教師については昼が25人、夜間15人、全部合わせて40人の先生である。一部の先生は昼も夜も授業をしている。我々は高い給料を払えないので、これは給料を増やすためである。

例えば私（副校長）自身は、週に32時間教えている。これはもちろん多いが、なんとか生活するために仕方が無いことである。私自身も基本的には8時間の労働時間であるが、実際にはそれ以上に働いている。こちらは皆先生方はとても仕事好きの人々で、大変に頑張ってくれている。建物や教室ではなく、どの科目についても大事なものは先生であり、いい先生が必要とされるのである。

女性の教師数は少ない。一般の夜間学校から授業に来ていた先生がいるため、女性の先生も見かけたかもしれないが、基本的にこちらでは女性の先生は少ない。ただし女子生徒への教育があるため、女性の教員もいる。世俗的な教科を教えるための先生が夜間学校からいらしているのである。昼は8人の先生が来ており、3人の先生は夜間で働いている。

男女の学生数に関して、1年、2年は男女別である。彼らもよその世界から入って来ているが、こちらの（イスラーム的な）習慣に慣れるまでには時間がかかっている。モラル的、道徳的な（男女のあり方の）ルールを守るべきである、と考えている。こちらのマドラサでは革命前はもちろん女性はいなかったが、93年に再開してからは女性を受け入れている。再開した時、女性の教育に対する要求も高かったためである。

一般の教育のシステムの中では専門性を得るために、また仕事を得るために教育を受けているが、ここでは精神的な要求を満たすために教育が行われているのである。あとからそれを仕事とする場合もあるかもしれないが、最初の段階としては、そうした精神性の要求を満たす、ということを目ざしている。一般の教育機関の卒業生であっても、自分の専門で3割、4割が仕事を得ていて、それ以外は他の仕事をしている。時間を浪費する必要はないだろう。

女性に関して言えば、ムスリムの女性の人生において、その使命は素晴らしい結婚をして、ちゃんとした子育てをすることであり、家族を守ったりすることである。こちらで教育を受けることによって、キャリアもできるし、仕事への道も開けるが、それが人間の幸せに直結しているわけではない。私自身の考えではあるが、女の人の幸せのためにはそんなに教育は必要ではないように感じる。まずは女性のためには、いい結婚相手こそが必要であると、考えている。いい結婚相手を見つけるためには、いい価値観こそが必要であり、こちらではそういったいい価値観を与える教育を行っている。

質問：ここでは入学試験はどのようにしているのか。

こちらの入学試験に関しては、まず言語の試験が必要とされる。ロシア語であれば、統一試

験のロシア語の点数を用いるが、またここでもう一度試験をするようにしている。なぜ言語を重視するかと言えば、こちらではアラビア語を学習するためである。なぜアラビア語かと言えば、それはクルアーンの言葉であるからである。他国の言葉を覚えるためには、まず自分の国の言葉を教えておかないといけない。こちらの人は皆ロシア語はわかっているのだけれども、名詞や動詞など、文法的に区別できないこともあるのである。

言語の試験の他に、歴史の試験が必要となっている。歴史の分かる人たちは、幅広い範囲で世界を捉えることができる。歴史は時代の成り行きを知るためには重要である。統一試験の点数を使うのだが、学校での試験が低ければ、再度試験をこちらで受けることができる。細かい年数や日付が重要なわけではなく、時代の大きな流れ、歴史的な考え方などを知っていることが重要なのである。3番目の試験は、イスラームの基礎知識である。ゼロ段階からこちらでは教えることはできないので、多少の準備を必要としている。

質問：先生になるための資格はどのようになっているのか。

こちらのマドラサでは、全部秘密を打ち明けたくはないのだが、マドラサに結びついている人々が先生を務めている。こちらで教育を受けて、アラビア諸国に行って、教育を受けて帰ってきた人、他の教育機関で教育を受けて、こちらで宗教的な教育を受けた人たちがおり、中心的なのはそのような人たちである。

ここの施設と関係していない人もいるけど、そうした人たちが慣れるまでには本当に時間がかかった。こちらは特殊な施設であり、独特な伝統や慣習、道徳などがあり、それを覚えるために時間がかかった。2週間給料が遅れていたとしても、例えばこちらの先生は怒らない。こちらの事情がよくわかっているからである。

質問：他の教育施設と比べると給料はどうか？

他の施設には興味がないので、他と比べてということも分からない。人のポケットの金を数えるな、というイスラームの教えもある。給料の出し方は二つあり、授業数で決める方式と、1ヶ月でやる方式とがある。1ヶ月ごとの方が安定しており、授業数による計算は損をしてしまう。例えば、副校長としての給料は13,000ルーブルであり、これは私には十分な金額である。一般の学校の先生は8000ルーブルぐらいをもらっているが、これが高いか安いかわかることはあまり評価したくない、と感じている。

質問：ここは資金調達は安定していないが、どの程度ボランティアでやっているのか。

イスラーム大学は国の予算でやっているのだから、先生は安定した生活を求めて行ってしまったが、生徒は逆にこちらの方に戻って来ている、といった現象が起きている。子どもたちにとっては、こちらの方が馴染みがあって慣れているから、ということである。

質問：学生が卒業後も更に勉強したいと思った際はどのようにしているのか。

卒業後に更にイスラームについて学ぶための機関はこちらでは存在しない。エジプト、マレーシアに行ったり、あるいは昔はシリアもあった。シリアにはハナフィー学派の学校が沢山あ

ただ、今の事情を考えるとなかなかそれは難しくなっている。

9年生卒も11年生卒も5年間の教育をここではやっているのだが、9年生卒の子どもたちに関しては午後も勉強をここで続けている。

我々はライセンスもあるし、教育施設として登録されているし、なんでも国家のコントロールを受けている。教科書の作成なども国家の基準に沿っている。照明の照度などについても検査が来たりする。ここでは、教育、管理、経営を全てやらないといけない。私自身もなんでもできるのであり、掃除などもできるし、授業もできる。

質問：マドラサの数はカザンでは幾つあるのか？

マドラサの数はカザン市で4つであり、またカザンのイスラーム大学もある。

⑥カザン連邦大学付属東洋学国際関係研究所

Институт востоковедения и международных отношений Казанского (Приволжского) федерального университета
(16:30 – 18:00)

1. 対応者：Линар Наильевич Латыпов, Директор Института востоковедения и международных отношений
2. 住 所：Ул. Пушкина, д.1/55
3. 連絡先：(843) 292-07-78 east.inst@ksu.ru
4. 入手資料：大学紹介のパンフレット
日本語コースの4年制、5年制の授業カリキュラム。



こちらの大学は、東洋の諸国について総合的に研究をしている機関になり、極東講座もあり、その講座長をウスマノヴァ先生が務めている。イラン、アラビア諸国、中国や韓国についてもこちらで研究を行っている。

こちらは日本の理化学研究所と関係があり、3つの新しい実験室が開設されている。私（所長）自身カザン大学の副学長を同時に務めており、さらに今後近代的ないい施設を買いたい、と考えている。理化学研究所の所員はこちらに来て、その施設を使いながら実験を行っている。

カザン大学には4万8千以上の学生と、3225人の博士課程在籍者があり、スケールの大き

な大学である。

中国とは活発に関係しているけれども、日本とはそれほどではない状態が続いている。中国語は専門の部屋が一つだったが、現在その数は増えている。それは国からの予算が出ているためである。しかし残念ながら、日本の政府はそのようにはなかなかしていないようである。ただ、カザンには日本の会社があり、人材は必要とされている。2年前には日本語講座はなかった。東洋学の研究所として200年の歴史はあったのではあるが。そのため、日本の大学との関係の強化を期待している。

日本語を学ぶ学生の間では、現在はまだバカラブリアートと5年制教育が並存している。現在の3年生までは、スペツァリスト養成課程であり、5年制で学んでいるが、こうした点は学部によって異なっている。1、2年生はバカラブリアートとして入学をしている。日本語学習の学生に対して、マギストラトゥーラはまだ開設されていない。現在学部生の2、3、4、5年生が日本語を勉強しており、教師養成課程などで学んでいる。もっと日本語を勉強するチャンスがあれば、というように考えている。タタール教育大学とカザン国立大学は2年前に合併をしたばかりであり、以前は教育大学の第2外国語として日本語のコースが用意されていた。現在では合併に伴い、教育学部と言語学部と国際関係学部とが一つの学部統合された。現在の日本語のコースでは、こうしたもともと3つの学部にも所属していた学生が学んでおり、彼らは3つの異なるカリキュラムで学んでいる。

< 2012年10月3日 >

⑦ロシア・ギムナジア No.37

Средняя общеобразовательная гимназия №37 с этнокультурным русским компонентом
(10:00 – 12:30)

1. 対応者：Гаврилина Мария Александровна 校長先生
2. 住 所：Ул. Копылова, 13
3. 連絡先：+7-843- 571-07-05
+7-843-571-17-13
G37.kzn@tatar.ru
4. 入手資料：教育計画 (учебный план)





今年は記念すべき創立60周年である。1952年に開校しており、建物そのものも古く、部屋も広くて、天井も高い。2004年からこちらはギムナジアの資格を与えられて、ロシアの民族コンポーネントによる教育を行っている。こちらはそのステータスを受けるために、長年準備をしてきた。

現在785人の生徒が在籍しており、249人がタタール人の子どもであり、その他はロシア人、マリ人、チュバシ人などであり、多民族的な学校である。先生は61人であり、友好的な雰囲気です。学校運営をおこなっている。タタール語の先生9人、ロシア語、ロシア文学の先生が9人、6人が英語の先生である。ギムナジアのステータスを与えられていることにより、様々な特権を与えられている。ロシア語、タタール語、英語の授業の際には、クラスを二つのグループに分けて行っている。

毎年8月には、その年1年の教育プランを作成して採択するが、それに加えて両親の意見も取り入れたうえで、ロシア語が週に5時間、タタール語が週に4時間、英語が週に3時間という構成をとっている。ギムナジアとしての資格を得ているからこそ、ロシア語の時間を1時間増やすこともこうして可能であった。

こちらでは2004年から8年間に渡って民族性を重視してきているが、ただしそれはロシアの文化やロシア語だけではなくて、一方でタタール語、タタール文化なども重視しているし、英語の授業も重視している。また皆の協力のおかげで、民族博物館を校内に開設することができた。近くにはタタール語のギムナジアもありコレッジもあるので、この地域の両親には様々な選択肢が与えられている。ここの子供達はもちろんロシア語は完璧であり、またタタール語も英語も完璧である。そのため来年2013年にカザンでユニバーシアードが開催されるにあたって、それに向けてボランティアとして貢献できるように、英語の勉強にも集中的に取り組んでいる。

またスポーツの面からいえば、隣にトリウンフというスケート場、プールなどの施設もあり、子どもたちは積極的にそちらも使っている。サークルも沢山あり、カラテや英語などを行っている。こちらの近くには、子ども宮殿もあり、そちらを子どもたちは利用することができ、また教育センターがあり、小学校から高校まで、子どもたちはそちらの施設を利用することができる。

こちらの学校にも歴史があるので、今年は修復をやっているところである。子どもたちは学校がとても好きで、ここにあるものを丁寧に大事に使っている。展示がなされているように、自分たちが生活している文化環境というテーマで、テクノロジーの授業で子どもたちは様々な作品を作っている。こうした活動は女子だけではなく、男子もそのような作品を作っており、オリンピックに参加するというも行っている。両親もサークル活動に協力的であり、両親も一緒に参加するようなこともある。校内に展示してある数々の作品も、タタールの文化を象徴している。

一方で我々はそれほど、タタールのとか、ロシアのとかといったように分けていない。「我々のロシア」という特別なプログラムが採択されており、その主な目的は自分たちの言葉を忘れない、ということである。

新学期が始まれば子どもたちは宿題を与えられるわけであるが、例えば、今年の宿題のテー

マは 1812 年のナポレオン戦争で、それについて新しいデータなどを集めて勉強会を行ったり、発表会を行っている。その中のいいものについては、更にスケールの大きいフォーラムで発表するような機会が設けられる。



12 年間にわたって、こちらではウシンスキー記念の研究会を地方レベルで行っており、この学校をはじめとして町全体の学校が参加している。英語、タタール語など、8つのセクションに分けられている。37 番学校の学校新聞なども発表しており、まだスケールは大きくはないが、とても人気がある。タタール語、ロシア語などの授業でも先生方は必ず民族的なコンポーネントを取り入れている。また道徳的な教育が重視されており、月曜日には「感謝の日」という大きな祭りも行われた。町のお年寄りを呼んで、交流をしながらコンサートが行われた。高齢者への敬意というのは、こちらの伝統である。学校の子どもたちが地域の老人の家を訪れて、話をしたりニーズを聞いたり、ということも行っている。

こちらの学校が誇りとする博物館を見て頂き、音楽のコンサートをも見て頂きたいと思う。そのあとロシア語の授業も見て頂きたいものである。

(言語学専門の副校長先生の指摘によれば、) タタール人の先生でロシア語の先生ということもこちらでは珍しくない。お互いに文化は混ざってしまっているためである。こちらでは文化はお互いに対抗せず、調和的に共存しているのである。タタルスタン全体として、ロシア語やタタール語が飛び交って聞こえるという状況がある。

民族間の結婚も多く、例えばインタビューに同席した学校内のサークル活動の総責任者である先生のお母さんもタタール人、お父さんもシベリア育ちのロシア人であり、両方の言語が家の中で飛び交っていた。違う民族性であっても、こちらではみんな仲良く共存しているのである。

質問：民族共存、ということでこちらの学校を選び訪問させて頂いた。民族共存、あるいは、染み込んでいる、と言った時に、これは混ざり合って新しいものが生まれているということか。

単独で維持されているのではなくて、お互いに染み込みながら、新しい生活スタイルが生まれてきている。結果として子どもたちの間では、心の豊かさとか、高齢者への尊敬、人間性、そうしたものが生まれてきている。全ての文化はお互いに何かの穴を埋めている。また例えば、色々な宗教などから、いいものをもって、それをユニットとしていっているのである。

カザン市の 4 つの行政区において、それぞれの場所にこちらの学校のような学校がある。2004 年にこのような学校を目指して、教育省は特別なプランを作成した。

(教育委員会の方によれば、) 文化同士はお互いに染み込んでおり、また同時にこちらのような学校の目的は、ロシアの伝統をもっと深く教える、ということである。ここに来る子どもたちもロシアの文化を深く知ることを望んで、この学校を選択して来ているのである。博物館の活動などでも、まずロシアの文化をメインとして維持しながら、広い範囲で、出来るだけ深く教えるべきであるのである。そのため下の入口で歓迎をしてくれた子どもたちは、ロシアのス



タイルでパンで歓迎したのであるが、別のタタールの学校では、タタールの帽子をかぶり、パンではなく（砂糖菓子の）チャクチャクで歓迎を受けていたであろう。

新しいプログラムに従ってこちらの学校は一つの枠内で、音楽などの授業で民族的なコンポーネントを教え、またロシアの伝統的な音楽や民謡などを教えるようになっている。また民芸品を作る、などといった活動も行われている。子どもたちが知るべき古典的な（基本的な）内容を犠牲にして授業を行うのではなく、それにプラスして民族的な内容を教える、というようなことを行っているのである。

質問：90年代のアンケートをみると、ロシア人の子どもたちはタタール語の勉強に時間を割きたくない、という子どもが出ているようであったが、現在はそういうことはないのだろうか。

（教育局の方によれば、）こういうような人は以前もいたし、今もいるし、将来もいるだろうけど、ただしその割合は今遥かに減ってきている。タタール語の知識は必須である、と考えている。最低限でも対話のできる程度の能力が必要である。この国に住む以上現地の文化に敬意を払う必要もある。昔ある場所では、タタール語しか通じなかった、ということが思い出される。そこではロシア語は一言も聞かえず、お店ではタタール語で話せば大丈夫であるが、ロシアで話すと無視されたりした。そのあと子どもたちにも色々話したが、やはりお互いの言葉を学びあうことは実に重要なことである。最近は英語も我々の日常生活に入り始めてきているので、英語も知るべきである、というような常識ができてつつある。将来は他の言語も学ぶかもしれない。現在すでに中国語を学ぶ学校も出始めている。

質問：英語教育は親の希望によって重視されているのか。

まず教育プランにしたがってそのように固定されてもいるが、それに加えて入学する際には両親などのリクエストも聞くようになっている。特に10年生、11年生は将来の専門性に向けて準備をする段階であるので、リクエストに従って科目を調整できるようになっている。

質問：外国人のゲストや外国との交流はあるのか。

学校としてはないが、子どもたちは自身で行ったり来たりしている。市のレベルでドイツなどへの交換も行っている。いくつかの学校を紹介したり、ということも行っている。例えば、近くには36番というドイツ語に特化した学校もある。その学校はユネスコに属している、ユネスコの学校としてのステータスを持っている。また他の地区の9番学校も昨日、ユネスコの資格を得たところである。7番のギムナジアでは、シンガポールやアメリカと交流を行っている。10年生の男の子や、英語の先生も英語のレベルを向上させるためにイギリスを訪れたりしている。

⑧スヴィヤシスク島基礎学校

МБОУ «Свияжская основная общеобразовательная школа Зеленодольского муниципального района РТ»

(14 : 40 – 16 : 00)

1. 対応者：Яковлев Дмитрий Владимирович 校長 (директор)
2. 住 所：422590, РТ, Зеленодольский район, с. Свияжск, ул. Рождественская площадь, д. 3
3. 連絡先：(84371) 3-89-19, sviyajsk@yandex.ru
4. 入手資料：教育計画 (учебный план)



プーチン大統領も今年8月末にこちらの学校を訪問している。学校は1911年に開校されており、元々は女子修道院として女性のための専門学校としての役割を長年果たしてきた。現在はユネスコの学校としても登録されており、ユネスコの復興プログラムのために部屋も設けられている。幼稚園も併設されている。生徒30人、幼稚園11人、総勢41人である。去年は27人しかいなかった。先生は11人。校長先生をいれて、12人である。

以前この学校は荒地のようになっていたが、シャイミーエフ大統領のイニシアティブでこちらの学校が復活した。幼稚園は主にこの島の子どもが通っており、学校の方には島以外からも子どもがきている。

学校が1911年に開校された当時は、最先端の学校とされていたが、その後は一度も建て直しや修復などはなされてこなかった。スヴィヤシスクは以前はもっと島の面積が広がったのだが、後から島の4分の3は沈んでしまった。子どもたちは当時橋を渡って来ていたので、その時は500人以上の子どもたちがいた。正面の川はスヴィヤーガという川であり、ヴォルガの支流である。一方でこの島はスターリンの時代には、収容所として使われていた、という悲しい歴史がある。去年は政治的弾圧に関する記念碑が作られた。

スターリン時代の弾圧の犠牲があまりにも多いので、歩いているときは、人の亡骸を踏みながら歩いている、とも言われたりもする。国内戦争の際も赤軍、白軍の占領を悲劇的に繰り返して来た場所であり、支配者が変わる度に敵側の指導者は射殺されるなどしてきた。ロシアの政治的な運命がここで決められてきた。伝わるところでは、トロツキーもここに来ていた、と言われている。

ここには沢山の教会があったが、ソヴィエト時代に破壊されて、遺跡が残るのみである。一



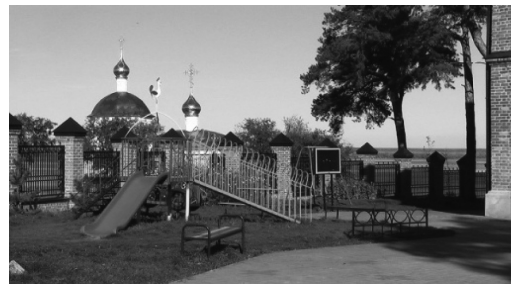
つの教会は、精神病院も兼ねていた。

質問：そのような悲劇的な運命は子どもたちに教えるのか？

週1回の割合でクラエベージェニエ（郷土科）の授業があるので、地元の歴史をそこで語るようになっている。タタルスタンの歴史とロシアの歴史と合わせて教えられるようになっている。テント生活をしながらの観光なども行われており、そうしたキャンプの交流会の時に、地元の歴史について語り合ったりしている。こちらでは、子どもたちは歴史に浸っている、とも言える。こちらの建物自体が歴史的な場所でもある。今年の卒業生の一人は、民芸品専門の芸術学校に、もう一人は観光ビジネスの専門家を育てる学校に進学した。つまり、子どもたちも自身の地元の伝統に関わるような道を選択しているのである。

区のレベルで去年特別な文学的なプログラムを作り、そのプログラムに従ってゼレノドルスクの地区の子どもたちのほとんどはスヴィヤシスクを訪れている。その他に、タタルスタン共和国教育省の協力を得て、予算を与えられて、こちらでスラブ文化研究会を行った。子どもたちはこの学校に色々な場所から集まって来て、こちらでプロジェクトを発表したり討論会を行った。スヴィヤシスク全体としてキャンプをやって、皆で研究の成果を発表しあう、というようなことも行った。

また教育省からサポートを得て、こちらでは2年間の特別なプログラムを作った。それはゼレノドルスク地区の文化と歴史について学ぶプログラムであり、36時間ずつ2年間学習をするようにしている。その目的は住んでいる地区の歴史を知ることである。スヴィヤシスクをテーマとしたコンクールも開かれるなどして、その成果はカレンダーになったり、ということもあった。共和国全体の先生方がスヴィヤシスクに集まって来て、博物館教育などについて会議を行う、ということも行われた。



< 2012年10月4日 >

⑨タタルスタン共和国教育省

Министерство образования и науки РТ

(09:00 – 10:00)

1. 対応者：
 - Поминов Андрей Иванович (Заместитель министра образования и науки РТ)
 - Алексеева Татьяна Георгиевна (Начальник отдела реализации государственных программ и проектов)
 - Измайлова Эльвира Ансаровна (Ведущий советник отдела дошкольного образования)
 - Зиннатулин Раиф Каримуллович (Начальник отдела национального образования и межрегионального сотрудничества)
 - Алишов Тимирхан Булатович (Начальник управления профессионального образования)
 - Шалипов Ильнур Зуфарович (Начальник отдела международного образования)
2. 住 所：Кремлевская ул. 9
3. 連絡先：+7-843-292-93-51, Ilnur.Sharipov@tatar.ru



タタールスタン共和国全体で子どもは 83 万 5 千人、人口は 378 万人である。ロシア全国に共通して言える問題ではあるが、施設が足りていない、という状況になっており、タタールスタンにおいても施設を拡充しなければならない。現在ある 1926 ケ所の幼稚園を言語別に分けると、タタール語、ロシア語が混ざっているところが圧倒的である。76 ケ所はロシア語ではない、チュバシ語、マリ語など、そういった民族が集中している地域の言葉による教育を行っている。「バリキシユ（赤ちゃん、子ども）」というプログラムを採択し、幼稚園に入るための子どもの待機時間を減らす、という取り組みを行っており、年間 13117 人の子どもがこれによって入園をしており、成果も上がってきている。このプログラムには 30 億ルーブルの予算が投じられ、53 の幼稚園と、125 のグループが新たに作られた。種類には様々なものがあり、家族が運営しているものや、民間に属している幼稚園などもある。現在 3 – 7 歳の子どものための幼稚園就学の要求は 97% 満たされている。

普通教育における問題は教育の質であり、また低い経済性も一つの問題となっている。ロシア語タタール語の学校数は大体同様である。バシキール語やユダヤ語の学校などもある。こちらではタタールスタンの言語法で、国家語はロシア語とタタール語の 2 ケ国語となっている。このため、どの学校でもロシア語とタタール語が教えられるようになっている。

タタールスタン共和国においては現在、2015 年までの教育プログラム「キワチェック

(будущее の意)」というプログラムが採択されている。ここでは教師、テクノロジー、インフラへの投資が課題として位置づけられている。最近2、3年のうちに、共和国の先生の給料は相当増えてきている。特別な先生のためのグラント・プログラムも採用するなど、教師の成長を促し、モチベーションを高めるような取り組みを行っている。いい教師にボーナスを出すような取り組みは、いい刺激となっている。



「我々の新しい先生」というプログラムがあり、大学の卒業生などの人材を引き込むためのプログラムを行っている。例えば、2006年から実施されている「アルガリッシュ (進歩の意)」というプログラムがある。教育センターでの活動を通じて、タタルスタン共和国の教育スタッフの資格向上のための取り組みを行っている。外国の大学にこちらの卒業生、大学院生、博士、研究員を研修に行かせている。このプログラムの中には、学校の先生向けのものもあり、例えば Education Fes というものを通じて、英語の先生の資格向上を行っている。シンガポールの Edu Care という組織とも協力関係にあり、卒業生はロシアの経済総合大学でマギストラトゥーラになる資格を得たりしている。何人かの先生はスイスなどで研修を行っている。248ヶ所で高校生のための「リーダーシップの基礎」、というプログラムも導入されている。

テクノロジーについて言えば、数年前から全ての設備をモダン化する、というプログラムを行っている。25億ルーブルの予算が与えられた。今現在100%の学校がハイスピードのネット環境をもったコンピュータ教室を持っている。大統領の判断で、全ての先生にパソコンが与えられた。多くの学校においては、生徒一人にパソコン一台というプログラムも行われている。

こうした取り組みを通じて、教育システムに関する新しい情報環境を作ることになった。これはロシアの地方教育としてはとてもユニークである。このシステムのおかげですべての教師、生徒が情報環境を利用することができるようになり、また4万人の保護者もこのネットワークに含まれることとなった。データは全て政府のサーバーに情報が保存されている。100%保護されており、保証もついている状態である。このため、学校において通信教育を実施するのに適した環境が整えられている。これは田舎や、生徒が少ない学校、障がい者の学校の子どもなどにとって有益な取り組みである。

2010年、2012年の世銀のモニタリング・データによれば、タタルスタンの全ての学校のレベルが上昇している、という結果が出ている。今年タタルスタンは、情報リソースの活用という点において、ロシア全国で1位とされている。

特筆すべきは、教育施設をベースとしながら、専門別のコンピティション・センターを設けている点であり、そのセンターに通っている生徒には地元の子どもだけではなく、他の地区の学校の子どもたちも含まれている。このような場所を作るためには、様々なセンターを持つ大手企業の協力も必要になる。そうした活動の結果、オリンピックの優勝者の数は例年タタルスタンが高く、ヴォルガ周辺地域においては、我々がリーダーシップを発揮している。統一試験の成績も現在上昇しており、ほとんどの教科に関して、ロシア全国の平均水準よりも高くなっている。おそらくご存知だろうと思うが、ロシアにおいては連邦レベルの大学が9ヶ所あり、

29の民族研究センターが設けられている。そのうちの3つはカザンで実施されている。大学は86ヶ所であり、20万人の学生が教育を受けている。専門別の原則に基づいて、14のクラスターシステムが設けられている。タタールスタンでは、補充教育のシステムも大変に充実している。422の補充教育施設で35万人の子どもが学んでおり、学校においてはサークルがあり、その数はほぼ1万であり、そちらでは16万2千人の子どもが学んでいる。現在こうした教育システムをさらに発展させるために「午後の学校」という新しいシステムが進められている。グリーンスクールの活動なども行われている。

質問：経済発展によって移民が入って来ていると思うが、そうした移民の大人、子どもに対する教育的なサポートはどのようになっているのか？

そうした移民のためには日曜学校が設けられており、30ヶ所が共和国内にある。そこでは28の言葉を教えている。アゼルバイジャン、ウクライナ、アルメニア、オセチア、タジク、アッシリア、アフガン、ギリシャ、ポーランド、グルジア、ブルガリア、ドイツなど、自分の言葉を学んでいる。

移民の子どもたちはまず学校に通う。そこでまずロシア語やタタール語を他の学校の子どもたちと一緒に学ぶ。一方、大人向けの適応プログラムも設けられている。それは旧ソ連圏から来ている人々を対象としたもので、教育カレッジを基礎としながら、移民向けにロシア語教育を行うような機関となっている。そこで言葉を勉強すれば、専門的な教育機関に入ることができるようになっている。

質問：グリーンスクールについての言及があったが、それはヨーロッパと同じようなものか？

それらはこちらに独特なもので、多目的なプログラムであり、学校の敷地内で生徒たちは自身の力で施設環境を綺麗にしたり、中庭をデザインし設計をして、協力しながらそこで植物を植える、といったことを行っている。共和国内の74ヶ所で、地質、水質、空気の質の測定設備が備えられているが、子どもたちは自分でそれらの測定を行っている。2週間に1度測定を行っており、その内容は情報センターに集められて、インターアクティブな地図が作られている。このように共和国全体の環境的なモニタリングに生徒たちが参加するようになってきている。これによって我々も共和国内の環境の状況について知ることができるようになっている。

質問：タタールスタンにおける先生たちのレベルの高さの秘訣はどこにあるのか。

その秘訣は子どもたちへの愛情と、自身の仕事への愛情であろうし、愛国心もその一つだと考えている。

質問：教育省は、教師が子どもたちに対して愛情を持てるように何か支援をしているのか。

資質向上のために、物質的な取り組みがある。今日紹介したプログラムは教育省経由で行われている。教育上のオリンピックなども行われている。このように情熱を維持するための努力を行っている。

質問：タタールスタン共和国において民族教育の性質に変遷は起きてきているのか。

ソヴィエト時代は、民族教育は現在のように発展していなかった。当時はファクulty

ヴという形で、両親、生徒の希望に従って行っていた。当時タタール語を教えていたのは、田舎の学校のみであった。現在教育システムは憲法、国家語法に従っている。ここではロシア語とタタール語を同等としていて、それに従って、教育を行っている。全ての学校において、ロシア語、タタール語は同等の授業数の扱いを受けている。今現在直面している唯一の問題は、教えるための技法である。これについては実践、論理の上で研究者が取り組みを行っている。

質問：高等教育の2段階制度導入により、新たにバカラブリアート課程が導入された。現在の労働市場ではバカラブリアート課程の卒業生が要求されているのか。また、教員養成においては、バカラブリアート課程を卒業した教員は学校で求められているのか。それとも教員としてはバカラブリアート課程よりマグストラトゥーラ課程の卒業生の方がよいのか。

大学システムについては連邦法に基づいて実施している。ボローニャ・プロセスを導入し、現在はほとんどすべての大学では2段階で教育を行っている。将来はバカラブリアート課程卒業生の教員は当然要求される。現在は、このような教員はどのレベルで教えていいのかということについて協議されている。例えば、バカラブリアート課程の卒業生には、学校の小・中レベルで、マグストラトゥーラ課程の卒業生には、高等学校およびプロフィールの学校で教えさせる。

教員養成に限らず、一般的に初めてのバカラブリアート課程の卒業は、2015年の予定である。その年には、バカラブリアート課程の卒業生もスペツィアリスト課程の卒業生も同時にいることになる。その時卒業生が就職で困らないように、雇用者との協力が必要とされる。

今、利用されている高等教育のプログラムは、大学により新たに作成され、十分に検討されていないまま実施された。そのため、現在諸大学によってバカラブリアート課程のプログラムの調整や改善が積極的に行われている。バカラブリアートはスペツィアリストと変わらず、スペツィアリストと同じような職務ができることを、企業も次第に理解してくれると期待している。

その上でバカラブリアート課程の卒業生は積極的に国際レベルで活動ができる。段階教育導入のおかげで、海外の大学は我々の高等教育制度を理解でき、協力も可能となった。例えば、ダブル・ディプロマの制度の導入ができるようになっている。

長期的には、教育制度や労働市場の冷淡さなどの問題を克服できたら、新たな高等教育制度は成功すると考えている。

⑩市立子ども宮殿

Дворец Детского творчества

(13:00 – 15:30)

1. 対応者：Елена Юрьевна Габитова 所長
2. 住所：ул.Галактионова, 24
3. 連絡先：+7-843-238-57-56
4. 入手資料：児童・教師の芸術作品集「Тысяча творческих работ учащихся и педагогов к 1000-летию Казани」



踊り、歌、メカニックなどの授業を見学し、その後子ども宮殿博物館を生徒の解説で紹介して頂く。また、民族舞踊などを含む子どもたちのコンサートを開催して頂いた。



質問：こちらでは費用がかからない、というのは本当か。

実際に無償で活動を行っている。衣装などのための予算も市から与えられている。こちらは市の予算で運営されている子ども宮殿である。子ども宮殿のために年間 2500 万ルーブルの予算を与えられており、建物のメンテナンス、暖房、スタッフなどをその予算から行っている。

質問：こちらの教育の水準は高いと思うが、子どもたちは将来の進路においてそれらを活用していくのか。

ここで教えたことは、しばしば子どもたちの専門となる。例えばカーティング（ミニ・レーシングカー）の先生の息子さんも先生となって、こちらに戻ってきている。ソーシャルダンスの先生も家族全員でこちらで働いている。こちらの卒業生は他の場所で教育を受けて専門性を高め、その後こちらに戻ってくることも多い。こちらは特別な雰囲気があるため、生徒たちにとっても居心地のよい温かい雰囲気を持っている。

ここで毎年 6 千人が教育を受けている。2010 年には創立 75 年を迎えた。政府からも沢山の表彰を受けており、こちらの子ども宮殿が誇りとしているのはロシアのメドヴェージェフ大統領からもらった表彰である。こうした名高い表彰を受けているのはこちらだけである。またレベルの高い専門家たちが従事しており、78 人が政府から表彰を受けている。若い先生もおり、一方経験豊富な先生方はコンクールにおける優勝経験者たちである。

こちらにはカザンの町全体から子どもたちがやって来る。科目は色々な方面について設けられており、アルゼンチンの数学オリンピックで賞を取った子も在籍している。こうしたサークルを紹介しようとしても、その活動や実績を紹介するだけで一日かかってしまうほどである。コンサートなどで今日紹介したサークルは、全体のうちのごくわずかではない。ピアノやギターなどのサークルなどもある。選別もあるが希望者は今のところ、皆ここで勉強することができる。朝 9 時から夜 9 時まで、と長時間にわたって活動をしているために、参加を希望する子どもたちの要求を満たすことができている。才能が無く面接で通らなかったような子ども



に対しては、他のサークルが勧められるといったことも行われている。

質問：子どもたちの間でだんだんと差がついてしまい、そのことについて悩むような子どももいるのではないか。

レベルについていけず、戸惑う子どももいる。

才能に従って、いろいろなグループに分けることもあるし、ステージに立つのは一番上手い子どもたちであるが、自分が楽しむ目的で教室で踊るような子どももいる。ともかくも、まず才能があってもなくても、ここで発展させるのである。やりがいのある活動、有意義な活動をさせて充実させるのである。子どもは、普通週に2回、2時間来ている。子どもは自分でバスに乗ってやって来るけれども、こちらの子ども宮殿が所有するバスもある。

質問：こちらのような優秀な先生方はどこから採用してくるのか。

まずこちらでは丁寧にスタッフを守っていく、ということを行っている。(所長ご自身が)指導者として使命としているのは、スタッフにとっての楽な状況、条件を作る、ということである。ここで働いている人たちは情熱的で、愛情深く子どもたちに教えるような先生方である。そして目が輝いているような先生、性格でないと、ここでは生き残れない。

バレエ教室の先生も、小さいころこちらに通って練習をし、当時正月祭りの際には雪姫の膝に座っていたが、今は彼女自身が当時習ったものを次の世代へ教えるようになっている。こちらの75年の歴史は大きく、豊かな伝統を有している。以前はピオネール宮殿であり、ピオネールとしての豊かな経験も有している。市の教育の担当者たちもここを大切にしており、保存のために努力をしている。またこちらではピオネール時代の先生が沢山残っている。

副所長先生もピオネールであったし、その後に教育局でも働かれていた。ピオネール組織というのは、リーダーシップを育てるための活動に大きく貢献してきた。現在そうした政治のパターンはもちろん外されているが、当時使われていた子どもをリーダーとして育てる、といった手法は現在でも活かされている。前衛に立って動きを進める、といったような活動である。カザン市の今の社会活動家の多くは、子どもの時にこちらの子ども宮殿で教育を受けた人々であり、こうした人々はこちらにとってもいい思い出を持っている。子どもたちは、病気で学校を休んだとしても、それでもこちらにやって来てダンスをしたりしている。学校とは異なり、誰も2点とか5点といった点数を気にしておらず、実績だけが問題になるのである。



質問：この20年間で変わったことは何か。

20年前はこの目的は教育ではなく、ほぼ娯楽であった。今こちらでは教育的なプログラムを実施しており、文字通りの教育施設となった。3年間、10年間といったプログラムを計画し、実施している。例えば、6才の子はこちらに入ったばかりのころは何もできないのだが、10年経てばご紹介したような素晴らしい演技ができるようになり、あとからは大きなステージでも踊れるようになる。子どもたちを成長させるための変更も、こちらの活動において様々行われている。政府としても、補充教育に関する決議がいくつかなされており、政府のレベルでも補充教育がとても注目をされている、と言える。こちらのような取り組みは、共通の教育システムの一部となり、欠くことのできないものとなった。国家教育スタンダードが制定されて以降、補充教育もそこに含まれるようになった。

質問：最近5年程度の間で新たに加えられたサークル活動などはあるか。

社会的な性格を持った「リーダー」というサークルができた。ロシアでは今リーダーシップを持った子どもが要求されるようになってきている。昔と違うようなメンタリティの育成が求められるようになってきている。我々もそうした新しいメンタリティを持った子どもの育成に努めている。一方で、知識的に優れた人材への要求も大きく存在する。そうした点から、知的な人材を育てる活動が行われている。若い数学者、物理学者、科学者というようなサークルが新しく創設され、「数学的な闘争」というような活動、「何、いつ、どこ」というようなクイズ形式の活動、コンピューター・プログラム、反麻薬、自律的な子ども、という健康生活に関するプログラムなどもある。これも大統領府が採択した「健全な人材」というプログラムがあるためであり、そうした方針に沿ってこちらでも活動を行っている。またもう一点強調したいのは、ロシアやタタールの民族文化を維持するためのプログラムが導入されている、という点であり、そのために大きな努力を払っている。ロシアの民謡があれば同じくタタールの民謡を、ロシア語の演劇があれば同じくタタール語の演劇を、というようにしている。

質問：子どもの数は以前と比べてどうか。

以前と比べても大体同じである。また子どもたちは趣味や興味に従っていくつかのサークルを選んでいい。タタールの子どものロシアのダンスや演劇、ロシアの子どものタタールのダンスや演劇をする、といったことも行われている。これは本当に素晴らしいことであると考えている。一般開放の日をこちらでは1年に一度やるので、そちらに来賓や両親や参加を考えている子どもを呼ぶ、ということも行っている。

ここでの活動分野は技術、美術、ダンスなど10あり、教育プログラムは93ある。基本的にそれはサークルの数である。最近、кружок という言葉はほとんど使わず、代わりに объединение という言葉を使っている。373グループがあり、大体1グループに15人である。5425人の子どもが現在通って来ている。

例えば、歌う子は音楽の理論を最初に勉強し、それからダンス・スタジオに通ったりする。だから演技の質がとてもいい。子どもたちの年齢は、6－18才までである。先生は現在121人おり、そのうち78人が賞を受けた人である。皆大学、短期大学などで教育を受けてきた人々

である。ここではやはり優れたマスターしか生き残れない。自分にカリスマ性が足りないと、子どもたちの情熱を燃やすことはできないからである。学校では先生からでも、または教科書からでも知識を与えることもできるのだけど、ここではハートからハートへと教えており、そのようにして芸術の技法が伝わっていくのである。今日のステージをしてくれた子どもたちに関して言えば、練習は10年と言わず、3年、4年ほどであるようにできるようになるのである。ステージの最後に登場していた男の子だけのグループは、本当にこちらが誇りとしているものである。男の子にダンスさせるのは難しい。先生たちがなんとか元気づけて、踊りをさせ、また練習を続けていかないといけない。そのために女性の先生たちが真剣に努力をしていかないといけないのである。



< 2012年10月5日 >

⑪中等普通教育学校ウスマニア（イスラーム教育機関）

Мульманская средняя школа «Гусмания»

(10:30 – 14:30)

1. 対応者：Фатыхов Ильдар Мулланурович 校長先生ほか
2. 住 所：Ул. Мусы Бигиева, дом 35/56
3. 連絡先：+7-843-253-37-61
+7 903-305-37-61



こちらは教育省に属した、普通の学校である。全国イスラーム評議会が支援をしてくれているが、モスクに付属した学校、というわけではない。現在の校長が2009年に任命されて赴任したときは、別の方がイスラーム評議会の議長だった。以前はわずかながら支援があったが、新しい方になってから支援はあまりない。イスラーム評議会も経済的に大変なので、支援はあちらからはあまりない。ただしとても良好な協力関係を築いている。新しい会長が任命されてから、評議会もあまりにも忙しかったので、我々の学校まで支援が行き届く余裕がなかった。新しい人が任命されてから、マドラサの学校に給料を払い始めたのであるけど、こちらはマド

ラサではないので給料をもらっていない。ただ彼らは市の予算からもお金をもらっておらず、募金などだけで運営を行っている。例えば、この建物は近くの別のモスクの所有であり、それを借りている状態である。ただし無償で借りている。

こちらの学校はイスラーム的な雰囲気であり、当初からイスラームの教育施設として作られた。こちらの学校の名前は何度も変わってきているが、今は私立学校ウスマニアという名前になっている。革命前にトゥカイ通りで学校を設立した裕福な人物の学校にちなんでいる。トゥカイ通りの学校は私たちに返却されたが、それを修復するだけのお金がなかった。それから創立者である前の校長は、イスラーム評議会にその場所を譲ってしまった。今そこは修復作業が行われており、ハッジ（巡礼）のための観光オペレーターのオフィスが入っている。学校側は政府にアピールして、中心部でも郊外でも建物の提供を頼んできたけれども、それが与えられたとしてそれを使えるだけの予算があるか、という点を本当に心配をしている。こちらはとても狭いが、居心地のいい雰囲気で子どもたちは教育を受けている。しかしいずれは広い環境で子どもたちに教育を与えたいと思っている。

質問：子どもたちの両親は授業料を払っていないのか。

両親は寄付の形でお金を学校に出している。自分のキャパシティに合わせて、寄付をしている。寄付をできない家庭もある。こちらは11年制の学校であり、子どもたちはもっと少ない時期もあったけど、現在は110人がいる。キャパシティとしては法に基づいて、教育省からは120人が就学可能であるとされてはいるが、1番大きな教室にも20人しか入らない。こちらは最大で12人のクラスである。多くとも16人でそれ以上は入らない状況である。スタッフは先生が20人、メンテナンスの人などを合わせると全員で30人である。

質問：先生も生徒もみんなムスリムであるのか？

学校の名前に「ムスリム」とは入っていないが、皆知っているのだからここに子どもたちを連れて来る人は、ムスリムか、イスラームの精神で子どもたちを教育したい、と考えている人々である。先生は多少人手不足で隣の14番ギムナジアの先生に来てもらったりしている。我々は自身のことをムスリムと呼んでいる。民族性としてはロシア人でムスリムである人もいる。ここには実験室とか作業場のような教室はないので、テクノロジー、労働の授業は近くにある学校間教育共同施設1と2に通って、そこで授業を行うなどしている。そちらでは、先生方はムスリムであるかどうかは関係ない。男の先生はタタール人であるが、女の子に教えている先生はクリスチャンである。この地区はアヴィアストライーチェリヌイ地区といい、飛行機の工場で有名などころである。19ヶ所の教育施設があり、そのために幾つかのそのようなテクノロジーの授業のための共同施設が設けられている。そこで生活安全教育を受けている。そこでも先生はロシア人である。

こちらでは教育局で採択された教育計画に基づいて教育を行っている。子どもたちは希望で、



サークルの範囲で両親の了解を得て宗教的な内容を含む活動を行っている。子どもたちのためにはクルアーン、アラビア語などのサークルがある。第一外国語として教えられているのがアラビア語であり、第2外国語は英語である。アラビア語の学習は教育規格に入っているので、必ず皆勉強をしている。アラビア語のオリンピックでの優勝者も生徒の中にいる。ムハンマディアを卒業した先生で、こちらでアラビア語を教えている人もいる。ここの卒業生も大学の外国語学部によく入学している。卒業した学生が、こちらに先生として戻って来ることもあり、また他の学校で先生として働いている卒業生もいる。こちらでは80%の学生が大学に入学するが、技術専門学校に進学する子どももいる。ここの卒業生はイスラームと自分の人生を必ず結びつけるわけではなく、芸術や技術、医学などの道に進む生徒もいる。こちらの課題は教育スタンダードに従って教育を行い、子どもたちの興味に従ってどの教育機関にも進学ができるように支援を行うことである。アラビア語を勉強しているため、もちろん宗教的な教育施設に進学する学生もいる。ヨルダンに進学した学生も2人いる。

質問：宗教に関する教育がロシア全土で導入されたことについてはどのように受け止めているのか。

我々は宗教の教科を歓迎している。この教科については教科書があるので、そのプランに従って4年生からの教育を行っている。その教科はあくまでも情報を与える科目なので、本校の生徒もその知識を得るべきである、と考えている。我々の土地では多宗教が共存してきたので、お互いによく知るべきである、と考えている。イスラームの中にもキリスト教の情報が多く含まれており、例えばイサクやアダムなど色々と共通する点があるのである。



質問：クルアーン以外の宗教的な内容を含む活動は行われているのか。

サークルとして「イスラームの道徳」というテーマの活動がある。子どもたちはそこで非常に熱心に学習を行っている。そこで教えられているのは、ムハンマドの人生、物語などである。後ほど紹介したいと考えているアラビア語、クルアーンの授業などを見れば、子どもたちが創造的な活動の中でイスラームに関連する学習を行っている様子が分かると思う。諺では、言葉を覚えれば覚えるほど、人生が何倍にも重なる、としている。子どもたちにもそのような思想を与えようとしているので、我々も4ヶ国語が使えるように教育をするようにしている。

質問：こちらには移民の子たちは在籍しているのか。

もちろんすべての子どもたちを助ける余裕はないが、クルグズ、ウズベクなど様々な民族の子どもがこちらに在籍している。ロシア全国からカザンに集まって来る家族が多い。ここで家を買ってここで教育をしたい、という家族が多いのである。そうした家族のために家を探した

り、子どもたちに援助をしたり、ということをしている。サークルには、アラビア語、タタール語などのサークルがある。ここにムスリムの人々が集まって来るのは、カザン市の経済性、仕事などもあるが、自分たちの祖国に戻りたい、という思いがあるためである。アラビア語やクルアーンもこちらの学校では学べるので、それも子どもたちがやって来る理由である。こちらではウズベク人が経営している（ムスリムのための特別な）ハラール食品を売るカフェもある。

質問：生活態度や道徳などの面でクルアーンに基づいた指導をしているのか。

クルアーンでは、ある女の人は子どもを預言者に預け 10 年間教育を受けさせたが、その子は母親のもとに戻って来た時にまったく大声をあげなかった、とされている。我々は一般人なので聖人ではないけど、先生として声を荒立てず、声の調子だけを変えるようにして子どもたちに諭すようにしている。表情だけでも子どもたちに伝えることができる。我々の先祖は、鞭を必ず教室に持っていたけれども、それは掛けてあるだけで一切使わなかった。子どもを殴る、ということは悪いことである。この世に鞭も存在するんだ、ということ伝えるために置いていたのである。イスラーム的な罰というものもあり、宗教的なルールを破ったときに、投石で殺すなどということが大人の世界にはあるけれども、学校ではそういったことはない。こちらではまず、先生への恐怖ではなく、神に対する畏怖の念を育てようとしている。子どもたちを怖いと思わせるのは、両親や先生に対してではなく、まず神様である。そのように育てられた子どもはどこに行っても悪いことをしないのである。お祈りをここで子どもたちはしないけど、（インタビューをした金曜日のこの日は）1 時までには隣のモスクにお祈りに行かないといけない。

教授言語について言えば、4 年生までは主要言語はタタール語、5 年から 11 年生はロシア語を基礎とする。タタール語だけ分かる子、ロシア語だけ分かる子もいるので、その点の調整は複雑である。（見学した授業では、子どもたちはアラビア語のアルファベットを学び、暗記した長文のアラビア語のテキストを復唱するなどしていたが、実はそこは 1 年生のクラスであり、たった 1 カ月半ほどでここまでできるようになった、とのことであった。この日授業をした先生はムハンマディアの卒業生の方であった。アラビア語の授業を紹介してくださった先生は 56 歳で、実は年金生活者なのであるが、本校で教鞭をとり続けている。この先生は共和国のアラビア語コンクールでの優勝者を育成した先生であった。）

（テクノロジーの授業で石鹼を作る実験をした男の子がいた。この実験の材料に関してもイスラームに従って実は制約があった。）このような時はハラールの製品をつかうべきなので、石鹼をつくる際にも、ハラールのものを使わないといけない。動物の油も石鹼には使わない。例えば他にも化粧品にアルコールが入っていれば、お祈りをする前にそれが飛ぶまで待たないといけない。他のテクノロジーのプロジェクトでは、バラの花に別の色をつける、といった活動も行っている。その色が変わる様子を観察したりする。玉ねぎを土と水の中に入れて、どちらが早く芽がでるか、ということを試すとといった実験もしている。フランス人の実験を取り入れて、水に対していい言葉、悪い言葉、そして何も言わない、ということをやるとどのような反応が起きるか、ということを試したりもしている。悪口を投げかけたものは枯れてしまった。褒められたものは、さかんに咲いていた。サークルの活動で、子どもたちは色々なものを作る。ま

たテクノロジーの授業でも、色々なものを作ったりする。女の子は編み物、縫い物などをテクノロジーの授業でしている。男の子は近くのセンターに行って授業をしたりしている。

こちらは男女共学であるが、イスラームに従うと本来男女別である。部屋が小さいので、今はそれができないが、両親から男女別についての強いリクエストがある。別々なら一番いいのであるが、なかなかそこまではいかない状況にある。ぶつかったり、矛盾したりするところもあるのである。我々の国の条件を考えると、男女はいつも遭遇する環境にあるので、分けるのは難しいかもしれない。それでも、正しい教育を子どもたちに対して行っていけば、男女は正しく付き合うだろう。授業は2交代制でやっている。天気がよければ、近くの14番学校のスポーツ施設で運動をする、ということもあるが、その際は男女別々である。モスクの地下にもスペースがあり、男子はそこでも運動をする。生徒の中にはウズベク人が30%程度おり、先生方もそうした子どもたちに触れている間にいつの間にかウズベク語、アゼルバイジャン語などを覚えてしまうのである。

⑫カザン市立動物園

Казанский зоопарк

(15:20 – 16:30)

1. 対応者：Курбашкина Светлана Анатольевна, Зав. сектором хищников
Резеда Алиевна, ученый секретарь ほか
2. 住 所：Ул.Хади-Такташ, 112
3. 連絡先：+7-843-278-05-30
+7-960-033-38-23
kaz-zoo@mail.ru
zoo-emo@mail.ru
4. 入手資料：動物園のパンフレット、植物園を紹介した本



こちらの動物園の特徴は、動物園としてだけでなく、植物園としての特徴も兼ね備えていることである。ロシアで一番歴史の長い植物園の一つで、200年以上の歴史がある。カザン国立総合大学の歴史と、この植物園の歴史はとても密接に結びついている。最初は植物のコレクションが植えられた場所としてスタートした。講義の際には、先生方はそれらの植物を学生

たちに見せて説明したりしており、教育的な役割も担ってきた所である。1834年にカバンという湖で、7ヘクタールの土地が買いつけられて、大学の方から植物のコレクションがそこに移された。

こちらは国内戦争の際には、混乱に直面し非常に困難な時期を経験した。ここに植えていたユニークな木を市民たちは伐採して、薪として暖房のために使ってしまった。こちらの代表的な植物もそうした際に伐採されてしまった。1924年に幸運にもわずかに残っていた植物をカザン大学の学生たちはこの植物園で復活させる取り組みを行った。その時現在の植物園の温室が建てられた。カザン・ネズのように1834年からこちらに植えられているような植物もこちらには存在する。動物園全体として建物が非常に老朽化してきているので、今後こちらから新しい建物へ引っ越すことを検討している。

環球教育的な取り組みとしては、「エコロジー教育の学校」というプログラムがこちらにはある。教室が敷地内に備えており、そちらで学校の生徒たちに対して授業を行っている。映画の上映や展覧会などもこちらで行っている。ユーラシアとアジアの動物園協会にも所属をしているので、毎年そちらのプログラムにも参加している。環境保護や珍しい動物を保護するためのキャンペーンなど、そういった毎年変わるテーマに合わせて活動を行っている。去年は東南アジアの動物の保護、というテーマであった。そのために知的活動の一環としてクイズ番組のようなものを行う、ということもあった。

冬にはこちらで多くの雪が降るので、最近は伝統になってきたが、雪を用いて様々な動物の雪像を作っている。2008年には雪像で色んな芸術学校の生徒がカエルを作るといったこともなされた。そうしたカエルは、園内の飾りも兼ねていた。これは世界的な大会で1位となった。チェコの人々は、多額のお金を投じて外国に行って珍しいカエルを見つけて、写真に移したりプレゼンテーションしたりしていたが、私たちはそれほど投資をしないで、簡単な慣れている方法で作ったカエルの彫刻で1位を取り、チェコの人たちは2位となった。

トラを使ったプログラムとしては、毎年アムールトラの日という記念日が設けられており、現在はアムールトラの絵のコンクールをやっていて、こちらはもうしばらくしたら締め切られる予定である。

植物園のスタッフも新しいものを作るのにとっても熱心なので、日本庭園もこちらで作ることに挑戦しているところである。

モスクワ市（1面会、1機関）

<2012年10月6日>

⑬移民政策研究者グリャエヴァ氏へのインタビュー

руководитель программы «Психолого-педагогическое сопровождение адаптации детей мигрантов», Мос коовский городской психолого-педагогический университет

(11:00 – 12:40)

1. 対応者：Гуляева Алевтина Николаевна 氏
2. 住 所：Сухаревская пл., Сретенка, 27
3. 連絡先：8-916-242-20-13
8-495-607-08-72
4. 入手資料：(必要な書類があれば、メールで知らせてほしい、とのことであった)。

我々はこの移民の問題に関して、長年に渡って取り組んできた。以前の移民たちは、各地域・共和国の最高のエリートであり、競争を勝ち超えた人材であった。最近では労働者が中心である。一般の人達であるために、社会的なステータスも低いし、子どもたちの道徳や教育などのレベルも低いので問題が起きている。今はどの学校の教室を見



ても、30%余りが移民の子どもたちである。そのため移民の子どもに限らず、モスクワとしてもどのように対応するか、ということが問題になってきている。2007年から「改革的な教育」という国家プロジェクトが始まった。我々としては心理学の大学として、一番重要な心理学のテーマを選択した。我々は助成金を受けながら現在の活動を行っているが、ロシアにある3000大学余りの大学のうちそうした助成を勝ち取ったのは57大学である。

そのプロジェクトの中には36のテーマがあったが、そのうちの一つを我々は選択している。長いプロジェクト名も付いているが、これは簡単に言うと「移民の子どもたちの教育」というテーマである。なぜこのテーマを選択したか、というと、私自身は現在文学部に属しているが、以前北の地区の学校で教えていた。そこでも移民の子どもたちが学んでいた。私はロシア語とロシア文学を教えていたが、そのような環境はとても難しかった。ロシア語の文法を教えようと思っても、移民の子達は全然関心がない。ロシア人の子たちに要求される基準を満たすことができず、両親からも強い不満が寄せられていた。実践経験が私自身にもあったからこそ、この問題に関しては子どもたちのレベルだけで判断するのではなく、両親の要望にも応えなければならなかった。努力を払えば、いい結果が生まれるが、誰も努力をしないのである。私は若く元気のある時にクラスの指導者として、情熱をもって取り組んだ。給料が低かったとしても、情熱を持って若い教師は取り組めるのである。当時はまず両親をお互いに紹介したが、そのようにすると雰囲気が良くなるのである。お互いを知るようになると、あのカザフ人、トルコ人と言っていた両親がお互いに人間であることを理解して、雰囲気が良くなるのである。

今は国家レベルで2025年までに移民教育のための国家プログラムが設けられている。私が大学に勤め始めたときは、2009年で丁度それが始まった時で、それは「同国者の子どものための教育」というプログラム名であった。あらゆる共和国の30人の学生が、留学ではなく、5年間のちゃんとしたプログラムとして、アゼルバイジャン、モルドバ、ベラルーシ、ウクライナ、タジキスタン、カザフスタン、ウズベキスタンなど旧ソ連の各国からモスクワに集められた。彼らは多少なりともロシア語のできる学生たちであった。まずこの学生たちどのように適応で

きるか、ということを検討した。学生たちと話しながら、日常の仕事の中でプログラムを進めて行った。メガポリスのモスクワになじませる、ということからまずスタートした。地下鉄の使い方、スリに対する注意とか、モスクワの日常生活の特徴を教えながらやっていった。

モルドバ人で地方からきた一人の男の子がいたが、彼は私が朝から大学にいなかったら、誰にも一言も言わずに逃げていたりするといふかなり難しい子であった。他の子達は何とか頑張っていたが、この子だけは難しかった。その子と5年間も付き合っただけで色んなことをした結果、1年間休学した後、1年間遅れて特別に卒業した。このように誰かが隣にいないと、彼は卒業できなかつたと思われる。とても孤独な子であった。私は彼にいい先生を紹介して、いい指導のもとで卒業論文を書かせた。彼はキシニョフとモスクワの生徒に関する素晴らしい比較を行った。彼のためにはまず第一に心の優しいいい先生を見つけた、ということが大きかった。このようにしていけば、いつかこの環境に慣れてきて適応していけるのである。

市のレベルでプログラムを任せられたとき、私たちは実践の上で経験が溜まっていた。私たちの大学は心理学の大学なので、個人のアプローチとか、個人の独自性を考慮に入れて、特徴に合わせたアプローチをするというのが基本となった。私は「同国者の教育（昔は同じソヴィエトだった、という含意）」という内容でそれについて本も書いた

次に学校レベルでの移民の適応についても取り組み始めた。一番大事なことは、努力さえ払えば、必ず実績がでる、ということである。プロジェクトに関してはその構成をしっかりと検討していった。まず外国語としてのロシア語である。言葉がわからないと適応することはできない。このプロジェクトを通じて、子どもたちは割と早くロシア語をマスターしていくのである。モスクワ市のレベルでも、ロシア語の専門学校があり、12ヶ所も移民の子ども向けの教育を行っている。それは日曜学校ではなく、補充教育の施設である。柔軟性を持ちながら、一般の学校と都合が合うようにしている。

次は文化的な適応である。移民の子どもたちは、メンタリティの上では違う感覚をもっている。例えばロシア人の感覚では基本的な「うさぎは優しく、きつねはずるい」というようなことを教えることを行った。こうしたことを知らずに「きつねのような」という言葉で、「ずるい」ということを思い浮かべる子どもたちはいないであろう。主にこういう適応コースを担当しているのは、ロシア語、ロシア文学の先生たちである。数学の授業ではこのようなことを学習する雰囲気はない。

他にも「なぜプーシキンは詩の太陽と呼ばれているのか」といったように、例えばそのような根本的なことを教えるのである。また世界的に通じる、シンボルのようなことを教えている。例えばドストエフスキーにとって、サンクトペテルブルクとはどのような意味があるか、とか、このような文学的なことを子どもたちに教えると、市民性とか社会性がだんだんと形成されるのである。こういう市民的な形成が行われないと、移民の子どもはこの社会の一員にはなれないのである。私も日本に行ったとしたらまず何が要求されるか、といえ、日本人が愛していることを私も愛する、尊敬するというような態度を学ぶことである。相手の文化を尊重すれば、自身の文化も尊敬されるのである。

第3点として、一番微妙でデリケートな面であるが、心理学的な動向で言えば、先生方の一人ひとりの振る舞いに関して色々決めて、先生のためにマニュアルを書いたりする、という

ことである。先生だけではなくて、掃除のおばさんや、警備員のためにもマニュアルを作って、軽蔑的な表現を言わない、「チュルカ（トルコ系の蔑称）」と蔑視して言わない、とかそういったことを伝える。そういう尊重されている姿勢を感じると、子どもたちは自分たちが尊敬されていることを感じて、いい結果が出るのである。

以前ロシア語が流暢なベトナムの人が論文を発表して、それを読んだのであるが、その人の論文はベトナムとロシアでどのような移民への取り組みが行われているのか、ということと比較していた。ベトナムにも移民が沢山いて、政策を行っているそうである。この論文の中には、色々な国におけるベトナム人のイメージ、扱い方など、ということについても述べられている。この間、民間からプロジェクトの依頼があり、大人向けのプログラムを作るように要請された。どこで様々な登録を得たらいいのか、どこでリーズナブルな値段の買い物をすればいいのか、どこで宿泊施設の問題を解決したらいいのか、などである。皆が（不法移民のように）地下に住んでいるわけではないので、このような取り組みが必要となる。

ロシアでは最近5年間で、移民労働者の組合ができています。それは公式に登録された人を相手にしているのですが、違法労働者の人もそこに訴えることができる。レクチャーを依頼したり、というようなこともできる。数々の実績が行われており、目標を達成するのは長いプロセスではあるが、それでもいつか成果がでるのである。

教育心理学的なコンポーネントとしては一番デリケートであるが、ここが一番重要であり、我々は個人へのアプローチを行っている。私が学校で勤めていた時は、クラスの民族文化の日を定期的に行っていた。両親も呼んでその民族の民芸品を作ったり、といったことも行っていた。仲良く共存し始めると、両親も子どもも安心するのである。まず先生の一つの大きな課題は、子どもたちの団体を団結させることである。移民の子たちの両親だけではなくて、モスクワの子たちの両親も教育しなければならない。言葉で言うのは簡単だが、移民の流れは非常に激しく変化も早い。短期間滞在して、また出ていったりしてしまう人々も大勢いるのである。

質問：日本においても日本にやってくる人々については定住を目指す人と、仕事の後に出てしまう人もいます。こちらではどうか。

こちらにも両方あるが、ここに移住しようと思っている人々の方がやりやすい。移民としての立場が決まり、社会的な立場を理解し、ロシアに住む覚悟ができているために協力的なのである。一方でそうでない家族は難しい。距離感があるのである。モスクワは大昔から多民族の街なので、第1カテゴリーの人は早く定着していく。彼らは自らここにいたい、と考えているのである。ロシア語も自分で学ぶ意思があり、こちらの人と同じ生活に馴染もうと努力し、問題を起こさない。しかし第2カテゴリーの人は違う。仕事のために臨時で来ている移民労働者が一番の問題なのである。

彼らは子どもを家から一番近い学校に行かせたりとか、ロシア語も勉強させたり、といったことをするのであるが、ロシア語の力が十分でないために卒業も難しい、といった事態も起きてしまう。出稼ぎの人たちは子どもを学校に行かせないようなケースも多い。この出稼ぎの人たちは経済的なステータスも低いので、子どもたちは民族性の区別ではなくて、社会的なステータスから差別されることが多い。ハンディキャップがとても多いのである。このため人情

を基礎に置いて、人間性をポイントにしてなんとか子どもたちの友情を結ばせる、というような努力が欠かせない、という状況になっている。

質問：どこから来た人にそういうことが多いのか。

タジキスタン、クルグズスタン、(やや状況は異なるが) アルメニア、そしてウズベキスタンなどが一番目立っている。タジク人は建築労働者、クルグズ人は中庭掃除とかトイレ掃除、ウズベク人は市場での物売りが多い。

質問：その後、そういった人々は本国へ帰るのか。

彼らは行ったり戻ったりする。また仕事がなくてまた戻って来たりする。ただ、また違う場所で仕事を見つけた場合は、違う地域に住むことになる。

質問：そうした際には、子どもたちはロシア語も自身の言葉も教育が不十分になる、ということか。

国の政策について言えば、2025年までのプログラムで就職に際してロシア語のテストを受けなければならなくなった。以前はそのようなことはなかったが、そのように変化してきている。またこのプログラムに従って、企業別に与えられる移民労働者の人員割り当てを減らすようになってきている。企業は移民を雇用するために国からそうした割り当てを申請するのであるが、移民を雇う許可(割り当て)は企業に与えられるが、労働許可は個人に与えられる、というようになっている。

例えば以前は1000人雇えたところも、現在では500人しか雇えないようになっている。それは、モスクワはもう町としてもこれ以上の人を受け入れられない、という状況にあるためである。移民の人々は非人間的な環境で生きている。警察も監視を強めて、様々な建設現場を回ってチェックしている。チェルキーゾフスキー市場が最近閉鎖されたのもそういった事情によるものである。最低の人間らしい環境で暮らすための権利が誰にでもあるのである。

我々はこのプロジェクトを作成したときには、ロシア全国を回り、ハバロフスクとかピャチゴルスクといった町も訪問した。二つを比較すればピャチゴルスクはコーカサスの多民族的な町である。その地域のすべての民族が集中している町である。コーカサスはイスラームにも熱心なエリアである。その言語大学を訪問したら、様々な民族が勉強しており、中にはヒジャーブ(ヴェール的一种、覆うもの)を被った子もいた。そこでは皆友好的に学んでいるが、指導部の方からはプロジェクトを課されるようになっている。ダンスとか料理とかそういった民族の一番いいものを披露するのである。

例えば宗教の歴史という科目を教えていても、宗教の一番いいポイントを教えるようにしている。本来宗教は良いことばかりを人に教えており、それは例えば人を殺すなどか、他人のものを取るなどか、そういった共通性を強調しながら教育活動を行いそこから、私たちは皆人として同じだ、というように感じられるようになるのである。

ハバロフスクでは中国からの移民が沢山居て、とても目立つ存在となっている。すでに移民の中国人はロシア人と結婚していて子どもも生まれてくるので、このプロセスはもう止められないのである。こうした子は移民なのか、どうなのか、区別は単純ではない。そのため、民族

性を強調するのではなく「我々は皆地球の人である」という新しい常識、メンタリティを与えるようにしないといけない。地球の人は多様性があればあるほど、面白くなるのではないだろうか。

一方でだからこそ自身の民族的なアイデンティティを保存しなければならないが、それこそが今ロシア人にとって欠けており、問題となっている。あまりにもロシア人の民族性というのは曖昧になり、薄くなってきてしまっている。国家単位では今「ロシア語」という特別な国家プログラムを実施している。ロシア語が使われる地域も減少しつつあり、昔は1億6000万人がロシア語を話していたのであるが、その人口は減りつつある。この「ロシア語」というプログラムも我々は様々な教育施設を通じて行っていて、半年に1回報告を行うようにしている。「ロシア語」というプログラムも、ロシア語を消えないようにそれを支持する、というようなプログラムである。今私たちの大学でも、言語学センターが作られており、そちらでもロシア語を外国語として教える企画がある。中国のチャンチュン（長春）大学と学生の交換を行っている。毎年お互いに留学生を送り出している。こちらもいいプログラムなのであるが、ともあれ結果的に移民のための適応政策は早くスタートすればするほど、結果はよくなるのである。

学生時代から友達となっている人々同士は、将来は敵同士にはならないであろう。我々の大学はそれほど大きくはないのではあるが、3500人が大学の昼間に学び、夜間、通信と合わせて更に2500人の学生がおり、そのうちの90-100人は外国の学生である。彼らの間で争いは起きていない。我々は最初から、1年生の段階から努力を払っているのである。私は国際部長を同時に務めているのであるが、部下たちは寮を頻繁に訪れたり、モスクワの名所を訪れたりし、また彼らの国の話も頻繁に聞くのである。こうした敬意もった態度を生徒自身も理解しているのである。

カザンから来たスルターノワ先生という方の博士論文のテーマは移民の子どもたちの適応なのであるが、その発表の際に聞かれたのは、移民の子どもたちには配慮しているが、地元のロシア人の子たちの利益はどのように守るのか、というものであった。その際彼女は、犠牲にならないように、ダメージにならないように、子どもたちをクラスで団結させなければならない、そのことにより利益が出るのである、ということをお答えした。皆が平和的に汚染されていない環境で生きるべきなのである。

連邦教育発展研究所という所の世界中の言葉に堪能であるアメリカ人の先生が、グローバル化の流れの中で、世界は小さくなっていく、地球は私たちの共通の我が家だ、という意識を植え付けないといけない、ということをお仰っていた。また、地球のエコロジーをテーマにした企画をこれからの方がいい、ということをお仰っていた。人々のメンタリティを変えながら環境を作っていくのである。

質問：出稼ぎの子たちが適応できない、というときに、各民族の文化を教える、ということを通じて、ロシアの文化を理解できる、ということもあると思うが、そのような取り組みも行われているのか。

アゼルバイジャン全国会議という組織がモスクワにはあり、またアルメニアのディアスポラ

の組織もある。グルジア語の学校もある。各大使館には教育施設があり、大使館の立場から国民に教育を与えている状況である。

質問：タタールスタンからの移民については、ロシア国内なので厳密には移民ではないのであろうと思うが、他の共和国の移民とは違いがあるのか？

モスクワの学校まではまだ造られていないが、いつかそういった学校が造られるだろうと思う。前は皆ロシア語を話していたので、そのような学校の必要はなかった。今の世代はロシア語が分からないので、そういった学校の必要性も出て来ている。移民の数の増加と、学校数というのは比例していない。波のように圧倒的に人が来るので、なかなか対応しきれないでいる状況にある。

質問：宗教的な施設でもプロジェクトに関わる協働があるのか。

今は学校の授業で宗教的な授業も行われるようになってきているが、子どもたちにも選択肢があるので勉強する内容も選択できるようになっている。ロシアは教会と政治は切り離されている。もちろんそういった問題も無視できない問題であり、柔軟性のある形で教会もなんとか宗教の問題を解決するために、宗教の面から人々が差別をされることのないように教育を与えようとしている。

宗教を教える、ということは本当に重要なのである。色々な国の宗教を学び、我々は宗教が違って共通性がある、ということを知らなければいけない。アグレッシブなイスラームは普通家族内から出てくる。宗教を手段として戦略的になっているところは問題であるが、ごく普通に違う宗教の子どもたちが一緒に学ぶということ自体は問題にはならないのである。教育を通じて全ての問題を解決する、というのは不可能である。しかし民族性も考慮に入れて正しい適応政策を立てたならば、問題は学校では発生しない。民族性とか宗教について、まずお互いを尊敬する立場を強調しなければならない。学びというのも、与え、与えられというような総合的なプロセスなのであるから、だからこそ家族の重要性が増すのである。国家単位でも色々な政策が立てられており、なんとか解決の糸口が見つけられるだろう、と考えている。

質問：日本では移民の子どもたちが学業不振で途中退学、また高等教育に進学できない、というような事態が起きている。ロシアではどうか。

こちらでも同様であり、そういったことが起きている。子どもたちにとって、成功するためにはモチベーションが必要である。父親が工事現場で働いていても、自分が社会的に成功する子どももいれば、そうではない子どももいる。大人になっても自分は掃除の仕事しかしないんだ、と考えるような子どももいる。我々の経験から言えば、できるだけ早い時期に教育を開始する必要がある、そうした場合によりよい結果がもたらされる。ロシア人の子どもたちについても、もちろん進学の問題があり、全員が高等教育に進学するわけではない。我々もこの点の解決に向けて研究に取り組んでいる。最後まで諦めずに努力し、子どもたちに注意を注いでいけば、問題は解決できると考えている。日本でも同じような問題に関心があらわれる、ということを本当に嬉しく思う。

質問：これまで日本は外国人を受け入れてこなかったのであるが、入管法が変わったことにより、日本は少し受けいれるようになってきている。）

それは世界中の問題である。人々の意識を変えて、世界が我らの家である、というように意識を変えないといけない。我々はステップ・バイ・ステップで慎重に解決していくしかないのである。我々も様々な研究をしており、子どもたちの適応マニュアル、アンケート、テストなどがあるので、もしさらに必要があれば連絡を頂ければと思う。

⑭モスクワ・タタール人協会

Официальный сайт Татарского культурного центра РТНКА (Региональная татарская национально-культурная автономия) г. Москвы

(15:00 – 17:30)

1. 対応者：
2. 住 所：Малый Татарский пер. 8
3. 連絡先：center@tatarlar-moscow.ru

最初にセンターの活動についてインタビューさせて頂き、その後隣接するモスクワで一番古いモスクを見学し、最後にセンターの行っている若者によるコンサートの見学をさせて頂いた。



今はタタールスタンのカザン市では、ユニバーシアードの準備で建設ラッシュが進んでいる。タタール文化センターの名前は昔の名前であり、今度その名前を変える、という決議がなされ、新しい名前は「アサドゥラエフ記念精神教育センター」という名前になった。この建物はタタール人協会が入っているが、来年 100 周年記念を迎える節目に当たるためである。この

建物は石油開発分野で活躍していたバクーの実業家シャムシー・アサドゥラエフ氏が建てたものである。彼が死ぬ直前に奥さんに、モスクワのムスリムのために会館を作ることを約束させた。1913年につくられ、1918年までこちらの教室にはタタール人のためのマドラサがあった。

当時、完全にタタール語で教育を行っていた。1940年に第2次世界大戦が始まるまでは、ここにはタタール語の学校が入っていたが、1941年にこちらは軍事病院にされた。戦争のあとは、こちらは外務省に所属するカレッジであった。ソヴィエト時代が終わってからモスクワに住んでいるタタール人協会を通じて、この建物の返却を求め、98年に返却がなされた。こちらの建物は契約で50年間の仮契約である。

この建物が引き渡されてから、モスクワ市のタタール人の自治団体が登録されてきた。我々の課題は、モスクワに住んでいるタタール人を団結させる、ということである。ソヴィエト時代の数十年の間に、タタール人はモスクワの町に溶け込んでしまい、見えなくなってしまった。言語を忘れてしまったり、文化・伝統を忘れてしまったり、ということが起こった。タタール人はロシアで2番目の人口を誇っており、居住地域はモスクワだけではない。タタールスタンに住んでいるタタール人は全体の40%にすぎないのである。タタール語の復活、文化、伝統、イスラームを知り、復活させるために、こちらの文化センターが現在活躍をしている。こちらはモスクワ市のタタール人の自治団体としての資格を得ており、モスクワ全体には30の支部があるが、こちらが全体の中心である。それぞれの市には30余の支部がある。ここが中心ではあるが、実際の活動は支部のレベルで行われている。

少し時間がかかるであろうが、この建物の中にタタール語の学校を復活する、という企画もある。子どもたちのタタール語によるサークル活動を行っている。子どもたちのためにタタール語を勉強するセンターも作られている。今建物はどこも改修が行われているが、それも10日ほどで終わり、3歳の子どものサークルが始まる予定である。舞踊や合唱など、子どものサークルも大人のサークルもある。今年の夏指導部が変わり、今新しい方針をとりつつある。またいくつかのタタール人の若者の団体もこちらに所属している。その一つが、「地球と人々」というチャリティー団体である。この団体はここを中心にして数年間仕事を行っている。子どものための企画や、年金生活者のための活動、孤児をこちらに連れて来て、モスクワに滞在させる、というような活動も行っている。センターにはボランティア活動の専門学校もオープンされる予定である。子どもたちは、タタール人とロシア人両方の子どもの参加者がある。1ヶ月前に主にロシア人を中心としたグループをこちらの企画に参加させた。青年のための知識人クラブも創設された。お見合い活動と知識水準をあげる活動、といった取り組みも行っており、お互いにタタール人同士が出会える場を作るサポートをしたり、といったことをしている。結果も出ており、ここで知り合っただけの家族もある。先ほどコンサート会場にいた子どもも、ここで知り合った両親の子どもである。

質問：お見合いの制度は、タタール人のためだけの紹介制度なのか？

お見合い活動自体は、タタール人を目的としている。

こちらのチャリティー団体は、現在までに自力でサンクトペテルブルクとオレンブルグの町にも支部を開いてきた。ガンと戦う子どもたちのための全国組織の指導部の人とも会って、そちらでは外国での治療のサポートという新しい活動を提案された。ボランティア組織としては、日本のグループと協力できるチャンスがもしあればそれを大歓迎したいと思う。

質問：先ほど「溶け込んでしまった」という話があったが、タタール人とモスクワ人が平和的に共存してきたからこそ、溶け込んでしまったのではないか。

溶け込んでいるということ自体は良いことなのだが、問題は別のところにあるのである。タタール人を一ヶ所に集中的に集めるつもりはないが、言葉、文化、宗教を失うことを我々は恐れている。共存していたとしても、民族のアイデンティティのもとになるものを維持しなければならない、と考えている。

質問：現在はタタール語があまり使えない子どもが増えてきている、ということか。

だんだんと家族の中でもタタール語を使わない人も増えてきている。

質問：モスクワにはタタール語の学校、文化センターがあったと思うがそちらの活動は今でも続いているのか。

あの学校しかない状態であり、そちらが唯一の施設である。これだけの大きな都市としては十分ではない。そのためここもベースとしながら同じような活動のセンターを作ろうとしている。

質問：宗教的な内容もこちらでやっているのか？

タタール人は伝統的にイスラーム教徒であったのであるが、現在までにキリスト教徒になるタタール人もいる。歴史的には皆イスラームだったのだが、イワン雷帝がタタルスタンを占拠してから、そういった人が増えてきた。もちろん信仰は個人の自由であるのだが、一方でモスクワというこのような大都市に、現在モスクは4つしかない。これは全く足りていない状態である。

質問：大きいモスクができた、との報道があったが。

まだ建設中でなかなか完成していない。戦勝記念公園の近くにあるものが一番最近のものである。大きなものも作っているけれども、それはまだ建設中である。時々モスクを作ろうという動きがあると市民が抵抗する、とされるが、私が思うには、それは上からストップされているのであり、市民の反対であるという言い訳を設けているだけなのである。例えば200ヶ所の教会を作る、という国家政策がある一方で、モスクを作る政策が無いのは、なぜなのか。

こちらはモスクワの人々だけでなく、中央アジアからも移民が多く来ており、4つのモスクでは全然是入り切らない。私自身はこちらのセンターに隣接する一番古いモスクでも務めているし、また弁護士としても働いている。タタール人の文化センターでは執行委員会の会長を務めている。それは私の社会活動になっている。こちらはロシアのヨーロッパ部のイスラーム支部となっているが、ロシアのアジア支部、などもある。アシーロフ氏がそちらの会長である。支部はウラル山脈で分けられている。ヴォルガ地方やまたコーカサス地方にもある。

質問：モスクワのイスラーム大学などもあり、多くの優秀な人材が活躍しているようにも思うが。

あれだけでは足りていないのである。今必要なのはモスクである。今モスクワには10の行

政地区があり、我々の計算ではそれぞれの行政地区には最低でも2つのモスクが必要である。つまり、さらに20のモスクが必要とされている。特に大きな宗教的な祝祭の時、例えばウラザーバイラムなどの時には、古いモスクの周りには、3万-5万人の人が集まって来る。全ての周りの道路、小道が人で一杯になるほどである。お祈りはそのためモスクの外でやっている。車が走っているところやアスファルトの上ではなくて、プライバシーのある空間でお祈りをしたい、という気持ちがある。

質問：人材も重要だが、それよりはお祈りをしたりイマームに相談したり、という場所が更に必要である、ということか。

その通りであり、そうしたことが問題である。大学が設立されていても、この問題が解決されないことにはどうにもならないのである。300人あるいは1000人の専門家を育成したとしても、その人たちはどこで働くというのであろうか。私が知っている限りでは、大昔の絵はがきを見ると、クレムリンの中にもモスクがあったはずである。絵葉書の中に十字架とともにイスラームのシンボルである月のシンボルが見えている。12、13世紀にはロシア人はロシア語とタタール語の二つの言葉を使っており、ほとんどバイリンガルな状況であった。だからこそ私たちは、タタール語を使えるエリアを広げていきたいし、タタール人の文化も維持していきたいと考え、そのような目的のものとセンターでの活動を行っているのである。

質問：タタールの文化といった際に、特に重視したいのはどのようなものか。

まずは家族の伝統、家族の作り方や家族に対する考え方、常識である。例えば最近ロシアでは孤児が増えていっているが、イスラームの家族にはそれはあり得ない。親戚が責任をとって引き受けて、自分の子どもと一緒に育てていくのである。最近孤独な高齢者も沢山いるが、老人ホームのように老人を捨てるようなことは伝統的なタタール人の家族であればあり得ないのである。それはタタール人の民族性にも基づいているし、イスラームにも基づいている。どちらのルールでも捨てるてはいけないのである。

質問：誇りとされているような、タタール・イスラームの最も重要な特徴などはあるか。

基本的にはタタール人のイスラームに特徴や独自性は無いが、わずかに亡くなった人の葬式が7日、40日を区切りにしたりすることはある。ただし宗教の上では違いはない。

質問：こちらではイスラームについて勉強する授業はあるのか。

今のところはない。ただ3ヶ月前に指導部が変わり、そういうことも予定されている。子どもたちは生まれつきムスリムではないので、自らいつか選ばないといけない。それは子どもたちが自覚的に選択することである。イスラームの良さとか魅力を学ばせるためには、ここで様々な教えてあげなければならない、と思われる。宗教は押し付けて学ばせるものではないのである。イスラームについて学ぶ授業の予定はあるけれども、全てのことを我々の力で解決できるわけではないのである。

質問：センターはイマームのように相談にのったり、助けたりしているのか。

こちらではそのようなことはしていない。隣接する歴史的なモスクのイマームはこちらのセンターの副所長を務めている（隣接するモスクは 1830 年の設立、現在勤務する 4 人のイマームの中には、ロシアで教育を受けた人もいれば、サウジアラビアで教育を受けた人もいる）。そうした活動の発展は今後彼に任せられる。98 年に自治団体が登録されたのであるが、経済的にも様々な意味でも混乱しており、それほどは活動をしてこなかった。2003 年にセンターに建物が引き渡されたので、そのころから活動を行うようになってきている。

今までは舞踊とか民謡とかコンサートとか、文化活動に重心をおいていたが、これからは宗教的な教育を与えられるような活動も考えている。舞踊などもいいのであるが、宗教などについても必ず教えられるべきである。ロシアでの一番大きな一つの悲劇はアル中なのであるが、タタール人は信仰によって、その問題を避けることができるのではないかと考えている。それが今後活動の一つの重要な方向性となると思われる。

タタール人協会は、モスクワでは 32 ヶ所の支部があり、8 つは大きい地方のレベルであり、残りは区のレベルである。積極的な人は各センターで 100 人くらいいるので、その人たちを中心にやっていきたいと考えている。施設の場所は区によって違う。場所を与えてくれるような区もある。役所は本来場所を与えるべきであるが、あまり協力的ではない。そのため最初の段階では誰かのアパートでスタートし、その後人数が増えれば、役所にも強いリクエストをすることができる。今モスクワには 125 の地区があり、その一つ一つに拠点を作れるようにしたいと考えている。

センターの活動として言語に関する内容と同時に、宗教に関する内容も一緒に行われている。タタール語の学校としても機能しながら、宗教的な教育を与えるために小さい頃から、宗教的な指導者の話を聞けるような機会も設けるようにしている。このような宗教教育をやっているとタタール人だけではなくて、将来的にイスラームの他の民族がセンターを使い始めるかもしれないし、今でも何も制限を設けているわけではなく、誰に対しても開かれている。普通はイスラームのテロリズムとなぜか関係づけられるのであるが、タタール人のムスリムはテロリズムとは何も関係ないのである。ウズベク人なども隣接するモスクに来て、こちらに来ることもある。

質問：移民の助けはしているのか。

我々は移民サポートプログラムにもこれから加盟しようと考えている。言語的や宗教的な内容についてである。彼らはこちらに来て、だんだんと悪い影響を受けて損なわれ、道で酒を飲んでいたりする。全ロシアのアルコールの悲劇に対して、宗教以外に対抗策は見つかっていない。日常生活では未解決の問題が多すぎる。一番簡単な方法は飲んで全てを忘れてしまうようなことである。そのような時は、アルコールではなく、宗教を求められるような環境を作りたいと、考えている。これも私たちの課題の一つである。

【参考資料】

① 「ムハンマディア」マドラサ 「教科課程表」

(昼間部用； 宗教科目に下線)

教科についての注釈は『岩波イスラーム辞典』(岩波書店)によったが、「タフスィール」については、『イスラーム世界事典』(明石書店)では、「クルアーンの解釈学をいう」とされている。

1 学年

前 期		後 期	
教 科 名	時数/週	教 科 名	時数/週
クルアーン	3	クルアーン	3
タタール語	2	タタール語	2
フィクフ (イスラーム法学)	3	フィクフ (イスラーム法学)	2
アキーダ (信仰箇条・神学)	2	アキーダ (信仰箇条・神学)	2
アラビア語 (講読)	4	アラビア語 (講読)	4
アラビア語 (会話)	4	アラビア語 (会話)	4
アラビア語 (文法)	4	アラビア語 (文法)	4
アラビア語 (形態論)	2	アラビア語 (形態論)	2
アラビア語 (習字)	1	イスラーム道徳	2
クルアーンの読み方	2	タタルスタンの歴史	2
アラビア語 (手紙)	1	アラビア語 (手紙)	1
アラビア語 (発音)	2	アラビア語 (習字)	1
		アラビア語 (綴り)	1
合計時数	30	合計時数	30

2 学年

前 期		後 期	
教 科 名	時数/週	教 科 名	時数/週
クルアーン	3	クルアーン	3
タタール語	2	タタール語	2
フィクフ (イスラーム法学)	2	フィクフ (イスラーム法学)	2
アキーダ (信仰箇条・神学)	2	アキーダ (信仰箇条・神学)	2
アラビア語 (講読)	4	アラビア語 (講読)	4
アラビア語 (会話)	4	アラビア語 (会話)	4
アラビア語 (文法)	4	アラビア語 (文法)	4
アラビア語 (形態論)	2	アラビア語 (形態論)	2
地理	3	スィーラ (ムハンマドの伝記・預言者伝) (1)	3
タタールの歴史	2	タフスィール (ハディースに基づく解釈) (1)	2
アラビア語 (手紙)	2	ハディース (預言者ムハンマドの言行を記録したもの) (1)	2
合計時数	30	合計時数	30

3 学年

前 期		後 期	
教 科 名	時数/週	教 科 名	時数/週
クルアーン	3	クルアーン	3
タタール語	2	タタール語	2
フィクフ (イスラーム法学)	2	フィクフ (イスラーム法学)	2
アキーダ (信仰箇条・神学)	2	アキーダ (信仰箇条・神学)	2
預言者たちの歴史	3	クルアーンの物語	3
イスラームの歴史	2	イスラームの歴史	2
演説術 (1)	1	スィーラ (ムハンマドの伝記・預言者伝) (2)	3
イスラームの女性	2	方法論 (学年論文)	1
クルアーン研究 (1)	2	クルアーン研究 (2)	2
タフスィール (ハディースに基づく解釈) (2)	2	タフスィール (ハディースに基づく解釈) (3)	2
ハディース (預言者ムハンマドの言行を記録したもの) (3)	2	ハディース (預言者ムハンマドの言行を記録したもの) (4)	2
アラビア語の歴史	3	イスラーム法史	2
ハディース研究	2	イスラームの女性	2
アラビア語史料研究	3	アラビア語語彙学	3
		アラビア語 (翻訳)	1
		演説術 (2)	1
合計時数	30	合計時数	30

[訳者注： 合計時数は単純加算で前期は 31、後期は 33 時間となっている。また「ハディース (2)」は原文から欠落している。]

4 学年

前 期		後 期	
教 科 名	時数/週	教 科 名	時数/週
クルアーン	3	クルアーン	3
タタール語	2	アラビア語作詩法	1
フィクフ (イスラーム法学)	2	フィクフ (イスラーム法学)	2
宗派とその分派 (1)	2	イスラームの宗派とその分派 (2)	2
フィクフ ([イスラーム法学の] 継承)	1	フィクフ ([イスラーム法学の] 継承)	1
アラビア語文学史	3	アラビア語文学	2
修辞学 (ал-бади')	1	修辞学 (ал-ма'ани)	3
アラビア語 (翻訳理論)	1	現代イスラーム社会	2
アラビア語 (講読)	2	アラビア語 (文法)	2
タフスィール (ハディースに基づく解釈) (4)	2	タフスィール (ハディースに基づく解釈) (5)	2
フィクフ (イスラーム法学) の基礎 (1)	2	ハディース (預言者ムハンマドの言行を記録したもの) (6)	3
イスラームへの召喚	2	イスラームへの召喚	2
ハディース (預言者ムハンマドの言行を記録したもの) (5)	2	ハディース (預言者ムハンマドの言行を記録したもの) (7)	2
アラビア語 (会話)	2	アラビア語	3
心理学	2	アラビア語 (翻訳)	1
合計時数	30	合計時数	30

[訳者注： 合計時数は単純加算で前期は 29、後期は 31 時間となっている]

5 学年

前 期		後 期	
教 科 名	時数/週	教 科 名	時数/週
クルアーン	3	クルアーン	3
アラビア語史料研究	2	コンピューター	2
イスラーム教授法	2	アラビア語教授法	2
英語	4	英語	4
外国語教授法	2	方法論（卒業論文）	1
現代イスラーム社会	1	イスラームの訓育	2
教育学基礎	2	タフスィール(ハディースに基づく解釈)(6)(テーマ別)	3
修辞学(ал-байан)	2	心理学	2
タタール語	1	タタール語	1
演説術(実践)	1		
合計時数	20	合計時数	20

②ロシア・ギムナジア No.37「教科課程表」

1 - 4 学年

分野(1-3 学年の表)	科 目	1a,б,в	2a,б,в	3a,б,в	計(1-3)	4a,б,в	計(4)
文 系 科 目	ロシア語	99/3	102/3	102/3	303/9	102/3	102/3
文 系 科 目	文学講読	66/2	68/2	68/2	202/6	68/2	68/2
文 系 科 目	タタール語	99/3	102/3	102/3	303/9	102/3	102/3
文 系 科 目	文学講読(タタール語)	33/1	34/1	34/1	101/3	34/1	34/1
文 系 科 目	外国語(英語)	-	68/2	68/2	136/4	68/2	68/2
数学と情報科学	数 学	132/4	136/4	136/4	404/12	136/41	36/4
社会科・自然科	まわりの世界	66/2	68/2	68/2	202/6	-	-
	まわりの世界(人、自然、社会)	-	-	-	-	68/2	68/2
芸 術	音 楽	33/1	34/1	34/1	101/3	-	-
芸 術	美 術	33/1	34/1	34/1	101/3	-	-
	芸 術(音楽・美術)	-	-	-	-	68/2	68/2
技 術	技 術	33/1	34/1	34/1	101/3	-	-
	技術と民芸工作	-	-	-	-	68/2	68/2
体 育	体 育	99/3	102/3	102/3	303/9	102/3	102/3
	宗教文化と世俗道徳の基礎	-	-	-	-	34/1	34/1
計		693/21	782/23	782/23	2257/67	850/25	850/25
1-3 学年	教育プロセス参加者により形成可能な部分						
	ロシア語		68/2	68/2	134/4	-	-
	文 学 講 読	34/1	34/1	68/2	-	-	
1-3 学年	週当たり最大時間数	693/21	884/26	884/26	2461/73	-	-
4 学年	学校コンポーネント(週6日制)						
	ロシア語	-	-	-	-	34/13	4/1
4 学年	週6日制での学習負荷最大時間数	-	-	-	-	884/26	884/26

〔訳者注:「a,б,B」はそれぞれのクラスを表す。各時間数は「総時間数/週当たりの時間数」となっている。〕

5－9 学年

科 目	5a,6,B	6a,6,B	7a,6,B	8a,6,B	9a,6,B	計
ロシア語	105/3	105/3	105/3	105/3	70/2	490/14
文 学	70/2	70/2	70/2	70/2	105/3	385/11
タタール語	105/3	105/3	105/3	105/3	70/2	490/14
タタール文学	35/1	35/1	35/1	35/1	35/1	175/5
外国語（英）	105/3	105/3	105/3	105/3	105/3	525/15
数 学	175/5	175/5	175/5	175/5	175/5	875/225
情報科学と情報通信技術				35/1	70/2	105/3
歴史(タタール人とタタルスタンの歴史を含む)	70/2	70/2	70/2	70/2	70/2	350/10
社会科（経済・法律を含む） 35/1	35/1	35/1	35/1	140/4		
地 理	35/1	70/2	70/2	70/2	245/7	
自然学	70/2				70/2	
物 理			70/2	70/2	70/2	210/6
化 学				70/2	70/2	140/4
生 物	35/1	70/2	70/2	70/2	245/7	
芸 術（音楽、美術、装飾的応用美術）	70/2	70/2	70/2	35/1	35/1	280/8
技術と民族工芸	70/2	70/2	70/2	35/1		245/7
生活安全の基礎				35/1		35/1
体 育	105/3	105/3	105/3	105/3	105/3	525/15
計	980/28	1015/29	1155/33	1225/35	1155/33	5530/158
学校コンポーネント（週6日制）	35/1	35/1				70/2
ロシア語	105/3	70/2	70/2	35/1	35/1	315/9
地 理		35/1				35/1
専門科目準備： 世界の芸術（17時間） 環境モニタリング（17時間） 河川学実用課程（17時間）					70/2	70/2
化学分析基礎						
週6日制での学習負荷最大時間数	1120/32	1155/33	1225/35	1260/36	1260/36	6020/172

10 学年 a クラス（化学－生物専攻）

科 目	10 a	2 年間の週当たりの履修時数
基礎科目		
ロシア語	1	2 (1/1)
文 学	3	6 (3/3)
タタール語	1	2 (1/1)
タタール文学	2	4 (2/2)
外国語（英語）	3	6 (3/3)
歴 史	2	4 (2/2)
社会科（経済・法律を含む）	2	4 (2/2)
地 理	1	2 (1/1)
物 理	2	4 (2/2)
体 育	3	6(3/3)
生活安全の基礎	1	2 (1/1)
計：	21	42 (21/21)
専門科目		
数 学	6	12(6/6)
化 学	3	6 (3/3)
生 物	3	6 (3/3)
計：	12	24 (12/12)
学校コンポーネント		
ロシア語	2	4 (2/2)
情報科学と情報通信技術	2	4 (2/2)
計：	4	8 (4/4)
計：	37	74 (37/37)

10 学年 6 クラス (社会一人文専攻)

科 目	106	2 年間の週当たりの履修時数
基礎科目		
タタール語	1	2 (1/1)
タタール文学	2	4 (2/2)
文 学	3	6 (3/3)
外国語 (英語)	3	6 (3/3)
数 学	4	8 (4/4)
経 済	0.5	1 (0.5/0.5)
物 理	2	4 (2/2)
化 学	1	2 (1/1)
生 物	1	2(1/1)
芸 術 (世界の芸術文化)	1	2 (1/1)
体 育	3	6 (3/3)
法 律	0.5	1 (0.5/0.5)
生活安全の基礎	1	2(1/1)
計 :	23	46(23/23)
専門科目		
ロシア語	3	6 (3/3)
歴 史	4	8 (4/4)
社会科	3	6 (3/3)
計 :	10	20 (10/10)
学校コンポーネント		
数 学	1	2(1/1)
生 物	1	2(1/1)
化 学	1	2(1/1)
情報科学と情報通信技術	1	2 (1/1)
計 :	4	8 (4/4)
計 :	37	74 (37/37)

11 学年 a クラス (情報技術専攻)

科 目	11a	2 年間の週当たりの履修時数
基礎科目		
ロシア語	1	2 (1/1)
文 学	3	6 (3/3)
タタール語	1	2 (1/1)
タタール文学	2	4 (2/2)
外国語 (英語)	3	6 (3/3)
歴 史	2	4(2/2)
社会科 (経済・法律を含む)	2	4 (2/2)
地 理	1	2 (1/1)
化 学	1	2 (1/1)
生 物	1	2 (1/1)
物 理	2	4 (2/2)
体 育	3	6(3/3)
生活安全の基礎	1	2 (1/1)
計：	23	46 (23/23)
専門科目		
数 学	6	12 (6/6)
情報科学と情報通信技術	4	8 (4/4)
計：	10	20 (10/10)
学校コンポーネント		
ロシア語	2	4 (2/2)
化 学	1	2 (1/1)
生 物	1	2 (1/1)
計：	4	8 (4/4)
計：	37	74 (37/37)

11 学年 6 クラス (社会—人文専攻)

科 目	116	2 年間の週当たりの履修時 数
基礎科目		
タタール語	1	2 (1/1)
タタール文学	2	4 (2/2)
文 学	3	6 (3/3)
外国語 (英語)	3	6 (3/3)
数 学	4	8 (4/4)
経 済	0.5	1 (0.5/0.5)
物 理	2	4 (2/2)
化 学	1	2 (1/1)
生 物	1	2 (1/1)
芸 術 (世界の芸術文化)	1	2 (1/1)
体 育	3	6 (3/3)
法 律	0.5	1 (0.5/0.5)
生活安全の基礎	1	2 (1/1)
計 :	23	46(23/23)
専門科目		
ロシア語	3	6 (3/3)
歴 史	4	4 (2/2)
社会科	3	6 (3/3)
計 :	10	20 (10/10)
学校コンポーネント		
数 学	1	2 (1/1)
生 物	1	2 (1/1)
化 学	1	2 (1/1)
情報科学と情報通信技術	1	2 (1/1)
計 :	4	8 (4/4)
計 :	37	74 (37/37)

科研費研究費補助金基盤研究（A）海外学術調査
「ロシア連邦 20 年の教育改革」
2012 年度エカテリンブルク・ハンティ - マンシースク教育調査報告
(2012 年 10 月 6 日～ 14 日)

遠藤 忠
松永 裕二
大谷 実一

訪問地：ウラル連邦管区；スベルドロフスク州エカテリンブルク市及びハンティ - マンシ自治管区ハンティ - マンシースク市

訪問地概要



ウラル連邦管区 (Уральский федеральный округ) は、クルガン州、スベルドロフスク州、チェリャビンスク州、チュメニ州、ハンティ - マンシ自治管区、ヤマロ - ネネツ自治管区の 6 つの構成主体からなる連邦管区であり、東はシベリア連邦管区、西は北半分が北西連邦管区、南半分が沿ヴォルガ連邦管区と接している。領域面積は 1,788,900 平方キロメートル (国土面積の 10.5%)、人口 12,080,526 人 (全人口の 8.5%) *¹で前回に比べ 2% 余り減少している。

スベルドロフスク州 (Свердловская область) はロシア連邦中央部の州。ウラル連邦管区 (2010 国勢調査人口 12,080,526 人) に含まれる。州都はエカテリンブルク。州名は革命家

* 1 2010 年国勢調査、ロシアの全人口は 142,856,536 人で、前回より 1.6% 減少している。2002 年国勢調査時では、ロシア全体の人口は 145,166,731 人、ウラル連邦管区では 12,373,926 人である。

のヤーコフ・スベルドロフ Свердлов, Яков Михайлович に由来する。面積 194,800km² (ロシア連邦の 1.2%)、人口 4,297,747 人 (2010 年) *²、人口密度 23 人 /km² である。

エカテリンブルク (Екатеринбург) は、ウラル山脈中部のアジア側斜面に位置し、ウラル地域重工業都市であり、交通の要衝である。スベルドロフスク州の州都である。人口は 2010 年の国勢調査では 1,383,179 人で、近年増加傾向にある*³。人口規模でみるとロシア国内で 5 番目に大きな都市であるという。1924 年から 1991 年までは、活動家ヤコブ・スベルドロフを記念してスベルドロフスク (Свердловск) と呼ばれていたが、現在は旧名に戻された。1723 年に、ピョートル 1 世によって建設された。町の名は、ピョートル 1 世の妻エカテリーナ 1 世に因む。ロシア革命の際、皇帝ニコライ 2 世とその家族はこの地に送られ、1918 年 7 月 17 日に銃殺された。また、ロシア連邦初代大統領エリツィンの出身地としても知られている。モスクワから東に 1667km の距離にある。ウラル山脈中部の東側 (アジア側) 斜面に位置し、イセチ川が流れる。40 キロメートル西には、ヨーロッパとアジアの境界線が走っている。ウラル地域の工業・文化・教育の中心地で、交通の要衝でもある。ウラル連邦管区の本部が置かれ、高等教育機関、博物館、劇場なども多数ある。

ハンティ - マンシ自治管区 - ユグラ (Ханты-Мансийский автономный округ-Югра) は、ロシア連邦中部のチュメニ州に属する自治管区。ウラル山脈の東側、西シベリア平原の西部に位置する。中央をオビ川、エルティシ川、ヴァフ川が流れる。この地域は、もともとユグラと呼ばれていた。ハンティ人*⁴とマンシ人は言語の上ではハンガリー人に近く、フィン・ウゴル系の民族である。12 世紀から 13 世紀にノヴゴロドの商人たちが交易のために訪れるようになる。1582 年、イェルマークにより征服され、ロシアの支配下に入った。1930 年 12 月 10 日にオスチャク・ヴォグル自治管区として設置され、1940 年にハンティーマンシ自治管区と改称された。さらに、2003 年 6 月 25 日ロシア連邦大統領令 841 号により現名に改称された。ユグラはハンティーマンシ人の古代ロシア名という。

原油と天然ガスを産し、その採掘・精製が主要な産業となっている。ロシア連邦でも有数の石油工業の拠点である。今日、人口の大部分はロシア人であり、ハンティ人とマンシ人の

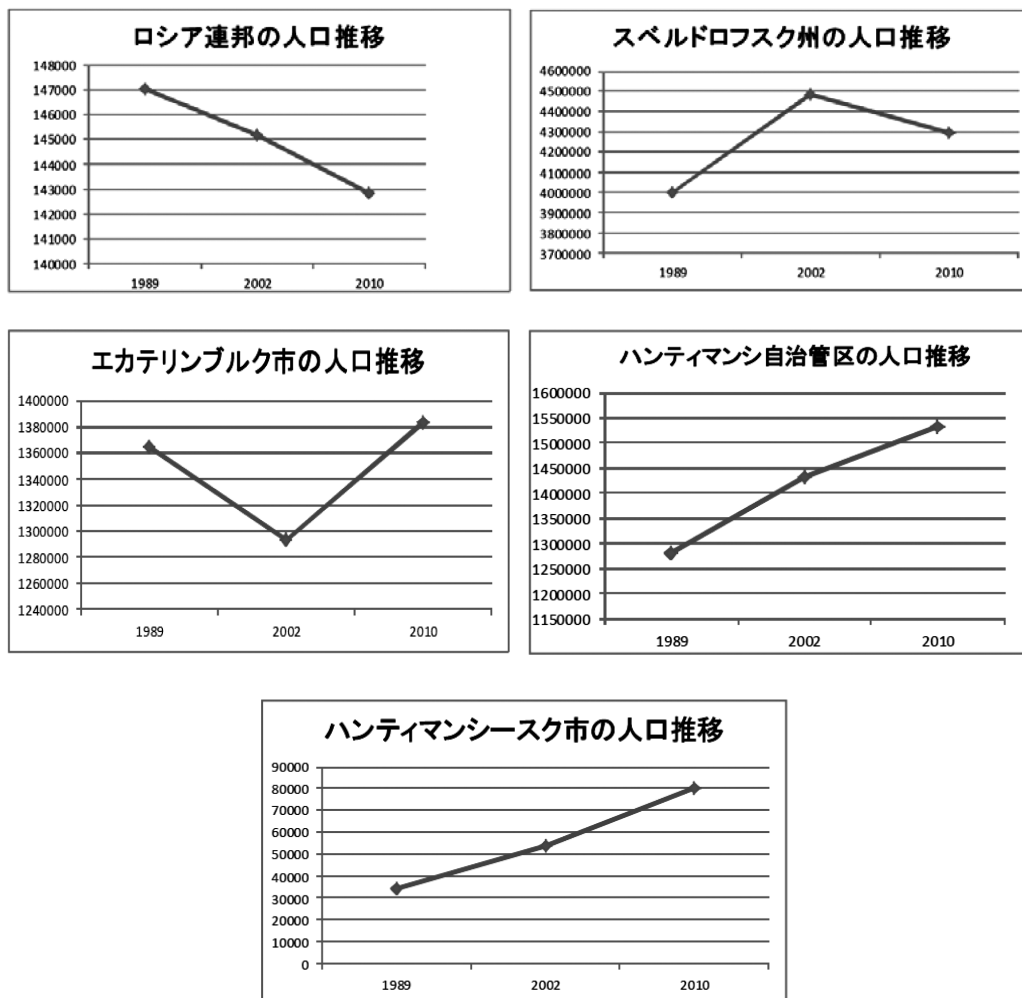
* 2 2002 年の 4,486,214 人より 188467 人減となっている。

* 3 1989 年ソ連国勢調査での 136 万 4,621 人、2002 年全ロシア国勢調査では 129 万 3,537 人で一時減少傾向にあったが、近年もち直している。なお、人口百万人以上の都市は、今回調査では全国で 13 都市である (前回も 13 都市)。

* 4 オビ川流域とイルティシ川東岸側に住むウラル語族系の民族。かつてはハンティ族の西方に多く住むマンシ族とともに「オプスキー・ウゴル」と総称され、ハンティ族は「オスチャク (Ostyak. 大河の民の意のハンティ語に由来)」として知られていた。ハンティ語はマンシ族のマンシ語とともにオビ・ウゴル諸語に分類され、ハンガリー語とも類縁関係にあり、ともにウラル語族のフィン・ウゴル語派をなしている言語である。シベリアではフィン・ウゴル語派はハンティとマンシだけ。ハンティ族とマンシ族は鉄器時代以降に分かれ、それぞれ独自の文化を持つようになった。ハンティ・マンシの両族は、紀元後 1000 年頃に東ロシアと西シベリアのステップ地帯から、東方・北方へと移動をはじめた。もともとは騎馬文化を持っていたようだが、厳しい自然が支配するシベリアにおいては使用に適さないため、先住民の生活を導入するようになった。10 世紀ころには北ルーシに居住するロシア人との接触をはじめ、11 世紀までにはノヴゴロド市からやってくる商人との定期的な交易を行っていた。その後モンゴル帝国の拡大にともない服属し、西シベリア汗国の中に含まれるようになった。16 世紀後半、ロシアによるシベリア征服によってその支配を受けるようになり、その苛酷な統治は人口を減少させ、文化を破壊・衰弱させた。

占める割合はきわめて小さい。これは、油田が発見された後に、多くのロシア人が流入した結果である。人口は2010年国勢調査で1,532,243人^{*5}、1989年より約25万人(約20%)増。また、ハンティ人の人口は19,068人、マンシ人は10,977人である^{*6}。自治管区150万人余りの人口のうち両民族あわせてわずか3万人(2%)ほどしか住んでいない。しかも、ロシア全体でも両民族の人口は4万3千人ほどである。

ハンティ・マンシースク(Ханты-Мансийск)は、ハンティ・マンシ自治管区の行政の中心。エルティシ川に臨み、エルティシ川がオビ川と合流する地点から約15km上流に位置する。人口は2010年の国勢調査では80,151人で、急増中である^{*7}。1930年に労働者の居住地として建設され、はじめオスチャコ・ヴォグルスクと呼ばれ、1940年にハンティ・マンシースクと改称される。1950年に都市として登録された。市街は、16世紀から知られるサマロヴォ村を含む。2004年にはエルティシ川を渡る長さ1,315mの橋がかけられた。以下、ロシア連邦、スベルドロフスク州、ハンティ・マンシースク自治管区、ハンティ・マンシースク市の人口推移のグラフを示す。



* 5 1989年国勢調査で1,282,396人、2002年国勢調査で1,432,817人である。

* 6 ロシア連邦全体ではハンティ人30943人、マンシ人12269人である。

* 7 国勢調査の結果では1989年で34,462人、2002年で53,953人である。

日程：2012年10月6日～14日

今回の調査では、以下の日程で、15の機関を訪問した。

月 日	訪問先・時間・記録担当者
10月6日(土)	成田発 12:05・SU263 便搭乗 モスクワ着 17:10 モスクワ発 23:50・SU1412 搭乗
10月7日(日)	エカテリンプルク着 04:10 ホテル・オネーギン (Онегин) 泊 ・市内見物ののち郷土博物館
10月8日(月)	① スベルドロフスク州教育省：松永 ② 47番ギムナジア：大谷 ③ 第16番普通教育学校：遠藤 ④ エカテリンプルク市教育庁：遠藤
10月9日(火)	⑤ ウラル国立経済大学：松永 ⑥ ウラル国立カレッジ：大谷
10月10日(水)	⑦ スベルドロフスク州外務省：遠藤 エカテリンプルク発 18:05・UT302 便搭乗 ハンティ-マンシースク着 19:50 ホテル・タライ Тарай 泊
10月11日(木)	⑧ 学校間学習コンビナート：松永 ⑨ 第1番ギムナジア：大谷 ⑩ 音楽芸術学校：遠藤
10月12日(金)	⑪ 第1番普通教育学校：遠藤 ⑫ 幼稚園：遠藤 ⑬ 少数民族センター：遠藤 ⑭ ユグラ国立大学：松永 ⑮ ハンティ-マンシースク自治管区教育・青年政策庁：大谷
10月13日(土)	ハンティ-マンシースク発 07:40・UT352 便搭乗 モクスクワ着 08:55 モスクワ発 20:00・SU260 便搭乗
10月14日(日)	成田着 10:20

エカテリンブルク到着

< 10月7日(日) >

市内見物ののち郷土博物館

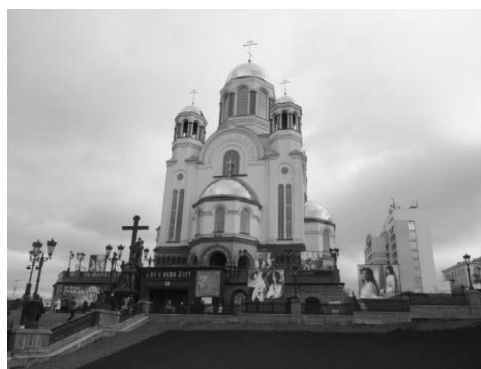
○タチシェフとド・ゲーニンの記念碑 (Памятник Татищеву и де Геннину) (右の写真)

本記念日は労働広場にある。エカテリンブルク市は 1721 年に彼らにより建設が開始された。公式記録によれば、市の誕生日は 1723 年 11 月 7 日 (新暦 11 月 18 日) とされている。



○血の上の教会 (Храм-на-Крови во имя всех святых в земле российской просиявших)

本教会は、ロシア革命後の 1918 年 7 月 16 日の夜にエンジニアのイパチェフ (Ипатьев) の家で処刑されたニコライ二世一家を悼んで、イパチェフ邸の跡地に 2003 年に建設された教会。建物の竣工日は一家の命日である 7 月 16 日である。ちなみに、イパチェフ邸は、その後革命博物館として使われていたが、1977 年、当時スベルドロフスク州共産党第一書記であったボリス・エリツィンの命令で取り壊されていた。



教会上層階は博物館になっており、ニコライ 2 世記念の品や家族の白骨化した遺体を掘り出す作業風景や調査記録などが展示してあった。1 階の礼拝室では一家の大きな肖像画が飾れており、人々がこの一家を神でもあるかのように礼拝するのに驚いた。



同じような名前で Санкт-Петербурク に「血の上の救世主教会」(Храм Спаса на Крови) があるが、もちろん別物。ペテルブルクにあるものは、1881 年ロシア皇帝アレクサンドル 2 世が、ナロードニキのテロに倒れたのを悼んでアレクサンドル 3 世によって着工された。しかし、完成は孫のニコライ 2 世の治世になってからである。祖父と孫とが同じような血なまぐさい名前の教会に祭られるのも、ロシア近代史の一面を象徴するものである。

○スベルドロフスク州郷土博物館 (Свердловский Обласной Краеведческий Музей) 住所は、г.Екатеринбург, ул. Мальшева, 46 で、入場料は 200 ルーブルである。1 階から 5 階まで階段を上りながら、展示室を見学する。(遠藤)



< 10月8日(月) >

【調査機関①】 スベルドロフスク州普通・職業教育局

(Министерство общего и профессионального образования Свердловской области)

訪問時間：9：00～10：15

対応者：エカテリンプルク市教育局長：ウームニコワ・エフゲーニヤ・レオニード
ブナ (Умникова Евгения Леонидовна),

オリガ・ゲニカニエブナ, スベルドロフスク, 州普通・職業教育省副大臣：
ミハイル・コリヤーギン, 副大臣もう一名 (本来会う予定になっていたクリ
コフ副大臣は急な会議のために欠席となった)

住 所：620075, г.Екатеринбург, ул.Мальшева, д.33

連絡方法：Тел.: (343)371-20-08, Факс: (343)-371-34-08

e-mail: info@minobraz.ru, http://www.minobraz.ru

スベルドロフスク州の人口は約 450 万人。普通教育学校が約 1,100 校、就学前教育施設が約 1,600 校、補充教育施設が 360 施設 (これらは市町村レベルの施設。ここで子どもたちは無償で芸術、スポーツなどの活動を行い、能力を発達させている)。州は教育においていくつかの特徴をもっている。州独自で開発した教育プログラムがあり、教育内容のアクセントもロシア連邦とは異なるところがある。この 20 数年間で州の教育のアクセントは、児童・生徒の社会的コンピテンシーの発達重視に移っている。2003 年、2005 年ではこの分野における達成は、PISA の結果として現れた。

以下質疑・応答

大谷質問：日本では知識・能力・技能という学力と、コンピテンシー、リテラシーとのバランスが悪く、うまく融合されていない。こちらでは、コンピテンシーを重視する教育に移行中とのことだが、このバランスはどのようになっているのか。

応 答：この問題はロシア連邦にもある。イギリスなどではコンピテンシーと学力のバランスをとる活動が行われているが、まだ解決されてはいない。スベルドロフスク州では州独自のコンピテンシーアプローチに基づくスタンダードを導入している。次の 3 つの要素：教科に関する学力、教科間の全般的な共通能力、社会的コンピテンシー間のバランスが必要である。

遠藤質問：2005-6 年頃から連邦構成主体では学級担任に関する職務規程を定める動きが出てきたが、スベルドロフスク州ではどうか。また、州では学級担任の待遇はどうなっているか。

応 答：1992 年から学級担任に関する法律や条例が出されていないのは確かである。州では「年間会議」という活動があって、この活動を通して教員の水準向上が図られている。学級担任の役割は、子どもたちが教育のルートを辿っていくことのコーディネートをすること、子どもたちの権利と利益を守ることである。これは、ロシアだけでなく日本にもある問題だと思うが、学力競争中心の教育を行う場合、子どもたちの人格に悪い影響を与えたり、トラウマを引き起こしたりする可能性がある。学級担任は、できるだけ子どもたちの活動を調和的にす

る役割を果たしている。州レベルの規程としては教員給与規程がある。これには、教員の活動効果を評価する目安が示されている。学級担任に関する規程を作成しようと思ったものの作らなかった理由としては、次の二つがある。①学級担任の活動は教員の主要な活動ではない、つまりそれは補充的な活動であること、②ロシアの場合、明確な規程を作成しても必ずしもその活動の改善になるとは限らないこと。学校レベルでは、学級担任の活動内容に関する説明書や教員の給与を定めた文書などがある。

エカテリンブルク市には、普通教育学校が168校あり約12万人が学んでいる。就学前教育施設は326校で園児数は約5万人。補充教育施設は18施設ある。学校には、普通教育学校とそれよりもステータスの高いリセ、ギムナジア、特定教科を深く学習する学校などがある。その内訳は、リセ12校、ギムナジア26校、特定教科を深く学ぶ学校25校である。

コリャーギン氏によれば、州の高等教育機関は30、その内の17が国立で13が私立である。州には、ロシア連邦全体で7つある連邦大学の一つ「ウラル連邦大学」がある。ウラル連邦大学は、「エリツィン記念ウラル国立技術大学」と「ゴリキー記念ウラル国立大学」が合併したものである。法律によって連邦構成主体である州は自分の大学を持つことはできない。市(町村)はその権限をもつ。例えば、エカテリンブルク市には、「エカテリンブルク現代美術アカデミー」という市立の高等教育機関がある。近年エカテリンブルク市では学芸員や芸術関係専門家の需要が高まったので、図書館、美術館、博物館、劇場などで働く専門スタッフを養成するために5年前にこの大学が開設された。この大学も州内の17大学の中に入っている*⁸。

州の大学全体での専攻は、産業、技術、人文など全部で約350ある。大学生総数は、約20万人でその内の約15%が私立大学生である。私立大学では、経済、マネジメント、法律、人文などが主として教えられている。エンジニア、技術、医学などは専門家養成に経費がかかるので私立大学では教えられていない。私立大学の授業料は大学によって異なる。企業が私立大学に入学生を派遣して学費を支払い、卒業後はその企業に就職させるというケースもある。授業料の支払い方法も1か月ベース、セメスターベース、年間ベースと色々ある。

大学の教員総数は約25,000人で、その内の約5,000人は修士・博士号を取得している。

大卒者が様々な企業に就職して、そこでの活動がうまくいくようにするために、大学と企業はPPP (Public Private Partnership) という形での連携を行っている。大学と就職先との関連性や関係は重要である。現在、州レベル、大学レベルで職業教育スタンダードの作成にとりかかっている。高等職業教育はロシア連邦の管轄下にあるが、スベルドロフスク州の大学の卒業生は基本的に州内で就職しているので、州は成績優秀な学生や教員に助成金や金銭的な支援を与えている。例えば、州知事は、毎年成績優秀な大学生235人に知事奨学金を与えている。また大学以外の高等教育機関の学生100人にも奨学金を与えているし、優れた大学教員にも知事

* 8 Википедия2012/07/21によれば、スベルドロフスク州の州都であるエカテリンブルク市には、国立大学17、私立大学1、私立大学15の計33の大学と他都市の大学の分校16がある。コリャーギン氏の説明によると、スベルドロフスク州内の大学数とエカテリンブルク市内の大学数は、ほぼ一致していることになる。スベルドロフスク州には、人口132万人のエカテリンブルク市に次ぐ大きな都市として、人口38万人のニジニ・タギル市、人口18万人のカメンスク・ウラリ斯克市、人口16万人のペルボウラリ斯克市などがあるが、これらの都市ではエカテリンブルク市内の大学もしくは他の都市の大学の分校が開校されているだけで、その都市に所在する独自の大学はないようである。

から助成金が与えられている。

高等教育機関では様々な訓育活動やガイダンス活動を行っている。例えば、ウラル国立経済大学（10月9日に訪問）は、「青年ユーラシア経済フォーラム」を主催している。エカテリンブルク市はエキスポ 2020 に応募しているので、同大学はそれに向けて2013年5月半ばに「国際知的フォーラム」を開催する準備を行っている。（松永）

【調査機関②】 第47番ギムナジア

(Муниципальное Общеобразовательное Учреждение Гимназия № 47)

訪問時間：10：40～14：00

対応者：クリュコーワ校長 (Крюкова Елена Михайловна) など

住 所：ул. Советская, д.24а

連絡方法：Тел.:8-912-64-222-55, HP: <http://www.gimnazium47.ru/>

学校の概要：校長室でクリュコーワ校長（写真右、エネルギーで話し始めたら止まらない）より、本校の概要を聞く。クリュコーワ校長は本校で17年間校長を務め、市・州・連邦レベルでの革新的教育実践を主導している。

本校は1959年に開校し、本年で53周年を迎える。1998年にギムナジアのステータスを得た。本校はエカテリンブルク市のユニークな学校である。それは、ギムナジアであるが、幼稚園（2-6歳）と初等学校を併設し、学校経営と教育内容・教授法（「テクノロジー」と呼んでいる）における一貫性を大切にする総合教育施設（コンプレクス）であるという点にある。コンプレクスとしては、ペレストロイカ時代からすでに22年が経つ。児童・生徒が2歳から17歳まで首尾一貫した教育を受けた後、本校では、上級学年のプロフィールクラスで職業オリエンテーションとして、大学とパートナーシップ（連携）を推進している。卒業後、生徒は、そうしたパートナー大学、主として「ウラル連邦大学」に進学する。



生徒数は、初等学校で520名、ギムナジアの5-9学年が596名、10-11学年で96名である。いずれも、1学年5クラス、1クラスは25-27人を基本とする。なお、上級学年では、プロフィールクラスを設けており、9学年で卒業する生徒がいるので生徒数は若干少なくなるが、生徒のニーズに合わせて5-6のプロフィールを設けている。教員数は77名、その他の職員は27名である。

本校では、新連邦スタンダードを他の学校よりも1年早く導入したエカテリンブルクで初めての学校である。新スタンダードの教材としては、モスクワの教育アカデミー（ブネーエフ、ペテルソン等のチーム）が開発した「学校2100」というプログラムを採用している。このプログラムは、特色ある現代的教授法（テクノロジー）からなっており、その中に「問題・イデ

オロジー授業」、「教科間授業」が含まれる（後にその授業を参観した）。本校は、エカテリンブルグ市・スベルドロフスク州・ロシア連邦の教員に対して上述の現代的教授法を教えるセンターの機能を果たしている。なお、教員の研修は国内だけでない。昨年は、英国の校長が研修に来校し、現在は、中国の学生が初等学校で教育実習を行っている。

教育プログラムは「人格」、「教科間」、「教科別」の3水準から構成されており、「システム・活動的アプローチ」を取り入れ、生徒の普遍的学習行為の形成を主目標としている。

本校の訓育の取り組みとして、「ギムナジア・アカデミー」と呼ばれる生徒による社会自治組織がある。本校では、子ども一人ひとりが自分の得意な分野を見つけるために、様々な機会を提供している。現在、5種類の活動を行っている。それらは、「科学(Академия наук)」、「記憶(Академия памяти)」、「創造と芸術(Академия творчества и мастерства)」、「スポーツと健康(Академия спорта и здоровья)」、「リーダーシップ(Академия лидерства)」である。「科学アカデミー」では、研究活動を行いその報告書を書いたり、課外でチェスや碁などのイベントを実施したりする。「創造と芸術アカデミー」では、社交ダンス、合唱、オーケストラ、絵画・芸術など種々のクラブ活動を行う。学校の廊下には、このアカデミーの卒業生の絵画作品（主に風景画）の個展を開いている。また、本ギムナジアでは、年間テーマを設定している。昨年は「文化対話におけるギムナジア」で、第二外国語で学ぶ言語（英語とフランス語）圏の文化を取り上げた。今年は「ロシアの市民性」（ロシアの運命における私の運命）である。「創造と芸術アカデミー」では、踊り場等に年間テーマに即した絵画や装飾を行っている。「スポーツ・健康アカデミー」では、健康をめぐる様々なテーマに関するプロジェクトを行い、電子新聞を作成する。スポーツ競技として、極真会空手、バレーボール、サッカー、テニスなど各種の競技に取り組んでいる。「リーダーシップ・アカデミー」は、学校の大きなイベントを組織することを通してリーダーの才能を育成するものである。最も重要なものは「良い行いのアカデミー」で、ベテラン（退職教師や退役軍人など）や孤児院などに対して社会的に有用な活動を行うことである。本日（訪問日の月曜）は、上級生が下級生に授業をすることになっている。この6年間、本校の卒業生の中で、企業の指導者になったり、市・州の行政機関に勤める者の割合が多く、これは、各アカデミーの活動の成果のあらわれであると考えている。

学校の教育活動は、児童・生徒の健康等に配慮し、5週間が過ぎたら1週間の休暇を取ることになっている。各休暇では、特定の目標を定め、その活動を学校外で行うことにしている。例えば、児童・生徒は、休暇を利用して、リーダーシップ、家族、創造、芸術、プロジェクト修学旅行などに取り組む。

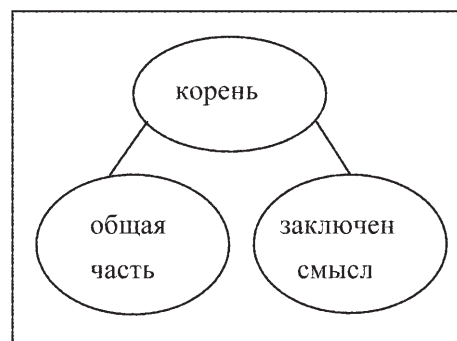
授業見学：3年と6年の授業を参観する。

3年の授業は、「問題・イデオロギー授業」というテクノロジーを用いたロシア語の授業の一部である。授業の目的は、新しい知識の発見である。そのために、まず動機（モチベーション）を高め、問題を持たせ、その解決を通して、児童が新しい



知識を発見するよう授業を組織する。

授業の実際：学習内容は、「つづり：語根における子音 (Орфограмма:согласная в корне слова)」という新しいテーマである (以下の部分は、正書法に関することであるが、筆者が専門外であるため誤りがあることを恐れる)。授業では、電子ボードが使用される。「語根(корень слова)」の概念(「主要部 общая часть」と「含意(заклучен смысл)」)を、図を用いて確認する。場面として、「秋に、アンナ (Анна) は友達のアッラ (Алла) とキリル (Кирилл) と庭で人参 (морковку)、玉ネギ (луковки)、レタス (салат) を取る」お話しをする。お話しに出てくる語を、電子ボードに示し、ペンでタッチして2つのグループに分ける。「人参、玉ネギ、レタス」のグループは、庭で採れる植物・野菜の名前。「アンナ、アッラ、キリル」は人の名前である。他に、分類する観点はないか。後者は、子音が2つ。ペアになっている子音。前者は、アクセントがない母音。「ペア子音」と「二重子音」は、どう区別するか。この例を動機付けの契機として、児童に考えたい問題を設定させる：「この他に語根における子音のつづりのタイプはないか」。教師は、児童に、「秋」を表現する形容詞を挙げさせる：「美しい」、「悲しい」、「静かな」、「黄金の」。教師は秋に関する語を提示し、児童は小グループを編成し、これらの言葉を正しく書く。(ここで次の授業へ移動する)



教科間授業は、ナターリア・シュマコーワが1-9学年向けに開発した英才教育プログラム (大統領から表彰されている) に基づくもの。本校教員が興味を持ち、モスクワで研修を受けて、6-7年前から導入している。学校コンポーネントとして位置付け、週1回2時間続きで実施している。このテクノロジーは、年間テーマを設定し、児童のモチベーションを高めながら、グループで探究的なプロジェクト活動 (問題の定式化、仮説設定、調査、整理、解釈、評価) に取り組むことを通して、児童の一般的・普遍的な能力 (分析する、批判的に考える、重要な要素を同定する、体系化する、説明し・論駁する、など) の発達をめざす。教科間授業では、児童・生徒の成績評価を行わない。年間テーマは、初等学年が「変化」、「影響」、「秩序」。5年は「継続性 (преемственность)」(初等学校から基礎学校への接続)、6年は「システム」、7年は「力」、8年は「相互関係」、9年は未定である。

教科間授業は、児童・生徒に、従来の教科の個別・離散的な狭い世界を拡大し、システムをなす一般的・普遍的な能力を育成しようとする。これは、新スタンダードがめざすコンピテンシーの育成という課題にも対応している。シュマコーワは、人文・自然科学・数学の分野の統合が大切であると考え、基礎学校では3名の異なる教科の教師によるチーム・ティーチングにより授業が行うことを提唱している。3名の教師チームは年間テーマに照らして教師の希望に基づき編成される。例えば、「システム」をテーマにする際には文学・地理・数学の教員がチームを組んだが、「力」をテーマにする場合は物理の教員がチームに入ることになる。授業では、帰納的・演繹的・活用的など、思考の性質に応じて3名のうちだれがリーダーになるかが変わる。3名の教員がチームで授業をすることで、児童たちにもチームで協働すること (チーム、リーダー、役割分担の意味) はどういうことであるかについて、そのモデルを示す

ことができる。授業における教師の役割は、チュータ的なものであり、児童がグループワークをするとき、教師はチームワークの調整を行う。本校の授業方法はシュマコーワの原理に従うが、授業の内容は英才児だけでなく一般の生徒たちにもわかりやすいよう教師が工夫する。



教科間授業を実施することにより、従来の教科の授業がやりよくなった。教科間授業で児童が学んだ能力は、各教科の授業でも発揮されている。教師も、他の教科の教師と関わることで、視野が広がり、考え方が変わる。児童よりも、むしろ教師の方が変わった。次いで、3年の授業を参観する。今年の年間テーマは「影響」であり、現在はその中で難しい概念である「時間」について探究している。児童は4名でグループを編成をしている。スクリーン（電子ボードでない）にPPTで「時間：多義的な概念（Время – многозначное понятие）」というタイトルで、時間の様々な性質が示されている：不可逆な（необратимо）、止まり得ない（нельзя остановить）、過去から未来への運動を示す（показывает движение от прошлого к будущему）、現実的であり空想的でもある（бывает реальное и сказочное）。

授業のテーマは、「ギムナジアは今週金曜日に53周年の誕生日を迎えるので、皆でプレゼント（紙で作った作品）を贈ろう」。チーム（グループ）リーダーは、紙とハサミを配る。教師は、ハサミ使用のルールと切り屑の処理の仕方を注意した後、児童は紙に印刷された花の型を切り取る作業に取り組む。作業はベルの合図で開始し、ベルの合図で終了する。作業を終えた後、教師は、「作業にとれくらい時間がかかったか」と問う。児童は、3分、5分、15分10分、14分などと答える。教師は、「ベルとベルの間、同じ時間だけ作業したのに、どうして時間が違うのか」と問う。教師「どのような仮説を立てることができるか。」児童「作業中、時間を気にしなかった」、「時間をはっきりと測らなかった」。教師「一人ひとり速さが違うのですね」。児童「一人ひとり自分の時間の感覚が違う」（仮説）。教師は、スクリーンに「仮説：人はそれぞれ時間の感覚が違う」を提示する。教師は「賛成ですか」と児童に問う。「どうして、感覚が違うのでしょうか」。児童「人によって取り組んでいる活動が違うから」、「それぞれ自分の時間を持っているから」、「時間を見ないから」、「いろんなテンポがあるから」と答える。（ここで次の教室に移動する）

6年の授業を参観する。授業は週1回2時間続きである。この授業では、3名の教員（文学、



地理学、数学）がティーム・ティーチングで行う。児童はグループをなしており、黒板には「システム」に関して調べた内容を整理した紙が貼ってある。各グループが順番にその成果を発表し、他のグループは質問をし、できばえを評価する。スクリーンには「計画：1. 当該のシステムの非標準的な機能を提案しなさい。2. その機能の実際

的な意義（解決された問題の重要性）を明確にしてください。3. それらの機能が具体化される「リアリティ」を評価してください。」と書かれたPPTのスライドが示されている。指導法担当の副校長が、授業の説明をする。この授業は「システム」、標準的なものを非標準的な解決方法によって考察すること。例えば、図書館というシステムについて、非標準的な機能を考え、その機能はどれほどリアリティがあるか、その機能によりシステムがどのように変化するのか等を検討する。

授業の実際。あるグループは「交通システム」について検討したことを発表する。このグループは、「バスを寮にする」という提案をする。教師「バスや飛行機が人を運搬する機能ではなく、そこに人が居住する空間にする。この場合、システムは変わりますか。」児童「交通システムは破壊されます、変わってしまいます。」「一部の乗り物だけを変える。」「乗り物に絵をかいて移動美術館・博物館にし、我々のところに来てもらう。教師「その交通機関を一時的な住まいとするのですか。」「例えば、工事現場では、作業者のための一時的な住まいを作らなければならないですね。」他のグループの児童「一つの提案があります。バスをアートオブジェにしてはどうですか。教師「ここにはないですが、モスクワのアルバート通りに、トロリーバスのアートオブジェがあり、喫茶店になっていますね。」「みなさんはアートオブジェの話をしてしていますが、現実的な話をしましょう。バスは使えなくなったとき、それを一時的な住居として使えますね。」「バスのシステムは変わるんですか。他のグループは、「スーパーマーケット（本来の機能は品物の販売である）を空港のターミナルにする。」という提案をする。教師「ビソツキービルや大病医の屋上には、ヘリコプターが離発着できるスペースがありますね。」児童「新しい空港を作ったほうが、スーパーを空港にするよりもやりやすいですね。」「スーパーから遠い人が、ヘリコプターに乗って買い物にすることが出来る。」「みなヘリコプターを持っている訳ではない。教師「みなさんのプロジェクトを、HP等を使って、大型スーパー・チェーンに提案すればいいじゃないですか。次のグループは、「人工池を造る。池には、通常、植物や魚が生息しており、動物が水を飲んだり、人が休憩したりする。私たちは、池を遊園地にし、ボート、スロープ、ジャンプ台などを作る。その際、魚は他の場所に移動します。教師「このような池に変えると、私たち都会の人には何かよいことはありますか。児童「遠くの池に行けない人が、近くの池で娯楽をすることが出来る。教師「遠出できない人には、野外遊園地はプラスの機能ですね。」「遊園地が新しくできると、他の遊園地の行列がなくなり、お金も儲かります。教師「システムは変わりますか。児童「変わります。教師「授業のまとめをしましょう。最初、一本のロープについて考えました。普段、ロープは何かを結んだり、つないだりします。しかし、それに他の新しい機能を追加することもできました。例えば、海に行ったとき、それは、釣り道具、網、海水のフィルターとしても使うことができます。みなさんが、グループで考えたことは、通常の機能に新しい非標準的な機能を追加することでした。その学習を通して、「システムの機能が変わると、システム自体が変わる」ことを学びました。」児童は、この結論をノートに書き込む。

次に、「ギムナジア・アカデミー」の活動を参観する（各2-3分程度）。先ず、9年生の「リーダー・アカデミー」の活動。上級学年の生徒が様々なタイプの集団ゲームを紹介する（通常の授業と異なり、楽しい雰囲気、生徒の笑顔が絶えなかった）。その際、リーダーを決めたり、集団のモチベーションを上げたりする仕方を紹介する。次に「科学アカデミー」の活動。このアカ

デミーの部員は様々なコンクールの優勝者で、今は、「何を？どこで？いつ？」という市・州レベルの競技に5年と8年のグループが参加するための準備を行っている。次に、「健康・スポーツアカデミー」の活動。このアカデミーの生徒は、健康やスポーツに関する慈善事業を計画する。生徒は、今週金曜日の53回の開校記念日に向けて、本アカデミーのスポーツ競技の歴史にちなんだ事業を企画している。次には、別の「リーダー・アカデミー」の活動を参観した。10月5日の自治組織の日に、半数の生徒が教師役・残り半数の生徒が生徒役となって活動を行ったことについて、今日は報告会を行っている（10点満点の評定、良かった点と改善すべき点の確認など）。生徒は、教師という新しい経験をし、教師とは生徒のためにとっても大変な仕事をし、教師の仕事の大変さを理解した。次は、「創造・芸術アカデミー」の活動。53回の開校記念日に披露する「第47番、大好きな学校」という舞台芸術（パフォーマンス）のシナリオと役割分担を話し合っている。別の「創造・芸術アカデミー」の活動として、男子生徒が木材加工機械を使って、孤児院の子どもたちに贈る木工作品を作成している。

学校付設教授法センター:アカデミーの活動の参観を終え、10台程度の検索用のコンピュータが設置された図書閲覧室に案内される。ここで、「プリズバーニエ」と呼ばれる教員研修センターについて説明があった。センター長から説明があった。十数年前に、エカテリンブルグ市教育庁が本校に教育教授法センターを開設した。近年、ロシアの教育学で革新的な教授法（テクノロジー）が開発され、本校の教員はそれぞれの教授法の開発者のもとで直接研修を受け、理論・実践的知識を習得し、研究セミナーや公開授業を通して、その教授法を本市ならびに州の教員に啓蒙・普及を図っている。毎年、千人以上の教員が本校で学んでいる。昨年より全ロシア教授法フォーラムの開催している。その際には、研究報告書をCDで作成し、配布している。本年、新しい試みとして、教員だけでなく、学校の自治組織のリーダーを集めて高い水準の意見交換を行う。本校が好んでいる教授法の一つに「知的カードメソッド」がある。校長は、このメソッドを用いて、新しいプロジェクトを開発したり活動成果を評価したりしている。この後、本日の学校訪問について、知的カード法を用いた議論が行われた。黒板の中央に「第47番ギムナジア」と書き、それから連想される言葉を出し、概念地図を作っていくものである。（通訳のカーチャさんの言葉は、「疲れた」であった。）（大谷）

【調査機関③】第16番普通教育学校

(Муниципальное бюджетное общеобразовательное учреждение средняя общеобразовательная школа №16)

訪問時間：14：50-16：40

対応者：ベズボロティコ校長 Безбородько Любовь Борисовна

住 所：г.Екатеринбург, ул.Павла Шаманова, д.24

連絡方法：Т/Ф; (343) 366-82-00, e-mail;academschool16@mail.ru,
сайт;академшкола16.рф

2011年8月に開校した新しい学校。学校のあるアカデミーチェスキー地区そのものも新開地で、周辺は団地の建設中。学校も周囲の建物も鮮やかな彩色を施され、遊園地にでも迷い込んだようで現実感に乏しい風景。校舎は4階建て、低学年用の建物は写真に見るように空色、青灰色、オレンジ、黄色、緑、薄緑の6色に塗り分けられている。



開校2年目だが、生徒数は1847名。1年目の昨年が906名だから1年でちょうど倍増。最近のエカテリンブルク市の人口増加を象徴するような学校だ。



校舎の収容能力は1000人なので、今年から2部授業を実施している。5年生以上が1部、1～4年生が2部だ。標準学級規模は25人だから、全校で74学級、各学年6から7学級の計算だ。実際、授業時間割表でみると、各学年の学級数は1年生は不明だが、2年生8学級、3～5年生各7学級、6～8年生各6学級、9年生5学級、10年生4学級、11年生3学級となっており、低学年に多くの生徒が集中していることがわかる。住民の年齢層が若いことがその背景にあるのだろう。



ちなみに、付近にもう一つの学校が建設予定。完成すれば、生徒の一部はそちらへ移り、2部授業は解消する。玄関ホールには、周辺地区（アカデミーチェスキー地区）の開発計画の模型（前ページ写真）が展示されている。色が付けられているところが建設済みだ。地区の中心部にあたり、今のところ全体の4分の1程度だ。

授業時間割は、下に示すように少なくとも2種類あり、やや複雑である。そのせいか、3階の物理教室（No.316）からの退出についてくどくどと述べた注意書きが廊下に掲示されている。

物理教室に掲示してある時程表

第1 交替組		第2 交替組	
第1 校時	8:30 – 9:10	第1 校時	13:10 – 13:50
第2 校時	9:20 – 10:00	第2 校時	14:00 – 14:40
第3 校時	10:20 – 11:00	第3 校時	15:00 – 15:40
第4 校時	11:20 – 12:00	第4 校時	15:50 – 16:30
第5 校時	12:20 – 13:00	第5 校時	16:40 – 17:20
第6 校時	13.10 – 13:50		
第7 校時	14:00 – 14:40		

美術教室の授業時間表（玄関ホール掲示のものと同じ）

第1 交替組		第2 交替組	
第1 校時	8:00 – 8:40	第1 校時	14:00 – 14:40
第2 校時	8:55 – 9:35	第2 校時	14:55 – 15:35
第3 校時	9:50 – 10:30	第3 校時	15:50 – 16:30
第4 校時	10:45 – 11:25	第4 校時	16:45 – 17:25
第5 校時	11:40 – 12:20	第5 校時	17:35 – 18:15
第6 校時	12:30 – 13:10	第6 校時	18:20 – 19:00
第7 校時	13:15 – 13:55	第7 校時	19:05 – 19:45

校舎の向かい側には運動場 (стадион) がある。運動場には陸上トラックとサッカー場、その他ボール競技場が設置されており、広々としてしかも立派。これが現在の国の基準による運動場だという。

教員は現在 90 名だが、まだ不足しており、募集中。ほとんどがこの地区に住んでいる (83 名)。

週 6 日制を採用している。今年度から 1～9 年生の教科の授業は月から金曜日までに配置し、土曜日は訓育・ガイダンスのみを行うようにしている。学級の時間は土曜か平日の空いた時間を探して行っているという。玄関ホールに掲示してある全学年の授業時間割表でも 9 年生までは月曜日から金曜日までしか示されていないが、10 年生と 11 年生は月～土まで示されている。3 年 D 組、5 年 D 組及び 10 年 A 組を例にとると下表のとおりである。3 年 D 組では、週 22 時間授業でその中に「学級時間」が明示されている。また、この学年は 2 部に属するが、日によっては標準の授業開始時間より早い時間帯に置かれている授業もある。これは 3 年の他の学級も同様である。5 年生及び 10 年生は第 1 部に属し、1 校時は先に述べたように 40 分であるが、1 週間で 5 年生で 29 校時、10 年生で 37 校時の授業が行われている。学年による授業時数の違いが日本の学校より大きい。また、中等以上の学年の授業時間表には、「学級の時間」がみられない。

3 年 D 組の授業時間表

	月	火	水	木	金
				英 語	技 術
1	文学読書	ロシア語	体育(ダンス・ホール)	ロシア語	数 学
2	数 学	数 学	文学読書	数 学	ロシア語
3	ロシア語	周りの世界	技 術	周りの世界	学級の時間
4	音 楽	文学読書	英 語	美 術	—
5	—	英 語	—	—	—

5年D組の授業時間表

	月	火	水	木	金
1	数 学	数 学	文 学	—	ロシア語
2	体 育	音 楽	数 学	数 学	自 然 科
3	美 術	ロシア語	技 術*	文 学	数 学
4	歴 史	自 然 科	技 術*	芸 術	安全基礎
5	ロシア語	英 語*	英 語*	ロシア語	英 語*
6	情 報*	文 学	ロシア語	体 育	文 学
7	—	—	—	—	—

*印は2グループに分かれて授業実施。

10年A組の授業時間表

	月	火	水	木	金	土
1	数 学	英 語*	情 報*	社 会 科	技 術	英 語*
2	物 理	文 学	化 学	数 学	物 理	ロシア語
3	情 報*	数 学	社 会 科	英 語*	数 学	社 会 科
4	歴 史	数 学	生 物	文 学	世界芸術文化	文 学
5	体 育	物 理	歴 史	文 学	安全基礎	体 育
6	英 語*	ロシア語	ロシア語	歴 史	歴 史	—
7	文 学	—	地 理	—	—	—

*印は2グループに分かれて授業実施。

到着後すぐに校内を見学。1時間たっぷり。校舎の各階には「生徒の学習意欲を刺激するために」すぐれた業績を上げた歴史上の人物や子どもたちに人気のキャラクターの画像が大きなアクリル板に印刷されて、飾られている。建築設計の時でなければできないデザインだ。校長たちの教育観が建築に反映しているというべきか。



見学先：コーラス・ホール (вокальный зал)、化学教室、調理室、女子の家庭科 (裁縫)、6年生技術の授業、体育 (女子、モダンダンス)、生物、美術科授業、10年生化学授業、物理学教室、数学 (最小公倍数)、情報技術 (図形のかき方)、守衛室 (監視カメラの映像が36か所以上)。1階の玄関ホールには、有料サービスの掲示2種 (「5～6歳児の発達の学校」と「一

歩ずつわかりやすい外国語学校」。「発達の学校」の方は15名ずつ6クラスの名簿が脇に貼り出されている。プログラムは週4日、25分授業が1日3コマから4コマ。(遠藤)



【調査機関④】 エカテリブルク市教育局
(Администрация Екатеринбурга Управление Образования)
訪問時間：17：15 - 18：25

対応者：ウムニコワ教育長 Умникова Евгения Леонидовна (начальник)
ロパト्यूク次長 Лопатюк Наталья Александровна
(заместитель начальника по вопросам содержания и экспертизы качества образования)
クディノワ部長 Кудинова Татьяна Геннадьевна
(начальник отдела по вопросам содержания и экспертизы качества образования)

住 所：г.Екатеринбург, ул.Ленина 24а

連絡方法：тел.:(343)371-80-12

факс :(343)371-55-73

kudinovata@eduekb.ru

所在地名のレーニン通りそのままに教育庁がある市庁舎の向かいには、大きなレーニン像が立っていた(右の写真)。

ウムニコワ教育長の説明：本市では、シュマコーワの開発した教科間学習指導(меж-предметное обучение)を採用している。その狙いは、初等教育段階と中等教育段階の接続性を高め、中等学校の卒業までに生徒たちにリーダー性を育成することである。本日、見学してもらった47番ギムナジウムと新しい地区につくられた16番学校は、そのモデルでもある。

本市の教育の概要は以下のとおりである。

初等中等普通教育学校の数は165校、うちギムナジウム27校、リセ11校、特定の教科を



深く学ぶ学校 20 校、生徒数は約 12 万人。就学前教育施設は 294 園、児童発達センター 13 施設、園児は約 5 万人。補充教育機関は 20 施設である。なお、この補充教育機関は教育局管轄のものだけであって、この他に、文化局管轄の音楽・芸術系のものや、体育スポーツ局管轄のスポーツ学校が 39 校がある。これら広義の児童補充教育機関に通う青少年は全体の約 70%に上っている。その指導員は約 1 万 4 千人である。



立派な運動場が設けられているが、新しい学校に見られる運動場 (стадион) は、2004 年開始の学校改修プログラムによって設置されるようになったものである。また、この 10 年間で建設された学校はみな運動場をもっている。ただし、この近くにある No.9 ギムナジウムの運動場は小さい。このほか学校には体育館があり、週 3 回の授業が行われている。

エカテリブルク市は 7 地区からなっているが、現在新しい住宅地区の建設が進められているが、まだ、5 分の 1 程度しかできていない。完成は数年後の予定だが、完成すればそこは新しい行政地区 (район) となる。エカテリブルク市は人口増が維持されている。

表. エカテリブルク市の教育機関

機 関 種	機関数	小計	人数
就学前教育施設* ⁹	294	307	約 5 万
児童発達センター	13		
夜間 (交代制) 普通教育学校	1	165	約 12 万人
ギムナジウム	27		
リセ	11		
特定教科を深く学ぶ学校	20		
中等普通教育機関	106	21	不明
補充教育機関	20		
市立児童 (青少年) 創造宮殿	1		
教育センター* 1		7	不明

* 1 州立機関 1 を含む。障害児のための遠隔教育及び対面教育を行う施設。

教員不足の問題について：最近では幾分増加が目立つようになっている。要因としては給与の改善があげられる。もともとエカテリブルク市は豊かなところで、'90 年代でも給与の未払いは起こらなかった。

* 9 この中には、健常児のための普通幼稚園 180 園の他、障害児教育タイプ幼稚園 34 園、複合タイプ幼稚園 66 園、一定の発達活動を優先する普通幼稚園 5 園、病弱児等のための養育幼稚園 9 園を含んでいる。なお、2008 年 10 月の「就学前教育機関標準規程」の改正によって、就学前教育機関と初等教育機関の一貫機関化が可能となったが、ここでは、以前どおりの制度であるようだ。

教員の給与改善にあたっては、2006年の国家優先計画「教育」の影響が大きかった。学校には100万ルーブル交付され、使い方は学校裁量にゆだねられた。教員にもはじめ10万ルーブル、後に20万ルーブル支給された。このことはとても大きな意義を持っていた。この優先計画ではすべてのレベルに対する国家支援が提供され、学級担任への手当もこの中に含まれていたし、生徒に対する奨学金もあった。

国家教育スタンダードについて：今年度は実施2年目。課外活動の指導員は専任である。人材は主に補充教育の指導員から。

民族教育について：民族間の交流プログラムの成果について話そう。教育局はウラル連邦大学に依頼して学校の生徒たちにおける他民族に対する心理的な状況を調査した。主たる調査対象は遠隔地の多民族学校である。調査の結果、それらの学校では、民族の異なる生徒たちの間に心理的緊張や葛藤がないという状況が明らかにされた。そのような状況をもたらした要因として、学校ばかりでなく未成年者心理支援センターも加わり、いろいろな民族文化に関する知識を与え、生徒たちを仲良くさせたり、他民族に対してポジティブな感情をもたせるような行事を催していることがあげられる。行事は、たとえば、「友人の町」「演劇」「合唱祭」「民族舞踊」「モダンダンス」などの文化的フェスティバルや、コンクール、健康フェスティバル、職業オリエンテーション、ボランティア運動などである。これらを7つの地区それぞれで実施している。(遠藤)

< 10月9日(火) >

【調査機関⑤】ウラル国立経済大学

(Уральский государственный экономический университет)

訪問時間：9：00～12：00

対応者：学長：フョードロフ・ミハイル・バシーリエビッチ

(Фёдоров Михаил Васильевич)、

第一副学長：マラムウイギン・マクシム・セイゲエエービッチ

(Марамыгин Максим Сергеевич)、

青年プログラム担当：副学長ガダビウイフ・エレナ・セルゲーエブナ

(Годовых Елена Сергеевна)、

教学担当副学長、国際協力局長：ブラソワ・ナターリヤ・ユーリエブナ

(Власова Наталья Юрьевна)、

国際教育センター長：グープキン・ドミトリー・フェドロービッチ

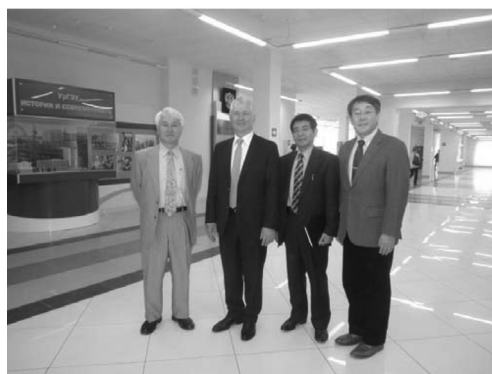
(Губкин Дмитрий Федорович)

住 所：620144, Россия, Екатеринбург, ул.8 Марта, 62

連絡方法：Tel/ファクス:+7(343)247-02-46, e-mail: rector@usue.ru, <http://www.usue.ru>

まず学長から次の説明を受けた。

本学は一週間後に創立 45 周年を迎える。1960 年にウラル国立大学に経済学部が設置された。1965 年にモスクワ国民経済大学のエカテリンブルク分校が開設された。1967 年にウラル国立大学経済学部と上記分校が合併して一つの経済大学となった。これが本校である。当時の名称は、университет ではなくて институт であった。当時、ソ連ではいくつかの国民経済大学が創設された。国民経済大学の目的は、国民経済を運用・運営する人材の養成で、共産党はそのような専門家が不足していることを理解していた。製鉄業、建設業、鉱山業などの専門家の養成だけでなくサービス業の専門家の育成も重要だということがわかってきた。当時は、経済、金融、サービス分野の人材養成が必要となった過渡期ということができる。当時の国民経済大学は、全て同じような構造を持っていて、経済、金融、公共外食、販売



などの分野の専門家を養成することがその主要な任務であった。食材加工、飲食店サービス、販売などの専門家を養成する大学は、エカテリンブルグの東 1500 キロ、西 1500 キロの範囲にはなかった。100 万人程度の人口をもつ都市、チェリャビンスク、ペルミ、チュメニ、クルガンなどでは、このような食材加工、飲食店サービス分野の人材養成を行っていなかった。ロシア連邦崩壊後の教育システムの市場化にともなって、地方でもこのような専門家の養成が始まった。ただし、一分野の専門家養成システムを形成するまでには、15 年から 20 年かかる。

本大学は、経済、金融、公共外食、食材加工、販売などの専門家の育成では最高水準にあるが、いくつかの分野では欧米の水準の方がはるかに高い。例えば、フランスの高等料理人学校での専門家養成は、こちらよりもはるかに高いレベルにある。問題は、我々の人材養成活動はスタンダードによって制限されていることである。そのスタンダードは最近までかなり厳しかった。例えば、ケーキなどのデザート作成を学ぶ時間は、我々の所では 8 時間に過ぎないが、フランスの高等料理人学校ではそれを 2 年間かけて学んでいる。だから、現在、ロシアでは第 3 世代のスタンダードが導入されている。教育内容の 50% 程度はスタンダードによって決められるが、残りの 50% は我々で決めることができる。

本大学には、経済学部、金融・法律学部、マネジメント・情報学部、販売・食事・サービス学部の 4 学部がある。教員数は 560 名。その内 80 名が博士で 240 名以上の博士候補がいる。本大学に通学している学生数は 5000 名強。4 つの分校があり、遠隔教育センター、通信教育センター、第二高等教育部などがある。カレッジ卒者を対象とする短期コースもある。これらの分校やコースの学生も含めると学生数は 26500 名になる。

本大学の課題は、これからいっそう国際交流を発展させることである。そのためには英語が不可欠である。今年から英語の授業を週 6 時間と倍増した。これは国家スタンダードに定め

る基準の3-4倍である。現教育科学大臣（ドミトリー・リワノフ）は、かつてモスクワの鉄鉱大学の学長だったが、その時に週8時間の英語の授業を導入した。本学もこれを見習った。インドのオプテック社と協定を結び、同社の「オプテック英語プログラム」を導入している。オプテック社は、英語を早く修得させる学習法や教材を提供する会社である。本学の卒業生一人一人が自由に英語を駆使できるようになることを目指している。近い将来英語で講義を行う教員を増やす予定だ。また、定期的に外国人教員を招き英語による講義をしてもらっている。現在は、アメリカ、ブルガリア、イタリア、チェコ、ドイツから招聘している。本学の教員も海外の大学に出向いて英語で講義を行っている。留学生に関しては、独立国家共同体からではなくそれ以外の国から受け入れたいと思う。今後、英語ができない若手教員は採用しない方針である。このような積極的な国際交流は本学の新しい活動分野である。

本学の青年プログラム担当の副学長は、ロシアで最年少の女性副学長であるが、このような若手の副学長が青年政策を担当するのは、本学にとってこの問題が切実な課題となっているからである。

ソ連時代には人材養成制度は厳しかった。人は、生まれてからすぐに何らかの社会組織 - オクチャブリャータ、ピオネール、コムソモール - に所属しなければならず、また色々なカテゴリーの中からリーダーを決めていた。ロシア連邦の今日のリーダーたち、財閥、オリガルヒ（新興寡占資本家）、大手事業のオーナーたちは、もともとはコムソモールのリーダーだった者だ。20年前にはシステムが破壊され、教育制度の改革となった。重要なことは、我々の子どもたちが無視されるようになったことである。特にこれは、私立の高等教育機関に関していえることである。スベルドロフスク州では、私立の高等教育機関数は国立（公立）よりも3倍多い。ソ連時代、スベルドロフスク州（当時の人口は450万人）には国立の高等教育機関が16あった。今日国立大学は30校、分校を入ると89校。その内60ほどが私立大学である（学長によるこの説明は、コリャーギン氏の説明と一致していない。コリャーギン氏の説明が正しいと思う）。国立と私立の違いは大きく、教育のレベル、質、物的基盤の整備度合などで大きな違いがある。国立大学には、文化会館、スポーツ会館、食堂などがあるが、これらは多くの私立大学にはない。食堂を持つ私立大学は私立大学の20%程度であり、これはロシアにとって大問題と思う。

学生の訓育の問題は優先的な課題である。本学は、学生一人一人が何らかの活動に参加するように支援、サポートを行っている。全学生5500名中2000名程は、継続的にスポーツ活動を行っている。また多くの学生が、芝居、演劇のクラブに入っている。500名以上の学生が歌ったり踊ったりしている。また科学的創造活動に参加する学生も沢山いる。学生が国際的レベルで交流することも大切である。それで2009年に本学は国際コミュニケーションの場を作った。それは「青年ユーラシア経済フォーラム」である。これは、経済、政治、技術、芸術、文化などの分野で学生たちがコンクールを行うものである。このコンクールの条件を世界中に広めてコンクールに積極的に参加する学生を選抜し、最高の成績の者を年に一度このウラルに招待している。このコンクールには、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、ラテンアメリカなどの学生が招待されている。本学でファイナル・コンクールが行われている。また、スーパーファイナルというのもある。経済分野のスーパーファイナルはカザフスタンのアスタナで行われる。2008年からカザフスタンでナザルバエフ大統領が「国際経済フォーラム」を開催してい

る。このフォーラムはとても評判が高く、そのHPへのアクセス数はダボス会議へのアクセス数よりも多くなっている。このフォーラムには今年12名のノーベル賞受賞者が参加した。また、国際機関のトップ、国連の理事長の二人の次官も参加した。今年は、アスタナで第1回「国際青年経済フォーラム」が開催された。2013年のスケジュールでは、第2回「国際青年経済フォーラム」を本学が開催することになっている。

テクノロジー関係の若者は、「インナプローバル」という場で集めている。政治に関心のある若者には、「世界政治フォーラム」（スベルドロフスク州で毎年開催）が用意されている。なお、エカテリンブルク市では2018年にサッカーのワールドカップが開催されることになっており、また、同市は、2020年の国際万博（エキスポ）の開催候補地でもある。

以下、質疑応答。

現在第三世代の高等教育国家スタンダードに基づいて教育が行われているとのことだが、これはいつから効力を発揮したのか。また、バカラブリアート（4年）、マギストラトゥーラ（2年）の4-2制への転換はもう済んでいるのか（遠藤質問）。

第三世代の高等教育国家スタンダードは、2011年1月1日から有効である。本学の場合、4-2制は10年くらい前から一部の専攻で導入された。マギストラトゥーラは6年前からである。2000年の第二世代スタンダードによれば、4-2制は大学の希望で実施できるようになっていた。古典的な総合大学はいち早く4-2制を導入した。4-2制は2011年からは義務的なものとなった。本学にはスペシャリスト（5年制）のプログラムはない。マギストラトゥーラ修了者の就職状況は悪くなく特に問題はない。就職先である企業は、まだバカラブリアートとマギストラトゥーラの卒業生の違いがよく分かっていないようだ。本学の場合、マギストラトゥーラに入った学生は、仕事をしながらマギーストルの学位をとろうとしている。マギストラトゥーラは昼間コースとなっているが、実際のところ学生たちは昼間働いて夜に大学に通っている。今は、多くのバカラブリアートを卒業させるための移行期である。

本当にこの新しい4-2制への移行が必要であったのかとしばしば思う。ロシアの既存のスペシャリスト制度はかなりよくできていたし、ロシアの大学は世界でも評判が良かった。しかし、それはとても費用のかかる制度であった。つまり、人間に対して投資する金額が高かった。かつては、大卒者は就職先が義務的に決められた。国家は、こうすることによってその投資額（人材養成の費用）を回収したのである。今日の市場経済の下では、大学卒業後にどこかの企業に義務的に就職させられるということはなくなった。多くのエンジニアが大学卒業後サービス業界に入っているが、そこは大学で修得した知識・技術は必要としない分野である。

従って、これは問題の一つの側面だが、もう一つ重要なこととして思うのは、人と人とのコミュニケーションが強化されていき世界中が共通のシステムにならなければ駄目だということだ。最初この大学で学び、次に日本でさらにヨーロッパでというように共通のシステムがあればこのようなことが可能になる。共通のシステムがない場合は、他の所で勉強するチャンスがない。現在、ロシアの若者は世界中に出て行っている。（遠藤氏コメント：ロシアが4-2制に移行したことによって、アメリカや日本の高等教育との互換性が高まったと思う。ヨーロッパとの互換性もいままでよりは高まったはずだ。学長のおっしゃるように、これからは日露間

の交流—学者、研究者、留学生の交換—もいっそう拡大すると思う。)

ロシアの教育システムには、今経済的な要素が否定できない影響を与えている。現在我が国では7つの連邦大学と70以上の大規模な研究所が創られそこに予算が投入されているが、他の残りの大学や研究所は自分なりに生きていかざるをえない。連邦大学ではすべての専門家が養成されているわけではない。例えば、我々のウラル連邦大学では、製鉄業、建設業、機械製作業などの専門家は養成しているが、鉱山、農業、森林業関係の大学はウラル連邦大学に入っていないので、ウラル連邦大学ではこれらの専門家は養成されていない。鉱山、農業、森林業関係の大学には、この20年間十分な予算は入ってこなかったしこれからも入らないであろう。スベルドロフスク州は、鉄鉱、鉱山関係の地域なのでその専門家の養成に自分の資金を入れなければならない、また、農業、森林業関係の大学にも自分の予算をかけなければならない。そうしなければ、全般的な専門家養成の高いレベルがなかなか確保できない。今現在でもかなり大きな不均衡がある。連邦大学には最良の学生が入学し高い質の教育が行われているが、農業、森林業、鉱山業などの専門家の養成レベルは低い。

入試制度についてお聞きしたい（松永質問）。

以下、教学担当副学長による説明。

入試制度としては統一国家試験がある。毎年、教育科学省は統一国家試験の最低合格点を発表している。必須科目は数学とロシア語の2科目で、3科目目は受験生の選択（選択科目）である。選択科目としては、外国語、情報学、社会科学などがある。3つ目の試験は各大学によって決められる。例えば、経済大学では3番目の試験科目は社会学である。外国語は、2020年から必須科目となることになっている。統一国家試験は、高校卒業予定者（11年生）の高校教育卒業試験と大学入試を兼ねている。統一国家試験の結果（成績）証明書は2年間有効である。統一国家試験によって、受験生は5つの大学に出願することができ、各大学では3つまで専攻を選ぶことができる。残念ながら昨年は、統一国家試験に不合格の者、すなわち大学に入学できるような点数をとれなかった者がかなり多かった。モスクワの高等経済学校(大学)は、毎年統一国家試験の結果に基づいて大学評判リスト（レイティング）を作成している。これによって、統一国家試験で一番良い成績を収めた者はどの大学に入学したかが分かる。本学は社会経済的大学のグループに属している。この10年以上、経済、法律、ビジネスなどの専攻を志願する者が多かった。というわけで、本学では入学者の統一国家試験の平均点は70点以上になっている。大学評判リストによれば、70点以上の大学はレベルの高い大学である。

今年から「連邦入試情報システム」が導入された。これはデータベースのようなもので、統一国家試験の受験生全員のデータが収められている。このシステムが導入されるようになったきっかけは、昨年モスクワの医科大学で起きた入試を巡る汚職事件である。統一国家試験を実際は受験していないのに受験したかのように装って入学した学生がいた。当時はデータベースがなかったのをこれを見抜けなかった。「連邦入試情報システム」の導入によって教育科学省の管理機能は強化されつつある。つまり、現在ではデータベースに実際入っている者しか大学に入学できないからだ。これは、重要な汚職対策となっている。現在入試は透明になってきている。ただし、今汚職は学校段階に移ってしまった。

今年、メドベージェフ首相の息子が大学に入学した。メドベージェフは息子の統一国家試験受験の経験を踏まえて、統一国家試験では筆記だけでなく口頭試験も必要だと言い出した。これまで統一国家試験には大学教員の多くが否定的であった。その代表格は、モスクワ大学学長で全国学長同盟会会長でもあるサドーフニチイである。モスクワ大学は、統一国家試験だけでなく受験生に追加試験を課して彼らの知識水準をチェックすることができる。もう一つ、サンクトペテルブルク大学も追加試験を実施することができる。追加試験ができるのはこの二つの大学だけだ。モスクワ大学とサンクトペテルブルク大学は、自分の大学の卒業証書を出している。他の大学は、連邦スタンダードに基づいて活動し国家卒業証明書を出している。今日では統一国家試験への批判はあまり聞かれなくなった。このやり方に慣れてきたこと、また毎年改善もされているからであろう。

教育科学大臣は、エンジニア関係の専攻を重視している。技術関係の専攻では無償枠が拡大されているが、経済や人文科学では逆に縮小されている。というわけで、技術系大学の統一国家試験の平均点は低い。今、教育科学大臣はドミトリー・リワノフに代わった。彼は、これから20年間で大学数を20%削減すると表明した。統一国家試験の平均点が低い大学はなくなる可能性が高い。もう一つの目安は、大学の教員の研究活動で彼らの論文の引用率が高くないとだめだ。プーチン大統領は、ロシアの5大学は世界のベスト100に入ることを目指すと表明した。というわけで、ロシア連邦では連邦大学が創設されている。現在全国に9つの連邦大学がある。その一つは、エカテリブルク市にあるウラル連邦大学だ。

無償席ほどの程度、何割くらいか（大谷質問）

無償席は、去年に比べて減らされてはいない。経済 - 100名、マネジメント - 90名、応用情報 - 30名、品質管理 - 20名、飲食店テクノロジー - 25名。これらの数値を決めるのは教育科学省である。こちらから教育科学省にこれだけの無償席が必要との申請をする。実際には少なくなるので3 - 4倍多めに申請をするのが普通だ。コンクールがあって最終的に教育科学省によって決められる。今年は、入学者の6割が無償席で残りは有償席（契約による入学）であった。今年の昼間部の入学者は800名、通信教育部などを含めると入学者は全員で5000名程であった。遠隔教育部、通信教育部、第二高等教育部、カレッジ卒者を対象とする短期コースなどは、全て有償である。

無償席に入学できるかどうかは、統一国家試験の成績次第である。先ほど言ったように受験生は5つまで大学に出願できる。統一国家試験の自分の成績に照らし合わせて、無償枠で合格できる大学（各大学のHPに情報が掲示される）に入学することになる。これは、大学にとっては大きな問題だ。というのも、たとえある学科に約1,000人からの出願があっても、成績の良い受験生は逃げていく可能性が高いからだ。

人口学的な問題もある。現在、入学者の獲得を巡る大学間の競争は激化している。第二次世界大戦後からこれまでに人口増減の波があったが、90年代には子どもの出生が少なかった。それで現在は受験生が少ない時期になっているので、大学は学力の低い者も入学させざるを得ない。親は子どもに大学教育を受けさせたいと思っている。カレッジやテクニクムへの進学者は減少している。

有償席の料金（授業料）は、次のようにして決められる。まず教育科学省は大学における人材養成にかかる費用（平均コスト）を算出する。例えば、それは経済専攻では年平均 62,000 ルーブルである。エンジニア関係では施設設備にお金がかかるので、それは平均 112,000 ルーブル程度となる。各大学はこれを下回る授業料を設定してはならない。本学の授業料は、8 万から 9 万ルーブルである。授業料は、大学の HP に公表され変更することはできない。

アクレディターチャ（認証評価）について：本学は今年 6 月にアクレディターチャを得た。今後 6 年間有効である。これを得るために色々な準備が必要だったが、学生もインターネットによる試験を受けた。これは「連邦テスト」と呼ばれるもので、学生の知識が一定水準にまで到達しているかどうかを確認するために実施される。教育科学省に学生のリストを提出し、その中からコンピュータがランダムに受験生を選び出す。試験委員が来校してコンピュータによる試験を実施する。その結果は教育科学省に直接送られる。連邦テストの結果が悪かったらアクレディターチャが得られないというわけではない。アクレディターチャを得るためには 5 つのパラメータで審査が行われる。その内の一つが「連邦テスト」だ。たとえ「連邦テスト」の結果が悪くても、他の 4 つのパラメータをクリアできればアクレディターチャが与えられる可能性はある。

この後学内の施設設備を見学した。また、本大学 HP の編集長からインタビューも受けた。

(松永)

【調査機関⑥】ウラル国立カレッジ

(ГБОУ СПО СО Уральский Государственный Колледж имени И. И. Ползунова)

訪問時間：14:30-17:00

対応者：ルイバコフ校長 (Рыбаков Евгений Аркдьевич)

住 所：пр. Ленина, 28

連絡方法：8-904-38-32-320,

HP <http://www.ugkp.ru/>

学校の概要：本校は中級職業教育機関であり、市の中心部、レーニン広場と河川公園の間に位置しており、市庁舎と隣接し、大変良い立地条件にある。入学式等の学校行事が河川公園で催される。

副校長が出迎えてくれ、校長室まだ案内をしてくれる。すぐに教授法教室に移動し、リバコフ校長 (13 代目) から本校の概要 (歴史と将来の展望) について説明を受け、その後、施設を見学する。

本校の淵源は、1824 年にウラル山脈のふもとに設立された工業・算術学校にさかのぼる。



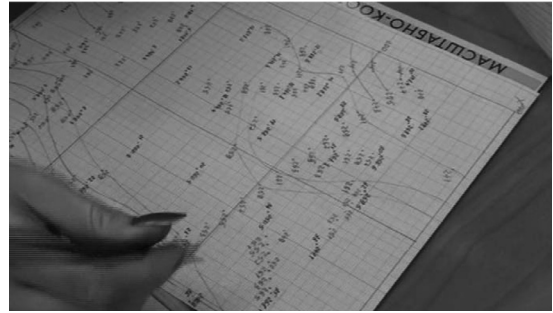
1847年にウラル工業カレッジが設立され、工業製鉄関係の労働者を養成した（本校はこれを基準としている）。1918年までにカレッジは811人を卒業させた。1928年にソ連の製鉄省により、スベズドロフスク工業製鉄テクニウムが設立された。1947年に、このテツフニウムはイワン・記念カレッジとなった。ポルズノフは有名な発明家で、本工業学校の卒業生であったため、その名前を冠することになった。現在、ロシアでは、ポルズノフ記念の教育機関は本校とアルタイ国立技術大学の2つである。同じ1947年に、本カレッジは労働赤旗勲章を授与された。リバコフ氏は、2003年から校長を務めている。1999年には、スベズドロフスク工業製鉄テクニウムはポルズノフ記念ウラル国立カレッジになった。名称変更の際に、学校の活動内容が現代的多分野・プロフィールへと拡大した。今年で165周年を迎える。これまで約4万5千人の専門家を養成してきた。本校は、無期限の国家登録とアクレディテーションを有している。ISO2008と2091の認証を受けている。ロシアのカレッジでトップ100の中にも入っている。サンクトペテルブルグにある欧州品質協会、モスクワの全ロシア博覧会協会から表彰されている。また、様々な賞を受賞しており、100万ドルの賞金も獲得している。

本校は、スベズドロフスク州に3つの分校がある。生徒数は4,128名。本年の入学生は1,128人である（近年、普通教育・祝行教育ともに生徒数が減少傾向にある）。大部分の生徒は9学年卒業後に入学するが、11年を卒業して入学するものもいる。卒業生の35-40%は高等職業教育機関に進学する。働きながら通信教育で学ぶことが主流である。教員数は250余名（中には、博士候補、功勞教員、国家勲章受章者も）。職業専攻数は121で、ロシア全体で最大級の教育機関の一つである。主要な専門分野は、伝統的な工業製鉄、IT（情報セキュリティ専攻はロシア全体で18校）、経済・サービス、公共施設マネジメントである。補充教育プログラムの充実しており、現在は15の専門分野がある。主要な分野は、コンピュータ、会計・経理である。学習ラボ（実験・実習棟）は6棟あり、119の教室がある。ユニークな施設として、地下工業実験場がある。また、本校は、スベズドロフスク州教育省附属科学教育分野リソースセンターにもなっている。

国家スタンダードを導入するにあたり、授業に関しては教授法部門の強化を行っている。専門教育の他に、普通教育と補充教育を行っており、10種類以上のクラブ活動がある。実習に関しては30以上の企業と協定を結んでいる。ソーシャル・パートナーがあり、主要なものは37社からなるウラル工業製鉄ホールディング社で、ロシアの11の地域に支社を持っており、10万以上の社員がいる。その社長は本カレッジの卒業生である。現在、ウラル工業製鉄ホールディング社は主幹会社として、市中心部から10キロくらい離れたところに附属コーポレーション大学を準備中で、本カレッジもそのプロジェクトに参加している。この大学は、さまざまな水準の専門家（初級からマギストラまで）を会社で育成するもので、施設設備は会社が提供し、教育はエリツィン記念連邦大学と本カレッジが提供する。教育内容は、必修部分は連邦スタンダードに基づいているが、選択部



分はホールディング社や他の会社のニーズに合わせたものである。選択部分の例としては、金鉱を有している会社に対して地下採掘技師を育成するものがある。設置形態は、国家予算（連邦と州）と企業投資とで運用される「官民パートナーシップ」(PPP)による。将来的には、企業立の教育コンプレックスになるであろう。コーポレーション大学に加入する際にも、現在のカレッジとしての名称のまま参加する。本校は今後ともこの校舎である程度の活動を続け、コーポレート大学には一部の活動を行うことになる。



施設見学：校舎は約 165 年前の歴史的建造物で、7 年間から改修を進め、まだ終了していないが、8 割程度が綺麗に改修されており、潤沢な学校であることが覗える。博物館：51 年勤務したフォードロフ氏（ウラル工業製鉄ホールディング社社長の教師）から説明を受ける。ポルズノフが発明した銀製錬機、150 年前の手書きの教科書、著名な卒業生（エリッイン記念連邦大学の学長など）、生徒による芸術的な銅の鋳造品などを見る。ホールに続き教室を見学する。観光コース（経済理論入門（右上の写真）。女子が多い。教室は新しく、コンピュータ等も設えられている。体育館とトレーニング場（バスケットコート 1 面くらい）。採掘コース（鉱業幾何学）。女子の方が多い。地質データに基づき地下鉱物（鉄鋼）の分布図を作成する（右の写真）。それに基づき露天掘りをする。製鉄コースの授業（男子が多い。ウラル工業製鉄ホールディング社とのパートナー事業の掲示がある）。小講堂に続き、実習のためのラボを見学する。専門科目は、10%が理論で、90%が実習である。物質化学分析ラボでは 12 名（グループの半分）で実習を行っており、女子生徒ばかり。

施設見学後の対談：ウラル地方はロシアの産業の基盤をなしており、スベズドロフスク州の企業の 6 割は製鉄業であり、本校は中級職業教育機関として中心的役割を果たしている。ウラル地方には、外国企業（フィンランドやカザフスタンなど）も参入しているが、単独というよりも、国際プロジェクトの形で参入している。ロシアは 17 年かかりようやく WTO に加盟した。鉱物資源の輸出は、現在中国と競合している。（大谷）

< 10月10日(水) >

州政府外事局との会見が予定の時間より 2 時間以上遅くなることになったので、3 時ごろまで観光して過ごすことになった。まず、郊外にあるアジアとヨーロッパの境界標（写真右）を見に行き、そののち市内に戻り、エカテリンブルクで一番高い建物「ヴィソツキー」の展望台から市内の眺望を楽しんだ（写真下）。人造湖を囲み東西南北に整然と広がる市街の姿は美しく、





建設の早い時期から計画的につくられたことをうかがわせている。また、古い建物が美しく修復され、新しい建物が次々と建設されている様子は、この地域の経済活動の躍動を表している。
(遠藤)

【調査機関⑦】スヴェズドロスク州外務省

(Sverdlovsk Region Government Ministry for International and Foreign Economic Relations)

訪問時間 15：30 - 16：30

対応者：ソロバロフ州政府外務次官 Vladimir Solovarov (Deputy Minister, Sverdlovsk Region Government Ministry for International and Foreign Economic Relations)、その他（市代表、市国際課担当者など）

住 所：г.Екатеринбург,октябрьская площадь,1

連絡方法： тел.:+7(343)217-88-66,

факс:+7(343)217-89-07,

e-mail:svj@gov66.ru

当初、なぜ外務省まで出向かなければならぬかさっぱりわからなかった。また、会見時間がたびたび変更され、教育省の担当者は時間が合わなくなって出席できなくなったと聞かされ、ますますわからなくなった。到着してみると、会場は大変堅苦しい印象で、ロシア側の人々はみな緊張している様子。席についても会見が始まらない。押し黙ってにらめっこしている。しばらくしてソロバロフ次官が登場、全員起立して次官を迎え、次官が我々にきれいな日本語で歓迎の言葉をかけ、ようやく会見が始まる。聞けば、次官は日本に何年かいたことがあるということ。本人はとても懐かしがっている様子。「ははあ、この人が日本人に会いたかったのか」と納得。

最初に、我々に対して訪問の印象について訊かれ、査問でもされる気がしたが、その後は、先方がスベルドロフスク州及びエカテリヌブルク市の「現代的教育課題」について話してくれ、なかなか興味深かった。

スベルドロフスク州及びエカテリヌブルク市の現代的教育課題について：まず、職業教育の

課題についてから話し始めたが、全体として産業を支える人材養成を教育制度全体の中でどのように行っていくか、という問題意識が強烈に感じられた。

当地における現代的教育課題とは、教育を製造業やサービス業のニーズに合わせて改革することである。製造業の中心である当地が金融の中心へと重心の移動を図りつつあることも考慮に入れなければならない。特に、エカテリブルク市



はスベルドロフスク州の人口の3分の1が居住しており、イノベーション的産業や企業のための人材育成、そのニーズに対応した教育を構築してゆくことが急務である。具体的には、スベルドロフスク州における対企業プログラムとして、第一ウラルパイプ工業やウラル製鉄、ユーラスグループなどとの協力関係を築いてゆく活動が進められている。

また、職業教育スタンダードを開発し、教育行政機関が法的に活動できる基盤を整備することが求められている。

就学前教育機関の充実・発展も重要課題である。就学前教育機関は、一時期、ソ連邦時代に比べ半減していた。今日、この機関のネットワークを整備し、州内のすべての子どもの通園を保障する体制をつくるのが課題となっている。そのためには、2万3千人分の収容増を図らなければならない。昨年までに67園増設した。この課題を重視している理由の第一は、女性労働の動員であり、第二に、児童の就学準備、読み書き・コミュニケーション能力やソーシャルライゼーションの育成、人格発達の課題に応えるためである。

(エカテリブルク市教育庁のタチアナ・クジン氏が話を引き継いで) われわれは、ロシア教育の現代化の課題について「2012～2015年連邦普通教育発展プログラム」に基づいて取り組んでいる。昨年(2011年)9月から新国家教育スタンダードが初等学校からスタートし順次基礎学校での実施が予定されているが、来年(2013年)から中等学校(10, 11学年)でも実験的導入を開始する予定である。

スタンダードの改革に応じて、教員の養成・研修システムも改革されなければならない。市内の教員に対する新しいアテスターツィアが準備されている。また、教員の量的確保の課題も重要性を増しているため、給与レベルを上昇させる取り組みにあたっている。

エカテリブルク市では、6年前から教育革新の取り組みが始まっているが、その重点課題の一つとして、教育の品質評価システムの開発があげられる。このシステム構築のためのデータづくりは今年の年末までに完成する予定であり、完成すれば、学校はフォーマットに従い年2回報告書を提出することになる。この評価システムはオーストラリアのマスラックが開発したものを使用している。

その他、市ではバリアフリー連邦プログラムに参加してインクルーシブ教育を推進している。遠隔教育技術を利用してコンピュータを用いた多様な教育サービスを提供している。

質 問：パブリック・プライベート・パートナーシップ PPP は行政としてどのように取り組んでいるのか。

職業教育にとって企業の協力は不可欠。新しく作られた鋼管企業（パイプライン用の鋼管製造）との連携は重要。同企業では新工場の建設計画を持っているが、そこでは 700 人から 1500 人の人材が新規に必要とされている。そのような人材育成のために官民協力を進めているが、具体的には、企業は学校で必要とする教材を提供したり、学校の施設改善を行ったりする一方、教育行政は企業の従業員に授業を実施するなどである。また、そのための資金については鋼管企業 5 億 4 千万ルーブルを、教育行政側は 5 千万ルーブルを拠出することになっている。同じような取り組みは州内の別の市でも進められている。

再びソロバロフ次官：連邦全体としての PPP（パブリック・プライベート・パートナーシップ）に関するプロジェクトは、これまでの 15 年の間すでに継続的に行われてきて、成果を上げている。その資金は構成主体、連邦、企業の 3 者で 3 分の 1 ずつを拠出してきた。

プロジェクトの内容は主に人材育成である。対象は社会人であり、その第 1 段階は、1 年間の現地機関でのビジネス研修である。授業は、この間週 1 日（土曜ないしは日曜）行われる。第 2 段階は、専門に応じて外国の教育機関等で研修を行う。期間は専門等に応じて 2 週間から 3 か月までの間で行われる。この際の資金は連邦政府から交付され、派遣先はアメリカ合衆国、ヨーロッパ、日本などである。これまでのプログラムの効果の測定結果は、1 の投資に対し 10 の成果が得られており、大変満足している。第 2 段階の研修を終えた社会人研修生は、所属企業の課題に関する何らかの提案を作成・提出して、研修全体が終わる。

これまで、1900 人がこの養成システムで研修を受けた。そのうち 900 人は外国での研修に参加した。研修生は、ロシア国内の 70 地域から参加しているが、スベルドロフスク州は毎年の養成数で上位（5～7 位）を占めている。本プログラムを修了したものは、MB^{*10}の第 2 年目に入学することができる。

この他、外国との協力の例としては、例えば、ウラル国立経済大学と協力して高等教育レベルのソフトを開発している。ウラル大学とドイツの企業サクソニアとの機械製造技術の向上プログラムの開発。これは学生の教育に実際役立っている。

最後に、ロシアが WTO に加盟した意義について述べておこう。すなわち、高等教育での学位統一化が行われ、ロシアの修士（マギーストル）の国際的通用性が強まった。付言すれば、ウラル国立大学に経済・対外貿易講座が開設され、こうした可能性を積極的に活用する試みが一歩進んだところだ。（遠藤）

ハンティ - マンシースク到着

19 時 50 分ハンティ - マンシースク空港到着。空港を出たのは午後 8 時半頃か。

空港からホテルまで車で 20～30 分。あたりはすっかり暗くなっていたが、道路はよく整備され、車はすべるように走ってゆく。道の両側には空港から市内に入るまで、歩道が切れ目なく整備され、街灯が 20 メートルおきくらいに立ち並んでいる。人の姿は見かけない。女性が空港の方に向かってジョギングしているのを見かけた。この町の治安はそんなに良いのだ

*10 何の略称か不明。ビジネス専攻のマギーストゥル課程の 2 年目という意味か。

ろうか。雪洞のような街灯の光の列がはるか先まで続いている。柔らかく滲んだその光を見つめると、幻想の世界に迷い込んだような気持になる。

ホテルでチェックインに随分と時間がかかり、夕食をレストランで摂ったのは12時頃であったか。おいしい食事だったが、値段も高い。しかし、我々は、魔法にでもかけられたように上機嫌で食事を楽しんだのであった。

< 10月11日(木) >

昨夜の印象どおり、市街は驚くほど美しく整備されている。特に、スポーツ施設や博物館、美術館、役所、学校など公共の施設が立派。「〇〇ランド」のようである。

このような街の姿は比較的近年に整えられたらしく、施設訪問の土産にもらった絵葉書やカレンダーなどの写真などには、昔の町(1950～60年代か)と今の町を対比させるようなデザインがよくみられる。(遠藤)

【調査機関⑧】 ハンティ・マンシースク市教育局

(Департамент образования администрации города Ханты-Мансийска)

訪問時間：9：00～10：00

対応者：ハンティ・マンシースク市学校間学習コンビナート所長：チェルニャエワ・ナジェジュダ・ペトロブナ (Черняева Надежда Петрова)、
市教育局長：マキシモワ・リリヤ・ブラディミーロブナ
(Максимова Лилия Владимировна)

住 所：Российская Федерация, 628007, Тюменская область, Ханты-Мансийский автономный округ-Югра, г. Ханты-Мансийск, ул. Чехова, 71

連絡方法：Тел.: 8(3467)32-62-22, Факс: 8(3467)32-83-80

e-mail: pr_edu@admhmansy.ru

最初に学校間学習生産コンビナート所長からコンビナートについて説明を受けた。このコンビナートは、普通教育学校とは異なる活動を行っている。コンビナートは、普通教育学校の上級生に対して様々な職業教育を施したり、労働関係の能力を育成したり、労働市場の状況を紹介したりする機関であり、最近では上級生だけでなく7～9学年生も受け入れるようになった。5～8年生には、彼らにどのような関心・能力



があるのか、どのような職業に向いているのか、など職業選択のための色々な活動を行っている。9年生(プロフィール教育前段階)には、11年でプロフィール教育を始めるために5～8年生よりももう少しハイレベルで職業適性を調べる活動を行っている。上級生は、ここで職業

訓練を受けて卒業までに大衆的な職業に就く労働準備が与えられる。

コンビナートは、街づくりの基盤となっている企業と協力も行っている。最近ニーズの高い職種はエンジニア関係である。コンビナートは、ガイダンス活動、訓育活動、クラブ活動など色々行っている。「職業オリエンテーションラボ」というのもあって、生徒たちにどのような就職先があるのか紹介したり、どこの大学に入ったらどのような企業に就職できるかといったことを教えたりしている。つまり、生徒たちが大学を卒業してからこの町に戻って就職できるようにサポートしている。子どもを一つの職業に縛り付けるのではなくて、スローガンとしては、子どもたちにやらせてみて失敗したらそれをやり直させるというような活動を行っている。

市教育局長の説明：ハンティ・マンシースク市は今年で430周年を迎える。430周年を祝う大きなイベントは既に9月に終わったが、今年1～12月まで430周年を祝う様々な催しが行われることになっている。

もともとハンティ・マンシ自治管区レベルの国民教育部があった。1990年から市としての教育局ができた。1961年に市には14校の普通教育学校、2つの夜間学校（仕事をしながら通う学校）、16の幼稚園（その内5つだけが教育省管轄で残りは企業付属）、寄宿制学校、スポーツ学校、ピオネール会館があった。当時の学校教育部の役割は、学校の管理、生徒募集、学校への教員派遣、学校予算編成などであった。

1992年までは学校は全て小規模校で木造校舎だったが、現在は、鉄筋コンクリート製のモダンで立派な校舎に生まれ変わっている。前ページの二枚の写真は、第8番幼稚園の新旧校舎である。

1992年に学校は全て市管轄下となり、17の就学前教育機関、11の普通教育学校、4つの補充教育機関があった。2000年代から人口が増加し、2001年には2つの学校が新設された。現在ハンティ・マンシースク市には、20の就学前教育機関（幼稚園・保育園、児童発達センター、幼稚園年齢以下の児童のための保育施設）、8つの学校（初等、中等、ギムナジア）、7つの補充教育機関、教育発展センター、診断コンサルティングセンターがある。就学前教育機関に通う児童は4196名で、そこでは教育科学省が認定している様々な子ども発達プログラムが導入されている。何等かの理由で就学前教育機関に通っていない子ども・両親に対しては、就学前教育機関内に相談室が設けられ彼らへのサポート・支援体制がとられている。人口が増加したことで、この3年間で新しい3つの就学前教育機関を新設し700名を収容することにした。また、2015年までに9つの就学前教育機関を作りここに2350名を収容する予定で



ある。就学前教育は無償である。普通教育学校も無償である。学校で子どもたちは、社会的地位、居住地などに関係なく平等の教育を受けている。教育法に定められているすべての形態の教育が行われている（全日制、通信制、夜間制、エクステルナート）。

毎年児童・生徒数は増加している。今年の小中高校生は9373名、その内1年生は1120名である。昨年の児童・生徒総数は8830名、その内1年生は1085名であった。子どもたちは、ロシア連邦で使用されている様々なプログラムで教育を受けている。2011年から新ロシア連邦教育スタンダードが導入されたので、1、2年生は新スタンダードで学んでいる。ある学校の5年生の2クラス、50名を対象にして新スタンダードを導入する実験も行っている。昨年から新スタンダードが急に導入されたというのではなく、前もって色々な準備が行われた（教員の準備、新しい学習プランの作成、新しい教材の作成・検討、文書の作成など）。

評価は5点制となっている。3、4、5点の評価を得た者が全体に占める割合は99～99.3%。4、5点の評価の割合は40%である。最高の成績をとって卒業する者、すなわち金メダリスト、銀メダリストもいる。昨年の11学年卒業生は300名強。9学年卒業生は700名強だった。金メダリストは20名、銀メダリストは15名であった。9学年終了時、11学年終了時に生徒は義務的な国家試験を受ける。11学年卒業生が受ける国家試験は、統一国家試験である。今後9学年卒業生を対象とする新しいタイプの国家試験（統一国家試験のようなもの）が導入される予定である。統一国家試験によって教育の質の客観的な評価が行われるお蔭で、田舎の子どもも大都会の評判の良い大学に合格できるようになった。例えば、これから訪問してもらうギムナジウムのある卒業生は、金メダルをもらってモスクワ大学に進学しその後日本の大学に留学もしている。こんな事例もある。11学年卒業生の99%が高等教育機関に進学している。その内70%は無償席に入っている。大学に進学しなかった生徒に対して、市は就職先を探すお手伝いをしている。男子は軍隊に入ることもある。身体に障害を持つ子どもが市には7～8%いる。彼らの中には普通学校に通える者もいるが、通えない子どもにはIT技術を使って遠隔教育が与えられている。親が特殊学校に通わせたくない場合は普通学校に通わせ、その子に合わせたプログラムに基づいて学習させている。

補充教育機関は、市の自慢の一つである。市には7つの補充教育機関があり、5～18歳までの市の児童生徒の97%、11800人が学んでいる。ここでは、様々な分野での児童・生徒の人格形成、市民としての訓育がおこなわれている。補充教育として子どもたちに人気があるのは、美学・美術、民芸、スポーツ、エコロジー、観光、知的分野、社会経済的分野である。補充教育機関で学んでいる子どもたちは、様々なレベル - 市、州、ロシア全体、国際 - のコンクールに参加して賞（補充教育機関に通っている子どもたちの56%が何らかの賞を受賞）をもらっているが、補充教育の主要な目的は、コンクールへの参加ではなくて子どもたちが自分に向いた分野とか自分の道とかをみつけることができるようにすることである。

市内の教育機関に勤務している教員数は1426名で、その内訳は幼稚園 - 507名、学校 - 666名、補充教育機関 - 253名である。教員の年齢は、平均すればかなり高く教員の48%が35～55歳で、28%が25～35歳、8%が25歳までの若手教員である。教職の人気を高めるために連邦政府は色々な措置をとっている。教員に対して金銭的ならびに非物質的な刺激が与えられている。

以下、質疑応答。

92年以降この市では人口が増加しているということだが、その主要な要因は何か（遠藤質問）。

この地域は石油ガス開発が盛んに行われているので、外国（旧ソ連邦構成共和国）やロシアの他の地域から働きに来る者が多い。本市では就職先が増えただけでなくて、自治管区政府としては様々なカテゴリーの市民に対して平等な社会的サポートを行っている。自治管区の予算で学校の子どもたちに食事を与えている。子どもたち全員に温かい朝食が与えられている。特権のある子どもたち（子どもの数が多い家族の子どもなど）には、温かい朝食だけでなく温かい昼食も与えられている。幼稚園では、4回の給食があり親はその費用の20%を支払っている。就学前教育自体は無償である。

生徒は全体的に良好な成績を修めているようだが、落第者は毎年どの程度いるのか（遠藤質問）。

どこの国でもそうであるように、次の学年に進級できなくて同じ学年に残る者はもちろんいる。今年は、11学年生の一人が統一国家試験の1科目に不合格になって来年また受験することになった。

学校数は92年の11校が2012年には8校になったとのことだが、これは統廃合されたということか（大谷質問）。

最初に言ったように、もともと学校は小規模な木造校舎であった。現在学校の数は減ったが、1校当たりの児童・生徒数は増加している。学校は二部制である。出生率が高くて学校が足りない。近いうちに5校新設する予定だ。

保護者の学歴は他の州と比べてどうか（大谷質問）。

特に学歴が高いということはなくかわりはないと思う。ただし、ここの保護者たちの学校や教育に対する要求水準は、他の地域よりも高いと言える。

教員の給与やその他の待遇はどうなっているか（遠藤質問）。

先ほど言ったように、教員は国から色々と優遇されている。教員の平均給与は、自治管区の平均給与と同じく月額48000ルーブルである。ボーナス制度ももちろんある。ボーナスは、教員の達成度に見合う形で支給されるので支給額は教員によって異なる。

企業からの学校への寄付はあるのか（大谷質問）。

「今年の教員」というコンクールがあり、これに石油ガス会社がスポンサーとして協力している。市としては、このコンクールのお蔭で教職の評判を高めることができる。今年は11月に実施される。優勝した学校にはスポンサーから70万ルーブルの賞金が、優勝した教員には30万ルーブルの賞金と副賞として車が贈呈される。また、市長のグラントもありその賞金は15000～30000ルーブルである。

この市には外国人労働者がたくさん入ってきているということだが、それとの関連で学校でいじめは起きていないか（松永質問）。

もともとみんなソ連人であったし、ソ連は多民族国家だったのでいじめのような問題は発生していない。別の問題としては、旧ソ連の共和国から来た子どもたちはロシア語を全く話せないのでコミュニケーションの面で問題がある。それで特別のプログラムを用意して対応している。子どもたちだけでなく両親にもロシア語コースを開いている。学校では、58の民族の子どもたちが学んでいる。ハンティ人、マンシ人は1.4%程度である。この後、市のテレビ局による日本の教育に関する質問などに遠藤氏が答えた。（松永）



【調査機関⑨】第1番ギムナジア

(Муниципальное Общеобразовательное Учреждение Гимназия № 1)

訪問時間 13:00-15:30

対応者：シシュキーナ校長 **Шишкина Римма Иозапасовна**

住 所：ул. Янская, д. 6

連絡方法：8-3467-35-96-11, HP <http://xn--1-7sbirdczi9n.xn--p1ai/>

本校は、1992年に私立の人文リセとして開校し、2002年1月より公立のギムナジアとなった。児童・生徒数は1184名、内初等学校は621名である。教師は70名で、33%が上級カテゴリー、37%が1級カテゴリーである。



到着早々、教員向けのレストランで、専属のシェフが作った昼食をいただく。

本校の見学は、基本的に学校の施設の見学であった。校舎はバリアフリーである（車椅子用のスロープが備わっている）。ハンティ-マンシースク市では、すべての学校がバリアフリーである。玄関で、校長・副校長らが歓迎してくれる。シーシュキーナ校長をはじめ、若い教員が多い。学校は休暇中（5週間の学習の後1週間休み）であり、一部の生徒は補充授業に参加しているのみである。



校舎は、目を見張る豪華さである。例えば、歯科の無償の診療・治療施設があり、驚きである。廊下のスペースはとても広く、その空間で様々な装飾がなされている。廊下には「情報キオス

ク」と呼ばれるコンピュータ端末が設置され、学校に関する情報（時間割、各クラスのフォルダ、電子成績簿等）を検索できる。また、随所に豪華なソファ、壁に組み込まれた熱帯魚水槽、大きなテレビモニター、滝、植物等が置かれており、子どもがリラックスするエリアを設けている。廊下や踊り場の空間では、様々なテーマで装飾が施されている。外には、遊園地のような遊具がある。



まず、食堂に案内される。一般の学校の食堂の雰囲気を感じないようデザインされ、壁に四季の自然の風景画が描かれてという。朝食と昼食が出され、無償である。食堂の一角には、ブッフェがあり、子どもたちは定食以外に好きなメニューを好みで取ることができる。また、パン、チョコレート等のスナック菓子、ジュース類を販売する売店もある。



踊り場には愛国心教育（訓育）のコーナーや「子どもの権利と義務」の掲示がある。この掲示は、子ども、保護者、教師、設置者、外部の者からなる「学校ソビエト」の合議で定められる。上の階には、生徒たちが制定した校則の掲示がある。



次に、「テクノロジー」の教室（女子用・男子用）に案内される。女子用のミシンは日本製のジャノメである。また、女子用のキッチンと食卓の部屋がある（豪華である）。



体育館に案内される。大小2つあるそうである。大きなサイズは、バスケットボールコート1面位であり、大きい。得点の電光掲示板がある。これが、規準の大きさである。また、本校にはスポーツジムがありマシンが揃っている（このジムナジアだけに設置されているとのこと）。

教室では、電子黒板と通常の黒板があり、併用している。教室のデザインも工夫している。野外教室がある。また、ソファでリラックスして対話をする教室を計画している。

教員室。全体向け（教員の評価、組合の資料）と個人向け（2人で一部屋）。廊下には、各教師のプロフィールが掲示されている（コンクール入賞、グラントの獲得など）。

化学教室（普通である）。デジタルラボ（8-11 学年の生徒がプロジェクトで使用する機器（各種のセンサー）やプリンターが設えられている）。ガラス張りの舞踊（ダンス）部屋。

サークルの見学。交通ルール学習。小さな教室（児童6名）。電子ボードを用いて、交差点での自動車の優先進行のルールを学ぶ。掲示により、アイスホッケーチームの紹介。学校心

理士の部屋（30名くらいがゆったりすごせる広さ。机やソファがある。とても広い）。付設のセンサールーム（薄暗い部屋で、LEDライト、クッション、アロマがあり、リラックスをする）。

図書室。書架、ソファや机がゆったりと配置されている。「読むことは流行だ」という学校プロジェクトを行っており、家庭での読書習慣の形成を重視している。

交通ルールサークルの子どもたち5名、上級学年の女子生徒2名が、集会室で詞、歌、踊りを披露し、プレゼントの贈呈。豪華な学校施設の案内がメインであった。（大谷）

【調査機関⑩】 児童芸術民芸学校

(Детская Школа Искусств и Народных Ремёсел)

訪問時間 16:00 - 18:30

対応者：ヤロスラフ・ロージ校長 Родь Ярослав Иванович

ラリーサ・アンドレーブナ副校長

住 所：628012, Россия, Тюменская обл., Ханты-Мансийский автономный округ-

Югра, г. Ханты-Мансийск, ул. Дзержинского, 7

連絡方法： тел./факс: +7(3467)33-20-40, дом: +7(3467)33-30-12,

моб. тел.: +790281 9-40-80, e-mail: MUZROD@rambler.ru

本校は、公立文化余暇センター“オクチャーブリ”の一面に置かれている。「パンと塩」の儀式で迎えられる。今回の訪問では初めてで最後。

校名には「音楽」という言葉は出てこないが、実態は児童音楽学校である。



校長とのインタビュー：わが国の補充教育の歴史は90周年を迎える。子どもの美育はソ連時代から重視されており、その水準は世界最高レベルにある。補充教育が行われる以前には、音楽家といえども必ず楽譜を見ながら演奏していたものであるが、補充教育を通して音楽教育が発展したおかげでロシアの音楽家たちはみな暗譜で演奏するようになった。シヨスタコービッチは革命後のロシアで最初の児童音楽学校であるグリャーセル И. А. Гляссера の音楽学校でピアノを学んだのである（1916～1918年）。その学校はレニングラード郊外の児童の村 Детское село（革命前のツァールスコエ村、現在プーシュキン村）にあった。これまで、革命後の最初の児童のための音楽学校はクラスナグヴァルデイスク村 г. Красногвардейске (Гатчина) に1930年につくられた児童音楽学校であったが、近年、古文書館で見いだされた記録によれば、1925年の芸術家組合 профсоюза работников искусств の名簿にグリャーセルの名前が登録されているので、当初、私立であった彼の学校がロシアで最初の児童音楽学校であると考えることができようようになった。

本校は、ユグラ地方で最初の児童音楽学校であり、教授科目はアコーディオン、バイオリン、ピアノ、歌唱などである。創立以来の55年の間に国際的コンクールで20人以上の入賞者を輩出している。就学前の子どものためのクラスもあり、一番重要なのは成功すること。

校長は歌手であり、ピアニストの夫人とともに歌を披露してくれた。

生徒数は550人。生徒は5歳から18歳にわたっている(ただし、規則では7歳から18歳となっている)。現在の法律では、「補充教育機関」となっているが、近いうちに行われる改正では「職業前教育機関」になる予定である。

7歳から始めると7年間のコース。

10歳から始めると5年間のコース。

1992年までは文化省の管轄であったが、1992年の教育法の成立により教育省の管轄になった。新しい教育法では職業教育前教育の機関と位置づけられ、コース修了の際に与えられる卒業証はプロのものである。



各教室参観：ホールにて生徒及び教員による演奏の鑑賞，お茶をいただきながらインタビュー】スポンサーは、ハンティ-マンシースク銀行である。

新スタンダードでは、(教育課程担当の)ネットワークの中に含まれている。今年から「学習コンビナート」にもなる。

新教育法の下では状況は今よりもっと複雑になるだろう。今は、ほとんどすべての希望者を受け入れているが、しかし、職業系の教育機関になると入試のようなものが予想される。コストがかかる教育なので、厳しい状況が予想される。一部有料になるかもしれない。一般の学校では音楽科もあり、無料のものはそちらでやることもあるだろう。本校はサンクトペテルブルクのマリインスキー劇場と契約して、モスクワ文化大学(Московскийгосударственный гуманитарный университет имени М. А. Шолохова か?音楽学部がある)に進学できるような道筋を強めていかなければならないと考えている。(遠藤)

< 10月12日(金) >

【調査機関⑩】第1番普通教育学校

(Муниципальное Бюджетное Общеобразовательное Учреждение "Средняя Общеобразовательная школа №1 имени Созонова Юрия Георгиевича")

訪問時間 10:30 - 12:15

対応者：タチアナ・プルトワ校長 Пуртова Татьяна Николаевна (директор школы №1)
ラリーサ・ツーラヤ Цулая Лариса Владимировна
(ハンティ-マンシースク教育部普通教育課長) начальник отдела общего
образования Департамента образования

住 所：628011, г. Ханты-Мансийск, ул. Комсомольская, д.40

連絡方法：(校長) тел. 8(3467)356-106 ,
e-mail:tnpurtova@rambler.ru

本校に到着する前に教育部普通教育課長のラリーサ・ツーラヤ氏からの説明：市内の各学校はどれも 1000 人以上の大規模校であり、それぞれ重点を持っている。

1 番学校は、これから見学するところだが、愛国心教育と数学教育が重点 (профиль)

2 番学校は、健康教育。3 番学校は、数学の深化学習。4 番学校は、カデット кадетский (幼年学校)。5 番学校、6 番学校、7 番学校は不明。8 番学校は、精神文化を重点としている。訪問した 1 番学校は、きわめて充実したホームページをインターネット上にもっているが、他の学校には、同窓会のホームページ (会員制) はあるが、自前のホームページはない。7 番学校などは所在さえインターネット上では検索できなかった。

市にはスクールバス (8 台) があり、学校選択を可能にしている。実は、昨年までは完全選択制を実施していたが、今年から教育法が変わり、通学区制になった。

校長とのインタビュー：本校は 1932 年 2 月に設置され、今年創立 80 周年を迎えるところである。当時は 2 部屋しかない木造バラックの校舎で、教室には生徒用の机や椅子もなく、あるのは二つの大きなテーブルとそれぞれに二つずつのベンチで、座れるのは 10～12 人だけだった。1932 年 1 月、学校は 83 名の 1～3 年生の生徒を入学させた。しかし、生徒の



数は 1932-33 学年度のうちに 1～7 年生にわたる 340 名に増えた。1933—34 学年度には、上級段階の学年が追加され、学校は中等学校となった。大祖国戦争の直前には生徒数は 971 名を数えていた。

冒頭 4 枚の写真は左上が創立時の木造校舎。右上が 1937 年から 2002 年まで使用した校舎で、一番懐かしいものだという。下は左右とも現校舎。左が表側で右は裏側。仮住まいを経て現校舎(右)は 2006 年から使用。校舎総面積は 13,892 m²。

2011 年にはハンティ - マンシースク自治管区 - ユグラ教育・青少年政策局の推薦で本校は「ロシアの先進的教育機関」に登録された。2012 年 1 月から本校は基礎普通教育の連邦国家教育スタンダードの先導的導入に関する地域パイロット施設となっている。先導的試行の開始は 2012 年 9 月からで、5 年生 8 学級のうち 2 学級で実施している。実施決定にあたっては、8 学級全部で父母会を開き、説明、意見聴取の結果 2 学級実施が決まった。

本校は愛国心教育と数学教育が重点 профиль である。

学年は 5 学年から 11 学年の生徒を対象にしており、本年度(2012 - 2013)の生徒数は 1034 名である。5 年生～9 年生は 836 名で、10～11 年生は 198 名。このように本校では初等教育は実施しておらず、5 年生は隣接する 11 番初等学校から入学してくる。ちなみに、入学式は 5 年生で行っている。初等教育を分離したのは木造校舎を出るときであった。初等教育と中等教育を分離した方がよいのか、あるいは元通り統合して一貫教育をすべきかはなかなか判断できない。検討中である。

授業は週 6 日制、2 交替制を実施しており、第 1 部は 8 時から 13 時まで(2011—12 年度で 5,7,9,11 学年)、第 2 部は 14 時から 19 時までである(同じく、6,8,10 学年)。

第 1 部は 8 時開始。1 校時は 40 分で、休憩は 10 分。ただし、休憩のうち 2 回は 20 分である。第 2, 3, 4 校時の後は軽食 завтрак。14 時以降は、選択科目や、サークル活動、個別指導 консультация が行われる。

14 時から第 2 部が開始。1 校時は同じく 40 分。休憩は 10 分。ただし、休憩のうち 2 回は 20 分である。第 2, 3, 4 校時の後は軽食 завтрак。19 時以降は、選択科目や、サークル活動、個別指導 консультация が行われる。

なお、食事 1 回分は無償であり、特定の生徒(貧困家庭、多子家庭、孤児)では 2 回分が無償である。

9 学年以下は 4 学期制であり、10, 11 学年は 2 学期制である。

本校が有する教育活動のライセンスは、①基礎普通教育、②中等(完全)普通教育、③一ないし複数教科での補充(深化)学習を行う普通教育の三種である。

上級学年の重点別編成は以下の通り。

10 年及び 11 年 А 組 - 医療系 - 普通教育水準(медико-общеобразовательный уровень)

10 年及び 11 年 Б 組 - 社会 - 文科系(социо-гуманитарный профиль)

10 年及び 11 年 В 組 - 数学深化学習(углублённое изучение математики)

10 年及び 11 年 Г 組 - 情報 - 技術系(информационно-технологический профиль)

上記のように重点教育はいくつかの領域で行っている。すなわち、技術系(医療系)、社会 - 文科系、数学系、言語系(英独仏)、ユニバーサル・クラス(このクラスは学校間生産実習コ

ンビナートに通っている)。重点領域学級は大学と連携している。例えば、医療系クラスは医学アカデミーと、情報 - 技術系クラスはトムスク大学と、社会 - 文科系クラスはユグラ大学と連携している。

9 学年を修了した者の中には技術教育カレッジに進学する者もいる。スポーツ好きはスポーツ学校に進む。スポーツクラスではホッケーをやっている。これらは7年生から始まる「重点教育前段階」の生徒の話だ。

また、本校は市内で金メダリスト・コンクールの優勝者が一番多い学校である。

教員は専任が74名で、その内訳は新任専門家5名、第2カテゴリー教員10名、第1カテゴリー教員20名、上級カテゴリー教員39名である。そのほかに、40名ほどの職員が働いている。内訳はおよそ教科準備室(生物、化学、IT)の助手、心理士2名、学校ソーシャルワーカー1名、清掃員などである。

校名についているソゾノフ Созонов Юрий Георгиевич は、本校の元校長である。生徒たちに大変慕われた校長で、玄関ホールの柱に飾られている同氏のレリーフは、生徒たちが働いて貯めた基金でつくったものである。

愛国心教育：本校の訓育及び補充教育の体系において「市民性 - 愛国心的方向」(гражданско-патриотическое направление) は優先的なものである。ロシア連邦国家教育ドクトリンにおいて、市民の訓育の課題が重要課題として提起されていた。すなわち、「教育制度においては、…中略…ロシアの愛国者すなわち個人の権利と自由を尊重し、高い倫理性を有する法治・民主・社会国家の市民を育成することを保証しなければならない」とある。「市民性教育」(гражданское образование) という言葉で意味されることは、一定の知識体系を伝達し、祖国に対する愛情や自国民の歴史 история своего народа や国家の法律に対する関心を発達させ、自らの行動や国の運命に対する責任感を育て、市民的行動(市民的積極性)につながる能力を形成することを通して、生徒の自覚に対する意図的教育的働きである。

したがって、このような愛国心教育を行うということは、教科を含め学校の教育活動全体を通して実に様々なことを行うということである。

本校で、行っていることの一例を示せば以下のとおりである。

「寛容のフェスティバル」：民族文化を紹介しあったりして、お互いの文化をよく知り、友情を深める。「寛容度テスト」を今年から行い、民族間の感情の融和、対立の防止を進めてゆくつもりだ。

「5月9日戦勝記念日」：戦没卒業生を偲ぶ催しを行う。これにかかわることだが、サークル活動として、9～11年生で「探検隊」組織し、戦没学生の遺骨の探索、発掘活動を継続的に行っている。

「コンクール・私の法律案」：生徒たちが社会をよりよくするために必要な新しい法律案を提案し、検討する行事。

「私たちの夢の学校」：校舎についても生徒たちの創造活動の対象として、改善のための提案活動を行っている。

「卒業生の並木道」：毎年卒業生が植樹を行っている。

町の430周年の催しでは、本校はエカテリブルクから退職した教師を招待し、卒業生たちにも連絡して、出会いの時をもった。

「学級の時間」を利用して、学校博物館や市内の博物館見学を行っている。地域の歴史や文化への理解を深めることになる。

町ぐるみのキャンペーンとして、麻薬撲滅・防止キャンペーンが行われている。唾液テストも校内で実施。

「世界の毛布」という催しを青年センターで行っている。これによって、民族間の共通性の認識が深まることを狙っている。

「宗教文化と世俗倫理の基礎」を今年から導入した。これは同教科の教科書の拡大検定の一環としての導入である。この教科は全国で4年生から教えられることになる教科であり、評価は行わない。本校では、7割の生徒が社会倫理を選択した。ロシア正教は277人、イスラムは100人が選んだ。全国的には6割くらいが社会倫理を選択しているといわれている。

校内見学：学校博物館：学校の歴史展示。歴代の旧校舎の写真。生徒のボランティア活動：戦没者の遺骨探索・発掘。などなど。

図書館：蔵書3万2千冊。朝9時から夕方6時まで。日曜及び7月は休館。司書2名と生徒の図書委員会が運営。

ビデオカメラ。校舎内32台、校庭10台のビデオカメラが作動しており、守衛室で監視するようになっている。

教室：9年生がテスト実施。生物学の準備室。

(遠藤)



【調査機関⑫】 児童発達センター第8幼稚園

(МБДОУ: Центр развития ребенка -детский сад №8 «Солнышко».)

訪問時間 12:15 - 13:20

対応者：エルモリーナ園長 Ермолина Ирина Александровна (заведующий)
ラリーса・ツーラヤ Цулая Лариса Владимировна
(Хантэ-Мансиск教育部普通教育課長 начальник отдела общего образования Департамента образования)
住 所：г.Ханты-Мансийск, ул.Островского 37.
連絡方法：(園長) тел.:32-40-50.

市内の公立幼稚園は分園(2園)を含め全部で22園。本園は19の幼児グループによって編制されているが、その他は小規模のものが多く全体の3分の2が5グループ以下の編制の

園である。詳細は以下のとおり*¹。

表. 市内公立幼稚園規模別一覧

規模（幼児グループ数）	1	2	3	5	10	13	15	19	計
公立幼稚園数	1	4*	8	1	4	1	2	1	22

*分園を2園含む。

この他に、私立幼稚園が市内に9園ある。いずれも小規模であり、幼い子どもを受け入れている。

表. 市内私立幼稚園一覧

	受け入れ年齢	グループ数	最大受け入れ人数	月謝（ルーブル）
1	1.6～4.5歳	2	45	10,000
2	1.6～4歳	1	14	12,000
3	3～4.5歳	2	30	10,000
4	2～4歳	1	10	9,000
5	1.6～5歳	3	50	11,000
6	3～5歳	1	15	6,000
7	1.5～3歳	3	45	15,000
8	1.3～3歳	2	20	11,000
9	1.6～4歳	2	16	10,000

また、ハンティ-マンシースク自治管区全体では、2009年末現在で431の就学前施設が設置されており、72,792人の1～7歳までの幼児たちが教育を受けている。当該年齢層のうちの59%、3歳～6歳では78.8%（ロシア平均68%）の幼児が就学前教育を受けている。しかし、就学前教育に対する需要は日増しに高まっており、現在（2009年）では54,984人の待機幼児がいる。この数字は生まれたての乳児がすぐに入園希望登録をしていることを意味する*¹²。



エルモリーナ園長の説明：上の表に見るように、訪問した本園は市内で最大規模の幼稚園である。創立は1965年で、3歳～7歳までの500名弱の幼児を受け入れ、19グループに編制している。

* 1 1 Ханты-Мансийский образовательный портал (<http://edu.admhmansy.ru/educat/educomitet/activity/before/>) より。

* 1 2 О дошкольном образовании (Ханты-Мансийский образовательный портал <http://edu.admhmansy.ru/educat/educomitet/activity/before/>) より。ただし、2010年の国勢調査では、本自治管区の「0歳から9歳までの幼児・児童の通園・学者」の割合は62%である。すなわち、この年齢層の総数208,525人、「通園ないし通学者数」129,303人、「通園も通学もしていない者」69,445人、「無回答」9,787人である。



1 グループは20～27名で編成している。国の衛生基準では1グループは20名以下となっている。新教育法では「義務的就学準備」を規定している（ので基準より多くなってしまう？）。当市は昨年（2011）出生率が全国1位となり、待機児童が数多くいる。一家族に3人の子どもがふつうである。

食費（1日4回分^{*13}）は日額130ルーブル、月額2800ルーブルである。

教員は73名、うち言語指導員 логопед 5名、音楽指導員 музыкант 7名、保育士 воспитатель 40名で、彼らのうち50名は高等教育歴をもっている。その他、サービス要員が117名いる。園全体の広さは2ha、園舎は4つの建物から構成され、それぞれ子どもたちにわかりやすい名称、すなわち、「たいよう」、「はな」、「ちゅうおう」、「おはなし」と名付けられている。

予算は管区と市から支給されている。2004年には園舎建設費を含む4億9500万ルーブルを交付された。ハンティ・マンシークラ自治管区では「ユグラの新しい学校」という特別プログラムが実施されており、それによって、食堂をはじめ様々な施設・設備を購入し、園舎の定期改修を行い、新しい建物を建設した。この費用も州と市の折半である^{*14}。

16台の監視カメラが設置され、安全を保障している。

園内見学：歯科室、保健室、酸素室。酸素室では酸素ジュースをいただく（右の写真）。4棟の建物を結ぶ地下通路、昇降用エレベータ、30℃の温水プール、3つある体育館の一つ、絵画教室、もう一つの体育館、工作室、「冬のホール」という名の植物園などなど。

（遠藤）



*13 調理場に貼ってあったメニューには、4食（朝食、昼食、軽食、夕食）の他に、10時にフルーツジュースを出すと書いてあった。

*14 しきりに「ユグラ州」とか「州」という表現を用いる。

【調査機関⑬】少数民族文化—教育児童センター《リリンク・サユーム》

(МБОУ ДОД^{*15}, Детский Этнокультурно-образовательный Центр«ЛЫЛЫНГ СОЮМ»)

訪問時間 13:45 - 14:15

対応者：ヴァディチュポワ所長 Вадичупова Татьяна Савельевна (Директор)

メーロフ氏 Меров Владимир Савельевич

(Методист, Педагог дополнительного образования)

レミーゾフ氏 Ремизов Сергей Александрович(Методист)

住 所：628011,г.Ханты-Мансийск, ул. Мира, д. 52

連絡方法： тел.:(3467) 32-93-88, e-mail : lylyngsoyum@yandex.ru

vadichupova@mail.ru (所長)

HP : <http://lylyngsoyum.ru/>

所長の説明:センターの名前「リリンク・サユーム」はマンシ語で「生きた流れ」という意味。自治管区が現在の名称に改称された2003年の9月に、児童創造アトリエ「リリンク・サユーム」が設置され、さらに、2007年8月にこのアトリエは改称されて現在の名称となり、独立した補充教育機関となった。その内容は、民族的な音楽、舞踊、手芸、演劇、歌唱である。また、母語の授業も行っている。



ハンティ語とマンシ語はきわめて近い言語で、ウラル語族^{*16}のフィン・ウゴル語派の中のウゴル諸語の下位区分オビ・ウゴル諸語を成している。同じウゴル諸語にはハンガリー語が属し、フィン・ウゴル語派にはフィンランド語、カレリア語、エストニア語などが属している。

この施設には600人の児童が所属しているが、ハンティ・マンシ人はそのうちの200人である。職員は所長以下18名(所長1、副所長2、博物館主任1、資料室主任1、音楽指導者1、指導主事6、衣装係2、その他4)。施設内の展示物見学と民族楽器による演奏の鑑賞を行った。

(遠藤)

*15 МУНИЦИПАЛЬНОЕ БЮДЖЕТНОЕ ОБРАЗОВАТЕЛЬНОЕ УЧРЕЖДЕНИЕ ДОПОЛНИТЕЛЬНОГО ОБРАЗОВАНИЯ ДЕТЕЙ.

*16 フィン・ウゴル語派とサモエド語派から成る。

【調査機関⑭】 ユグラ国立大学

(Югорский государственный университет)

訪問時間：15：00～16：00

対応者：研究・国際活動担当副学長：ノビコフ・アレクサンドル・アフタナモービッチ
(Новиков Александр Автономович)、他スタッフ3名
住 所：628012,Россия,г.Ханты-Мансийск,ул.Чехова,16
連絡方法：Тел.: +7 3467 357 723 e-mail: A_Novikov@ugrasu.ru, aleks_hm@bk.ru

ユグラ大学は2002年に設立された。ロシア連邦において21世紀になって設立された唯一の大学である。元知事(フィリペンコ)のイニシアティブで設立された大学で、色々な大学の分校を集めて設立された。本校はハンティ-マンシースク市にあるが、スルグート、ネフチェユーガンスク、ニジネバルトフスク、ピィティ・ヤフ、ランゲパス、リヤントールに分校がある。



大学の主要目的は、ハンティ・マンシ自治管区のための人材養成である。若者を自治管区内に定住させる目的もある。学生数は4165名、その内通信制学生は1434名である。年間に1000人を卒業させることができる。バカラブル(19の養成分野)、マギーストル(6の養成分野)、スペシャリストを養成している。バカラブリアート修了者の約30%がマギスラトウーラに進学している。アスピラントウーラの制度もある。現在は新旧のシステムが併存している。教員数は317



名、内博士は50名、博士候補が155名である。教員は、様々な地域 - ノボシビルスク、オムスク、トムスク、バルナウールなど - から来ている。

本大学も他の大学と同じように最初は学部から講座形成が始まった。現在は、7つのインスティテュート-制御システム・情報テクノロジーインスティテュート(3養成分野:情報科学・計算工学、応用数学・情報科学、プログラム技術)、自然利用インスティテュート(4養成分野:エコロジー・自然利用、基礎・応用化学、応用地質学、地質探索テクノロジー)、人文インスティテュート(7養成分野:ジャーナリズム、言語・文学研究-ロシア語と文学、言語・文学研究-ロシア少数民族の言語と文学、体育学、言語学、社会活動、教育学・教育心理学)、総合技術インスティテュート(5養成分野:建設、輸送技術機械・コンプレックス操作、技術圏の安全学、エレクトロエネルギー技術・エレクトロテクニカ、材料学・材料テクノロジー)、法律インスティテュート(1養成分野:法学)、マネジメント・経済インスティテュート(3養成分野:

マネジメント、ツーリズム、経済学)、通信・補充教育インスティテュートで構成されている。これは、研究活動をもっと集中して行うための組織である。これらのインスティテュートの他に、5つの科学教育研究センターと石油・ガス専門家を養成する大学付属カレッジがある。教育プログラムは、小規模の本大学としてはかなり多く用意されている。これは、地域のニーズに合わせたからである。

最近ユゴルスク市にあるトランスガス社との会合に参加した。トランスガス社には年間200人以上の就職ニーズがある。この会合には、トランスガス社に専門家を提供している4つの大学 - モスクワのグープ記念石油大学、エカテリンブルク連邦大学、チュメニ石油ガス大学、バウマン工科大学 - が参加した。これらの大規模大学に小規模大学である本学は太刀打ちできないようにも思われるが、本学には本学なりの特徴(メリット)がある。それは、コンパクトでモビリティの高い構造なので企業ニーズにうまく対応できるということである。

本学には多くの少数民族出身者が通っている。ハンティ・マンシ自治管区の人口は150万人、ハンティ人は2.5万人、マンシ人は5,000人である。本学は、できるだけ多くの先住民に教育を与えようとしている。

学生のための福利厚生施設も充実しており、アパートタイプの住み心地の良い5階建ての寮7棟を完備している(2300名の学生が居住)。寮費は月額900ルーブルである。民間のアパートを借りると月額15,000~25,000ルーブルかかる。本学は小規模大学だが、素晴らしいスポーツ施設(例えばオリンピック仕様の50メートルプールなど)も備えている。スポーツ施設は、ハンティ・マンシ自治管区の費用で作られた。

本学では、伝統的に積極的な課外活動が展開されている。私(副学長)はトムスク総合技術大学に30年間勤めたが、本学ほど学生の課外活動が盛んな大学は知らない。例えば、ボランティアセンターがあって、そこでソチオリンピックに向けての準備がボランティア活動として行われている。

国際交流に関しては、世界の10ヶ国(ドイツ、オランダ、スウェーデン、ハンガリー、アメリカ、中国、チェコ、リトアニア、カナダ、ウクライナ)の22の大学、研究・教育機関と協定を結んでいる。例えば、チェコの南モラビアセンターと国際交流を行っている。チェコのブルノーからチェコ語の先生が来て本学の40名程の学生にチェコ語を教えている。また、フルブライトでアメリカから教員が来て英語を教えている。インターアクト(International Network for Terrestrial Research and Monitoring in the Arctic)という国際的な協力枠組みの中で、今年の夏、ポーランド、イギリス(スコットランド)、フランスから若い研究者が来て活動した。その研究テーマは、沼地のエコシステムであった。国際交流はまだそれほどバランスがとれていない。こちらからは学生を勉強のために派遣しているが、先方からはこちらの豊かな自然を調査するためにやってきている。皆さんの方から何か新しい形での国際交流の提案があれば喜んで受入れたい。

以下、質疑応答。

無償席の割合はどの程度か(大谷質問)。

連邦レベル(国家注文)の無償席は400、自治管区レベルの無償席は250である(入学者

数は 1000 名程度)。企業提供の無償席は少ない。

卒業生の就職先はどうか（遠藤質問）。

経済・金融の専門家は、ハンティ・マンシ銀行に勤めている。化学の専門家は、様々な種類のラボに就職している。エネルギーとか地質学の専門家への需要も高い。卒業生は、故郷に戻るかハンティ - マンシースク市に残るかしている。この市はとても住みやすい。ロシアには他に同じような町は無いと思う。

ハンティ人、マンシ人の入学志願者への優遇措置はあるか（遠藤氏質問）。

彼らには入学に際して特権がある。入学試験の最低合格点数が同じであったら優先的に無償枠に入ることができる。

昨日第一ギムナジアを訪問したが、そこの連携はあるか（大谷質問）。

第一ギムナジアの卒業生は本学の入学生でもあるので、当然ながらギムナジアには色々と協力している。例えば「若い化学者のスクール」などを実施しているが、率直に言ってその協力に完璧に満足しているわけではない。もっとレクチャーやラボ研究などを提供しなければならない。以前から大学付属のギムナジアを開設したいという希望があるが、これはまだ実現していない。

この大学は創立 10 年程度の若い大学なので色々と問題もあると思うが、現在一番大きな課題は何か（遠藤氏質問）。

現在最も大きな課題は、教育の質を向上させるということである。

日本でも大学教員の教育力向上のために色々な試み（教員評価、FD など）が行われている。こちらでは、教育の質向上のためにどのような試みが行われているのか（遠藤質問）。

これは世界のどの大学でも行っていることと思うが、教授法に関する研修会、資格向上やレベルアップのための研修会、有名な教員を招聘しての講演会、修士論文や博士論文の発表会などを開催したり、教員を海外に留学させたりしている。（松永）

【調査機関⑮】ハンティ - マンシースク自治管区教育・青年政策庁

(Департамент Образования и Молодежной Политики Ханты-Мансийского Автономного Округа – Югры)

訪問時間：16：25-17：50

対応者：パガニーシェフ第一副長官 Погонишев Денис Александрович

住 所：ул. Чехова д. 12

連絡方法：8-3467-33-51-81,

HP <http://www.doinhmao.ru/>

第一副局長のパガニーシェフ氏からの歓迎の挨拶と遠藤班長からの謝辞。

ハンティ-マンシースク市の様々な教育を訪問させていただき、ウラル山脈の麓にこのようなすばらしい市の教育の発展に感銘を受けた。今回は、ハンティ-マンシースク市のみであったが管区全体の現状と課題について教えていただきたい。



ハンティ-マンシースク市の教育制度は管区全体にもあてはまる。管区の人口密度は地域により異なる。人口集中地域は西部の産業都市ニジノバルトフスク、中部では産業都市スルグト、西側には小都市ハンティ-マンシースク市、ニャガイ市、ウライ市がある。これらの町は、管区の主要産業である石油開発コンプレクスである。都市部以外の地方には人口の15%が住んでおり、人口的にはバランスが取れている。スルグトやハンティ-マンシースクは古くからの地域で、それぞれ400年、320年の歴史を有する。自治管区の組織的発展は1960年代に始まった。実際、小都市の多くとニジノバルトフスク市は、30-35年前にできたものである。本管区の教育制度の発展は、旧ソ連時代の繁栄期においてであり、ソ連の教育制度の長所が本管区の基盤となり、管区の経済発展の可能性にも支えられながら、就学前・初等中等教育・中級職業教育機関が並行して発展していった。ハンティ-マンシースク市はもっとも発展が充実している都市で、中級職業教育は80周年を迎えた。ハンティ-マンシースク市では、先住少数民族との関係もあり、中級職業教育の主要分野として教員と農産業の要員を養成している。工業分野の要員を養成は、管区の西部のニジノバルトフスク市、スルグト市、ネフチュガンスキ市で行われている。

現在、教育制度全体の現代化に着手している。ロシアの他の中心部に比べて、本管区では教育制度と企業との関わりは密接ではなかった。例えば、医学分野、石油・ガス分野の人材育成に関しては関連企業からの協力があつたものの、医学は保健省、石油・ガスは石油省というように、中級職業教育機関は個別の行政機関の管轄であった。その後、中級職業教育機関は、各省の管轄下から分離させ、連邦教育省の管轄下となった。この決定は、ある段階では、本地域の労働市場に合致しないものになった。そのため、地域のニーズに教育機関の目標を合致させるため、この2年間、中級職業教育機関を州レベルの管轄下におくことについて検討がなされている。ハンティ-マンシースク自治管区は、自らの高等職業教育機関を設置している数少ない州の一つである。管区には5つの高等教育機関がある：ニジノバルトフスク大学、スルグト大学、スルグト教育大学、ユゴル大学、ハンティ-マンシースク医学アカデミーである。これらの大学に対しては、州からの発注の割合が大きい。ニジノバルトフスク大学、ユゴル大学はロシア連邦教育省の管轄下である。現在、新教育法の準備段階となっており、それが発効すれば州レベルでの高等教育機関の設立が可能になる。また、現在、ロシアの専門家養成制度には元来なかった人材育成の2つのシステムの間、「応用(прикладной)バカラブリヤート」という課程を導入するための積極的な準備が始められている。分野によっては(医学、エンジニア、一定の特定分野で)伝統的な5年間の専門家育成システムがあり、(物理・数学、教育

学、エコロジー自然使用、経済、文学、哲学、文化学などの広い分野には) アспиラントウーラ・ドクトラントウーラも残ってはいるが、ほとんどの専攻は 4-2 制のバカラブルとマギストルになっている。高等職業教育は社会のニーズに即して発展しており、産業関係を専門とする大学は、ハンティ-マンシースク自治管区を含むチュメニ州のレベルで行われている。つまり、経済・教育・文化の関わりは州レベルで組織されている。産業関係の要員の養成はかなり費用がかかり、自治管区レベルの運営は合理的でなく、州レベルで効果的にリソースを使っている。

次に、普通教育制度に関しては、現代化、すなわち連邦教育スタンダードの導入と関係している。すでに初等教育の段階で導入されており、学校の準備が整い次第、中等普通基礎教育段階、完成中等教育段階で導入されることになっている。このスタンダードは教育環境と生徒の達成のレベルに対する要求(本教育・青年政策局は条件を与える)があり、教育の結果の評価は独立した連邦レベルの管理機関が行う。就学前教育機関と普通教育機関の教育サービスは市教育庁管轄化になっているが、自治管区教育庁は連邦レベルの諸規則を市町村レベルの教育機関に伝達するとともに、管区の地域的特性を考慮して諸規則を実施している。連邦構成主体の特色と可能性に応じて、連邦教育スタンダードの枠組みを、各地域の特性(伝統と地域のニーズ、すなわち先住少数民族や各地域の特性など)に合わせて具現化することが可能である。連邦教育スタンダードは補充教育機関に関する要件も定めている。つまり、普通教育機関と補充教育機関の両方において、一人ひとりの子どものニーズに即した発達をめざす。補充教育は、管区全体で幅広く行われているが、様々な行政管轄下にあるので、システムは複雑であるが、合理的である。音楽や美術は自治管区文化庁、体育・シポーツはスポーツ政策庁、自然・環境や各教科を掘り下げて学ぶ活動は自治管区管轄下になる。補充教育は、子ども・保護者のニーズに合わせて無償・有償に分かれる。最近では、エンジニア部門とスポーツ部門に対するニーズが多く、それに応じて補充教育の重点が置かれている。補充教育は子どものニーズに応じて幅広い分野を効率良く提供することで、肯定的な訓育の役割を果たしている。教育庁の組織の中には、青年政策と関連する局があり、職業教育機関の学生や社会人に対する教育を担当している。職業教育機関の生徒には様々な学術会議やコンクールに、社会人に対しては勤務している企業のコンクールに参加させ、継続教育や自主教育を奨励し、最終的には実業家(自営業)としての活動の活性化を図っている。種々のコンクールは、青年の専門分野を深めたり、国内・国外の高等教育で学ぶチャンスを与えたりしている。他に、社会団体の活動、市民社会形成の活動も活性化させている。

就学前教育に関しては、本自治管区において重要な役割を果たしている。就学前教育機関に対する要求(建物、教育過程、衛生等)は高く、そのおかげで、学校教育にたいする首尾よい準備がなされている。こうした諸々の高い要求のために、急激な人口の変動に対して反応することが難しくなる。実際、本管区の出生率は(伝統的に高いコーカサスの国に続いて)ロシア全体で第3位である。すでに述べたように、本管区は 1960 - 70 年代の油田の発見により発展し、旧ソ連諸国からの移民が多い。本自治管区は多民族地域であるが、他の連邦構成主体と異なり、民族間での紛争などは起きない。本管区の地域には、50 - 80 の民族が生活しており、民族間での結婚も多い。このようなことは、本管区の全般的な状況である。質問があれば。

重要産業の発展の豊かさのもとで社会的人口増も大きい。しかし、学校を訪問した印象では、学校の施設設備は目を見張るほど立派であるが、なぜ二交替制を解消できないのか。すばらしい施設の幼稚園がある一方で、待機児童も多い。その原因は、予測できない急激な人口増が起きているためなのか。

主要因として人口増を考えたこともあるが、旧ソ連時代のように教育・社会の分野において国家統制がなくなり、人口増を正確に予測できないという困難点がある。それと同時に、ロシア政府は人口増に対して様々な優遇策を設けていることもあり、出生率は地域によっても異なる。本管区では、経済的な豊かさもあり、ロシア全体で予想されている出生率を上回っている。現在実施されている教育発展プログラムは2年前に作成されたもので、その後2年間に様々な変更があった。施設の建設に関わる計画は修正・改善する必要がある。実情に合わせて法律の文書を改定する必要があるが、迅速に進まないこともある。公立の幼稚園に入園できない待機児童に対しては非国立の部門に通えるような条件を与えている。

人口流入による児童増加の現状は。

この4-5年の間、自治管区に移入してくる人々は、従来とは異なる背景を持っている。開発のピークの80年代は、家族で移住する者が多かった。現在は、雇用は長期間でなく、プロジェクトに応じて一時的雇用が中心となっている。そうした一時雇用者の人口増は3-5%であり、実質的な人口増はすでに移住している人々の自然増である。

先ほどユゴルスキー大学を訪問した。この大学は州知事のイニシアティブにより設立されたもので、州の財政により無償席を確保していると伺った。州が大学に期待していることは何か。

ユゴルスキー大学の人材育成の仕方は、全ロシアのそれとは異なる。基本的に、大学は連邦から予算措置がなされるが、この大学は連邦のニーズに合わせたのではなく、州の西側地域の産業界のニーズ（地質自然使用、資源使用、電力、文学、先住民言語学、制御システム、産業生産技術過程など）に合わせたものとなっているので、州から予算措置がなされる。大学は、州の他の地域（東部・中央部・西側）のニーズに応じて組織され、州予算で完全に運営されている。ほとんどすべての席に州の発注を出している。また、州の大学が外部資金を獲得したり、企業と共同で研究開発したりすることもできる。このように、大学は地域に密着して配置されているが、州の大学はロシアの平均的な大学より高く評価されているし、スルグト大学とニジニバルトフスク大学は各専門分野の実績において、過去5年間、ロシアの大学で最高の評価を得ている。

中級職業教育機関が連邦から州（管区）に移管されたことで、やりよくなったことは。

一方で、管区への移管によって、州予算の追加負担となっていることがある。他方で、地域産業のために専門家育成が可能になっている。ただ、ロシア全体の傾向でもあるが、この地域でも中級教育機関が育成する労働者が不足している状況にある。中級職業機関の移管により、労働市場のニーズに、しかも短期間の教育により充足することができるようになる。ロシアの中級職業教育機関は、それぞれの管轄省庁と関連する企業とに関わっている。また発注される

専門分野は、大変細かなものになっている。例えば、チュメニ州では、石油関連の職業資格を持つ労働者に特化した養成をしている。ロシアの職業教育の構図は、世界の伝統的な中級職業機関の構図と異なっているが、そういうやり方もありうる。

青年問題に関して、青年の間で薬物乱用の問題はないのか。

そのような問題はあるが、こちらの地域の特徴だけでない。ただ、本自治管区では、そのような問題は比較的少ない。一つの理由は、家族の経済的状況が良いことがある。他方で、この20年間にかけて、それまでの社会体制から新しい社会体制へ移行するにあたり、青年政策を生かした社会活動は限られたものであった。さらに、イデオロギーモデルの変化も影響した。民族、国民、市民としての意識が薄くなっていったことも影響している。他方で、インフラ整備が整っており、ロシアからこちらの管区へのアクセスの仕方が、自動車でなく飛行機のみであるので、麻薬を持ち込みは厳しく管理することができる。また、幼稚園の段階から積極的な活動がなされており、社会的機関も予防対策に取り組んでいる。実際の薬物使用に対しても、学校のソーシャルワーカー、警察機関などとも相互に協力して対策を取っている。 (大谷)

ペルミ班（モスクワ、ペルミ）調査報告書

（2012年11月17日～27日）

嶺井 明子
高瀬 淳
ミソチコ・グリゴリー

2012年（平成24年）11月17日～27日（11日間）

月 日	発着地	訪 問 先
11月17日(土)	成田発（SU263便）→ モスクワ・シェレメチェボ着	（→空港近くのホテルで宿泊）
11月18日(日)	モスクワ・シェレメチェボ発 （SU1200便）→ペルミ着	
11月19日(月)		①ペルミ地方子どもの権利オンブズマン ②ペルミ市第396番幼稚園 ③ペルミ市子どもの発達センター・第355番幼稚園 ④ペルミ地方教育省 ⑤ロシア英雄クジミン記念警察リセ（寄宿制）
11月20日(火)		⑥ペルミ市教育部 ⑦人文系科目を深く学習するペルミ市第2番初等 ⑧ペルミ市第2番ギムナジア中等普通教育学校 ⑨ペルミ国立人文系教育大学+東洋愛好クラブ
11月21日(水)		⑩コミ・ペルミャク管区庁 ⑪クドィムカル地区ケクール村小学校（教師の家） ⑫ペシニゴルト ⑬コミ・ペルミャク民族文化センター子どもの家
11月22日(木)	ペルミ発（SU1201便）→ モスクワ・シェレメチェボ着	⑭ペルミ市青少年創造宮殿 ⑮モスクワ市第282番初等中等普通教育学校
11月23日(金)		⑯ウシンスキー記念教育学研究図書館
11月24日(土)		⑰モスクワ市子どもの権利オンブズマン（E.A.Бунимович）
11月25日(日)		⑱ロシア連邦教育科学省 普通教育における国家政策部
11月26日(月)	モスクワ・シェレメチェボ発 （SU260便）	⑲ロシア国民経済・行政学アカデミー 教育開発国際協力センター（CICED）
11月27日(火)	成田着	

< 11月17日(土) >

成田発。ほぼ定刻にモスクワ着。空港付近のノボテル・ホテルに宿泊。

< 11月18日(日) >

7時20分のシャトルバスで空港へ。

定刻に出発し、1時間50分のフライトでペルミへ。時差は2時間。つまり日本とは3時間の時差。ペルミ地方子どもの権利オンブズマンのパヴェル・ミコフ氏が出迎えてくれた。

14時半から徒歩で市内見学。

雪が市街や屋根に少し残っている感じで、散策中に小雪が舞い始めた。

●まず、教会を美術館として利用している施設を見学した。「ペルミ国立芸術ギャラリー」、木彫で有名である。大変興味深く、印象的な場所であった。現在、美術館は教会から退去を求められており、新しい美術館の建物を建設中である。教会の建物を破壊するのではなく、何らかの用途で利用する例は全国的に珍しいことではなかったという。



興味深い展示は木の彫像だった。イコンではなく、木の彫像が作られた。ペルミではアニミズム信仰などが根付いており、ロシア正教の普及はかなり大変であったという。ロシア正教を普及するために、聖人の顔をペルミ地方の人間の顔に似せて作り、また身近な神として認識してもらうために、聖人が金槌を持っているものもあった。キリストの顔もアジア的であった。かつらを被ったエンゼルの彫像が多数あった。

教会の外の建物はそのまま、内部の階段などの造作は取り壊すことになるという。

●次に興味深い点は、歩道に緑のライン、赤のラインがひかれており、それぞれを辿って歩くと、町の地図と現在地点・説明が付された看板がたてられてあり、町の旧所名跡案内、ロマンチック街道になっていることである。子どもたちはゲーム的に、自分たちの街の歴史と現在を知ることができるという。

●民族博物館を訪問したが、その建物は豪商が住居を提供してくれたものであった。この商人はペルミで最初の大学のための建物も提供するなど、この地方の文化的基盤整備に貢献した。

●市内には、「ツル」、「キオト」という日本食レストランがあった。「インドキタイ」の看板もあり、最近ではアジアのレストランができてきているという。

ペルミは文化交流がとても盛んで、夏はここはどこかと思うほど、外国人が多くなるという。

●夕食は、チキンのソーセージ、揚げ餃子のようなペリメニ、地ビールをご馳走になる。

●夜は、7時からペルミのバレエを観劇した（ここで初めてミコフ氏の助手のオシポワさんに会った）。日曜のせいか、小さな子どもたちが多かった。建物はとても立派だった。

帰途に就こうとしたら、「天気良く暖かいので徒歩でホテルに帰りますか？それとも車で

送りますか？」と尋ねられたのには驚いた。小雪がちらつく程度の天気である。天気がよいわけではない。オシポワによると、2週間位まえまでは雨が続き道路がぬかるんで歩くのも嫌だった。今は雪だからそんなことはなく、まだ寒くはなく暖かいから良い天気だそうだ。結局、車で送ってもらった。



< 11月19日(月) >

①ペルミ地方子どもの人権オンブズマン

Уполномоченный по правам ребенка в Пермском крае

1. 対応者：Марголина Татьяна Ивановна ペルミ地方人権オンブズマン
Миков Павел Владимирович ペルミ地方子どもの権利オンブズマン
Осипова Екатерина Николаевна ペルミ地方子どもの権利オンブズマン助手
2. 住 所：г. Пермь, ул. Ленина, 51
3. 連絡先：ombudsman@uprc.permkrai.ru, +7-342-253-7670

ペルミ地方人権オンブズマンであるマルゴリナさんに会う。

児童心理学博士候補。ペルミでは、90年代当初はコンクールによって行政機関などのトップを決めており、マルゴリナさんも選出された。

1997年ペルミ市教育科学委員会 委員長

1999年からペルミ市の副市長

2000年から副知事

2005年から現職

2006～2010年 ロシア人権オンブズマンの調整連絡会議共同代表

成人のシティズンシップ教育、人権教育をどのように推進するかが大きな課題である。

人権が侵害されている事例が多い。高等教育において人権教育どのように推進するかが課題である。

2011年9月から学年進行で導入される初等段階の新スタンダードでは教科外活動に10時間あてることが定められている。陶冶と訓育のバランス。訓育をどのように充実させるか、いろいろな意見がある。①宗教によって、②社会主義時代のようにコムソモール、ピオネールなどの活動によって、③法教育によって、など。パトリオティズム教育、シティズンシップ教育など。

※子どもの権利オンブズマンのミコフ氏のキャリアは以下のとおり。



1976年ペルミ州グバハ市で生まれた。1998年ペルミ国立教育大学歴史学部卒業。6年間政治学・歴史・一般社会の教師として働く。2004年にペルミ国立教育大学の教員になる。2005年フォード財団の奨学金を得てモスクワの教職員資格向上・再教育アカデミーのアспиранトウーラに入学。2008年から現職。歴史-啓蒙および人権擁護団体「メモリアル」のペルミ支部、ペルミ市社会団体「シティズンシップ教育・人権センター」、全ロシア子ども基金ペルミ支部などで活躍。

②ペルミ市第396番幼稚園

МАДОУ «Детский сад №396» г. Перми

(МАДОУ: Муниципальное автономное^{*1} дошкольное образовательное учреждение)

1. 対応者：Жуланова Вера Владимировна 園長
Споданейко Вера Васильевна ペルミ市教育部就学前教育課長
2. 住 所：г. Пермь, ул. Гайдара, 11
3. 連絡先：<http://ds396.ru/>



インクルーシブ教育を実施している幼稚園。パンフレットを入手。

インクルーシブ教育は2005年から（HPによれば、幼稚園も2005年に設立）。開始した契機は親から希望があった。

児童数310人。11グループのうち、2つのグループだけがインクルーシブ（それぞれ25人中5人が障害児）。1グループの平均人数は28人。

聴覚障害児、サンクトペテルブルクでインプラント手術（耳、耳の後ろに何かつけていた）。普通児と一緒に過ごす時、個別指導（見学した課業は、先生一人と幼児二人）簡単な会話文を読ませ（声をださせて）、何回も練習していた。普通児と一緒に、体育（体を動かすリズム運動的なもの）をやる課業。幼稚園の教師と欠陥額を学んだ教師がいる。

インクルーシブ教育に対しては、まだまだ教師の無理解、親の無理解がある。意識改革が必要である。と同時に、具体的な実践方法について実験的試みを継続させていく必要がある（ミ

*1 2011年1月より執行された民法の改訂により、国公立機関は（教育機関に限らず）、独立性が低い順に1) казённый、2) бюджетный、3) автономный の3種類のステータスに分類されるようになった。

コフによる)。

園長は30代の若い女性。年功ではなく教育部が適任と考えた教師を抜擢するというミコフの説明だった。

③ペルミ市子どもの発達センター（第355番幼稚園）

МАДОУ «Центр развития ребенка» детский сад №355 «Чулпан» г. Перми

(МАДОУ: Муниципальное автономное *2 дошкольное образовательное учреждение)

1. 対応者：Пак Фавзия Сунгатовна 園長

Споданейко Вера Васильевна ペルミ市教育部就学前教育課長

Коломийченко Людмила Владимировна ペルミ国立人文系教育大学
講座 主任

2. 住 所：г. Пермь, ул. Куйбышева, 14

タタールの民族教育コンポーネントを取り込んだ幼稚園。園長は67歳、タタール人で夫は朴という韓国人。カザンに住んでいたが、大学に入学するためペルミに引っ越し、国際結婚した。夫は研究しかしない。タタール語を全然話さないし、タタール文化にも興味を示さない。孫の女の子が在籍していた。皆の前で孫を紹介し、抱擁していた。



入園している子どもは、タタール人でも、家庭での会話はロシア語の子が多い。タタール語の授業を見学した。先生は民族衣装をきていたが、私たちへのサービスかもしれない。タタール語の単語を絵を見て発音したりしていた。留学生が子どもの入園を希望する場合が多い。

タタールの民族文化展示室があった。

タタールの民族衣装、ロシアの民族衣装に身を包んだ幼児が、歌と踊りを披露してくれた。最後に園長室で、タタール風の饅頭、チャクチャク、果物などとお茶をご馳走になる。

民族教育やタタール語の教育の必要性、国家が保証するよう条件整備すべき、と園長が執拗に出張したのを契機に、議論が始まった。

ポリクリトゥールヌイ поликультурный という単語がでてきたので、ムルチクリトゥールヌイ мультикультурный という単語との相違を質問したら、「私には違いは見えない」という返答が返ってきた。

「1990年代以降、外来語が多く、それまであったロシア語の単語との使い分けがわからず、

*2 2011年1月より執行された民法の改訂により、国公立機関は（教育機関に限らず）、独立性が低い順に

① казённый、② бюджетный、③ автономный の3種類のステータスに分類されるようになった。



混乱しているように思える。ロシア語の論文を読んでいてもよく理解できない。とりわけナツィオナルという単語である。」と問いをなげかけた。

ペルミ国立人文系教育大学の先生であるコロマイチェンコ氏は、ナロード народ（スラブ民族…）、национальность ナツィオナル（タタール…）、этнос エトノス（ロシア国民…）という3段階の説明を行った。彼女は、エトノスを（日本で言う）国民と理解していたので、意外で驚いた。日本でいうエスニシテティ（タタールなど）は、национальность と呼んでいた。以下は、入手資料の教授用参考書^{*3}に掲載されているコロマイチェンコ氏本人の論文^{*4}（p.12-24）による説明。

- 1) **Народ (народность)** – исторически сложившаяся на определенной территории группа людей, имеющих общие обряды, традиции, сходство языка. →歴史的発展につれて、より小さなグループに分かれ、**нации** を形成する
- 2) **Нация** – исторически выделившаяся из народности группа людей, обладающая специфическими многочисленными элементами культуры (искусство, костюм, жилище, кухня) важнейшими из которых является язык. →国家や国境線ができると、**этнос** が生まれる。
- 3) **Этнос** – исторически сложившаяся группа людей разных национальностей, объединенная государственной принадлежностью, единым государственным языком и общностью моральных ценностей (ритуалы, праздники, мировоззрение)

以上を踏まえると、ロシア連邦に居住するマジョリティは **славянская народность**, **русская национальность**, **россияне** になるという。幼児も、この順に自分の **народная культура**, 自分の **национальная культура**, 周辺の **национальная культура**, **ロシアの этническая культура** について理解を深めていく。Этнос のレベルは 6 歳から。

帰りの車中、ミコフは、「言語が文化の側面ではなく、経済的な有効性によって選択されているのが現実だから…」と語っていた。少数民族の母語保障原則のパラドックスを想起させる。

車中で待っていると、園長がミコフをつかまえて何かを深刻に話している。オシポフによる

* 3 Формирование межнациональной и толерантности детей дошкольного возраста в условиях поликультурного образовательного пространства Прикамья: метод. пособие / под ред. Коломийченко. – Пермь, 2009. これは第 355 番幼稚園の教育実践の紹介をしている論文集であり、パク園長も執筆している。

* 4 Л.В.Коломийченко «Теоретические основы формирования национальной и этнической толерантности у детей дошкольного возраста», стр.12-24. 1) народ, 2) нация, 3) этнос の概念を定義する際には Л.Н.Гумилев, И.И.Кушнер, Н.Н.Чебоксаров, Ю.В.Бромлей, Л.М.Дробижина, В.Б.Иорданский, З.В.Сикевич, В.Н.Гурова, Л.В.Любимова らの研究に基づいているという。(具体的な文献は挙げられていない。)



と、教育施設の基準が最近いっそう厳しくなって、閉鎖に追い込まれる機関がある。その点について、ミコフに相談している。閉鎖されると幼児は困ってしまうので、ミコフが相談にのっているということらしい。

.....

次のアポが変更され時間ができたため、これを利用して、ミコフ、オシポワさんが戦争記念碑に行ってくれた。

ペルミは激戦場になり、多くの人が死んだ。多くの墓、それを見下ろすように立つ母の立像。その奥にあるロシア正教の教会（野菜貯蔵庫として使われていたため、イコンなど古いものはわずかで、ほとんどが新しいイコンであった。）

ペルミにはスターリン時代のラーゲリが多かったが、記念碑から眼前に見えるクリーム色の建物もそれであり、現在は刑務所として使われている。この建物の前には荒地が広がっていたが、ここは政治犯などの遺体が遺棄された場所であり、いつか記念碑的なものをつくる予定で、そのままにしてあるという。



④ペルミ地方教育大臣

Министр образования Пермского края

1. 対応者：Кассина Раиса Алексеевна ペルミ地方教育大臣
Сидорова Лариса Сергеевна 就学前・普通・特別教育課長
2. 住 所：г. Пермь, ул. Подводников, 6
3. 連絡先：<http://minobr.permkrai.ru/>



4 時に行ったが、大臣がまだ戻らず、初等中等教育局長の女性がパワーポイントにより、地方の教育の概要について説明してくれた。この方は 20 年間の教師経験の後に行政の場に入ったという。説明の中で印象的だったのは、上から改革、改革と次々と打ち出しているが、現場まで届いているのはそのうちどれだけあるのかは別問題であると、微笑みながら語っていたことである。

説明の内容は、ネットで入手していた資料とあまり変わらないものだった（資料 2 参照）。

大臣が戻るまでの代理という感じで説明している印象を受けた。

大臣が戻ったのは 5 時 20 分であり、10 分程度、説明してくれた。

当初 17 時に訪問予定だった警察リセに急いで出発した。

⑤ロシア英雄クジミン記念警察リセ（寄宿制）

НОУ «Лицей полиции им. Героя России Ф. Кузьмина» (НОУ: Негосударственное образовательное учреждение)

1. 対応者：Каменев Сергей Викторович 校長その他
2. 住 所：д. Гамы, Пермский район
3. 連絡先：<http://liceypolice.ru/>

ペルミ市郊外にあり、車で 90 キロ、30 分走り 6 時ころ到着した。生徒たちが講堂で待っており、いきなり大きな拍手の中、壇上に着席させられた。グリーシャ、オシポワ、3 人とも



事情がわからず、驚くと同時に戸惑った。

人権オンブズマンの全権代表がペルミに来たので、ミコフもこの校長もそちらにいたり、同行しなかった。

生徒からの質問を5点受け付けた。日本での警察の権威は？筑波大学のランキングは？などであった。

7学年から入学。普通中等教育と初等職業教育を受ける。軍隊的な銃の射撃練習、乗馬の練習なども行う。広い敷地内に、校舎、寮、体育館、校庭、ロシア正教の教会がある。寮は一部屋、5人が基準。食堂は、7・8学年と9・10学年とにわかれていた。ほとんどの生徒はペルミ市ではなくペルミ地方の比較的貧しい地域からきている。親が警察官の家庭が多い。週末は家に帰る。

1993年ころから設立の準備を始め、1996年開校した。設立した背景には、20世紀末のロシア社会の民主化によって、法執行機関（警察など）の質向上の課題が浮上したことであるという。現在では卒業生がペルミの内務省などに就職するようになり、綱紀粛正に尽力できるようになってきた、と語っていたのが印象的であった。最初は地方の警察官であっても徐々に行政の中核に入り込むようになってきた。科学と違って一朝にして変化をおこすことはできないが、教育の力は時間はかかるが大きいのだ。

生徒数310人、うち7-9学年192人(61%)、10-11学年118人(39%)。1クラス平均20人。大学進学率は86.5%。多くの卒業生は最終的に警察官になる。

教職員数77人、うち高等教育修了者55人。普通教科の教師は39人、うち上級カテゴリー46%、第1カテゴリー6人、第2カテゴリー8人、カテゴリーなし7人。軍人教師は32人、うち офицеры-преподаватели 20人、小隊長 командиры взводов (=学級担任) 12人。教員の平均年齢は35.2歳。(2010-11年度現在、学校HPによる)

7年生には「ロシア正教文化の基礎」を教えている(革新的プロセスの1つとして位置づけている)。



< 11月20日(火) >

⑥ペルミ市教育部

Департамент образования администрации города Перми

1. 対応者：Гаджиева Людмила Анатольевна 部長
Петроградских Ирина Викторовна ペルミ市教育部・副部長
2. 住 所：г. Пермь, ул. Сибирская, 17
3. 連絡先：gadzhieva@mail.ru, (342)212-70-50

訪問した印象を聞かれたので、インクルーシブ教育、民族的要素（タタール）の加わった幼稚園など意欲的な取り組みが参考になったとのべた。

移民の問題が大きいことがわかった。134番学校はタジク人が多く、ロシア人が他の学校に転校してしまう事例が多い（ロシア人の子どももタジク語が分かるようになる、という「逆の統合」も起きているという。約1000人委員の定員があるのに500人



にも満たなくなっていました。方や1000人の定員なのに、ずっとオーバーしてしまい、2交代制としている学校もある。移民をいくつかの拠点学校に集めて教育するか、分散方式でそれぞれの学校で対応した方がいいか、今後の対策について悩んでいるという。

これから訪問する第2ギムナジヤは、中国語・日本語・韓国語の東洋語を教えており、大学ではなく学校がペルミ市と東洋諸国の協力のファシリテーターになっていることが特徴的である。特に中国語教育が充実しており、きっかけとしてはソ連時代からペルミ市に住んでいる中国人ディアスポラの存在が大きかった。日本語も数年前から教え始め、今年12月には初めて日本語能力試験の会場になる。

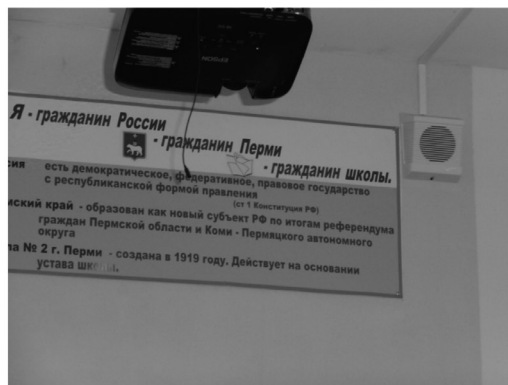
委員長が議会に出席のため退席した後、他の職員と話し合った。

<教科外活動10時間について>学校は従来の授業方式に慣れているので、充実した教科外活動を提供できない。補充教育機関のほうが市場の動向に対応できている。補充教育機関の教員を招いたりしている。最近タタルスタンのある学校を訪問したが、子どもは放課後に制服を脱いで普段着になったという違いだけで、午前中とまったく同じような授業をしていた。これでは決して訓育と教育の統合にはならない。

⑦人文系科目を深く学習するペルミ市第2番初等中等普通教育学校

МБОУ «Средняя общеобразовательная школа №2 с углубленным изучением предметов гуманитарного профиля» г. Перми
(МБОУ: Муниципальное бюджетное общеобразовательное учреждение)

1. 対応者：Красносельских Валентина Леонидовна 校長
Петроградских Ирина Викторовна ペルミ市教育部・副部長
2. 住 所：г. Пермь, ул. Пермь, ул. Старцева, 1а
3. 連絡先：kv11@mail.ru, (342)212-32-54, <http://www.school2.perm.ru/>



1919年に設立。現在の校長は2005年から。6年前に学校博物館をつくり、展示品に大部分は地元の作家 Лев Давыдычев について。児童生徒数 1108 人、教員 72 人(学校 HP による)。

シティズンシップ教育の授業を見る。先生はこの学校の副校長でもある歴史・一般社会の40歳位の男性教師。ミコフ氏によれば、この先生は優秀な教員としてペルミ市の「人材プール кадровый резерв」に入っており、どこかポストが空いたらペルミ市の別の学校の校長に就任するという。東京にいたことがあるという生徒がいた。パトリオティズムの解釈が日本とずれているのに改めて気づく。

校長は、シティズンシップ教育はパトリオティズムの教育であるとさらっと言ってのけた。「学校の市民」「ペルミ市の市民」「ロシアの市民」の三位一体でパトリオティズムのことを教えているという。国際婦人デー（3月8日）に男の子がみんな女の子のために校庭でハートの形に並んで演出してくれたのもパトリオティズムをあらわしているという。

授業においても然り。ウラル地方の美味しいお菓子とお茶をいただいた。

⑧ペルミ市2番ギムナジア

МАОУ «Гимназия №2» г. Перми

(МАОУ: Муниципальное автономное общеобразовательное учреждение)

1. 対応者：Суханова Людмила Андреевна 校長
Петроградских Ирина Викторовна ペルミ市教育部・副部長
2. 住 所：г. Пермь, ул. Пермь, ул. Старцева, 1а
3. 連絡先：kv11@mail.ru, (342)212-32-54, <http://www.himnasy2.perm.ru>

校長は73歳。東洋語センター（日本語、中国語、韓国語）。

1992年に開校以来、ずっと校長である。

日本語の生徒たちが校内案内をしてくれた。日本語の授業を参観した。現在は3人目の先生で、2012年9月から着任。このギムナジアが日本語教師を募集しているのを知って応募したという。

とても日本語が上手な女子生徒が二人いた。

後のホールでの交流会の際、日本への留学について質問していた。

日本語でトトロをとてもきれいな声でうたってくれた。



本校は2012年12月の試験から日本語能力試験の会場となる。沿ヴォルガ川連邦管区とウラル連邦管区の計20連邦構成主体の人が対象となる。モスクワ、ウラジオストク、ノボシビルスク、ハバロフスク、ユジノサハリンスク、イルクーツク、サンクトペテルブルクに次いでペルミは8番目の会場となる。ペルミが選ばれた理由について国際交流基金に問い合わせたところ、現地（=本校）からの要請があったという。

児童生徒数1141人、うち小学部454人。全部で43クラス（1クラス平均25人）。2年生から週6日制。（学校HPによる）

⑨ペルミ国立人文系教育大学

Пермский государственный гуманитарно-педагогический университет

1. 対応者：Колесников Андрей Константинович 学長、
 Чулаков Дмитрий Константинович 学術活動・国際関係部
 ведущий специалист、その他：副学長、国際センター長
2. 住 所：г. Пермь, ул. Сибирская, 24
3. 連絡先：kolesnikov@pspu.ac.ru, tel (342) 212-72-53, fax (342) 212-69-80



ペルミで最初の高等教育機関（1916年創設）から分離する形で、1921年にウラルで最初の教育大学として設立された。2012年5月に名称が педагогический университет から гуманитарно-педагогический университет に変わったばかりである。現在は、教育研究の水準向上を図る観点から、13学部（30以上の専門分野・教員数200名以上）より構成される「人文大学」として活動している。「国立」のステータスであることから全国的な活動を行っているが、8000名以上が在籍する学生の多くは、ペルミ地方の出身者である。なお、ペルミ市が1989年まで閉鎖都市であったことから、大学の国際化が課題とされている。テンプス計画などによりEUとの交流もあったが、ファンド終了により現在では機能していない。

学長によれば、体制転換から20年間の変化は、訓育（社会化）のための手段であったソ連邦時代の学校教育からイデオロギーの要素が取り除かれた点にある。すなわち、教育には、教授（科学的知識の伝達）と訓育（社会生活への適応）の側面があるが、「イデオロギーに奉仕する」ことが求められたソ連邦時代には、これらの側面が別々に教育されていた。体制転換により教育からイデオロギーの要素が排除されたことに伴い、教員は、社会で生きていくための資質・能力をどのように育成していけば良いかがわからなくなり、その結果、教授の側面（教科学習）を強調した教育活動を行うようになった。これに対する反省として、現在、学校教育に訓育の要素を取り入れようとする動きがあらわれているといえる。こうした認識の下に学長は、今後の学校教育においても、イデオロギーの要素が排除されていくことが望ましいと考えている。その一方で、副学長は、ロシア国民のアイデンティティを確立

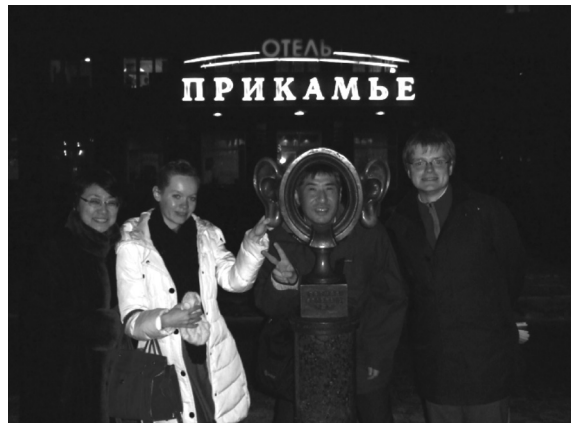
するためには、イデオロギーの要素が学校教育に含まれるべきであるとの見解を示した。

また、スタンダードなどに示される今日の“**Национальный национальный**”の概念については、ロシア社会が重層的な構造であることから、必ずしも明確でないとのことであった（メドベージェフ前大統領も“**Национальный**”の文言を法令等の公文書で使用しない方が良くいと発言している）。ただし、“**Национальный**”



には、多分に宗教的な要素が含まれており、世俗的には訓育の要素としてとらえられる。したがって、この問題は、学校教育（とりわけ訓育の側面）における宗教の位置づけにも関わり、当然のことながら教員養成教育の内容にも反映されなければならないが、現段階では手つかずの状況となっている。この問題について、副学長は、正誤が明確であったソ連邦時代の訓育の内容が、体制転換によって多様で複雑な価値を有するものに変化したことを指摘し、学生自身が教員として判断していくべきことと考えている。具体的には、学校教育において、①多様な文化的・宗教的・社会的な背景をもった生徒（民族）が在籍することを前提とした対応を行いつつ、②生徒の寛容の精神・態度をはぐくんでいくことが重要であるとの考えを示した。

最後に、東洋愛好クラブの先生や学生と交流した。40人近く集まってくれた。日本の教育などについてたくさんの質問を受けた。歴史学部の Вертинский Александр Владимирович 学部長らが対応してくれた。



Пермяк – солёные уши の像にて（本屋の帰りに）

< 11月21日（水） >

コミ・ペルミャック管区の調査。

朝7時、真っ暗な中をスホイ・パヨートを持って出発。レストランは7時からだった。途中の景色は残念ながら暗くて見えなかった。日の出とともに朝が来る日本が懐かしい。

⑩コミ・ペルミャック管区庁

Глава Коми-Пермяцкого округа

- | |
|---|
| <p>1. 対応者：Рычков Виктор Васильевич 管区長（兼ペルミ地方大臣）
Чугаев Юрий Егорович - руководитель государственной приемной
Уполномоченного по правам человека в Пермском крае в Коми-
Пермяцком округе</p> <p>2. 住 所：г. Кудымкар, ул. 50 лет Октября, 33</p> |
|---|

表敬訪問。

人 口 11万6000人（ペルミ地方の4%）

面 積 3万2000km²（ペルミ地方の5分の1：管区内の4分の3を森林が占める）

年間400万の木材 km³（持続可能な天然資源）

学 校 101校（うち50%で「コミ・ペルミャック語」が教えられている）

就学前教育機関 143園（人口の54%がコミ・ペルミャック人であることから、うち約3割の園でコミ・ペルミャック語が使用されている）

職業教育機関 3校

テフニクム 4校（教員養成、医療、木材加工、農業）

大学支部（ウドムルド大学、ウラル森林工科大学）



ペルミ人文系教育大学文学部では母語教育保障のための教員養成コースが設けられ、125名の学生（5年制：各学年定員25名）が在籍し、その卒業生は教員としてコミ・ペルミャック語を教えている。学校以外の主な就職先として、管区内外のマスコミがあり、コミ・ペルミャック語や民族文化の普及に貢献している（管区内には新聞社が4社あり、うち1社はコミ・ペルミャック語の新聞である）。

コミ・ペルミャック語の普及・促進を行う機関として以下のものが設けられている。

コミ・ペルミャック民族文化センター（コミ・ペルミャック語の書籍出版）

ドラマ劇場（コミ・ペルミャック語の芝居上演等：80年以上の歴史がある）

コミ・ペルミャック民族図書館（コミ・ペルミャック語の書籍の収集・保管等）

ペルミ地方の知事命令により、毎年2月17日が「コミ・ペルミャック語の日」とされている。当日は、コミ・ペルミャック語と文学に携わる者の顕彰や就学前教育機関～大学で様々なコンクールやイベントが行われる。また、民族ファッションや民族料理などに関する各種団体が活動しており、家族・家庭での実践を促進するために学校で教えている団体（料理）も存在する。2005年にペルミ地方に管区（自治管区）が組み入れられたことで、結果として、民族文化を支援する地方予算からの支出が増大し、コミ・ペルミャック語と文化の普及・促進を図る様々な支援プログラムが作成されている。

*ペルミ地方憲章の第42条「コミ・ペルミャック民族の民族的アイデンティティの維持の

保障」により、

- 1 コミ・ペルミヤックは、コミ・ペルミヤック民族の先住の地である。
ペルミ地方の国家権力機関は、コミ・ペルミヤック民族の言語、精神文化及びその他の民族的独自性を形成するものの保持と発展のための条件を整備すること。
- 2 コミ・ペルミヤック管区の域内の公的なコミュニケーションにおいては、ロシア語と並んでコミ・ペルミヤック語を使用することができる。」と定められている。

コミ・ペルミヤック語での演劇を行う人材（グループ）を管内で選抜し、サンクトペテルブルク演劇アカデミーに派遣している。これら学生には、連邦または地方に加えて管区の奨学金が与えられる。管区からは年2回の帰省旅費が支給され、帰省期間中には管内での公演や様々なイベントに参加することを求めている。

⑪教師の家

**Учительский дом…教師（夫婦）の住居施設が付属した小規模小学校
НОУ «Начальная школа» д. Кекур Кудымкарского района
(НОУ: Негосударственное образовательное учреждение)**

1. 対応者：Баяндин Александр Леонидович 校長
Симанова Галина Петровна クディムカル副地区長（社会発展担当）
2. 住 所：д. Кекур, Кудымкарский район



設置されているクディムカル地区には、275の居住地区・集落がありペルミ地方で最も多い。その理由は小規模集落が多いためであり、就学前教育機関や学校へのアクセスを保障することが課題となっている。

管区内に2校の「教師の家」が設置され、当校は、設置して3か月が経過したところで、現在、ライセンスの交付申請を行っている（もう1校はライセンス交付済）。この「教師の家」は、非国家立 негосударственный のステータスとなっている（財政は公費によるものであるが、既存の他の設置形態にあわないため非国家立というステータスになった）。生徒の人数により

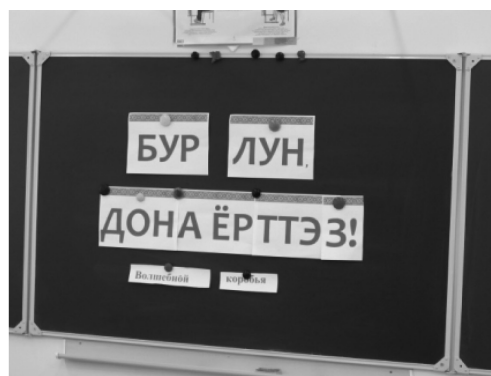
予算配分が行われるが、小規模校でその基準が適用されると、より多くの教員の任用が必要となり、教員給与などが十分な額に達しないこととなる。そのため、若い教員夫婦に住居等を提供することによって教員の生活条件を整備・保障し、同時に子どもたちがアクセスできる地域に一定の教育水準を伴う学校を設置することを可能にすることが意図されている（連邦の規定では教員に住居を直接与えることができない—学校の施設・設備は地区予算）。

児童数 20名（男子17名 女子3名）
教員数 校長（男性：主として経営担当）＋2名（うち1名が校長夫人）
学級数 2学級（1・3年生クラス、2・4年生クラス）
一部で1.5部制を採用し、4年生は3時間目から登校する。
児童生徒の第一言語はロシア語（1年生はコミ・ペルミャック語が多い）



教授言語 ロシア語
（管区内にコミ・ペルミャック語を教授言語としている学校はない）

- コミ・ペルミャック語と民族文化を教える授業が行われている。
 - 宗教文化と世俗倫理の基礎については、親との相談の上、「世俗倫理の基礎」を選択した（教科書については、プロスベシェニエのものを採択している）。
- ※本校の教科課程、教科外活動および教科書一覧は資料4を参照（ロシア語）



⑫ペシニゴルト子どもの家

ГКОУ Пермского края «Пешнигортский детский дом»
(ГКОУ: Государственное казённое образовательное учреждение)

1. 対応者：Подвинцева Татьяна Михайловна 校長
2. 住所：д. Пешнигорт, Кудымкарский район



従来の子どもの家は、広大な敷地に教育と生活の場が併設された施設であり、地域から隔離された状況にあった。しかし、孤児も他の子どもの同じように地域で生活する（社会的に инклюзивное образование される）存在であるとの観点から、当施設の子どもは、子どもの家で生活し、地域の学校に通学していることを特色としている。

ペルミ地方では、子どもの家の在籍者の養子縁組を進めることにより、在籍者・施設数を減少させて、子どもの家自体の環境整備を実現している。

寝室等を少人数のアパート形式にする（台所など）

地域の二部制の学校に通っているため、午前中にも児童生徒が生活

1942年にモスクワより130名の孤児が疎開してきたことにより設立

施設長はロシア語教員・校長経験者（6年前に大きな子どもの家の施設長、3年前から当施設長）

⑬コミ・ペルミャック民族文化センター

Коми-Пермяцкий этнокультурный центр

1. 対応者：Носкова Мария Валентиновна センター長代理
2. 住所：г. Кудымкар, ул. Студенческая, 9
3. 連絡先：<http://etno-kpo.umi.ru/>



出版社、民族文化センター、映画センター、アンサンブル及び補充教育センターの5つの機関を合併・統合して、2010年4月12日に設立される。

目的 民族の伝統的文化の継承
民族の芸術の継承・発展
民族的・文化的ニーズへの対応
地域間・国家間の交流の促進
作家・詩人への支援

単なる民族文化施設にとどまらず、補充教育施設を内包したことから、子どもの教育活動—特にコミ・ペルミャック語と民族文化の継承に貢献することが強調される。通信課程によるコミ・ペルミャック語の学習が提供されている。

コミ共和国とウドムルト共和国と協力して活動を展開している。

有能な専門家とともに様々な社会プロジェクトを推進している。

民族語・文化の保障が最も重要な目的としているが、親がコミ・ペルミャック語・文化を軽視する傾向がみられる（学校でコミ・ペルミャック語・文化の授業時間を減らして他の教科等の学習をしてほしいとの要望など）。経済的にはロシア語が優位という状況を背景としている。

< 11月22日（木） >

⑭ペルミ市青少年創造宮殿

Дворец творчества юных г. Перми

- | |
|--|
| <p>1. 対応者：Roslyakova Наталья Михайловна 館長
Зотова Людмила Олеговна ペルミ市教育部補充教育・訓育担当</p> <p>2. 住 所：г.Пермь, ул. Сибирская, 27</p> <p>3. 連絡先：http://www.ddut-perm.ru/</p> |
|--|

本施設は、2008年に創設70周年を迎えたペルミ市立の補充教育機関であり、軍事—体育、装飾—工芸、《芸術的創造》、音楽及び自然科学の5部門と就学前教育部《第一步》から構成される。各分門の下には様々な講座等が開かれるとともに、体育館、鉱物展示室、動物飼育コーナー、ミニ水族館などが設けられている。5年に1回の頻度でアテスターツィアを受けることが必要であり、審査の際には、開設講座等の活動を記録したポートフォリオやVTRを連邦の認定機関（モスクワ）に送ることが義務づけられている。指導者は所定の養成教育を受けた有資格者であり、その数は200名以上にのぼる。利用者は、約5000名（原則1～20歳）であり、このうちペルミ市予算でまかなわれる7～18歳の者が毎年1つの講座等を無償で受けることができる。障害者・貧困者については、2つの講座等を21歳まで無償で受けることができるよう配慮されている。

新しいスタンダードに基づく学校との連携については、学校に補充教育の専門性を有する指



導者がいないことから、その必要性が当然のことと受け止められている。学校の補充教育との相違点は、学校が所属する教員の資質能力に応じて、特定の講座等を一齐教授で行わなければならないのに対し、本施設では、指導者や施設・設備が十分に整っていることから、多様な講座等の中から利用者が希望するものを提供できることにある。具体的には、利用者の85%が上級の音楽系学校に進学する「民族アンサンブル」、大統領奨学金を受給する「演劇スタジオ“コード”」、学校のスタンダードになく Lukoil の支援を受ける「地質学講座」などを挙げ、将来の職業生活につながる補充教育が実施されていることを指摘した。このように学校では開講されない内容の講座等も設けられているため、遠距離の利用者については、無償で乗降できる車（バス）を運行する市の事業が実施され、学習機会の確保が図られている。

見学した講座等は以下の通り。

- カート：カート車の整備・運転など専門的な指導がレベル別に行われる。見学時の利用者は男子のみ7名であった。
 - フェンシング：終日開講しており、利用者の総数は250名を超える。利用者は週当たり3～6回の指導を受ける（競技選手レベルでは1日に2回というケースもある）。見学時には3名の指導者が20名程度の利用者に対応していた。
 - 粘土細工：見学時には1グループ15名の利用者が活動していた。
 - 犬の訓練：利用者は自分の飼っている犬を連れてきて調教・訓練をする。見学時には1グループ10名の利用者が活動していた。
 - 登山・フリークライミング：利用者は、平均して週当たり3回の指導を受ける。
 - ボーカル：利用者の総数は80名を超える。見学時には7名の利用者が、新年を迎えるための歌の指導を受けていた。
 - ダンス①：利用者の総数は約150名であり、週当たり4回の指導を受ける。見学時には女子のみ8名の利用者が活動していた。指導者(女性)は、かつて当該施設でダンスを学習していた。
 - ダンス②：スポーツとしてのダンスが指導される。利用者の総数は約120名であり、見学時には18名の利用者が活動していた。
- *ダンスに関するコースは5つあり、それらは13講座（模範集団のステータス）に分かれている。

○美術学校：5年間のカリキュラムをもち（シコーラのステータス）、登録すると8つの美術分野について、1年目には週当たり5時間、2年目以降では週当たり9時間の指導を受ける。見学時には、12名の利用者がデッサンの指導を受けていた。

○演劇：見学時には14名の利用者が活動をしていた。

○地質学①：学校のスタンダードで必修とされていない分野であり、大学進学等の具体的な学習成果が得られるように、年齢等を考慮した指導方法・内容に留意している（モスクワ大学などに進学実績あり）。見学時には8名の利用者が学習していた。

地質学②：25周年を迎えた講座であり、見学時には8名の利用者が学習していた。指導者は、特にペルミ地方の地質に詳しく、鉱物展示室においてペルミ特産のセルニットなどについて説明した。

○音楽学校：ほとんど個別指導により、一人一人の成長に合わせた指導が行われる（シコーラのステータス）。見学時には女子1名がピアノのレッスンを受けていた。

*ほとんどの音楽の講座等に障害のある利用者があり、指導を受けている。

なお、2013年2月18・19日の日程で、第1回全ロシア補充教育大会がペルミ市で開催される予定である。

<飛行機でモスクワへ移動>

⑮モスクワ市第282番初等中等普通教育学校

ГБОУ «Средняя общеобразовательная школа №282»г. Москвы

(ГБОУ: государственное бюджетное образовательное учреждение)

1. 対応者：Егорова Ирина Григорьевна 校長

Сухова Светлана Владимировна モスクワ市教育部

Омельченко Елена Александровна モスクワ公開教育研修所ユネスコ

講座 准教授

2. 住 所：г. Москва, Скорняжный переулок, 3

移民の子どもに対するロシア語の授業（放課後）を参観した。出身言語別に分かれていた（中央アジア、ベトナム、中国など）。移民の子ども教育実践コンクールで優勝した学校である。モスクワ市中央行政区に位置する。1936年に設立。1970年代から東欧からの外国人児童生徒を受け入れてきた（近くに海外専門家用宿舎2棟）。ソ連崩壊後、この宿舎にベトナム人が入り、外国人生徒の大部分がベトナム人になる。キルギスなど旧ソ連各国からの外国人の子どもも増加。現在は児童生徒数の半数近くが外国籍で、年度内の入れ替わりが激しい。学校は大きく定員割れしている。

放課後に「外国語としてのロシア語」の授業。教職員の7人がこの学校の卒業生。



●コンクールの概要

主催者：モスクワ市教育部（2012年4月24日付の規程により、モスクワ市の中期国家プログラム「モスクワ市の教育の発展（首都の教育）」（2012－2016）のサブプログラム「普通教育」の一環として、モスクワ市教育部の管轄化にある、普通教育プログラムを実施する国家教育機関を対象に実施

実行委員会：モスクワ公開教育研修所

期 間：2012年4月20日～2012年10月15日

第1段階 2012年4月20日～7月1日 応募期間（1次審査）書類やビデオをインターネットで送信

第2段階 2012年9月1日～10月15日（2次審査）審査委員及び実行委員11人：モスクワ教育部2人、モスクワ公開教育研修所9人

予 算：1位 150万ルーブル（約450万円）、2位 100万ルーブル（約300万円）
3位 50万ルーブル（約150万円）、+拠点校の設置（200万ルーブル）

審査結果（1次審査を通過した学校）：

第282番学校（中央行政管区）→1位

第157番学校（北行政管区・アゼルバイジャン民族学校）→2位

第250番（北東行政管区）→3位

第1429番教育センター（南行政管区）

第1540番ギムナジア（中央行政管区）

第1450番学校（南行政管区）

第90番学校（北行政管区・夜間学校）

※第282番学校・第1540番ギムナジア以外は「ロシア語学校」。上位5校が拠点校になった

< 11月23日(金) >

<参考： ウンシンスキー図書館の利用について>

⑩ ウンシンスキー記念教育学研究図書館

Научная педагогическая библиотека им. К.Д.Ушинского

1. 住 所： г Москва, Большой Толмачевский пер., д.3
2. 連絡先： <http://www.gnpbu.ru/>



開館時間 月曜～金曜 10:00～18:00 土曜・日曜 休館

受付時間 夏期(6月1日から9月15日) 10:00～15:55 冬期 10:00～16:55

入館証の申請

- ① 玄関に入って左側の管理室へ
- ② パスポートを提出して、申請書に記入
(証明写真がなければ3か月有効・証明写真があれば5年間有効の入館証)
- ③ 入口のカッサで60ルーブル支払って領収書を受け取る
- ④ 管理室に戻って領収書を提出
- ⑤ 署名(2箇所)して入館証を受け取る

蔵書は1994年以降のものが電子化されており、2階12号室で検索することができる。それ以前の蔵書は紙(カード)のカタログが、2階11号室と廊下に領域別又はアルファベット順(著者又は書名)で並べられている。なお、2階12号室の電子検索システムとは形式がことなるものの、日本からもウンシンスキー図書館のホームページ(www.gnpbu.ru)より、蔵書検索が可能とのこと。

閲覧をしたい書籍・雑誌等が見つかったら、入館時に渡される用紙とともに11号室の担当者に申請し、準備ができたら受け取って2階の閲覧室などで読むことができる(閉架式)。1回あたりの貸出は5冊までで、1か月間まで担当者のところでキープすることができる(ただし、申請後3日以内に貸出をしなければ返却される)。貸出された書籍・雑誌等は、入口のカッ

サ横にある窓口でコピーをしてもらうことができる。

退館時には、入館時に渡される用紙を2階11号室の担当者に提出し、押印を受けたものを出口で渡す。

.....

< 11月24日(土) >

⑰モスクワ市子どもの権利オンブズマン

Уполномоченный по правам ребенка в г. Москве

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">1. 対応者：Бунимович Евгений Абрамович2. 住 所：г. Москва, Новый Арбат, стр.1, 10 этаж3. 連絡先：(495)957-0585, факс (495)957-0599, info@ombudsman.mos.ru |
|--|

(略歴。1954年生まれ、モスクワ大学数学部を卒業後、学校で数学を教えるようになる。1997～2009年モスクワ市議会議員(政党はヤヴリンスキーの「ヤブロコ」、長年にわたり市議会の教育科学委員長を務める。2009年、ヤブロコがモスクワ市の選挙で落選→モスクワ市の子どもの権利オンブズマンに着任。今回ペルミ州の同職のミコフ氏の紹介でアポを取った。)

< 子どもオンブズマンの主な仕事は? >

以下の特別カテゴリーの子どもおよび問題が挙げられる(順不同)。

①孤児 1990年代～2000年代にかけてたくさん
の孤児を作ってしまった。とくにモスクワは
首都・メガポリスとしてロシア各地から孤児を
ひきつけている。家庭への引き取りと社会化の
問題。住居の問題も(モスクワ市がアパートを
提供している)。



②移民の子ども 孤児の場合は昔から対策があっ
て、既存の制度を改革していくことになるが、
移民の子どもの問題はロシアにとってもモスク

ワにとっても目新しい。約10年前に(あるいはもっと最近)はじめて大きな問題として
浮上し、現在複雑化している。社会適応、教育、医療、社会保障、法的地位の問題など。

③障がい児 移民の問題と違って、矯正学校 коррекционные школы や療養所などの伝統的
な制度があり、専門家もいる。インクルーシブ教育の分野は新しいが、モスクワ市は全国的
にリードしている。私が議員時代に作成した障がい児教育に関する
法律*5があり、ロシアの法律のなかで唯一「インクルーシブ」ということばを使っている。
連邦レベルでの法律が不在のため、様々な課題が残る。法律ができる5年前から積極的
に取り組むようになって、モスクワ市にそれぞれ100ずつあるインクルーシブ教育を取り

* 5 Закон г. Москвы от 28.04.2010 N 16 "Об образовании лиц с ограниченными возможностями здоровья в городе Москве"

入れている幼稚園と学校での実験的取り組みの経験に基づいている。

④**英才児教育** 最近の教育改革によって打撃を受けている。

そのほかに次のような問題

⑤**暴力の問題** (子ども同士の暴力、子どもに対する暴力)。

⑥**教育改革全体** 一般の子どもおよび上述の特別カテゴリーの子どもへの影響。予算配分のメカニズムの改革、組織改革、スタンダードの改革など
※住居問題に関する苦情が多い。子どもの多い家庭、障がい児のいる家庭など。

<移民の子どもについて>

連邦移民局、警察、教育機関、医療機関、雇用者など様々な機関や組織がかかわっており、それぞれの出している統計も合致しない。最初の時期は、移民の子どもを教育すること事態への抵抗が強かった。とくに校長の抵抗。モスクワ市の教育委員会の抵抗もあった。親の先入観も克服しがたい。

もちろん合法移民の子どもは問題なく受け入れていたが、合法移民の他に不法移民やいわゆる「半合法的」移民がいる。子どもの権利条約などの国際条約に基づき、すべての子どもは親の法的地位を問わず、教育と医療へのアクセスを与えられなければならない。医療のほうが楽だった。移民はよほど具合が悪くないと医者と呼ばないが、そうしたときにはたとえ書類に問題があっても、医者はちゃんと病気を治してくれるという古くからの伝統がある。学校のほうは壁が敷居が高かったが、今では制度としては解決されている。例外的に苦情がくることはあるが、基本的に学校はすべての子どもを受け入れている。問題は学校に入ってからのものである。多くの子どもは学年の途中に入ってきて、学年の途中に帰ってしまう。またロシア語もできない。ソ連時代と新生ロシアの最初の頃はそういう問題がなかった。私自身の30年以上の教師歴のうち、ロシア語のできない外国人の子どもは3-4人しかいなかった。

ロシア語環境のなかで外国語としてのロシア語を教えるための教授法もなかった。そうした専門家も。「ロシア語学校」という取り組みを進めたが、最初はロシア語ができない人はすべてそこに入るべきだと考えていた。しかし実際にやってみて、幼稚園や小学校1年生の子は自然に話せるようになるから、あまり必要ないということがわかった。しかし、もっと上の子はやっぱり必要。

移民の子どもの教育について調査したときに、いくつかの興味深い結果があった。移民は家賃の安い地域に住んでいる傾向があり(例えばモスクワ市の東部)、当然レベルが比較的低い学校に行っている。彼らは現地の子どもよりも頑張っていて、優秀な生徒になっている。彼らにとって学校のほかに社会化の道はない。またムスリムの家庭に関していえば、学校は家庭全体の社会化を促している(アラブ諸国など)。夫が妻に対してあまり外に出させない伝統があるが、子どもたちが通っている学校に送り迎えすることは構わないらしい。学校の職員として働くことも許される。また子ども自身もモスクワ社会についての様々な情報を家に持って帰っている。ロシア人の子どもの意識調査をみれば、低学年の場合、彼らの友達に占める移民の割合はクラス全体の移民の割合とほぼ一致している。つまり移民に開放的である。しかし学年があがるにつれ、親が言うことなどを聞いて、移民の友達をあまり作らなくなってしまう。これは

対称的に、移民の子どもの調査結果を見れば、友達として挙げているのはほとんど同じ移民の子である。つまり移民のほうが開鎖的である。とはいえ、移民同士では、出身国が紛争状況にあるアルメニアとアゼルバイジャンの子ども、「移民」という共通の立場が働き、最初は友達になっている。青年になって親から政治的事情を教わりお互いに仲が悪くなる。

連邦レベルの移民法令を改善して不法移民を合法的な移民にしないとこの問題は解決できない。今では不就学になっている子どもの数も把握できない

2008年、グルジアとの戦争があったとき、警察は学校にグルジア人のリストを提示するように求めた。これはグルジア人にとどまらずすべての移民にとって大きな脅威だった。私はすぐに「違法だ」と反応したが、警察のトップも教育省のトップの人も「違法」と言わなかった。数日間も緊迫した状況が続いた。校長らからはどうすればいいか電話がよせられた。今の法令をどれだけ理解しているか、これは彼らにとって大きな正念場であった。素晴らしい回答もあった。「警察は学校の設置者ではないので、そうした情報は教えかねます」という丁寧な回答を出した学校があり、私が模範として Новая газета に掲載した。「グルジア人の子どもはいるが、みんないい子たちだ」といった滑稽な回答もあった。しかしほとんどの校長は子どもの名前を明かさなかった。嬉しいことにモスクワ市教育部長は2日後に私の見方となって「こうした情報を提示するのは、法律にも道徳にも反している所以我々はそのような情報を提示しない」という発言をした。私は今でも感謝している。しかしこの出来事はすべての移民（とくに不法移民）に恐怖感を与え、もとの状況に戻るまで2年ぐらいかかった。

<教育改革について>

フルセンコ前教育大臣は、レストランでウクライナの教育大臣に私を紹介するとき「私の主な反対者である Евгений Бунимович」と言った。フルセンコさんと個人的には決して悪い関係ではないが。そのとき私は「私はフルセンコ大臣が自分の反対者であるとは思わない。なぜなら、大臣が代わっても状況は変わらないから」と答えた。その後、実際そうなった。教育大臣は代わったが、政策は一切変わっていない。

何が問題かという点、教育法の基本的な部分は、教育分野の人ではなく、財務省や経済省の人が書いている。教育をお店やサービス分野として考えている人がいる。これはもっとも単純化されたりレベルなモデルである。私は個人的にお店やサービス分野に反対しているわけではないが、教育はそれとは違う。生徒数におい応じた予算配分、つまり施設ではなく子ども一人ひとりの教育に対してお金を出している制度自体には反対しない。しかし、このモデルでは障がい児や移民の子ども、困難家庭の子どもや英才児の子どもはそれぞれ特別の対応を必要とするため、学校が損をしてしまう。モスクワ市では、いろいろ説得して、障がい児に対して2倍（病気によっては3倍）の割り当てが出るようにした。しかしこのお金でも、学校でエレベーターやスロープ、または弱視者や難聴者のための施設設備は作れない。また、障がい者 и н в а л и д ы は特別なステータスをもつが、単に健康上の問題をかかえる子どもはそういったステータスを持たない。彼らに対しては追加の割り当ては出ないため、学校にとってはいてほしくない存在になる。

また学校の統廃合が活発に行われている。この政策も本来悪くはない。モスクワ市には近く

にいくつかの学校が並んでいる場合がある。そのうち1校のみに生徒が集まり、他の学校が定員割れしていれば、後者の運営の仕方の何らかの問題があるはずだ。成功している学校の校長が2校や3校を統合した大きな学校の校長になればいい。小学部、中学部、高等部の校舎に分けることも可能になる。しかし今この取り組みは、経済的な効率性を理由にキャンペン化されてしまっている。この場合1校がインクルーシブ教育に取り組んで、残り2校がそうでなかった場合、合併した学校ではインクルージョンの要素が消えてしまう。英才児教育をしている学校は、大学の先生や学生を教師として雇っていたが、今日では経済的に不利となった。幸い、学校から心理士をなくそうとしたプロセスを食い止めることができた。数学やロシア語の教員はEΓΘの点数に直結するから、学校として雇う意義はあるが、心理士はこうした直接的な成果を出しているわけではない。だから、その分の予算を数学やロシア語の教員の給与に使うほうがずっと効率的である。

もちろん改革のプラス面もある。私が1997年にモスクワ市の議員になったとき市の学校教員の平均給与は100ドルだった。これも他の地域に比べて数倍も高かった数値。12年間教育委員長を務め、最後(2009年)には1000ドルまで上がっていた。今では2000ドルになった。しかしこのプロセスの反面についてもお話したとおりである。もう一つの問題は教員の加重負担である。給料があがるため、授業時間数を自ら増やしている教員が多い。結果として、教育の質が下がってしまう。

全体として、経済的な観点からの改革が進められ、教育環境、訓育、社会科といったものは軽視されがちである。新しい教育法においてこうした分野はあまり触れられていない。もっと恐ろしいことに、教育内容でさえ後回しにされている。経済的な問題のみ議論されている。学校の中の議論もそうである(学校の自立性が高まり、みんなお金の計算ばかりしている。)もちろん役所の人みんな「教育内容や訓育に取り組んでいる」と言うが、これはただの言葉に過ぎない。教育改革のメカニズムそのものが違う路線を示しているからだ。

<新しいスタンダードについて>

小学校のスタンダードは良いもので、私は高く評価している。問題はそれが実際に実現できるかということ。先ほどお話した経済的なモデルとどれだけ矛盾しているか。スタンダードは教科外活動だけでなく、IT技術も重視している。モスクワでは新しいスタンダードに沿って学習している1・2年生すべてのためにパソコン環境を整え、教員の資格向上も行った。全国的には不可能である。また、ロシアの現在の小学校教員のレベルから考えると、このスタンダードを実現できる能力は全然備わっていない。この問題の解決方法は私には分からない。

中学校のスタンダードは小学校のそれに劣るものであり、抽象的すぎる。高等学校のスタンダードはご存知のとおり、大問題を引き起こした。スタンダードが決定される2週間前にモスクワ市の数人の教師がこのスタンダードに反対する文書をインターネットに掲載すると私に告げた。有償教育のモデルを部分的に実施しており、必修科目の中には「世界のなかのロシア」という誰もみたことない科目が入っていた。ロシア文学をはじめ人文科教育の位置づけも問題視されている。そういった内容だった。私はその手紙の掲載の効果をあまり期待しなかった。しかし驚いたことに、インターネットで1週間に数万人の署名が集まった。そのなかには著

名な研究者、作家や社会活動家が出た。プーチンはスタンダードの導入の停止と修正を命じた。新しい委員会が設置され、これは教育省でも教育分野の委員会でもなかった。委員長はクルチャトフ研究所のコワリチュク所長、メンバーには企業、文化界、国防省の代表など様々な人がいた。私も入った。少し妙な委員会だった。結果的に承認されたスタンダードは複雑な妥協の結果。以前よりは改善されているが、問題はやはりどのように実現されているか。

改革は社会の要望に応えなければならない。ここ10年間で外国語教育の質が高くなった。主に英語。これは、教育省や各教育委員会の活動の成果ではなく、教育行政が社会の要望に対応した結果に過ぎない。モスクワ市で英語の先生の給与を2倍にした時期もあった。国家統一試験には当初ロシア語と数学の2つの必修科目しかなかったが、上述の委員会は「外国語」をそれに加えることを提案し、今3つの必修科目になっている。もう一つ成功した改革は、上位学年におけるプロフィール（分野）別教育である。これも子どもや親の要望である。

1990年代、ソ連時代からテレビを作っている工場があった。その工場の「改革」はどうすれば良いのか。あったものをすべて捨てて、東芝など外国の会社の組み立て工場にすればよかった。自動車産業も同じである。しかし教育は違う。ソ連教育にはいいものがたくさんあった。もちろん捨てなければいけないものもあった。何を残して、何を取り除くか、何を強化して、何を改革するか、という複雑なプロセスは今も続いている。それにイデオロギーの変遷の問題も重なる。様々な神話も少なくない。テレビの議論でよく「ソ連時代の教育は世界一だった」と言う学者がいる。私は「そのような統計の出所は？」と聞く。もちろんソ連時代の教育にはいい面があった。しかし、国境が開いてソ連の学校の卒業生が始めて外国に行ったとき、ソ連時代の5年間の外国語教育の成果はゼロに等しいことが判明した。彼らは、ホテルやカフェで会話すらできなかった。

< 11月26日（月） >

⑱ ロシア連邦教育科学省 普通教育における国家政策部

Департамент государственной политики в сфере общего образования Министерства образования и науки РФ

- | |
|--|
| <p>1. 対応者：Roskin Олег Вадимович 副局長
2. 住 所：г. Москва, Скорняжный переулок, 3</p> |
|--|

ニジエンコ（Низиенко Елена Леонидовна）局長が本来面談する予定であったが、就学前教育関係の会議に呼び出されてしまい、急きよ Roskin Олег Вадимович 副局長が代わりに対応することとなった。4年前までは金沢と姉妹都市になっているイルクーツクに勤めていた比較的若い男性で、親切に質問に答えてくれた。

< 20年間の改革について >

現在行われている改革の主な目的は、一人ひとりの子どもに対して教育のアクセス・質を保



障することである。国土が非常に広いロシアにおいて、大都会の子どもも、首都や州都から遠く離れた小さな町の子どもも、等しく質の高い就学前教育および学校教育を受ける機会を与えられなければならない。ロシア国内には、42000校以上の学校と46000園以上の幼稚園の合わせて約9万の当該教育機関があり、そこに在籍しているすべての子どもに、現代的な教育環境の条件整備、有資格の教員の配置、並びに円滑な進学を可能にした同等レベルの教育の質を保障すべきである。

また、教育内容を重視している。新しい連邦国家教育スタンダード (Федеральные государственные образовательные стандарты) では、子どもに「学ぶことを教える научить учиться」ようにしている。つまり大量の知識を詰め込むのではなく、自分が持っている最低限の知識を使って、新しい知識を得る能力を育成することである。子どもは、1年生から11年生までインターネットなどの最新の情報技術へのアクセスを持っていなければならない。すべての学校にインターネットを通し、遠隔教育も推進している。主要な大学にコンサルティングセンターを設け、大学レベルの学者が各地の学校の先生や子どもに対して遠隔授業をするようにしている。また、教員の資格向上や若手教員の採用に力を入れており、特に今年は各地方の教員の平均給与がその地方全体 (つまり全業種) の平均給与のレベルまでに引き上げられた。これを可能にしたのは、教員給与の増大のみに1200億ルーブルもの予算が組まれた、ソ連時代も含め前代未聞のプロジェクトである。(結局20年間全体の教育改革については答えなかったが、時間の関係でそのまま次の質問に進んだ。)

<新しい教育法における外国籍の子どもの教育の位置づけ>

現行の法令もそうであるが、新しい教育法でも、ロシア連邦域内のすべての外国籍や難民の子どもは、居住地となっている地方の予算で無償で就学前教育および学校教育を受ける権利を持っている、という重要な規定が残されている。(現教育法では「ロシア国民が教育を受ける権利を有する」とされているのではないかという質問に対して) 少なくとも、新しい法律の規定では、国籍を問わず、あるいは無国籍者も含めて、ロシア連邦域内のすべての子どもが就学前教育および学校教育を無償で受けるようになる。これは、ロシアが署名しているすべての国際条約に合致しているという点で非常に重要な規定である。

新しい教育法全体に関しては、法案の作成は数年前から進められ、最新版は常にネット上に掲載されている。数千の意見が受け付けられた。現行法は何度も改訂されてきたために、互い

に矛盾し合う条項も多く、新しい法律ではすべて正されている。学習者、保護者、教員の権利と義務、行政機関の義務など、具体的かつ明確に規定されている。2週間後には、ロシア議会の下院での第2読解が予定されており、その後年末もしくは年明けに最終的に承認される見込みである。少なくとも、新学年が始まる9月の時点では既に施行されているのは間違いない。

<教科外活動の10時間の具体的な実施方法は学校に任されているか>

良い質問です。新しいスタンダードには、10時間の無償の教科外活動が初めて組み込まれ、この活動は具体的には学校自治機関（つまり保護者や попечительский совет）などと話し合って組織されるべきである。①十分な教員数であれば一部の授業は学校が独自に実施できるし、②他の授業はスポーツ、音楽、芸術関係などの補充教育機関（教育以外の管轄の機関を含む）に依頼することもできる。実際の子どものニーズや近所の校外教育施設の実情などを考慮して決めていくわけである。教科外活動の財政措置は、各々の学校の在籍児童生徒数に応じて、連邦構成主体 (региональный) もしくは市町村 (муниципальный) の予算から支払われている。時間的に多大な負担がかかる音楽学校や芸術学校その他の補充教育機関に従来から行っていた子どももいるが、その場合、学校はそれを上記の10時間内のなかにカウントすることができる。これらの機関はすべて муниципальный であるため、子どもや親にとっては無償であることに変わりはない。学校と当該機関との間に契約があれば、その分の予算は前者から後者に支払われるが、そうした契約がない場合、学校内に残り、他の用途に使われることになる。

<就学前教育について>

今目標としているのは、3歳以上のすべての子どもが就学前教育機関に行けるようにすることである。現在は3～7歳の子どものうち、約40万人がまだ待機児童になっている。この問題は後数年で解決される予定である。先週メドベージェフ首相は3000億ルーブルの地方への補助金を支出するプログラムを1週間以内に作成することを命じ、地方はその補助金を幼稚園の新設に充てる一方で、従来その目的に充てていた資金を就学前教育機関の教員給与の増大にまわすことになる。

また、新しい教育法において就学前教育は普通教育の1段階として位置づけられるようになる。従って、普通教育は、①就学前教育 дошкольное、②初等普通教育（1～4学年 начальное общее）、③基礎普通教育（5～9学年 основное общее）、④中等普通教育（10～11学年 среднее общее）の4段階から構成されるようになる。これを受けて、学校教育と同様に就学前教育用の連邦教育スタンダードも今後作成され、教育環境の条件整備、教育内容や教育成果の評価基準が定められることとなるが、教育成果は学校と違ってテストなどの結果ではなく、親の満足度に基づいて測られる予定である。

（日本には幼稚園と保育園の2つの制度があるという説明を聞いて）幼稚園の形態としては、今も全日制の形態の他に、数時間のみ保育、家庭保育や保護者によるグループ保育などのバリエーションが認められているが、割合としてあまり多くない。すべてのスタッフが集まった完全たる施設での8～10時間の全日制の形態が基本的かつ望ましい形態と考えている。

<「宗教文化と世俗倫理の基礎」の導入について>

数年前から実験的に始めたが、今年度から必修科目として導入された。この科目の主な目的は特定の宗教の学習でもプロパガンダでもなく、文化を教えるもの культуроведческий である。どのモジュールを選んでも、そこで学ぶのは祖国への愛、母親への愛、責任感といった共通の価値観であり、具体的な事例としてはそれぞれの宗教の発展の歴史が使われているに過ぎない。モジュールの選択状況は地方によって異なるが、すべてのモジュールは需要があった。嬉しいことに多民族的な共和国では何のコンフリクトもなかった。例えばタタリスタンでは世俗倫理が優位だった。同じクラスに多宗教あるいは無宗教の子どもと一緒に学んでいる地域ではそれが一番いいかもしれない。お互いの文化を尊重することが大事で、簡単な例を使って分かりやすく教えられる4-5年生の年齢が対象になったのも正解だったのではないか。私の姪っ子がちょうどこの年齢で私も関心を持って各モジュールの教科書を見たが、どれもプロパガンダ的な記述がなく、ロシア国内外に通用する全文化的な価値について教えている。政教分離の原則があるため、あくまでも世俗的なコースであり、普通の学校の先生が教えている。思わず誰かの宗教意識を思わず傷つけてしまうことがないように、このコースを担当する先生はすべて当該の資格向上を終えた者である。

< Гражданское образование について >

どういう意味での гражданское образование なのか。もしパトリオティズムや市民性の育成などであれば、これは重要な課題であり、新しいスタンダードでも反映されている。市民性の育成は授業や教科外活動を通して行われるべきである。また最近歴史捏造の試みが相次いでいるため正しい歴史観を育成することが重要。先ほどお話した「宗教文化と世俗倫理の基礎」のコースもある意味ではそれに向けられている。パトリオティズム、祖国への誇り、他者（多宗教の人を含めて）への尊重を育成することが必要であるから。子どもたちの実際の行為 поступок が大事なので、訓育的側面は重視すべきである。資格向上のときに注意しているし、学級担任の仕事でもある。

<学校での日本語教育について>

第2外国語として日本語を含む東洋語を導入している学校もあるが、地理的にシベリア・極東に集中している。ロシアに4つしかない言語大学の一つが存在するイルクーツク（私の出身都市）では日本語を教えている学部があり、日本語の通訳をしている友人が一人いる。イルクーツクは金沢と姉妹都市になっており、学校の生徒の交流が毎年行われている。ロシアの西部では西洋語、とくに英語のほうが人気が高い。私がかつて学校で学んでいたフランス語も含め、他の西洋語は比べ物にならない。

⑱ ロシア国民経済・行政学アカデミー 教育開発国際協力センター (CICED)

Центр международного сотрудничества по развитию образования Российской академии народного хозяйства и государственной службы при Президенте РФ

1. 対応者：Максимова Анастасия International Development Officer
2. 住 所：г. Москва, Новый Арбат, д.21
3. 連絡先：amaksimova@ciced.org,
+7(495)647-00-76

(センターが電気工事で使えなくなったため、インタビューは急ぎよ近くのカフェで行われることになった。)

ソ連崩壊後にロシアは国際援助を受けていたが、2006年にサンクトペテルブルクで開かれたG8サミットでロシアもG8の他国に並ぶ援助ドナーにならなければいけないという働きかけを機に、2007年にロシア財務省の国際開発援助に関する決定が出され、ロシア財務省の資金で動



いている世界銀行の Russian Education Aid for Development(READ) プログラムの一環として2008年にCICEDが創設された(メンバーは現在12人)。

これは最初からロシアのイニシアチブであり、主な目的はロシアが自ら援助ドナーになることであるが、ロシア国内に制度的準備や専門家などキャパシティがなかったため、ユニセフ、ユネスコ、世界銀行、ETS Servicesなどの機関のなかからオペレーターを選び取った。国際援助の他の分野ではWHOなどその他の組織と協力しているが、教育に関しては世界銀行がオペレーターとなった。従って、運営上の細かい課題設定はオペレーター役の世界銀行が行っている。READプログラムの資金はすべてロシア財務省から出ている。

将来はロシアが教育援助をすべて独自に管理できるようにするため、モスクワにも本センターを置き、ロシアの専門家のキャパシティ・ディベロプメントを図る。センターの予算は直接財務省から出ている、部分的にはREADプログラムから出ている。アンゴラ、アルメニア、ベトナム、ザンビア、モザンビーク、タジキスタン、エチオピアの8カ国の途上国が入っている。各国で教育の質評価センターを設置する。実施状況は国によって温度差がある。タジキスタンのセンターはほぼできており、来年から実際に試験が始まるが、キルギスではまだ作り始めてもない。参加国は、ロシア外務省に国を選定してもらい、結果として主に旧ソ連が援助していた国である。キルギスの例から分かるように、ニーズがない国は積極的に取り組まない傾向があるので、2014年にREAD-2を始めるときには、参加国は応募した国のなかから選定する制度に変える予定である。

各国のセンター設置状況に関してモスクワのオフィス(CICED)ではあまり把握していない。CICEDの活動は主に以下のとおりである。

- 専門家派遣。ロシアには教育のエキスパートは少なくないが、国際開発援助の分野での専門性を高め、途上国での活動の経験をさせるため、途上国での研究に参加させる。教育の質のテーマを扱った途上国の研究チームはCICEDが提供する小グラントに応募できるが、そ

の際必ずロシアの専門家を1人入らなければいけない。研究テーマに適した専門家を探し出すのも CICED の役割である。

- 専門家研修。READ プログラムの一環として高等経済大学 (Высшая школа экономики) とモスクワ社会・経済科学大学 (Московская высшая школа социальных и экономических наук) にそれぞれ教育の質評価の修士コースを開設している*⁶。CICED は、その院生を含め、ロシア各地の専門家の途上国での研修のための資金を出している。
- 国際機関とロシア・CIS の専門家の仲介役 (ファシリテーター)。海外のプログラムの資料の露訳、ロシア語の文献の英訳、教育の質評価に関する国際会議でのロシア専門家のパネルディスカッションの促進など。

ブルッキングス研究所とユネスコ統計研究所は全世界に共有できる教育コンピテンシーの開発に取り組んでいるが、CIS は専門家がいなかったため対象になっていなかった。CICED は必要な資料を翻訳して、モスクワの教育の質評価センターで PISA、PIRLS、TIMSS を管理している Г.С.Ковалева がこの国際プロジェクトに参加することになった。

ロシアの研究者が開発したアセスメント・ツール① SAM (School Achievements' Monitoring: 何を覚え、何を理解して、何を応用できるようになったか、というものを評価するヴィゴツキーの理論に基づく)、② ICT (文字通り ICT 活用能力を評価する) をロシアや CIS 諸国 (カザフスタン、キルギス) での実用を促進している。こうしたツールを開発しているチームはセンターのメンバーではなく、CICED のマネージャーはファシリテーターとしての役割を担う。

ロシアで開発援助を管轄している機関が多すぎる。財務所、外務省、Россотрудничество*⁷、CICED など。役割分担もはっきりしていない。

<マクシーモワさんの略歴>

30 歳前後の若い女性。アメリカで国際教育協力を学び、ロシアに戻ってきた。American Councils for International Education に勤め、その後 CICED の存在を知ってから 2012 年の夏にここに移った。CICED の開発部は①地方開発 (ロシアの地方との協力を通して専門家のネットワークを広げる) ②国際開発 (PISA を実施している OECD、PIRLS と TIMSS を実施している IEA、ユネスコ統計研究所、ブルッキングス研究所、ユネスコ本部、ユネスコ・バンコク事務所、ユネスコ・アルマトイ事務所) に分かれており、後者はマクシーモワさんの担当分野である。

* 6 マクシーモワさんが知る限り、ロシアの大学では開発援助に関するコースは開かれていない。教育の質評価に関しては上述の2つのコースのみである。

* 7 Федеральное агентство по делам Содружества Независимых Государств, соотечественников, проживающих за рубежом, и по международному гуманитарному сотрудничеству (Россотрудничество) 2008 年に設立。

【資料編】

資料1. ペルミ地方の民族構成（2010年国勢調査）

Пермский край - все население ペルミ地方の全人口	2635276	
Лица, указавшие национальную принадлежность 民族属性を記入した者	2515738	100.0
Русские ロシア人	2191423	87.1
Татары タタール人	115544	4.6
Коми-пермяки コミ・ペルミヤク人	81084	3.2
Башкиры バシキール人	32730	1.3
Удмурты ウドムルト人	20819	0.8
Украинцы ウクライナ人	16269	0.6
Белорусы ベラルーシ人	6570	0.3
Немцы ドイツ人	6252	0.3
Чуваши チュヴァシ人	4715	0.2
Марийцы マリ人	4121	0.2
Другие национальности (не перечисленные выше) その他	36211	1.4

出典：http://www.perepis-2010.ru/results_of_the_census/results-inform.php

資料2. ペルミ地方の教育統計*⁸

①全体統計（2010年9月1日現在）

教育機関数 762

うち 初等教育 …………… 11

就学前および初等教育 …… 32

基礎教育……………234

中等（完全）教育……………485

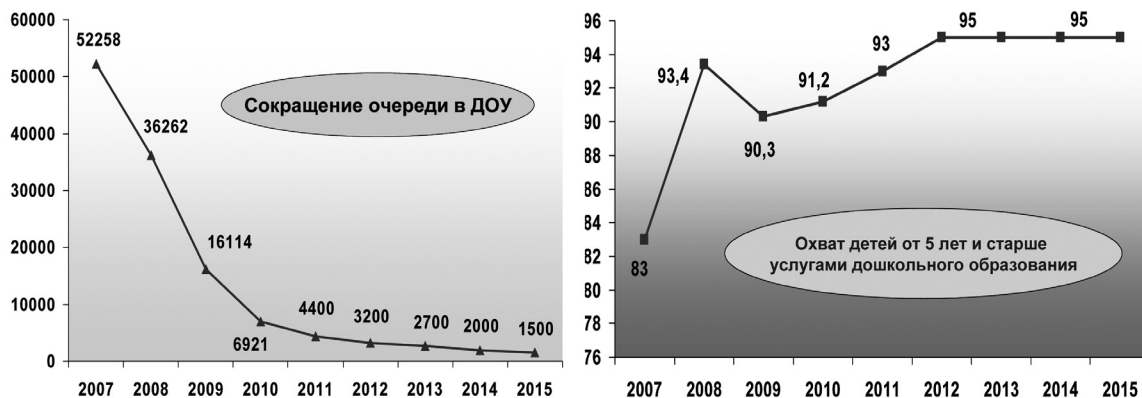
中等教育学校のうち、特定の教科を深く学習する学校が22校、ギムナジア23校、リセ12校、カデット学校2校。これらの学校には43198人の生徒が在籍している（全体の16.8%）。

* 8 Публичный доклад министерства образования Пермского края ?Итоги развития системы образования Пермского края за 2010-2011 учебный год?, http://minobr.permkrai.ru/public/ (2011.08.29) をもとに作成

②就学前教育

2008年～「Мамин выбор」プロジェクト（就学前教育機関に通っていない1,5～5歳児に対して пособие（手当）を支給、2011年度からペルミ地方の43の地域で実施）。

図1. 就学前教育機関における待機児童の減少 図2. 就学前教育就学率（5歳以上）



③教育の質

- 2010年度より Наша новая школа の実施
- 新しい連邦国家教育スタンダード (ФГОС) に向けた教員研修(ペルミ国立教育大学が拠点)
- 統一試験 ЕГЭ の成績 (ロシア全土より点数が高い)

④ペルミ地方独自のプログラム

- Проект «Поддержка и развитие одаренных детей» (英才教育)
- «Новый образовательный центр» школа для старшеклассников» (後期中等教育)
- Проект «Международный бакалавриат в Перми» (国際バカロレア)
- Электронный дневник (電子成績表)
- Система гражданско-правового воспитания в Пермском крае (シティズンシップ教育)
- Проект «Профилактика правонарушений среди несовершеннолетних» (非行予防)
- Дополнительное образование детей (в ведомстве системы образования) в Пермском крае (補充教育)
- Дистанционное, инклюзивное образование для детей с ограниченными возможностями здоровья (障がい児に対する遠隔教育、インクルーシブ教育)

⑤民族教育

- 母語（非ロシア語）が教授言語になっている、またはその言語を教えている学校

72校 6197人

うち タタール語教授	42校…3898人
ウドムルト語教授	1校……28人
コミ・ヤズヴァ語を学習	1校……28人
マリ語を学習	1校……54人
コミ・ペルミャク語を学習	27校…2189人

- 随意選択科目（факультатив）として母語を学習する普通教育学校 5校 462人
- ペルミ市青少年創造宮殿の日曜学校（アルメニア、グルジア、ポーランド、ドイツ）で約200人の子どもが母語・母文化を学んでいる。

⑥高等教育（目標：世界レベルの大学）

- ロシア科学アカデミー・ウラル支部の3つの支部（филиал）と4つの研究所（институт）
- 35の高等職業教育機関（うち、国公立26、非国家立10、国立補充職業教育機関1^{*9}）
- 約35の分野別（отраслевые）研究機関
- 学生数 10万以上、うち国公立大学 8万8千人
- 国家の科学分野： 約1万人の学者、うち博士700人、博士候補2400人、大学院生（докторанты и аспиранты）1千人

⑦教員給与

全国プログラム Модернизация региональных систем общего образования и повышение заработной платы учителей (2011-2013 гг.)^{*10}

ペルミ地方では、2011年末の学校教員の平均給与を前年比で30%上げる計画になっている。（2010年は前年比10%増の計画に対し、結果として15.6%上がった）。最終的には、ペルミ地方の平均賃金の水準に到達しなければいけない。

*9 これらを合計しても35にはならない。

*10 мрсо.рф (<http://www.mrso-mon.ru/>) を参照。本プログラムに盛り込まれた（教員給与以外の）その他の方策は、①新しい連邦国家教育スタンダード ФГОС の導入、②教員の資格向上・再教育、③遠隔教育、④ペルミ地方への若手教員の呼び寄せ、の4点である。

図3. ペルミ地方の平均賃金と学校教員の平均給与の対比

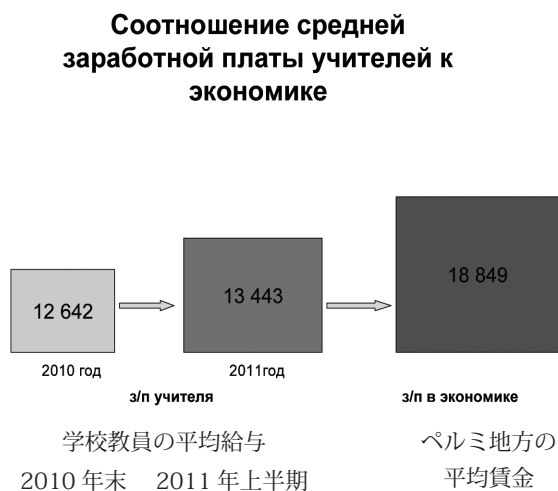


図4. 学校教員の平均給与の推移



表1. ペルミ地方における都市・地区別の学校教員の平均給与の推移

(単位：ルーブル、2011 年上半期)

Рейтинг средней заработной платы учителей

Наименование территорий	1 полугодие 2011г
Гайнский р-н	16771
г.Кунгур	15895
г.Кудымкар	15556
Пермский р-н	15413
г.Пермь	15316
г.Лысьва	15012
Звездный	14700
Частинский р-н	14463
г.Чайковский	14426
Карагайский р-н	14313
Кочевский р-н	14198
г.Кизел	14161
г.Добрянка	14134
г.Чусовой	13966
г.Березники	13795
Ординский р-н	13447
Всего по краю	13443
Верещагинский р-н	13401
Красновишерский р-н	13069
Уинский р-н	12832
г.Краснокамск	12809
Кудымкарский р-н	12694
Б-Сосновский р-н	12672
Оханский р-н	12551
Сивинский р-н	12419
Чердынский р-н	12352
Березовский р-н	12249
Усольский р-н	12006
Осинский р-н	11962
г.Александровск	11920
Суксунский р-н	11913
Косинский р-н	11856
Нытвенский р-н	11808
Кунгурский р-н	11660
г.Соликамск	11356
г.Губаха	11318
Еловский р-н	11267
Кишертский р-н	11232
Чернушинский р-н	11205
Соликамский р-н	11169
Юрлинский р-н	11144
Юсьвинский р-н	10906
Бардымский р-н	10650
Куединский р-н	10512
Очерский р-н	10340
Октябрьский р-н	9939
г.Гремячинск	9861
Горнозаводский р-н	9776
Ильинский р-н	9675

資料3. ペルミ市第2番初等中等普通教育学校の教科課程

3.1 初等段階 (1-4 学年)

Учебный план МБОУ "СОШ №2 с углубленным изучением предметов гуманитарного профиля г.Перми на 2012-2013 учебный год.

Начальное общее образование

Учебные предметы	Количество часов в неделю												Всего	
	1 абвг			2 абвг			3 абвг			4 абвг				
	вариатив*	инвариант	деление на группы	вариатив*	инвариант	деление на группы	вариатив*	инвариант	деление на группы	вариатив*	инвариант	деление на группы		
Инвариантная часть	Русский язык		5			5			5			5		80
	Литературное чтение		4			4			3			3		56
	Иностранный язык					2	2		2	2		2	2	48
	Математика		4			4			4			4		64
	Окружающий мир (человек, природа, общество)		2			2			2			2		32
	Искусство (Музыка)		1			1			1			1		16
	Искусство (ИЗО)								1			1		8
	ИЗО и художественный труд		2	2		2	2							32
	Технология								2	2		2	2	32
	Физическая культура		3	1		3	1		3	1		3	1	64
Итого		21	3		23	5		23	5		23	5	432	
Вариативная часть*	Основы мировых религиозных культур										1			4
	Информатика				1		1	1		1	1		1	12
	Краеведение				1			1						8
	Художественная культура				1			1			1			12
Итого	При 5-дневной учебной неделе		21	3										96
Итого	При 6-дневной учебной неделе				3	23	6	3	23	6	3	23	6	384
Всего			21	3		26	6		26	6		26	6	480

Примечание: В вариативную часть заносятся другие предметы, кроме предметов инвариантной части базисного учебного плана

В столбец "вариатив" ставим дополнительные часы из вариативной части, выделяемые на изучение предметов инвариантной части

3.2 前期中等段階 (5-9 学年)

Учебный план МБОУ "СОШ №2 с углубленным изучением предметов гуманитарного профиля " г.Перми на 2012-2013 учебный год

Основное общее образование

	Учебные предметы	Количество часов в неделю												Всего			
		5 абг			6 абг			7 абг			8 абг				9 абг		
		вариатив*	инвариант	деление на группы	вариатив*	инвариант	деление на группы	вариатив*	инвариант	деление на группы	вариатив*	инвариант	деление на группы		вариатив*	инвариант	деление на группы
Инвариантная часть	Русский язык	1	6			6		1	4		1	3	4	1	2	3	114
	Литература	2	2		1	2		1	2		1	2	3	1	3	4	82
	Иностранный язык		3	3		3	3		3	3		3		3	3	3	108
	Математика		5			5			5			5			5		90
	Информатика и ИКТ										1	1		2	2		18
	История		2			2			2			2			2		36
	Обществознание (включая экономику и право)					1			1			1			1		14
	География				1	1			2			2			2		28
	Природоведение		2														8
	Физика								2			2			2		20
	Химия											2			2		12
	Биология				1	1			2			2			2		28
	Искусство (Музыка)		1			1			1								12
	Искусство (ИЗО)		1	1		1	1		1	1							24
	Искусство											1			1		6
	Технология		2	2		2	2		2	2		1	1				54
	Основы безопасности жизнедеятельности											1					3
Физическая культура		3			3			3			3			3		54	
Вариативная часть	Худ. Культура	1			1			1		1							16
	Обществознание	1															4
	Факультатив (Информатика)							1		1							8
	ОБЖ				1												4
	Право							1			1			1			10
	Второй ин. Язык										2		2	2		2	24
	Экономика												1				3
Итого	При 5-дневной учебной неделе																
Итого	При 6-дневной учебной неделе	5	27	6	5	28	6	5	30	8	5	31	14	6	30	14	780
Всего		32			33			35			36			36			

Примечание: В вариативную часть заносятся другие предметы, кроме предметов инвариантной части базисного учебного плана

В столбец "вариатив" ставим дополнительные часы из вариативной части, выделяемые на изучение предметов инвариантной части

3.2 後期中等段階 (10-11 学年)

Учебный план МБОУ "СОШ №2 с углубленным изучением предметов гуманитарного профиля" г.Перми на 2012-2013 учебный год

Основное общее образование

Учебные предметы	Количество часов в неделю												Всего				
	5 абг			6 абг			7абг			8 абг				9абг			
	вариатив*	инвариант	деление на группы	вариатив*	инвариант	деление на группы	вариатив*	инвариант	деление на группы	вариатив*	инвариант	деление на группы		вариатив*	инвариант	деление на группы	
Русский язык	1	6			6		1	4		1	3	4	1	2	3	114	
Литература	2	2		1	2		1	2		1	2	3	1	3	4	82	
Иностранный язык		3	3		3	3		3	3		3	3		3	3	108	
Математика		5			5			5			5			5		90	
Информатика и ИКТ										1	1			2	2	18	
История		2			2			2			2			2		36	
Обществознание (включая экономику и право)																	
География				1	1			1			1			1		14	
Природоведение		2														8	
Физика								2			2			2		20	
Химия											2			2		12	
Биология				1	1			2			2			2		28	
Искусство (Музыка)		1			1			1								12	
Искусство (ИЗО)		1	1		1	1		1	1							24	
Искусство											1			1		6	
Технология		2	2		2	2		2	2		1	1				54	
Основы безопасности жизнедеятельности											1					3	
Физическая культура			3		3			3			3			3		54	
Худ. Культура	1			1			1		1							16	
Обществознание	1															4	
Факультатив (Информатика)							1		1							8	
ОБЖ				1												4	
Право							1		1				1			10	
Второй ин. Язык									2		2	2	2		2	24	
Экономика													1			3	
Итого При 5-дневной учебной неделе																	
Итого При 6-дневной учебной неделе		5	27	6	5	28	6	5	30	8	5	31	14	6	30	14	780
Всего		32			33			35			36			36			

Примечание: В вариативную часть заносятся другие предметы, кроме предметов инвариантной части базисного учебного плана
 В столбец "вариатив" ставим дополнительные часы из вариативной части, выделяемые на изучение предметов инвариантной части

資料4. コミ・ペルミヤック管区クドイムカル村教師の家（小学校）

4.1 教科課程

Учебный план (1-2 классы)			
Предметные области	Учебные предметы	1 класс	2 класс
Филология	Русский язык	4	5
	Литературное чтение	2	3
	Коми-пермяцкий язык	2	2
	Коми-пермяцкая литература	1	1
	Иностранный язык (английский)	-	2
Математика и информатика	Математика	4	4
Обществознание и естествознание	Окружающий мир	2	2
Искусство	Изобразительное искусство	1	1
	Музыка	1	1
Технология	Технология	1	1
Физическая культура	Физическая культура	3	3
Итого		21	25
Часть, образованная участниками образовательного процесса	Информатика	-	1
Итого		21	26

Недельный рабочий учебный план (3-4 классы)		
Учебные предметы	3 класс	4 класс
Русский язык	5	5
Коми-пермяцкий язык	2	1
Коми-пермяцкая литература	1	1
Литературное чтение	3	3
Иностранный язык (английский)	2	2
Математика	4	4
Окружающий мир	2	2
Изобразительное искусство	1	1
Музыка	1	1
Технология	1	1
Физическая культура	3	3
Основы религиозной культуры и светской этики	-	1
Максимальная учебная нагрузка	26	26

4.2 教科外活動

Внеурочная деятельность (кружки секции проектная деятельность)			
Направление	Название объединения	Количество часов	
		1 класс	2 класс
Общеинтеллектуальное направление	"Эрудит"	1	1
	"Юный исследователь"	1	1
Спортивно-оздоровительное направление	"Бассейн"	2	2
Духовно-нравственное направление	"Рисуем нестандартно"	1	1
Социальное направление	"Чужанин"	1	1
Итого		6	6

4.3 教科書一覽

Перечень учебников по программе "Школа России" * 1 1			
№	Учебные предметы	Учебники	Автор учебника
1	Русский язык	"Русский язык"	Рамзаева Т.Г.
2	Коми-пермяцкий язык	"Коми-пермяцкий язык"	Федосеева В.В.
3	Коми-пермяцкая литература	"Коми-пермяцкая литература"	Федосеева В.В.
4	Литературное чтение	"Родная речь"	Голованова М.В. Горецкий В.Г.
5	Иностранный язык (английский)		
6	Математика	"Математика"	Моро М.И.
7	Окружающий мир	"Мир вокруг нас"	Плешаков А.А.
8	Изобразительное искусство	"Изобразительное искусство"	Кузин В.
9	Музыка	Музыка	Критская Е.Д. Сергеева Т.П.
10	Технология	Технология	Роговцева Н.И.
11	Физическая культура	Физическая культура	Лях В.И.
12	Информатика	Информатика	Горячев А.В.

* 1 1 教科書会社「プロスヴェシェーニエ」の教材セットの1つ

モスクワ市・モスクワ州調査報告

(2013年3月23日～29日 帰国30日)

澤野由紀子
ミソチコ グリゴリー

2013年(平成25年)3月 モスクワ市・モスクワ州調査関係の活動日誌

Дата	
3月24日(日)	10:40 成田空港発 16:20 JAL441 にてドモデドヴォ空港着 (澤野のみ) ダニーロフスカヤ・ホテルへ
3月25日(月)	13:00 「知識」協会本部 (ミソチコ、通訳のサコティンコワ氏現地で合流) 15:00 正教聖ティホノフスキー人文大学 (ПСТГУ)
3月26日(火)	10:00 モスクワ市第734番教育センター「自己決定学校」 13:00 モスクワ市第90番夜間・交替制普通教育学校
3月27日(水)	11:00 モスクワ州教育省 14:00 モスクワ州クラスノゴルスク市普通教育施設第2ギムナジア
3月28日(木)	11:00 ロシア連邦教育科学省連邦教育発展研究所 (13:00 上記研究所の書籍購買部にて研究論集等購入) (14:30 Дом педагогических книг にて書籍・教科書等購入)
3月29日(金)	11:00 エヴリカ教育政策問題研究所 («Эврика») 17:40 JAL442 にてドモデドヴォ空港発 (澤野のみ)
3月30日(土)	7:45 成田着

2013年3月23日 成田発10:30のJAL441便でドモデドヴォ空港より入国。モスクワはこの時期70年ぶりの大雪にみまわれ、交通が混乱。JAL機到着時には吹雪がひどくなっており、万が一着陸ができなかった場合にはヘルシンキ空港へ向かうというパイロットのアナウンスがあり、ビジネスマン風の乗客が多かった機内では緊張が走った。だが、ドモデドヴォに近づくと風に揺れながらも果敢に降下して無事に到着。今回の訪問調査のコーディネートを委託したENIグループのエテリ・サコティンコワさんが依頼した運転手セルゲイさんの出迎えがあり、無事にダニーロフスカヤ・ホテルにチェックインできた。

< 2013年3月25日(月曜日) > 大雪

①全ロシア社会団体 ロシア「知識」協会本部

Общероссийская общественная организация Общество "Знание" России

訪問日時：2013年3月25日(月曜日) 13:00 - 14:15

1. 対応者：理事長 Сулова Валентина Алексеевна
事務局長 Дунаева Елена Борисовна
2. 所在地：101990, Москва, Новая пл., д. 3/4.
Здание Политехнического музея, подъезд 4, этаж 2, каб. 374.
3. メール・電話等：Тел. приемной: (495) 621-90-58, Факс: (495) 625-42-49
E-mail: znanie@znanie.org, URL: <http://www.znanie.org/>
4. 入手資料：
 - 1) Рязанское региональное отделение общероссийской общественной организации общества "Знание" России. Проект "Здоровым быть здорово!"
 - 2) Научно-публицистический журнал ЗНАНИЕ ОБЩЕСТВО: 65 лет Обществу "Знание" Санкт-Петербург, спец выпуск, май, 2012
 - 3) ЗОЛОТАЯ ОСЕНЬ (Газета о пожилых, для пожилых, силами пожилых), No.17 / 2011
 - 4) Общество "Знание" России, Немецкая ассоциация народных университетов, Кто меня научит? : Руководство для тех, кто работает в образовании взрослых, 1999
 - 5) Давыдов Денис Васильевич, Я горел бессмертной славой: гусарская лирика, мемуары (Новая библиотека русской классики - обязательный экземпляр), Москва 2012
 - 6) Клуб 33.6 млн: женский журнал, No.9, 2011
 - 7) Общество "Знание" России 活動紹介パンフレット
 - 8) Сочиにあるサナトリウムのパンフレット
 - 9) パワーポイント・プレゼンテーションファイル





額縁に入っているのは国からの補助金の証書

<組織の構造>

「知識」協会の最高意志決定機関は5年に2回開催される「大会」である。(この週の後半にこの大会がモスクワで開催されるため、訪問時はその準備でスタッフは忙しそうだった。)

全ロシアの65カ所に支部があり、今後あと3～4カ所増える予定である。

本部である訪問先は、総合技術博物館の中にあっただが、この博物館が近く改装されるため、本部事務局全体が別な施設に移転しなければならないということであった。

<「知識」協会の歴史>

「知識」協会は、伝統の継承を重視したロモノーソフの活動をモデルとして、1947年に設立された「全ソ連邦政治的・科学的知識普及協会」を前身とする。初代会長はアカデミー会員のバビーロフである。2011年12月のロモノーソフ生誕300年を記念する活動に参加した。2012年6月には65周年を迎え、各地で周年記念の行事が行われた。2012年7月5日に行われた65周年記念行事では視覚障害のある「知識」協会の活動家への表彰が行われた。この表彰式には、視覚障害のある議員として有名なオレグ・スモーリンン氏も参加した。

2011年にロシア経済発展省は全国の非営利の社会団体のリストを作成し、「知識」協会はそのなかに含まれた。これは、当協会が政府から高く評価されている証拠である。

2012年11月には第3回非営利団体大会に出席し、この場でロシア連邦の補助金を授与された。

また、同月には「情報と社会」に関する全国フォーラムにも参加した。電子政府や電子国家サービスの諸問題に関し、社会団体の役割が増している。

<現在の活動>

2012年から連邦プロジェクト「教養あるロシア」を実施している。ペレストロイカ以降、ロシアの教育活動全般の水準が低下していることから、最終的には教育を復活させることを目標とし、メセナ活動と教養（啓発）活動を行っている。

2013年3月にはリペツク市でリペツク州における教養活動の展望についての円卓会議を行った。

2012年には歴史分野での社会的意義のある教養イニシアチブコンクールが行われた。

その他のプロジェクト例として、次のようなものがある。(パワーポイントを用いてスライドが紹介された。)

○地名の由来を調べて地図を作成し、デジタル化してインターネットで公開する「地名の地図」

- 高齢者の生活水準向上のためのプロジェクト：高齢者の介助者の再教育、高齢者のための健康教育等（カレリア共和国）
- 新聞「人民大学」の刊行（チェリャビンスク州）
- 「市民対話」（ノボシビルスク州）
- 第3世代の人々への新テクノロジー教育：ロシア連邦社会評議会でも卓会議を実施。クールスク州、サンクトペテルブルグ市、オリョール市などが活発な活動を行っている。
- 教授法コンプレクス「ロシアにおけるジェロントロジー」：経済発展省からグラントを得て行っている。これは歴史上初めてのことである。
- 世代間交流事業：高齢者と若者が一緒にゲームをしたり、若者が高齢者にボランティアで新テクノロジーの使い方を教える。
- 非営利社会団体活動の法律上の支援（スタブロポリ）
- 第3世代市民の健康生活発展のための新テクノロジー（クルスクで大規模セミナーを開催）
- 高齢者の健康生活発展と新テクノロジー（ボロクダ）
- 高齢者の人権擁護のための新しいメカニズム「信頼のテリトリー」（チェリャビンスク）
- アクティブな長生きの手段としての創造的活動（キーロフ、チェリャビンスク、アルタイ、オリョール、ボログダ、クラスノヤルスク）
- 青少年・幼児対象の創造フェスティバル
- 民族性の維持：故郷へのバーチャル遠足とプレゼンテーション
- 若い愛国者の学校（クラスノダルスク、アリョール）
- 宇宙開発デー：ガガーリンの宇宙飛行のロールプレイ（スベルドロフスク）
- ボランティア学校：高齢者との付き合い方の基本的知識を青少年に与える（スタブロポリ）
- 視覚障害児のための慈善活動：ボーリング大会（カーメンスク）
- 「ロシア古典作品の新図書館」：ロシア古典の必読作品集を作成し、コンクールの入賞者、農村学校、外国（スロベニア・リュブリャナーナのロシア文化センター）等に寄贈する。

<スースロワ理事長のお話>

現在はプログラムソフトを充実させている。これまでは生涯教育がメインであったが、教育から教養（啓発）へとリセットしようとしている。教育は誰にでも与えられるわけではない。教育を受け取ろうとする人だけがやってくるので、こちらからアイデアを押しつけて対応することは避けるべきである。私たちのこの改革の趣旨はプーチン大統領も歓迎してくれている。

「知識」協会は、中央よりも地方支部の方が活発に活動を行っている。とくにクルスク、ノボシビルスク、スタブロポリなどが活発である。こうした地域ではソ連時代からあった「知識の家」という不動産をこれまで維持することができた。土地・建物があると活動の成立は容易である。

サンクトペテルブルグにはプラネタリウムもあり、青少年と幼児を対象に積極的な教育活動を行っている。

サンクトペテルブルグ、サマーラ、クルスクなど20の支部には大学があり、若者を対象とした教育活動を行っている。

大学がないところには補充教育センターがあり、有償の教育活動を行っている。

その他の教育活動はチャリティーに近い。

2011年に国の補助金を受けることができた。

ロシアの古典シリーズの刊行は、毎年200万ルーブルをエリツィン基金からもらって行っている。これまで38巻、各3000部ずつ刊行し、地図にものっていないような農村部の村の図書館に配布している。ロモノーソフの出身地であるアルハンゲリリスク州ではすべての市町村に配布している。3000部では足りないが、周辺の人々にも影響を与えることを期待している。

<国際的活動について>

以前にEUのTACISによる事業を行っていたが2007年に終了した。地方支部単位でヨーロッパの団体と交流している例はある。

<指導者の資格について>

学校ではないので、資格については緩やかにしている。

技術専門の指導者のなかには再教育を受ける人もいる。

スタッフ研修は、サナトリウムのあるソチで毎年行っている。研修のテーマは毎年変えて、事前にテーマを提示して参加者を募っている。研修修了時には修了証書を授与する。

②正教聖ティーホノフスキー人文大学

**Православный Свято-Тихоновский
гуманитарный университет**

訪問日時：2013年3月25日（月）15：00～16：30

1. 対応者：学長 主席司祭 Владимир Воробьев
国際担当副学長 司祭 Георгий Ореханов
教育学部長 СклЯрова Татьяна Владимировна.
国際部長 Виолетта Ничкова
2. 所在地：115184 Москва, ул. Новокузнецкая, д.23,стр.5А
3. メール・電話等：Тел. (495) 953-92-53 (приемная комиссия)
E-mail: priemkom@pstgu.ru, http://pstgu.ru/about_university/info/
4. 入手資料：
 - 1) 20 лет Православный Свято-Тихоновский Гуманитарный Университет 2012
 - 2) 20 лет Православный Свято-Тихоновский Гуманитарный Университет 2012: Выпускники
 - 3) Пречистому образу Твоему поклоняемся, Благий 教会芸術学部の教員と学生が修復したアイコン等の写真集
 - 4) Университет 20 лет. DVD
 - 5) 20 лет Православный Свято-Тихоновский Гуманитарный Университет:

Знания.Культура.Вера. パンフレット

6) ロシアにおける「宗教文化と世俗倫理の基礎 (ОРКСЭ)」の実施状況と宗教系学校に関するデータ資料



<大学の概要>

正教聖ティーホノフスキー人文大学は、正教の大学として、ソ連崩壊直後の1992年にロシア正教会総主教アレクシー2世の請願により創設された。1998年から国家アクレディテーションを受け、2004年にロシア連邦教育科学省から正式にユニベルシテートの地位を認められた（現在452の非国家立高等教育機関のうちユニベルシテートの地位を認められているのは20校にすぎない）。この大学の設立によって、ロシアの歴史のなかで、初めて世俗の者が高等神学教育を受けることができるようになった。このタイプの教育施設はモスクワにもう一校あるが、当大学が一番規模が大きい。宗教学の講座は様々な大学に設けられている。

この大学設立のイニシアチブは時代の要求であった。ソ連崩壊後、人々は自由になり、精神面の要求が多くなった。最初はコースをつくり、講義や講座を行うことから始めた。その後、聖職者がワーキンググループをつくり、大学設立に至った。

当初は5学部であったが、現在は、神学部、宣教師学部、歴史学部、言語学部、教育学部、教会歌唱学部、教会美術学部、情報学・応用数学部、社会科学部の10学部があり20種類以上の専門分野の教育（バカラブリアートとマギストラトゥーラ）を行っている。これらのほかに、既に大学を卒業している人、僻地や外国に在住の人や心身に障害があり通学できない人を対象とする補充教育学部がある。学生数は約3000人、うち全日制課程は1000人、通信制課程が2000人である。教員数は約400人（博士が48人、博士候補が182人）、事務職員数も約400人（人件費の予算不足からほとんどが他所での仕事を兼務しているため、多数を雇用

している。減らそうにも減らせない状況にある。レベルの高い教員に教えてもらうには、他大学に勤務する人に頼むしかない)。学生、教職員ともに全員が正教の信者である。学生は信者であることが入学時の条件となる。

全日制課程の授業料は無料である。他の課程は有料だが、かなり安い。本当は全員有料にしたいが、正教信者はみな貧乏であるためできない。

大学には研究センターとしてほかに軍人精神教育センター、ソーシャルワーク部門、ロシア正教会現代史研究センター、神学・神学教育史研究センター、宗教社会学研究センターがある。また附属機関として、合唱学校、正教聖ペトロフスキー中等普通教育学校、夏季・冬季子どもキャンプ場がある。

当大学は「正教文化の基礎」と「私たちの遺産」の2つのオリンピアードを実施しており、ロシア連邦教育科学省にも認められている。

当大学では神学の国家スタンダードを開発している。全ロシアでは現在 40 以上の国立・教会立の高等教育機関がこのスタンダードにもとづく教育を行っている。

2012 年の 20 周年記念までに 4000 人以上が卒業し、うち 600 人が聖職者に、8 人がアーキビストとなった。卒業生の活動の割合としては、印刷・IT 産業 (18%)、ロシア正教会ならびにその他の地域の正教会の聖職者 (16%)、出版社・図書館勤務 (15%)、商業機関勤務 (15%)、国家公務員・軍人 (11%)、全教会・主教区の活動に参加 (11%) (ただし、複数の活動に関わる者を含む)。

2010-2011 年度は、通信教育課程の卒業生の 5 分の 1 が学校教育の分野に就職した。

<大学創立から過去 20 年間の変化について：学長のお話>

ソビエト崩壊後、宗教教育の問題に直面した。ソビエト時代に宗教教育は完全につぶされていたからである。ソビエト時代にはすべての教育課程を国が定めていたが、新しい時代には新しいシステムが必要になる。新しいシステムのなかで「神学」のスタンダードが必要となった。スタンダードを定めたのは教会の関係者である。ソ連時代、科学的無神論を教えられていたが、神学スタンダードのおかげで当校のような大学をつくることができた。

10 年かけて多宗教的スタンダードを開発した。ロシア正教だけでなく、どの宗教にも使えるようなスタンダードである。そうでなければ教育省は承認してくれなかった。基礎になっているのは、ロシアの歴史、宗教史、哲学、体育、言語学など、どの宗教にも使える要素である。これに加えて、各宗教に関する教育を枝分かれさせるような形で導入した。これによって各宗教教育施設は自分の枝を選べるようにした。教育省はこのような形のスタンダードを承認した。

スタンダードができてから、他大学にも宗教学の講座や学部ができた。現在、ロシア全土に約 50 の宗教学の講座がある。現在はまだ博士論文を宗教学で書くことができないので、今後は最高資格審査機関 (BAK) の専門分野リストに宗教学を加えられるようにする必要がある。

ロシアには未だにソビエト的思考方が残っている。環境が抵抗している。

大学が宗教講座を開設した場合、教会とのタイアップがなければ無意味である。だがこれは複雑な問題で、教会も国家も準備ができていない。ソ連邦時代に教会は弾圧を受けていたため、人材不足も深刻である。

私たちの大学はこの交差点の真ん中にある。全力を尽くしてまわりの城壁をぶち壊して、教会と国家の間に橋を作ろうとしている。

ロシア革命の前、国家と教会はタイアップしていた。ヨーロッパ各国にも国家と教会の連携がある。現在のロシアはまだスタート段階で、障害がたくさんある。教会には資金がなく、国家も予算に余裕がない。ともに困難を乗り越えなければなりません。世論はかなり大きいので、社会のサポートを期待したい。

大学は寄付金によって経営がなりたっている。国や他施設からも補助金をもらっているが、それは大学の予算のほんの一部に過ぎない。

<教員養成と「宗教文化と世俗倫理の基礎 (OPKCЭ)」について：スクリャーロワ教育学部長のお話>

当校では教育学部は16年前から存在する。学校で宗教に関する教育が導入されたのは最近のことなので、卒業生はどここの学校でも教えられる国家資格をバカラブリアートで取得できるようになっている。教員資格以外に、社会教育士の資格も取得できる。

2007年から普通教育学校で宗教に関する教育が実験的に導入された。私たちはこのコンセプトの開発に相当な協力をした。学校は宗教的文化と世俗的倫理を教えることができる。当校の教育学部の卒業生の大半は国公立学校の教員になるが、正教学校などの宗教的教育施設の教員の養成も目標としている。

4年生の「宗教文化と世俗倫理の基礎 (OPKCЭ)」は問題が多い。ここに至る経緯は次のとおりである。

1998～99年、地方構成要素の中で宗教的教育の導入が始まった。つまり、地方から宗教教育導入の動きが始まったのである。

2002年から、地方からのイニシアチブをシステム化する試みが開始された。当時のフィリポフ教育大臣は通達を出し、「正教文化の基礎」という科目の国家教育スタンダードを作成した。このスタンダードによって示された方針にしたがい、教科書も出版された。

2007年に教育科学省はモニタリングを行い、地方構成要素の一つとして「宗教文化の基礎」を選択した生徒が80万人に上ることが明らかになった。このうち80%以上がロシア正教を選択し、10%はイスラム教を選んでいった（主としてタタルスタン共和国の生徒）。

2010～11年度には、実験的に「宗教文化と世俗倫理の基礎 (OPKCЭ)」が連邦構成要素として導入された。これにより、学校はどの科目をどのようにして選ぶか、選択のメカニズムを決める必要が生じた。また教師の研修や教科書検定の問題が生じた。

あくまでも個人的意見であるが、10～11年度のこの実験は失敗に終わった。教員研修と教科書の問題が未解決だったからである。

2012年度現在、98%の学校が「宗教文化と世俗倫理の基礎 (OPKCЭ)」を教科として導入している。だが、初等教育4年生では学級担任が全科を担当するため、担当授業数が増えることになった。また、当初は4年生の後期と5年生の前期に半年ずつ導入することになっていた。これは、復活祭の行事を暦に合わせるためであった。だが、ほとんどの学校では4年生で通年の教科として導入することとなり、復活祭については秋学期に学んでいる。

「宗教文化と世俗倫理の基礎 (OPKCЭ)」導入の実験により、1) 宗教的議論が生じるなかで、児童の宗教への関心が生じたこと、2) 4年生と5年生で半年ずつ実施するプログラムは不適切であることなどが明らかになった。

また個人的意見であるが、地方レベルのイニシアチブで宗教に関する教育が導入されるようになった頃は、現地の教育状況や市民の要求に合わせて行っていた。それが、連邦レベルで決めて上から下への命令系統が確立されたため、正教以外の他宗教が付け加えられたことから、問題が生じている。

地方レベルの取り組みが盛んであった当初は、市民と教会が手を組んでいた。現在は教会の関与は少なくなっている。

当大学の卒業生は、「正教の基礎」「世界の宗教文化」および「世俗倫理の基礎」の3科目を教えることができるように訓練されている。

(資料)

2007年 70万～80万人の生徒がシヤ連邦の学校で地方教育要素の枠内で宗教文化を学んだ。

2009年 「宗教文化と世俗倫理の基礎 (OPKCЭ)」を4・5年生で4学期のうち1学期間導入することが決まる。

2009年11月 実験コースの承認。

2009-10年度 9729校、児童236545人、教員15145人

2010-11年度 9980校、児童242902人、教員16266人

2012年ロシア連邦のすべての地方で4年生に導入

2012年11月1日現在のデーター

ロシアの学校44973校のうち44183校(98.2%)

合計135万3647人の児童が学んでいる。

イングーシェチア、チェチェンではOPKCЭの枠内で100%がイスラム教を学んでいる。

おおよそのデータによれば、OPKCЭコースを補う形で以下が行われている：

ベルゴロードスカヤ州では2～11年生が地方コンポーネントの枠内で正教文化の基礎を学んでいる(14万人の生徒のうち約10万人が正教文化を学んでいる)。

モスクワ州(127万人の生徒のうち約30万人が正教文化を学んでいる。)

タンボフスカヤ州(9万4000人の生徒のうち約3万人が正教文化を学んでいる。)

タタルスタン(60万人の生徒のうち約15万人が地方コンポーネントの枠内でイ

モジュール	児童数(人)	選択の割合(%)
世俗倫理	600135	44
正教文化	412602	31
世界宗教	281329	21
イスラム教	51156	4
仏教	5887	0
ユダヤ教	296	0

スラム教を学んでいる。)

全体として、約 50 万～ 60 万人が学校で宗教文化を学んでいる。

ロシアの正教教育機関数の統計

教育機関のタイプ	1914 年	2013 年()内は国外
宗教アカデミー	4	2 (4)
大学 (ユニベルシテート)	—	3 (1)
インスティテュート	—	2 (1)
宗教セミナリヤ	57	34 (7)
宗教学校	185	25 (9)
主教区女子学校	72	1
正教学校	— (すべての学校が正教学校だったといえる)	120-200
教会 - 教区学校	37528	10000

<高等教育機関の教員養成>

本学のアспиранトウーラとマギストラトウーラにおいては、本学の教職員を養成することも意識している。

本学の教員は、本学卒業生のほかに、モスクワ国立大学卒の先生が多い。宗教アカデミー出身の先生は少ない。これは宗教アカデミーの卒業生の数が限られているためである。

<今後の課題>

宗教学校のディプロマは国家スタンダードによって認められていない。スモレンスク市の宗教学校 1 校のみが認められている。これから教会に属する宗教的なものも国家に認められるように、ライセンスを取る努力をすることになる。本学卒業生が宗教アカデミーの教授になったので、期待できる。

< 2013 年 3 月 26 日 (火曜日) > 曇り時々雪

①モスクワ市第 734 番教育センター「自己決定学校」

Государственного бюджетного образовательного учреждения города Москвы центра образования № 734 "Школа самоопределения"

訪問日時：2013 年 3 月 26 日 10：00～12：00

1. 対応者：校長 Грицай Юлия Владимировна アルチョム先生
モスクワ市教育部メトディスト Ольга Николаевна Анисимова
2. 所在地：105484, Москва, Сиреневый бульвар дом 58А
3. メール・電話等：тел.:(499) 461-06-23 (499) 461-08-45

E-mail: school734@yandex.ru, URL: <http://734.msk.ru/>

4. 入手資料：

Александр Тубельский, Школа будущего, построенная вместе с детьми, Первое
Сентября, Школа Самоопределения, Москва, 2012



この学校には澤野が2002年5月に訪問調査を行ったことがあるので、この学校の特色ある教育活動についてその後の発展の状況を伺った。とくに前のトベルスキー校長が亡くなってからの変化について。また、4年生の宗教教育の取り組みについてもお話を伺った。この週はモスクワ市では春季休暇中の学校が多かったが、この学校では通常どおりの授業が行われていた。校長には校内の見学も勧められたが、事前に連絡しておいた上記の質問についての回答を伺うだけで予定時間を過ぎてしまい、授業の様子を見ることはできなかった。

<学校の概要>

児童生徒数： 幼稚園 179人、初等中等学校 565人

教員数： 120人 保育士：50人

終日制学校で、初等教育段階では30分授業、基礎・中等教育段階では40分授業

<グリツァイ校長のお話>

1980～90年代は社会・経済・政治が混乱しており、若者は外に放り出された感じであった。そこで、学校を子どもの関心のある所にすること、積極的に意見が言える社会人となるための教育が課題であった。民主主義は人の意見に耳を傾けることであり、まず第一に対話が重要で

あると考えられた。

当時から子どもが教育のプロセスの創造者として参加することが必要とされた。多様性のある活動を用意し、子どもに選択肢を与えた。子どもには、付き合う人、仕事、授業、空間、科目などを自由に選択させることにした。学校を濃い味のコンソメのようなものにして、子どもを味つけて自己決定のできる社会人にするための施設としたかった。

その後学校の方針に変化はあまりないが、環境と条件が変わってきている。

まず第1に、今の子どもは昔の子どもとは違う。昔はよく本を読んだものだが、今の子はインターネットで時間をつぶしている。学校の中だけでなく、社会もオープンになった。それと同時に、二人親のいる完璧な家族が減り、一人親家庭や崩壊家庭が増え、心理的に不安定な子どもが増加している。

社会の課題は変わっていない。依然として以前より積極的なタイプの若者の要求が高い。卒業生は競争社会に入る。そこで才能を発揮し自己決定できることが重要となる。学校は全体として生き物のような存在で、いつも新しい事情をもつ新しい人が入ってくるので、学校も変更の用意が必要である。

現在は親の役割が重視されている。父母の会議（ソビエト）がある。学校は独裁的な所ではなく、国家・社会的管理の施設である。どの学校にもホームページがあり、そこから父母がオンラインで自分の子どもの電子日誌帳と電子指導要録を閲覧できるようになっている。

モスクワには教育の質向上センターのサーバーを用いて各学校のウェブサイトを見ることができ、オンラインで討議もできるので、集まる必要はない。モスクワはこうした努力をしている最中であるが、サンクトペテルブルグでは教育プロセスの情報化はさらに進んでいる。

本校では定期的に卒業生との円卓会議を行っており、卒業後のキャリアについて聞き取りを行っている。本校卒業生の卒業後の進路選択には多様性がある。進学先は一つの大学に偏っておらず、皆バラバラである。大学のレベルが高くても、教育費が高くても、障害にはなっていない。自分の目標を達成するために外国（インドなど）に留学した卒業生もいる。

自己決定のプロセスは学校で終わらずに発展している。失敗しても違う試みをして頑張っている。入学した大学が自分に合っていないと思えば、別な大学に入り直す卒業生も少なくない。

本校卒業生は、大学教育のなかではプロジェクト式システムのある大学の方が適用しやすいようだ。つまり対話ができる所が好まれている。卒業生は、競争率の高い場では責任感を発揮している。

教育の成果が現れるのはすぐではなく、25年くらい経ってから現れるものである。教育の機会を得られた子どもは、学校の中でも同じことを追求するものである。

もう一つの特色として、本学に戻ってくる卒業生が多いことがあげられる。教職員170人中44人が卒業生である。また、本校では毎年アマチュアドラマを上演しているが、その2ヶ月くらい前から演劇に参加したい卒業生から電話がかかってくる。

1974年の卒業生はこの学校を舞台にした記録映画を制作中である。映画専門大学に進学したい生徒も映画制作を手伝っている。

保護者の50～60%も卒業生であることもあり、レクチャーやマスタークラス（専門家による講義）で児童生徒に自らの専門分野を紹介したりアドバイスをしたりしてくれる。またア

マチュアドラマに参加する保護者もいる。

本校が直面している問題の一つに、学校卒業後の社会への適用の問題がある。本校はあまりにも居心地がよいので、外に出てストレスを感じる場合がある。そこで、異なる世界に適用するための準備を9年生から始めている。9年生には特別プログラムのある他の学校を見学させる。10・11年生は将来の専門を選ぶために、大学訪問や1週間の職場体験を行っている。

モスクワ市全体の傾向として、大学やカレッジと連携したイベントが増えている。例えば、チミリャーゼフ記念農業大学など。各大学にはオープン・キャンパスの日があるが、それだけでなく、プロジェクトを共同で実施している。こうしたことは、外の世界との橋渡しとなる。

本校には学校ソビエトが1990年代からある。学校ソビエトでは議論を行いながらシステム全体を変えていくようにしている。

本校のコンセプトである「自己決定」は、初等教育レベルではゲームや遊びの形で選択を経験させ、基礎教育レベルでは選択肢を幅広くし、多様にし、後期中等教育レベルで自分で自己決定できる条件を作る、というように段階的に習得させている。

10年生ではサマースクールを実施し、先生が学校の科目以外のテーマの講座を行う。例えば「ポエジー」「社会学」「世界と人間」など。各生徒は自分で講座を選択し、独自のプロジェクトにも取り組む。卒業直前に深くテーマを探り、リサーチを行う知識と経験を生徒に与える。

このような実践を行っているため、後期中等教育段階では他校からの転入は認めていない。他校で基礎教育を受けた生徒は、本校の自由選択制に戸惑うからである。

学校の専門化のプロセスには、自校の人材リソースを基礎に数学、文学などをプロフィールとする場合と、子どもの才能に合わせたプロフィールを設ける「マルチ・プロフィール・システム」がある。すべての子どもの要求を満たすマルチ・プロフィール・システムは、どの学校にも人材リソースがあるわけではないので、困難である。このため、学校間で先生の交換が行われている。当校である科目の教員が不足している場合、近隣の学校から教員を借りてくる。マルチ・プロフィール・システムでは人手不足となる問題を、他の教育施設とのネットワークで解決しているのである。

学校の雰囲気や規則を支えているのは上級生であることはどこの校長も理解している。別な学校に転校したがる生徒を引き留めるための努力も行っている。例えば、本校のプロジェクト活動のなかに「デザイナー」というのがある。9年生と11年生のためのデザイン・グループを設けて、学校の図書館をメディア・センターとして現代化するプランを作らせた。リヤザンとプレオブラゼンスカヤの図書館の訪問調査を実施し、6ヶ月かけてデザインをした。近くその発表会を行う。現在はそのスポンサーを探しているところである。

「デザイナー」による支援がなければ上級生のニーズに応えることはできなかった。

教員もユニークな人をいつも探している。例えば、運動場が手狭になってきたので、先生を探してフラメンコ教室とエアロビクス教室を始めた。

本校の非スタンダード的コースには、コミュニケーション、ジャーナリズム、映画、ラジオ放送、ニュース番組制作、学校新聞製作、テレビニュース（15分）などがある。

新国家教育スタンダードは、本校の概念と変わらない。オリジナリティのある学校の経験に学んでスタンダードが改訂されたためである。スタンダードの問題点としては、いろいろな要

求のシステムがあるという前提そのものにある。だが、各学校はそれぞれ独自に目標を達成する自由が認められている。国が定めているプログラムもあるが、義務ではあるが「推薦」となっているので、学校が自主的に決めることができる部分が多い。

<「宗教文化と世俗倫理の基礎(OPKCЭ)」について：アルチョム先生のお話>

本校の児童生徒は多宗教で、完全に無神論の家庭の子どももいる。そこで全人類の歴史上の経験として宗教を教えるように心がけている。

ロシア、とくにモスクワは多宗教・多文化であるので、この科目の重要性は認識している。最低でもある程度は子どもに基本的知識を与えなければならない。

科目のストラテジーは本校の主義とは異なる。科目のミニマム・エッセンシャルは教科として教えることを前提としている。だが各テーマをクリエイティブに教えることはできる。教える人が独自の見解を入れることもできる。

OPKCЭは人類の文化学で範囲で欠くことのできないものである。宗教についての理解は歴史認識の鍵となる。

各クラスでは教え方はそれぞれ教える人の特徴に応じて異なる。本校の第4学年には2学級あり、いずれも両親にモジュール選択の機会が与えられた。学校からは「世界の宗教」を勧めた。

一つのクラスでは、ビデオを観たり、テキストを読んだりしながら、伝統的なやり方で宗教の歴史と現在を教えている。もう一つのクラスでは、他の活動と合わせて授業を行っている。例えばキリスト教がテーマの授業はクリスマスの直前に行っている。音楽、演劇、スポーツ、ミステリーツアー、演劇、祭事、クリスマスのご馳走作りなどを行う。そして宗教的祭事が教育上のフィナーレとなる。

今週父母会があるが、父母はこの科目の文化学的パターンを重視し、宗教の文化と伝統について知ることに賛同してくれた。

先生方は、科目が形骸化するリスクもあるため、オーソドックスな教え方ではなく、年数にふさわしい形で教えるべきであるという意見が多い。

イスラムの行事については全部実施しているわけではない。

スタンダードでは「学び方を学ぶ」ことが強調されている。以前は知識がメインだったが、今は体験がメインである。教科教育は手段にすぎない。宗教文化の授業も手段として行っている。祭事を行うことではなく、それがあつたことを知らせることに重点が置かれている。子どもに多文化的なことを外から見てもらうのではなく、積極的に参加することを通して知識を得ることが目的である。

子どもに自己決定のチャンスを与えることが重要である。自国の文化、歴史、社会の中での自分の正しい位置づけを自ら定めるべきである。子どもたちに何らかの真実を押しつけてはいない。インターネットを通して他の世界の情報リソースを活かすことの訓練も重要な課題である。

<OPKCЭについて モスクワ市教育局東部地区教育委員会アニシモワ、オリガ・ニコラエブナ談>

宗教教育に関して教員は大学では訓練を受けてきていない。社会のなかではOPKCЭ導入の

ための準備が行われた。4年生の教員には特別研修が行われたほか、全教員を対象とする専門講座も開催された。

東部地区には初等中等普通教育施設 123 校があるが、大多数は「世界宗教」と「世俗倫理」を選択した。次に多いのが、「正教文化の基礎」であり、「仏教」「ユダヤ教」「イスラム教」が続く。モスクワの教員は市内に様々なキャパシティがあるので、地方の教員よりも運が良い。例えば、最近ユダヤ・文化センターが開設され、そこに教員を連れていった。

子どもに本格的に宗教について学ばせたい親は、宗教系の日曜学校に通わせることもできる。

宗教教育に対する親の要求を正しく理解することが重要である。複数のモジュールの教育を導入している学校もある。もちろん、両親の選択を優先すべきである。

教科書は、この学区ではプロスヴェシュニエ社のものを用いている。参考資料も多く用いられている。この科目はデリケートであるため、教科書は必ず教科書リストに掲載されているもののみを使うべきである。

②モスクワ市第 90 番夜間・交替制普通教育学校

Вечерняя сменная общеобразовательная школа № 90

訪問日時：2013 年 3 月 26 日 13：00 ～ 17：00

1. 対応者：校長 Владимир Михайлович Кузнецов
Раиса Дмитриевна Кузнецова ロシア語学校担当 アントン先生
2. 所在地：Москва, 4-й Новоподмосковный пер., дом 2А (300м от ст. м. Войковская)
тел.:8-495-450-95-10
3. メール・電話等：тел.:8-495-450-95-10, E-mail: kuznecovvm@rambler.ru
URL: <http://www.extern90.ru/index.php/shkola-russkogo-yazyka/o-shkole>
4. 入手資料：
 - 1) В.М.Кузнецов, Р.Д.Кузнецова, Н.В.Кузнецова, **Обучаемся русскому языку играючи, Learning Russian While Playing, Москва 2009**
 - 2) В.М.Кузнецов, **Проблемы эффективного развития современной вечерней школе, , Образование в современной школе, 08, 2012 Август, сс.26–34**
 - 3) **Модель мини-комплекса образовательного открытого типа на примере ГБОУ ВСОШ №.90 校長先生作成資料**

本校は 1944 年、戦時中に設立。2006 年から「ロシア語学校III кола русского языка」を設置した。今は普通の夜間学校と экстернат（独学で検定試験により教育修了資格を得る制度を利用する者のためのコース）とロシア語学校のミニ・ンプレックスとなっている。ロシア語学校に関しては、3 年前から校長の奥さんが「ロシア語学校」担当の副校長に就いてから積極的に取り組むようになった。それまではどちらかという上からやらされていたらしい。モスクワ市では各行政区に 1 校ずつロシア語学校が設置されているが、14 歳以上の子どものため



ロシア語学校の看板



学校の入口：語学を深く学ぶコースの宣伝



アントン先生のロシア語学校の授業風景



キューバ人とベトナム人の生徒



ロシア語学校の生徒たちとの懇談会（ベトナム、アフガニスタン、キルギス、タジキスタン、中国出身の生徒たち）。右はプーシキンの詩を暗唱するアフガニスタン人の生徒。

の「ロシア語学校」は2校しかない（いずれも夜間（交替制）学校付属）。

学校全体は7学年から11学年まで、生徒数は600以上で、うち экстернат208人、夜間学校403人(ロシア語学校42人を含む)。Экстернатのみ有償となっている(1学年あたり4万ルーブル、通常1年間に2学年分のカリキュラムを履修学習する)。教員25人の小さい学校であるが、毎年300人の卒業生を出している（一般の学校の5－7倍）。体育や図工などの授業がなく、毎年約200万ルーブル節約できるという。これによって効率が上がって、教育の質もかなり高いものを提供が、ソ連時代の「夜間学校」は教育の質が低い学校としてのイメージを引きずっている。実際は卒業生の9割が大学に進学している。

校長先生は「夜間学校」のステータスや有償サービスを提供している Экстернат の組織を残すために苦戦してきた。モスクワでは夜間学校は次々と閉鎖に追い込まれていくし、学校が Экстернат を通して自立性を獲得していることも区の教育局では決して好まれていない。

本校のロシア語学校は夜間性ではなく、月～金 9:30～14:30、14:30～16:00 は個別指導になっている。ロシア語の能力別に毎年通常3つのグループに分かれる（1グループの上限は12人であるが、実際はそれをやや上回っている）：

- ①ロシア語が少し話せる CIS 諸国の子ども（アゼルバイジャン、ウズベキスタン、タジキスタン、キルギスなど）
- ②ゼロからロシア語の勉強を始める、いわゆる「遠い外国 дальнее зарубежье」の子ども（アフガニスタン、キューバなど。去年はイスラエル）
- ③ロシア語の発音が特に苦手なベトナム人の子ども。ベトナム担当の先生はベトナム語はできない。

ロシア語学校の先生はモスクワ公開教育研修所かプーシキン記念ロシア語大学で教員研修を受けている。プーシキン記念大学卒のアントン先生は高等教育終了後1年前からこの学校に就職した。

< 2013年3月27日（水曜日） > 晴れ

①モスクワ州教育省

Министерство образования Московской области

訪問日時：2013年3月27日（水）11：00～13：30

1. 対応者：第一副大臣 Запалацкая, Вероника Станиславовна
現代化プロジェクト担当 パンチューヒナ氏
就学前教育担当 モロゾワ氏（途中退席）
2. 所在地：143407, Московская область, г. Красногорск-7, ул. Бульвар Строителей, д. 1
3. メール・電話等：тел.: 498-602-09-87, URL: <http://mo.mosreg.ru/>
4. 入手資料：なし



モスクワ州政府の建物はセキュリティチェックが厳しく、道路に面したゲートでは荷物のX線チェックのほかに、サコティンコワさんを通して事前に送ってあったパスポートのコピー（顔写真を含むスキャンイメージ）との照合が行われた。セキュリティチェックを受けた後はゲートの外に出て庁舎まで歩かなければならない。庁舎の入口を入ると再びセキュリティチェックを受ける。

庁舎はガラス張りの近代的な建物で地下にはコンサートホールや展示場があり、一般市民のためのイベントも開催されるということであった。副大臣室に行く前に、ゲートまで迎えに来てくれた秘書の案内で30分ほど施設見学を行う。庁内には3500人の職員が勤務しているという。

副大臣室ではまず、私がなぜロシアの教育に興味を持っているのかを聞かれたので、日本における19世紀からのロシア教育研究の流れをざっと説明。ザハレツカヤ副大臣は、「ロシア民族の典型は、オブシチナ、サポールナといった伝統的コミュニティにおける団体主義的メンタリティがあり、個人主義とは相対立する。日本人と共通性があるのではないか。」とコメントされた。

<モスクワ州における教育改革の進捗状況>

連邦レベルの教育刷新のためのプロジェクトはコンクール方式で連邦構成主体が参加できるので、モスクワ州は積極的に参加している。コンクールに参加する場合、申請書に予算を書き、成果が出せることを説明する必要がある。

「私たちの新しい学校」(Наша новая школа ; ННШ)は教育の各段階の様々な領域に関するプロジェクトである。たとえば、教育施設の自治と公開性の拡大といった課題がある。コンクールによって補助金を得る特別プロジェクトである。大統領のイニシアチブにより始められた全国的教育イニシアチブで2010年から始められた。スケールが大きく、ロシア連邦のすべての構成主体の参加が義務づけられている。連邦レベルからの予算がすべての教育対象に付与され、ロシアの教育全体をシステム化することがねらいである。

いくつかの重要な方向性があるが、その第1は新しい国家スタンダードの導入である。

新国家スタンダードは、各地方で段階的に導入している。2011年9月1日からはすべての初等普通教育段階で新スタンダードが導入された。現在、モスクワ州では約1500校のすべての学校で1～2年生が新しいスタンダードによる教育を受けている。3～5年生はまだ実験的段階にある。2013年9月1日からより広範に導入することになり、5年生にも導入する。5年生については過去2年間に22校で実験を行っていた。(6年以上の)基礎学校段階につい

ては、2013年9月から180校で新スタンダードの実験を行う。2015年までに基礎学校段階でも100%の完全導入を目指す。

新国家スタンダードの特色は、授業だけでなく課外活動の時間を定めていることである。モスクワ州では初等教育段階で週10時間の課外活動を州の予算で行っている。今まで放課後の教育は独立したものだだったが、新スタンダードによって一般教育と補充教育との統合が図られた。各学校は主要なドキュメントとして基本教育プログラムを作成する。課外活動の内容は、各学校のリソースと親からの要望を考慮して定めることになっている。

主な課外活動としては1) スポーツ、2) 認知的活動、3) エコロジー、4) 宗教・道徳、5) 芸術がある。認知的活動とは、子どもの知的発達を促すもので、授業では教科別に学んでいることをさらに深く、教科横断的に学ぶ時間となる。授業としてではなく、様々な形態で活動が行われる。

第2の方向性としては、各学校で新しい情報環境を構築することがある。学校によっては既によく整備されている場合もあるが、テクノロジーの進歩のテンポは速い。ロシア独立後のIT技術の進展は速く、子どもたちは入学までに家庭ですでにITの活用方法を習得している。学校に入ってから知識と技能の発展のために用いることができるようにすることが重要である。

このためには知識が一方向的に子どもに知識を与えるという昔ながらの教育方法を改め、子どもが自ら学習を進展させていくことができるように、自分で情報を探し、加工し、新しい活動に活かしていくことができるような体験を与えなければならない。モスクワ州では、情報化された教育において子どもの活動的アプローチを取り入れようとしている。

連邦予算はこの面でいろいろな方向で活用されている。メインとなっているのは情報化教育環境で、初等教育の設備の整備が行われている。子どもたちが、自分のモードとテンポに合わせて知識を掘り起こせるように配慮がなされている。一番興味深い課題は、教師に新しい考え方を習得させることである。子どもの方が変化への対応が速いからである。

新スタンダードの成功は先生によって左右される。このため、教員の特別な研修コースが必要である。研修のキャパシティは限られているが、2年間で1万4000人を対象に再教育を行った。モスクワ州には教員のデータベースがあり、オンライン方式でどの教員が再教育を受けたかが瞬時にわかるようになっている。他の地方にはこのようなシステムはない。校外教育施設の指導者にも再教育を行わなければならない。モスクワ州では1億5000万ルーブルの予算を教員研修にあてている。このほかに、4000万ルーブルを初等教員のスタンダード導入に関する研修にあてている。

2011年からもう一つの重要なプログラムとして「教育システム現代化」プログラムが導入された。これはHHIIIを具体化するもので、教育発展の方向性と理念を示している。この現代化プログラムは、HHIIIを具体化する手段、メカニズムとリソースを定めている。例えば、教員に対する新しい資格の必要性を意識している。国の人材としての教員の地位向上のために、教員給与を引き上げることが、現代化プロジェクトの最重要課題である。給与を引き上げるだけでなく、学校所在地の経済水準に合わせ、平均給与以下にならないようにしなければならない。平均賃金が学区や地方レベルで上がった場合、教員給与も引き上げることが義務づけられた。モスクワ州の教員給与は平均賃金よりも1割高い。2013年1月現在で平均35507ルー

ブルである。これはモスクワ州が教育のプライオリティを教員に置いていることを示すものである。モスクワ州は2011～12年度の教員の平均給与向上に関して、国全体のベスト10に入っている。州は多額の予算を教員に配分している。(給与だけでなく)教員に対し現代化プロジェクトによって新しい設備を与えられた場合、それを使えるようになるために研修も受けなければならない。

また、英才児への支援として、モスクワ州ではネットワークの構築を行っている。市町村レベルから、地方レベル、全国レベルへと進む学力オリンピックへの英才児の参加を奨励している。その結果、2011年のモスクワ州のオリンピックやコンクールの優秀者数は、モスクワ市、サンクトペテルブルグ市に続くベスト3となった。モスクワ州は地域レベルのオリンピック優勝者への支援として、毎年1000人に18000ルーブルの賞金を授与している。2013年からはこの賞金を24000ルーブルとし、対象者も連邦レベルのオリンピックやコンクールの入賞者も含めることにし、2000人まで増やす予定である。

モスクワ州は72の行政区に分かれている。各行政区レベルに州とは別の支援プログラムがあり、資金が供与されている。

モスクワ州内にはかねてよりよい伝統があり、よい成果を出している。たとえば、創造的教員のチームや情熱的な校長に補助金を与えている。そのような学校は国家統一試験でもいつもいい成績をあげている。

学校における革新的なプロジェクトについては、州教育省が毎年テーマを発表し、コンクールを行うことによって支援している。コンクール参加校から72校を選び、グラントを付与している。プロジェクトを実施するための設備の整備にも使えるように、100万ルーブルを付与している。2012年度は72校のうち26校が英才児の支援に取り組んでいる。

英才教育の支援は、連邦、州、市町村の各レベルで行われ、すべてグラント方式となっている。このため、全レベルからの支援が重なれば、かなり大きな支援となりうる。

モスクワ州ドルゴプロードニー市にはモスクワのベスト5にランキングされているモスクワ物理テクノロジー大学(МФТИ、国立大学)が、英才児のための宿泊施設理数系プロフィール学校をつくらうとしている。寄宿制の場合7学年以上を対象とするのが適切だが、早期から始めた方がいいと考え、1～11学年の学校とする予定である。重要なプロジェクトなので州政府は重視している。知事と州政府の支援のもとで実施されるプロジェクトである。建物の改装、インフラ整備などのハード作りは段階的に行うが、相当に費用がかかる。

校舎ができる前の準備として、サマースクールなどの長期休暇中の全日制・通信制準備コースを設ける予定である。オンライン学習を可能とし、理数系の学力オリンピックも実施する。これらはМФТИとモスクワ州国立総合大学と連携して行う。教員研修も課題である。

このように、НИШと現代化プログラムは教育システム全体に関わる改革を促すものであることを強調したい。これまでは部分的な改革のプロジェクトが多かった。

また改革を上から下に押しつけるのではなく、下からの質の向上を目指して、情報を現場から集めるモニタリングとオンラインデータベースの構築に力を入れている。モスクワ州では2011年度から電子モニタリングシステムを導入した。モニタリングでは、管理運営、人材、リソース、学校の現状等に関する500項目以上のデータを収集している。2011年からモニ

タリングの結果を各行政区ごとにホームページで開示している。重要なのはデータを保存できる仕組みである。管理運営上の決定を下すためには、経年的に比較できるデータが必要である。ポイントの数値が重要なのではなく、データをどのように活かすかが重要となる。このため、管理職の人々も教員と同様にデータを正しく理解できるようになるための研修を受ける必要がある。教育システムの現代化はどの分野にも関連するもので、教員と管理職の専門性が問われる。とくに新しい感覚で監督することのできる管理職が重要である。またシステム性が維持されることが重要である。

他に、学校経営の透明性を図り、学校の自治性を拡大することが目指されている。各学校のウェブサイトに活動報告を掲載させることで、学校にモチベーションを与えている。「学校のベスト・ホームページ」というコンクールも行い、発表会で公式に紹介している。

また、現代の要請に応えることができるように、学校インフラの改善も必要となっているが、これには大きな投資を要する。連邦法に従って州レベルからも予算が追加されている。例えば次のようなものに予算が配分されている。

- 1) 現代的新校舎：保健・衛生面での新しいスタンダードに見合った新校舎への改築が行われている。2012年にモスクワ州では15校に2つの体育館とプールがあるような豪華な新校舎が開設された。1校の建物を作るのに、10億ルーブルかかる。モスクワ州では2011年には9校で校舎が新築された。古い建物の改築・増設は含まれていない。
- 2) 学校給食の改善：学校の食堂をもっと近代的にするために、「食堂のある学校」コンクールを実施し、優勝者に100万ルーブルのグラントを与えた。HHIIIの目標である生徒の健康増進にもつながる事業である。
- 3) スクールバスの購入：子どもはどこに住んでいても教育を受ける権利がある。通学のためにとくに農村部ではスクールバスが必要である。モスクワ州は72の行政区のうち36区が農村部にあるため、26～28台の新しいスクールバスを購入する予定である。
- 4) 遠隔通信教育のテクノロジー整備：ハイスピードインターネットを各校に配置し、教員の研修を行っている。統一国家試験の準備にあたって遠隔通信テクノロジーが必要だからである。また、障害のために通学が困難な生徒に対する遠隔通信教育も充実させる必要がある。

HHIIIのもう一つの方向として教員の人材確保があげられる。そのための一つの方策が待遇改善である。モスクワ州では、若い教員を採用した場合、勤続3年目まで学校が補助金をもらえるようにしている。補助金はモスクワ州の学校に就職してきた新卒の教員の給与月額に1000ルーブルが加算される。だいたい3万2000ルーブルから3万5000ルーブルくらいとなる。住居の提供や、教員の子どもは順番待ちなしで幼稚園に入園できるようにするなどの優遇措置もおこなっている。この結果、モスクワ州には新卒の教員が2011年は750人、2012年は834人採用された。

ロシアの教員は60歳になっても退職しないため、保守的でニューメディアに対応できない教員も多い。経験も重要ではあるが…最近、地理、歴史、ドイツ語、フランス語などの科目

別に教師協会が設立された。それぞれオリジナリティーのある教え方を探求するもので、教員の専門性開発と成長のための動機付けとなっている。

教員は子どもと同じように競争が好きなので、教員のためのコンクールも行っている。モスクワ州知事が毎年優れた教員 226 人に 10 万ルーブルの賞金を与えている。これに加えて優秀な管理職 100 人に対して 4 万 5000 ルーブルを授与している。

このほか、就学前教育の改革（2013 年度から新スタンダードを導入）や生徒の健康増進のための改革に取り組んでいる。

教育改革の次の段階はスケールが大きくテンポの速いものとなる。教育改革はモスクワ州では重要なプライオリティとなっており、知事も予算面で支援している。モスクワ州の教育発展プログラム「モスクワ州の教育」は 2014～2016 年まで実施することが決まっている。これは教育分野での政治的手段である。今年の教育予算は 1200 億ルーブルで、去年より 200 億ルーブル増えている。

<モスクワ州における「宗教文化と世俗倫理の基礎 (ОРКСЭ)」の導入状況>

モスクワ州教育省は、モスクワ市にある正教会と協力しながら宗教文化の基礎のカリキュラム開発を行ってきた。10 年ほど前から学校と教会との交流を図ってきた。モスクワ州国立総合大学に宗教地誌学センターを設立。リュドミラ・レオニードヴナ・シェフチェンコが正教文化の基礎の教科書を作成し、教員研修も行った。2012 年度より連邦レベルで「宗教文化と世俗倫理の基礎 (ОРКСЭ)」を新教科として導入することとなったが、モスクワ州は最も進んでいる地方とも言える。

私たちは精神性を育むことをきわめて重要なことと考えている。このため、教会との連携のもとに、行政区ごとに子どもと親のために、正教文化やスラブ文字に関する公開授業、円卓会議、討論会やクリスマスの行事などを行っている。こうした行事の成果をまとめたハンドブックなども作成し、他の行政区に配布もしている。

シェフチェンコ先生は、コロメンスキー教会のユベナリ総主教の指導のもとに 2012 年に就学前施設向けの正教文化の基礎の参考書も刊行した。このため毎年正教会が行っているコンクールで優秀教員に選ばれた。

②モスクワ州クラスノゴルスク市 普通教育施設第 2 ギムナジア

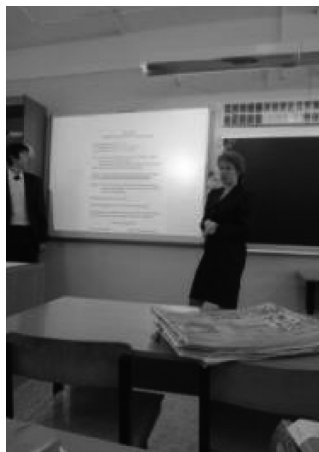
Муниципальное бюджетное общеобразовательное учреждение гимназия № 2

訪問日時：2013 年 3 月 27 日（水）14：00～18：00

1. 対応者：校長 Штейнберг Ирина Нодаровна 他 教職員一同
2. 所在地：143400, Московская область, г.Красногорск, ул. Карбышева, д. 5-а
3. メール・電話等：тел: (495)563-79-22
URL: www: <http://school2.k-net.ru>
4. 入手資料：パワーポイント・プレゼンテーションファイル



学校の概要について、インタラクティブ・ホワイト・ボードのある低学年の教室でプレゼンを受ける。左下は児童のポートフォリオ。右下は4年生のプロジェクト学習の成果。



世俗倫理の授業で4年生の児童が取り組んだプロジェクトをまとめた作品：「物語にみる善と悪」

モスクワ州で HHIII の助成を受けている学校のリストに掲載されていたギムナジア。州教育省の所在地であるクラスノゴルスク市にあったので訪問先を選んだ。訪問日は春休み中だったが、成績不良のため補習に来ている生徒の姿もみられた。用務のない教員も私たちのために学校に来てくれていた。



<学校の概要>

当校は人文学重視のギムナジアで、とくに文学と歴史を専門としているが、数学や理科系の科目にも強く、統一国家試験の成績はいい。ロシアでは数学は「すべての学問の女王」と言われているので、力を入れている。今年で36周年を迎えた。

児童生徒数は940人、教員数は63人である。

就学前準備コース（10月1日から8ヶ月間、30分の課業を3コマ、週2回無料で実施）には138人が在籍している。人気があり、入学希望者を全員受け入れることはできない。

「精神的、文化的に豊かな存在としての人格の形成」と「卒業後、社会における自分の位置をみつけ、生き甲斐をみつけられるような社会人の養成」を教育目標としている。

教員の平均年齢は40歳。最高カテゴリー18人、専門教員7人、優秀教員2人と優秀な教員がそろっている。教員コンクールには皆積極的に参加している。

当校は、2011年にモスクワ州の革新的テクノロジーを活用している学校のコンクールに参加し優勝した。2012年には「地方革新広場」に認定され、オンラインによる電子日誌や電子指導要録を導入した。これに対応するための教員研修も行っている。

<「私たちの新しい学校」(HHIII)をはじめとする教育改革の取り組みについて>

当校は、モスクワ州のHHIII優勝校10校のうちの1校で、100万ルーブルの資金を獲得した。これにより、2012年9月1日から当校では5年生に新スタンダードを実験的に導入している。また教室にマルチメディアの設備を整備することができた。

学校教育に対してモスクワ州政府の貢献が大きくなっている。例えば教材・教具や教科書用の予算は以前は200万ルーブルであったが、今年は2700万ルーブル、児童生徒一人あたり1500ルーブルとなった。

だが、問題もある。夢は室内プールをやることである。3900万ルーブルをかけて体育館と陸上競技のランニングコースは作ったが、プールがない。

本校は人気が高く、誰もが入れるわけではない。入学希望者は2～3月にオンラインで登録する。周辺小学区の子どもの優先的に受け入れた後に余裕があれば他の地域の子どもを受け入れている。実際には1月1日から新学期に入学する子どもの人数がわかる。社会保障サービ

スからデータをもらう。今年は定員 100 人のところ学区からの入学希望者は 79 人だったので、21 人を他の学区から受け入れた。今年は就学準備コースに 138 人が在籍しており、67 人を 9 月から受け入れる予定である。同じ学校に進学できれば、子どもは適用しやすい。就学準備コースは 10 月 1 日から 8 ヶ月間実施され、30 分の授業を 3 コマ、週 2 回行う。参加は無料である。就学準備コースを担当した教員が、翌年度は 1 年生を担当するようにしている。

当校では、有料の教育サービスも実施している。週 2 回、4 時間で、月謝は 1500 ルーブルとなる。

スターリンの言葉に「人材こそが何でも決定する」というのがある。

当校はクラスノゴルスク市内の教育施設ランキングでベスト 3 に選ばれた。教育の質、人事などいろいろなポイントが評価されたが、良い人材がそろっているのが最大の強みである。

< 2013 年 3 月 28 日 (木曜日) > 晴れ

ロシア連邦教育科学省連邦教育発展研究所

Федеральный институт развития образования при Министерстве образования и науки РФ

訪問日時：2013 年 3 月 28 日 (木) 11:00 ~ 12:45

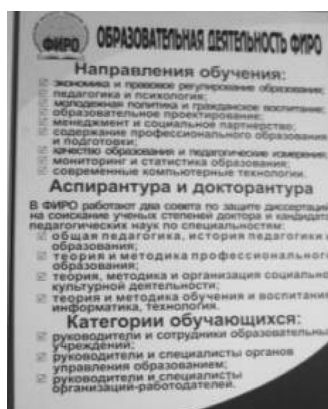
1. 対応者：副所長 Лейбович Александр Наумович

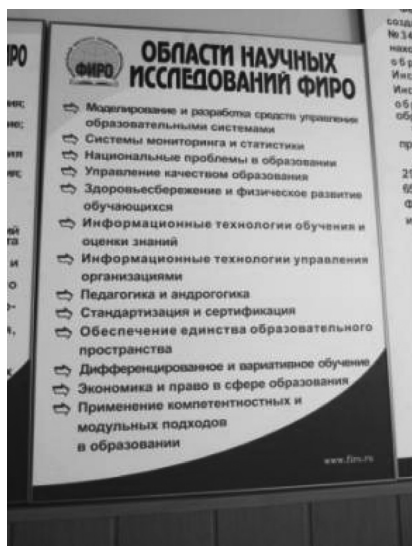
2. 所在地：Ул.Черняховского, дом 9

3. メール・電話等：тел: (499)-152-63-31

URL: <http://www.firo.ru/>

4. 入手資料：なし 論文集等を購買部で購入





教育科学省の労働要員養成と補充職業教育に関する国家政策局長のゾロターレワ氏 (Департамент государственной политики в сфере подготовки рабочих кадров и ДПО Министерства образования и науки Российской Федерации、ЗОЛОТАРЕВА Наталия Михайловна) との面談をリクエストしていたが、休暇中とのことで、職業資格枠組みに詳しい方ということでレイボヴィッチ教育発展研究所副所長を紹介された。2011年に発表された「生涯教育コンセプト」(«О проекте концепции непрерывного образования»)は承認されたのかどうか。またそれに対応した教育改革はどのようになっているか。とくに European Qualification Framework に対応したロシアの資格制度改革はどのようになっているか等について、お話しを伺った。

<「生涯教育コンセプト」について>

最近半年ほどの間に教育制度の法律的基礎が変化している。2012年12月に新しい教育法が採択され、それを具体化するための法律も作成されている。「生涯教育コンセプト」は経済専門大学が中心となっていくつかの機関が共に作成した文書であるが、まだ法律として採択されてはいない。

ロシアは普通教育から高等教育までのアカデミックな教育の伝統が強いため、生涯教育もヨーロッパのように職業的志向に偏ったものとはなっていない。国民のメンタリティのなかでもアカデミックな教育は欠くことのできないものであり、この意識はすぐには変えられない。

「教授・学習」「訓育」と「発達」という教育の三角形は今も生きており、消えてはいない。新しい教育スタンダードにおいても三角のポイントは残っている。これは一般教育の話だが、新スタンダードのもとで選択の幅が大きくなっている。学校は多様でバラエティーのある分野となってきた。

<ソ連邦崩壊後20年の教育、とくに最近10年間の教育の重要な変化>

どの国でも教育の発展の方向を決めるのは社会的・経済的環境である。教育分野が一番保守的なシステムであるため、現在生じているイノベーションや変化は、1990年代の社会・経済

の変化の結果として理解すべきである。90年代こそ、社会的・経済的変動が大きかった。その後の15年間は、普通教育から大学まで、ソビエトのシステムがそのまま維持されていた。大きなシステムの変化はごく最近になって生じている。

(初等中等教育の改革)

大きな変化の第一としては、普通教育において、教職員の給与額やプロフィールの選択などにおいて学校の自治が拡大されたことがあげられる。以前は全ての学校がいくつかの課程に区分されていた。学校の発展の方向も狭い範囲で固まり、規制もあった。今は学校の課程数は減っている。だが、例えば障害児のための学校として残っているものもある。最近のロシアでは「インクルーシブ教育」が重視されるようになったが、子どもは誰もがインクルーシブ教育に慣れることができるわけではないので、障害児のための学校は残っている。また、軍事学校という孤児を対象とする特殊な学校もある。

大多数の学校は幅広い範囲で発展している。数学を深く学ぶ学校になりたい場合、以前は上からの決定が必要だったが、今はどの学校も授業時間の30%は独自に決めることができるため、その時間を使って数学を深く学ぶようにすることができる。

学習成果の評価については、テストによるチェックという形式のオルタナティブとして学力オリンピックのシステムがある。以前よりも幅広いスケールで全国的に実施している。学力オリンピックの優勝者は無試験で大学に入学することができる。大学入試に際しては統一国家試験(ЕГЭ)の成績と学力オリンピックの成績とどちらか良い方を選ぶことができる。このようになったことで学力オリンピックの役割が高まった。

才能のある子どもを「卵探し」のようにして発掘することも重視している。学校で重要なことは、普通教育のシステムのなかで、障害者、孤児、父母の養育を受けることができない子どもや英才児のような特別な子どもの教育を重視するとともに、その他大勢の子どものための幅広い廊下を用意することである。その上で、どの学校もそれぞれの発展の方向を決めることができる。

背景にある現象としてЕГЭの導入がある。これは教育システムにおいて決定的なことで、政策的に今後変更することはありえないが、ЕГЭのコンセプトややり方を変えることは考えられる。初等教育修了時と基礎教育修了時の客観的評価は、厳しくならない程度にソフトに実施すべきである。

(高等教育の改革)

高等教育機関の改革も大体同じように幅広く論議されてきた。1990年代は大学の数は爆発的に増え、コントロールができなかった。規模の拡大により質が低下したが、社会ではある程度は仕方がないことと考えられていた。だが、ある段階からは許容しがたくなり、批判の対象となった。政策的にも、教育方法論的にも、教育の質の向上が課題となり、きわめて重要なキーとなった。世界の実践から見ると、予算を増やすだけで質が高まるとは言えない。OECDの教育インディケータによれば、教育費が一定以上になると、それ以上増やしても質が上がらないことがわかる。予算上の変更とともに制度上の改革を進めるべきである。

当たり前のことだが、管理や評価の方法は各国でそれぞれ異なる。ロシアでは次のような方法で実現している。

まず優先性のある大学がいくつか選ばれ、財政、法律、国家予算によって優遇され、独自のスタンダードを導入する権利が与えられた。

大学内の管理運営においては、企業におけるコーポラティブ・ガバナンスの導入が必要だが、変化はなかなか進んでいない。内部のプロセスを改善し大学の管理運営を刷新するにはどうしたらよいかが未解決である。可能なかぎり透明でオープンなものとしなければならない。

ロシアの大学は国際的な大学ランキングにも参加している。ロシア国内のランキングシステムを作ることも課題である。

もう一つの課題は、大学の管理運営に民間企業を参加させることである。これは重要な一歩になると思う。

次の段階のより大規模な変化として、主要大学以外の大学の再編がある。教育省内に新しいチームが作られ、この問題に取り組んでいる。この面での政策の目的は、国家基準の幅を決めて、その枠内で国家の支援を確保することである。学生の大多数は国立大学で学んでいる。私立大学の学校数が多くなっても、国立大学の学生数の方が圧倒的に多い。今直面している大きな問題は、主要大学グループに入ることができなかった大学の再編である。

「主要大学」と一般に言っている大学には、二つのカテゴリーがある。第1は「連邦大学」で、ロシアの各連邦管区毎にある。各連邦管区で一番権威のある大学に周辺の国立大学が合併された。

ただし、モスクワ国立大学とサンクトペテルブルグ国立大学は連邦大学といっても「首都大学」という地位になっており、独自の法的枠組みがある。

これ以外に「連邦研究大学」が40校ある。これらも独自の法的枠組みがある。こちらは複数大学を合併したものではなく、専門的な大学である。研究大学の地位を獲得した場合、重要な予算リソースを与えられ、独自の発展課題を実施していく。「連邦大学」と「連邦研究大学」が「主要大学」と呼ばれている。

他の大学については、基準や政府からの要求を厳格化し、数を削減していく方針である。これについては積極的な見方もできる。その第一は、定められた基準にあてはまるように、自らの機関を強化するようになることである。第2の道は、それぞれの地方政府からのサポートによって、地方のニーズに応じた施設とすることである。第3は、より権威のある大学と合併するという方向性を探ることである。この場合、大学ではなく、カレッジや短期大学、生涯教育施設、資格向上施設などとして存続することになる。

(中等職業教育)

中等職業教育も重視されている。労働力の育成に関し、国のプライオリティは高い。これは地方政府が直接に管轄し、中央政府と教育科学省は政策発展の方向を決めている。

新しい資格枠組みに合わせて職業スタンダードが作成されたが、対応する職業教育スタンダードはまだない。

中等職業教育においては、国家と企業とのパートナーシップが重視されている。官民パート

ナーシップのためにより有利な条件をつくることに力が注がれている。ビジネスのためにも、教育施設のためにも、モチベーションをもたらすことが現在求められている。

<質疑応答>

Q. 高等教育改革が新しい段階に入ったように見受けられるが、ボローニャプロセスへの移行については既に完了したと考えてよいのでしょうか？

A. ロシアのボローニャシステムへの移行はまだ完了していない。大学の2段階養成（バカルブルとマギストラトゥーラ）システムへの移行は完了していると言える。だが一番重要なのは、学生と教員のモビリティを増やすことである。この問題はまだスタートの段階にある。現状では、ロシアの学生と教員のモビリティはきわめて低い。

ヨーロッパ全体はロシア全国よりも社会的・経済的に統一されている。ロシアは地理的にも広く、地方別に社会的・経済的事情が大きく異なっている。モビリティ向上のためには全国的に条件をつくらなければならない。

ロシアでは、入学した大学で卒業時まで教育を受けるという伝統が強い。モビリティの障壁となっている原因はたくさんあるが、1) 小さい大学の数が多すぎることで、2) 単位（credit）の承認のための透明性のあるメカニズムが未だにないこと、3) ロシア国内の学生の移動が困難であること（ロシアと欧米間のモビリティの方がよほど簡単である）などがあげられる。

また、ボローニャプロセス導入のための条件は作られているが、現実に活かされているとは言えない。欧米で数十年かかったことを、ロシアでは短期間で実現しようとしているのだから無理はない。

これは、モビリティそのものの問題ではなく、大学の質の問題でもある。規模の大きい大学が質的に向上すれば、国際的なランキングも向上できる。ヨーロッパの大学ランキングの基準には、論文発表件数や引用件数がある。ロシア人は英語による発表数が少ない。ロシアには各分野に強い大学はあるのだが。また優秀なロシア人研究者はシリコンバレーに多くいるが、卒業した（ロシアの）大学はベスト100に含まれていないという状況である。ロシアにはロシアでしかできない研究もあり、ノーベル賞受賞者も多いというのに。現在 EГЭ の必修科目はロシア語と数学だけだが、英語（外国語）も必修化しようという動きがあるのは、こうしたことの影響もある。2020年までに新スタンダードの導入を完了しなければならない。

Q. 欧州資格枠組に対応したロシアの資格枠組の開発はどのようになっていますか？

A. 最近、資格枠組の新しいシステム導入のための重要な決議があった。職業資格枠組はソビエト時代から変わっていなかったが、政策的にも決定され、公文書が作成されている。ロシアの資格枠組の主なコンポーネントは以下の3つからなる。

- 1) 全国資格枠組：当研究所で開発し、現在労働省に承認を求めている。2013年4月までに承認される予定である。
- 2) 分野別資格

3) 職業スタンダード：主要なテクノロジー・プロセスとビジネス・プロセスの枠内で専門的基準を定める。ビジネス・プロセスでは、スタッフがどのようなことをするかを定めている。こうしたことは企業毎に特色があるのは当然のことなので、同業の企業が集まって討議し、スタンダードの内容を決めている。

職業スタンダードには労働法が適用される。対応した職業教育プログラムを作成する際にも考慮に入れる必要ある。

職業資格を付与するために、独立の資格センターを設立する予定で、現在必要な文書の作成を行っているところである。政府の決議・指令は既に出ている。

5年前に、このプロセスを統合するために全国資格開発エージェンシーが設立され、資格枠組みと職病スタンダードの導入をコントロールしている。また去年は労働省がロシア全国実業家協会を設立した(事務局長はレイモビッチ氏)。現政権下の労働省のメインテーマが資格枠組の設定である。今後2年以内に800以上の新しい職業スタンダードを作成しなければならない。現在までに完成しているのは約70である。それ以外の分野ではソビエト時代から数十年間も変わらない従来からの職業資格表が用いられている。

職業スタンダードの開発は、大手企業の課題である。社会的活動の分野の職業スタンダード開発には国の省庁も関与している。教育科学省では、例えば教育職員の職業スタンダードの開発を任されている。

Q. ロシアの全国資格枠組も欧州と同様に8段階ですか？

A. ロシアの全国資格枠組は9段階で、記述の仕方も欧州資格枠組とは異なる。国際的フォーラムで発表したところ、欧州資格枠組よりもしっかりしていて、明確であると高く評価された。欧州資格枠組を検討した上で作成したもののだが、後発なのでよりよいものを開発できるというメリットがある。草案は全国資格開発エージェンシーのサイトで見るができる。

<連邦教育発展研究所の役割>

当研究所は従来的一般教育研究所、中等職業教育研究所ならびに高等教育研究所を統合したもので、2006年から連邦教育発展研究所となった。これによって教育制度を上から下まで全体として研究できるようになった。現在、教育科学省に属する研究機関としては唯一のものである。教育問題は他の大学も研究しているが、大学の課題はあくまでも教育にある。当研究所はちがう。いくつかの大学に教育を全般的に研究する者もいるが数は少ない。例えば経済大学。モスクワ国立大学の一部もそうである。教育の諸問題を一貫して研究しているのは当研究所のみである。

主な仕事としては、1)教授法の開発、2)地方の教育発展の調整、3)国際交流がある。また、教育職員の資格向上研修の実施や、教育改革に関する全ロシア会議やフォーラムも主催している。教育科学省の審議会の活動にも参加している。例えば職業スタンダード開発のための審議会などである。

Q. ロシア教育アカデミーとはどのような関係にありますか？

A. 当研究所は教育科学省の直属なので、ロシア教育アカデミーとは直接の関係はない。ロシア教育アカデミーはもっと具体的な問題に取り組んでおり、心理学者が多い。アカデミーには普通教育研究所があり、スタンダード開発も行っているが、教科ごとの教育方法の研究に重点を置いている。互いに協力はしているが、研究面で重なるところはない。

ロシア教育アカデミーは、あくまでも学校教育を研究対象としており、「教育」全般ではない。こちらは教育分野のあらゆる面を研究対象としている。

< 2013年3月29日（金曜日） > 晴れ

教育政策問題研究所「エヴリカ」

Институт проблем образовательной политики «Эврика»

訪問日時：2013年3月29日（金）11：00～13：00

1. 対応者：Адамский, Александр Изотович
2. 所在地：Москва, 105187, ул.Щербаковская, д.53, стр.17, офис 207
3. メール・電話等：Тел.: (495) 988-86-58 (59), E-mail: eureka@eurekanet.ru
<http://www.eurekanet.ru/ewww/welcome>
4. 入手資料：
 - 1) Под ред. А.И.Адамский, Кадры решают всё. индивидуальный проект модернизации образования, ЭВРИКА Москва,
 - 2) Под ред. А.И.Адамский, Модернизация образования: шаг первый, 2007-2009, ЭВРИКА Москва, 2009
 - 3) Под ред. А.И.Адамский, Модернизация образования: шаг второй, 2010-..., ЭВРИКА Москва, 2009
 - 4) Под ред. А.И.Адамский, Автономная школа -- Путь к свободе, ЭВРИКА Москва, 2009
 - 5) Под ред. А.И.Адамский, Что такое качество образования, ЭВРИКА Москва, 2009





「Эврика」は NPO 法人であり、教育科学省のコンクールに優勝した結果 Наша новая школа のオペレーターとなっている。様々なデータを地方の教育行政ではなく学校レベルから直接集めることが「Эврика」のモニタリングシステムの特徴である。30年間のイノベーションの経験をもつ「Эврика」は、電子モニタリングのデータ分析を通して教育政策に影響を与えることを目指している。学校が一次データ約 600 種類をシステムに入力し、それを様々な公式を使って分析した結果、様々な指標が算出される。学校、市町村、連邦構成主体レベルのデータはそれぞれ公開されており、捏造することはできない。このようなモニタリングの結果、国家統計に新たな指標を設けることが可能になった。例えば、教員の平均給与のデータはこれまで国家統計にはなかったが、2013 年から正式に導入されることが決まった。

「Эврика」は連邦レベルのオペレーターであり、学校・市町村・連邦構成主体の各レベルのオペレーターもいる。オペレーターがシステムにログインすると、下位のオペレーターのデータしか見れない。しかし、データに変更を加えると、その操作を行ったオペレーターの情報がシステムに残るため、下位のデータを編集することは実質的には不可能である。各オペレーターがデータを入力した後、様々な指標が自動計算されシステム外からも閲覧できるようになる。

システムには 45000 の教育機関のアカウントがある。このモニタリングシステムは「Эврика」が独自に開発したものであり、2005 年頃にアダムスキー氏が考えついで、部下や大臣を説得してから 2007 年に教育の現代化プロジェクトの一環としてモニタリングを始めた。当時は 31 の連邦構成主体が参加した。2010 年からは Наша новая школа のモニタリングに切り替えて、全ての連邦構成主体 (83) の参加が義務付けられた。

<モニタリングのフィードバックはどのように行われているか？>

学校・市町村・連邦構成主体・連邦のそれぞれのレベルで見ることができる。学校レベルでは学校評議会 (управляющий совет)、教授法団体 методические объединения や労働組合などがあり、モニタリングの結果を参考にしている。将来は子どもたちの学習到達度を示す指標も導入したい。市町村レベルでは、法律により学校の設置者となっている市町村は、他の市町村の指標と比較しながら、それぞれの学校の運営が効率的になっているかどうかを見ている。教員給与は地方予算から出ているため、連邦構成主体レベルでは教員給与のデータを見ているだろう。教員の平均給与の格差が激しく、ウラル連邦管区では、クルガン州が 13000 ルーブル、ヤマロ・ネネツ自治管区では 72000 ルーブルとなっている。さらに、地方内（市町村間）格差も大きい。連邦レベルでも様々な指標があるが、あまり意味がない。例えば、教員給与の全国平均は昨夜の 23：45 現在では 25671.70 ルーブルだった。現時点では 25778.62 ルーブルで、少し増えていることがわかる。

«Эврика» は月に 4－8 回地方などでセミナーを開いている（連邦教育科学省や地方行政と契約を結んでおり、さらに学校レベルとタイアップしていることもある）。その他、年に 2 回モスクワで大きな会議を開いており、今年 7 月 4～6 日にはバイカル教育フォーラムを行う予定。

< 20 年間の教育改革に «Эврика» がどう影響したか >

教育改革が私たちに影響を与えたと言ったほうが良い。改革に参加すると自分たちの資格や専門性も高まる。科学的な組織は改革の外にいと必ず後退してしまう。我々の主な課題は、1987 年以降常に教育イノベーションであった。これらの経験はすべて 2005 年に国家優先プロジェクト「教育」に反映された。他の課題として、財政措置（児童生徒数に応じた予算配分など）、教員給与、教育の質、社会的管理（общественное управление：学校評議会など）が挙げられる。改革そのものについていえば、一番大きな変化は、①外部評価の導入（国家統一試験もその一つであり、近い将来には学習者の学業外の到達度 внеучебные достижения も大学入学の際に考慮されるようになると確信している）、②教育の多様性、③情報環境の改革、④社会的管理の導入などである。

< 海外の教育制度の影響について >

教育「移植」は複雑な問題である。各国の文化的文脈のみならず、社会経済的文脈も見ないといけない。アメリカの教育制度は国家が成立する前に構築されたが、ロシアは全く違う。ヨーロッパも小さな国々は言うまでもなく、イギリス、オランダ、フランス、ドイツといった大国の教育制度はそれぞれの特徴があり、決して同じではない。東アジア、南東アジアについても同様なことが言える。他方ではグローバル化が進行しており、教育もその影響を受けている。しかし全体としてアメリカの影響は過大評価されがちである。ロシアでは個人化への改革は進められているがそのテンポは非常に遅い。テスト文化も馴染まない。アメリカの影響に限らず、他国の支配的な影響を受けていないのは良いことである（高等教育は別として）。近年、教育改革において世界各国の対等的な協力関係が築かれたといえる。

<愛国心教育について>

日本も敗戦や米国占領期の経験があり国民意識が傷つけられているだろう。それが愛国心教育の形で現れてしまうのは自然なことであり、別の形で現れていないのはむしろ良いことかもしれない。ロシアも「帝国」の崩壊を経験して同じ傾向が見られる。それには、宗教意識の高揚やグローバル化への抵抗といった要因も重なる。こうしたなか、学校の先生が責任感を持った行動をとれば良い。

<宗教文化と世俗倫理の基礎の導入について>

これも自然な動きである。ヨーロッパの歴史的な文脈で言えば、宗教なくして文化は存在しないし、宗教の学習なくして教育も存在しない。ロシアの文学学校 книжная школа も 10 世紀にキリスト教の受容とともに始まった。しかし、現代のロシアは政教分離の原則があり、このコースは文化学的 культуроведческий な側面から教えられる。6つのモジュールがあり、子どもたちの親はそこから選ぶことができる。

<移民の子どもの教育について>

地域によって状況は違うが、モスクワでは多くの子どもがロシア語が話せない学級もある。この問題は国家レベルで重要視されてきて、〔大人の移民に対して〕ロシア語の語学力に関する条件が導入された。子どもに対しても幸い対策が進められており、すべての子どもが何の制限もなく学校に入れるようになった。移民の問題は安い労働力と関係している。

（外国籍の子どもは就学義務があるか？）ロシアでは義務教育 (всеобуч = に関する法律があり、住所登録の有無にかかわらずロシアに居住しているすべての子どもが学校で勉強しなければならない。学齢期にある子どもが学校に行くための措置は様々なレベルで施されているが、義務教育を実施・管理するためのシステムとして必ずしも良く機能しているわけではなく、親が子どもを学校に行かせたくなければ、義務教育の不履行は決して不可能ではない。

第Ⅱ部 資 料

国家教育イニシアチブ「私たちの新しい学校」

2010年2月4日付 Пp-271 ロシア連邦大統領 D. メドベージェフ承認

現代化と革新的発展はロシアを21世紀の世界で競争力のある社会とすることを可能とし、我が国のすべての市民に満足する生活を保証する唯一の道である。これらの戦略的課題解決の諸条件のなかで、自発性、創造的に考え独創的な解決策を見いだす能力、職業の道を選択する能力、生涯にわたり学ぶための準備ができてることが最も重要な人格の質となる。これらの力はすべて子ども時代から形成されるものである。

学校はこの過程において極めて重要な要素である。現代の学校の主要な課題は、各生徒の能力の開発、秩序と愛国心のある人間の育成、高度にテクノロジーが発展した競争的世界における生活へ向けた用意のある人格である。学校教育は卒業生が真摯な目標を自ら設定し達成することができ、様々な人生の状況のなかで行動することができるように構成しなければならない。

未来の学校

21世紀の学校はどのような特色をもつべきであろうか？

新しい学校—それは発達を先回りするという目標に対応した機関である。学校では過去の到達点だけでなく、未来に適応したテクノロジーの学習も保障する。子どもたちは、新しいことを作り出し、理解し習得することや、自らの考えを表明し、互いに助け合い、決定を下し、興味・関心を形成し可能性を身につけるために、研究プロジェクトと創造的課業に没頭する。

新しい学校？それはみんなのための学校である。どの学校においても、困難な生活状況にある健康に限界のある子ども、障害のある子ども、親による養育を受けられない子どもの良好な社会化が保障される。児童生徒の年齢的特性を考慮し、初等、基礎ならびに上級段階において多様な教育を組織する。

新しい学校—それは、新しいことすべてに開かれ、児童心理学と児童生徒の発達の特徴を理解し、自らの担当教科についての知識のある教員である。教員の課題は、子どもたちが将来の自分を見出し、自立し、創造性があり、自らに自信をもった人々となることを助けることにある。児童生徒の興味・関心に敏感で、注意深く、対応し、新しいことのすべてに開かれた教員は、未来の学校を特徴づける鍵である。そのような学校では校長の役割も変わり、自由の度合いと責任の水準も上がる。

新しい学校—それは親と地域社会との相互関係だけでなく、文化、保健、スポーツ、余暇その他の社会的施設との相互関係のセンターである。余暇のセンターとしての学校は、平日も休日も開放され、学校行事、コンサート、演劇、スポーツ行事は家族の休息の場となる。

新しい学校—それは現代的^{インフラ}基盤である。学校は現代的な建物となる。独創的な建築とデザインがなされ、質が高く機能的な学校建築—美味しく健康的な食事が出される食堂、メディアテックと図書館、ハイテクの教育設備、ブロードバンドのインターネット、良質の教科書とインタラクティブな教材、スポーツや芸術の課業のための条件がそろった、私たちの夢の学校となる。

新しい学校—それは教育の質の現代的システムであり、各教育機関それぞれと、教育システム全体がどのように機能しているかについての信頼性のある情報を私達に保障するものとならなければならない。

普通教育の発展の基本的方向

1. 新しい教育スタンダードへの移行

各生徒が学ぶことが必修の教科ごとに詳細なテーマが列挙されているスタンダードから、学校プログラムはどのようなものであるべきか、子どもがどのような成果を示すことができなければならないか、それらの成果を達成するために学校にはどのような条件を築かなければならないかを求める新しいスタンダードへの移行を実現する。

いかなる教育プログラムも必修の部分と学校が作る部分の二部構成となる。教育段階が上になればなるほど、選択の可能性を増やす。新しいスタンダードはサークル、運動部、様々な創造的活動などの教室外の活動を前提とする。

教育の成果には、具体的なディシプリンに応じた知識だけではなく、それらを日常生活に応用し、その後の学習において活用する能力がある。生徒は世界を一まとまりのものとして見るとともに、自然、民族、文化、宗教の多様性も見ることのできる全体的で社会的志向性のあるものの見方を身につけなければならない。これは様々な教科の教員が力を合わせることでのみ可能となる。

学校では、時代の要請に応じた教育基盤の発展を保障する要員、物的・技術的、その他の条件を築かなければならない。財政的保障は一人あたりの財政基準（「金が生徒の後についてくる」）の原則にもとづいて構築される。この基準への移行は、今後3年間にすべてのロシア連邦構成主体において達成することが計画されている。その際、資金は市町村へ、そして所有形態に関わらず各学校に基準に応じて配分されることになる。

スタンダードに応じた活動が効果的なものとなるように、教育の質評価システムを発展させなければならない。第4学年から第5学年および第9学年から第10学年に進級する際のテストを含む児童生徒の知識の自主的確認が必要である。自主的評価のメカニズムは、専門的教員連盟や団体の力で構築することができる。ロシアは教育の質の国際比較研究への参加を継続し、様々な市町村および地方の教育の質をマッピングする方法を開発する。

2010年には既に私たちは、各児童生徒の成果について定めた文書のリストを拡大し、新しい質への要請を導入した。統一的な国家試験は基本的なものとして残さなければならないが、教育の質の確認のための唯一の手段ではない。これ以外に、私たちは生徒の学業の到達度、コンピテンシーと能力のモニタリングと複合的評価を導入する。上級の生徒の教育プログラムはその後の専門の選択に密接に結びついたものとなる。

2. 才能のある子どもの支援システムの発展

ロシアでは今後数年の間に、才能ある子どもの発掘、支援と維持のための広範なシステムを構築する。

各普通教育学校においてとくに才能のある子どもを発掘するための創造的環境を発展させなければならない。上級生には居住地に関わりなく、プロフィールに応じた準備教育のプログラムを習得することを可能とする、通信制、通学・通信制ならびに遠隔教育学校における学習の可能性を提供する必要がある。児童生徒のオリンピックやコンクールのシステム、補充教育の実践を発展させ、大学入学の際に学習者の個別の到達点を考慮するメカニズムを検討することが求められる。

と同時に、才能のある子どもの形成を支援するシステムを発展させなければならない。これは、まず第一に、24時間滞在できる教育機関である。ロシアの一連の大学に付設されている物理・数学学校と寄宿制学校の活動の経験を広めなければならない。様々な活動分野で自らの才能を開花した子どもたちのために、形成された才能を支えるような会合や、夏季学校・冬季学校、会議、セミナーその他の行事を組織する。

才能ある子どもを対象とする活動は、経済的に目的に適ったものとするべきである。一人当たりの予算配分基準は、教育機関の特色に対応するだけでなく、児童生徒の特色に応じて定められるべきである。児童生徒が教員のおかげで高い成果をあげることができた場合、その教員が相当額の報償を受けられるようにしなければならない。

3. 教員集団の改善

我が国の教員を支援する道徳的・物質的刺激的システムを定着させる必要がある。最も重要なことは、教職に若く優秀な人々を惹き付けることである。

道徳的支援のシステムは、既存の教員コンクール（「年間最優秀教員」、「人間を教育しよう」、「まごころを子どもたちに捧げる」等）や、大規模で実効性のある優先国家プロジェクト「教育」の枠組みにおける優秀教員支援メカニズムにある。このような実践をロシア連邦構成主体のレベルにも拡大する。教職の地位向上は、2010年をロシア教員年と宣言したことに関連して計画する行事においても促進される。

物質的支援システムとは、給与の基金をさらに拡大するだけでなく、優秀な教員を勤続年数に関わりなく奨励するようなメカニズムを築くことである。それは若い教員を学校に引き寄せることを意味する。地方のパイロットプロジェクトが示すところによれば、給与は、学校評議会の参加によって評価される教育活動の質と成果に応じたものとするのが可能であり、またそうしなければならない。また現在の財政的・経済的メカニズムの複合によって、教員給与を実際に引き上げることが可能である。新しい給与システム導入の作業は今後3年間にロシア連邦のすべての構成主体において同様に実施されなければならない。

もう一つの刺激とするべきなのは、教職員と幹部職員の資格審査、すなわち教員の資質と学校が直面している課題への適合性を定期的に確認することである。教員の資質への要請と資質の特色は原則的に刷新され、専門的な教育的コンピテンシーが中心に位置づけられるようになった。若い人を含め、意欲のある教員に、通常より早い時期に高水準の資格を与えることについて、いかなる官僚的障壁もあってはならない。

教師教育のシステムを真剣に現代化しなければならない。教育大学は、大規模な教員養成基盤センターとなるか、古典的総合大学の学部になるかのいずれかに段階的に改組されなければならない。

5年に1回以上、学校の教員と校長は資格を向上する。それぞれのプログラムは、教員の興味・関心に応じて、すなわち子どもの教育的ニーズに応じて、柔軟に変えるべきである。資格向上のための資金も、教員がプログラムも教育機関も（資格向上研修所だけでなく、例えば教育大学や古典総合大学なども）選ぶことができるように、一人当たり予算配分の原則によって学校の集団に提供される必要がある。地方にはそれぞれの教育プログラムを提供する組織のデータベースを作らなければならない。その際、校長と優秀教員は近隣の革新的実践についてのイメージを獲得するために、他の地方で学ぶ可能性を与えられる。

教師教育、再教育と資格向上のシステムにおいて、優秀教員の経験を普及しなければならない。専門大学の学生の教育実習と、既に働いている教員の研修は、国家優先プロジェクト「教育」をはじめとする枠組みのなかで、自らの革新的プログラムを実現することに成功している学校をベースに行わなければならない。

また別な課題として、基本的な教師教育を受けていない教員を学校に引き寄せることがある。心理学・教育学の準備教育を受け、新しい教育テクノロジーを習得すれば、そのような人々でも子どもたちに、とくにまず学習のプロフィールを選んだ上級学年の生徒に、自らの豊かな専門的経験を示すことができるようになるはずである。

4. 学校基盤の変化

学校の外観は著しく変わらなければならない。私達は、学校が、知的生活やスポーツ生活で充実し、芸術と情報のセンターとなれば、本当の見返りを得ることができる。各教育機関には、障害のある子どもの完全な統合を保障できるように、ユニバーサルでバリアフリーの環境を築かなければならない。2010年には、この問題の解決に向けた「利用できる環境」という5カ年の国家プログラムが導入される。

建築コンクールの援助により、校舎の新築と改築の新しいプロジェクトが選定される。これは2011年から各地で実施される。「賢く」、現代的な建物を建設する必要がある。

学校の校舎と設備の設計と建設の基準、給食の衛生規則と基準、生徒の医療サービス組織と学校安全の保障の水準を改めなければならない。建物の暖房と空調のシステムは年間を通じて必要な気温を保障しなければならない。学校は飲料水とシャワー用の水を確保しなければならない。農村部の学校ではスクールバスのニーズを含めて、生徒の交通の効果的メカニズムを整備する必要がある。

学校基盤のサービスは中小企業が競争入札によって実施することができる。これはまず、学校給食、公共サービス、修繕と建設の組織に関わる。建設およびサービスの組織から、私たちは学校の校舎の安全の厳格な保障を求める。崩壊の危険がある、老朽化した、子どもの生命と健康に脅威となるような建物で課業を行うことを認めてはならない。もう一つの要請は、居心地の良い学校環境を保障するような現代的デザインを定着させることである。学校空間の建築は、プロジェクト活動、少人数による活動、子どもとのきわめて多様な活動形態を効果的に組織できるようなものとしなければならない。

5. 児童生徒の健康の維持と強化

子どもは学校で一日の大半の時間を過ごす。そして、子どもの身体的、心理的健康を維持、

強化することは、家族だけでなく、教育者の仕事でもある。人間の健康はその人個人の成功の重要な指標である。若者にスポーツ活動の習慣が現れれば、薬物中毒、アルコール中毒、児童虐待などの深刻な問題は解決される。

バランスの良い暖かい給食、現代的健康診断を含む医療サービス、課外活動を含むスポーツ活動、予防プログラムの実現、健康的な生活様式の諸問題について子どもとともに検討することなど、すべてが子どもの健康改善に影響を及ぼす。このほか、全員に必修の行事から児童生徒の健康増進の個別プログラムへの移行を実現する。2010年に体育の課業を、子どもの個別の特徴を考慮し1週間に3時間以上とする新しい基準が導入された。

とくに個別のアプローチは現代的教育テクノロジーの活用と子どもたちの学習への興味・関心を引き出すような教育プログラムの作成を前提としている。年齢的特性を考慮した個別学習の実践、選択教科の学習、古典的教科の課業の形態での教室での負担を全体的に軽減することは、児童生徒の健康に積極的な効果をもたらす。だが、そこには大人の側からの対策が必要なだけではない。同様に重要なことは、子どもに、学習における興味や、それぞれの興味・関心や適性に応じたコースの選択にもとづき、自らの健康に配慮する欲求を呼び覚ますことである。充実し、興味深く、楽しい学校生活は健康の維持と強化の最も重要な条件となる。

6. 学校自治の拡大

学校は個別教育プログラムの作成においても、財源の確保においても、より自主的にならなければならない。2010年から、優先国家プロジェクト「教育」のコンクールで優勝した学校と、自治的施設として改組された学校は自治権を獲得する。そのような学校の報告義務のニーズは著しく縮小され、かわって活動成果についての情報の公開性が求められる。これらの学校の校長は活動の質を考慮した労働の基本的条件を予定した契約を締結する。

私たちは国立と私立の普通教育機関の平等を法的に保証し、家庭により広い学校選択の可能性を与える。また、民間の投資家が学校の運営に関わるためのコンセッションのメカニズムの発展もまた目的に適っている。

生徒には、補充教育の枠組みも含めて、遠隔教育のテクノロジーを利用して優秀教員の授業へのアクセスを提供する。これはとくに小規模校、僻地校のために、またロシアの地方部全体に重要なことである。

このイニシアチブ実現の鍵となるメカニズムになるべきは、プロジェクト的活動方法とともに、プログラムの活動方法である。活動の方向性は、優先国家プロジェクト「教育」、連邦教育発展目的プログラム、革新ロシアの科学者、科学・教育要員連邦目的プログラムの枠組みのもとで実現される。

学校の現実をどのように設定するか、学校と社会の関係のシステムはどのようにするか、私たちは普通教育をどの程度知的で現代的なものにすることができるかに、私たちの子どもや孫、未来の世代の全員の幸福がかかっている。だからこそ、「私たちの新しい学校」は私達の社会全体の仕事とならなければならない。

(翻訳：澤野由紀子)

体制転換後ロシア連邦 20 年の
教育改革の展開と課題に関する総合的研究
中間報告書 (2012 年度)

2014 年 3 月 31 日 発行

編集者 福田誠治

連絡先 都留文科大学

〒 402-8555 山梨県都留市田原 3-8-1

Tel.0554-43-4341

fukuda@tsuru.ac.jp

印刷所 有限会社 印刷エトリ

〒 402-0052 山梨県都留市中央 2-7-24

Tel.0554-43-3451